



19 TH

# RYLA

SEMINAR

『これからどうして生きるか』



Rotary  
Youth  
Leadership  
Awards  
Seminar

第19回 RYLAセミナー報告

1997.3.27~3.30

神戸YMCA余島野外活動センター



# 目 次

RYLAセミナーとは .....	1
プログラムのねらいと内容 .....	1
セミナースケジュール .....	1
ごあいさつ 2670地区ガバナー 三宅 洋三 .....	2
2680地区ガバナー 田中 肇 .....	3
受講生の皆さんへ ディーン 山口 徹 .....	4
RYLA参加のみなさまに RYLA運営委員会 .....	5
<b>1日目</b>	
開講式	
「RYLAについて、およびロータリー用語について」	
セミナーアドバイザー 三木 明 .....	6
「プラス思考を産むために」	
2670地区ガバナー 三宅 洋三 .....	10
「自由のために責任をもって」	
RI理事・2680地区P.G. 今井 鎮雄 .....	15
オリエンテーション .....	21
オープニングパーティー .....	22
キャビンタイム .....	23
<b>2日目</b>	
講 義	
「人を愛して、人を Care する」	
ネグロス教育里親運動宝塚会	
会長 辻野 ナオミ .....	24
レクリエーションタイム .....	36
キャンプファイア .....	37
<b>3日目</b>	
講 義	
「みんなのことを考えていこうと……」	
兵庫県心身障害者福祉協会	
専務理事 片岡 実氏 .....	38

## 目 次

### フォーラム

「福祉文化の形成を目指して」 ..... 76

### 4日目

#### 講 義

「ロータリーの命を新しい時代へ……」

RI理事

RI2680地区P.G. 今井 鎮雄氏 ..... 115

#### 閉講式

ごあいさつ RI2670地区

インカミングガバナー 吉村 雄治 ..... 136

RI2680地区

パストガバナー 森 滋郎 ..... 138

RI2680地区

パストガバナー 深川 純一 ..... 140

セミナー・アドバイザー

#### 閉会の辞ならびに感謝

ディーン 山口 徹 ..... 142

### 参加者感想文

A班 ..... 144

B班 ..... 154

C班 ..... 164

D班 ..... 174

参加者名簿 ..... 182

第19回RYLA運営委員会 ..... 186

## RYLAセミナーとは

ロータリー青少年指導者養成プログラム（Rotary Youth Leadership Awards…RYLA）は、若い人々のためのプログラムであり、国際ロータリーが1971年に公式に採用したプログラムです。

ロータリーが青少年を尊重し、かつ、青少年に関心を抱いていることを一層明らかにし、選考した青少年指導者およびその素質ある人に実地訓練を体験させ、責任ある、効果的な自発性に富む指導方法を身に付けるよう激励、援助することを主な目的としています。

## プログラムのねらいと内容

RYLAセミナープログラムのねらいは、受講生に五つの特色を味わってもらうことがあります。

- 1) 高いレベルの講義と討論
- 2) グループタイム（親睦の熟成）
- 3) 自由と規律、4) 余島の自然
- 5) カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれたなかで、『これからどうして生きるか』のテーマを、講義・キャビンタイム・思索の時間・バズセッション・フォーラムなどを通して徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。



## セミナースケジュール

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
3/27 (木)									開講式 オリエンテーション			パオ ーイ テニ イン シング		キャビンタイム	
3/28 (金)	朝食	講義 辻野ナオミ氏	昼食	レクリエーション・ヨット・ テニス・ソフトボール・ア ーチェリー他					夕食	タ	キャンプファイヤー 親睦の夕べ キャビンタイム				
3/29 (土)	朝食	講義 片岡 実氏	昼食	思索 の 時間	バズセッション				夕食	タ	フォーラム キャビンタイム				
3/30 (日)	朝食	講義 今井 鎮雄氏		閉講式 昼食・離島											

# ごあいさつ

国際ロータリー第2670地区ガバナー

## 三 宅 洋 三

皆様よくお越し下さいました。四国・2670地区の役員をいたしております三宅でございます。

単刀直入ではございますが、ロータリーは、やがて幕を開く21世紀を担う若い皆様方に、大いなる期待を抱いております。100年前の19世紀末には、ゲーテの「若きウェルテルの悩み」に感動した多くの青年子女が自殺に走り、大問題になりました。今世紀末にも、民族問題・テロ問題等大変な時代を迎えております。ロータリーが皆様に期待するのは、このような困難な時代を生き抜くバイタリティー・理念・指導力であり、このライラも皆様にかける期待の1つであります。この2680地区・2670地区合同のライラは、神戸の今井先生・松山の梶浦先生のご努力により始められ、本年で19年目を迎えます。

今ベストセラーとなっている春山茂雄さん「脳内革命」によりますと、人にはプラス発想の人とマイナス発想の人がある、プラス発想の人は常に明るく健康で、多くの友人に恵まれ幸福な一生を送る。人は気の持ちようで一生の方向も変わる。プラス発想を育むのは、高タンパク食・運動・瞑想であると述べております。この余島のライラは3泊4日の短期間ではありますが、素晴らしい講師のお話・山海の珍味・種々のスポーツ・瞑想の時間が設けられております。新しい友人と議論を戦わせ、新しい知識と理念・余島の美しい自然を楽しみ、21世紀に向かう英気と信念を養っていただきたいと思います。

余島が良い思い出となりますことを心より祈念いたしまして、ご挨拶といたします。



# ごあいさつ

国際ロータリー第2680地区ガバナー

田 中 毅

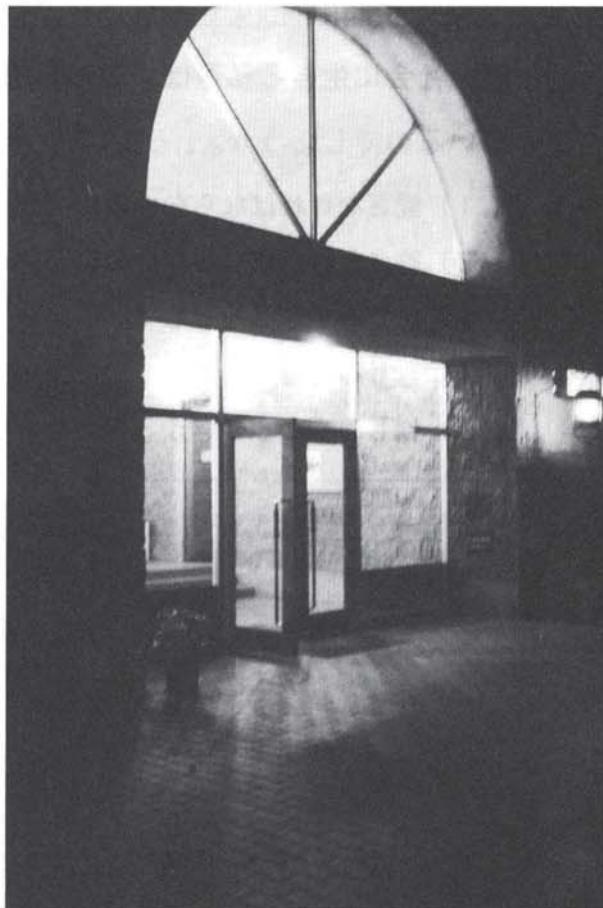
今年度の国際ロータリーのテーマは「築け未来を行動力と先見の眼で」というロマンに満ちたものであり、そのサブテーマの一つは「次の世代を準備することによって未来を築こう」であります。これはすなわち我々ロータリアンが次の世代を担う青少年のために素晴らしい環境を整備することを約束していることを意味します。

青少年を育成する立場にある皆様方とひざを交え語り合う、このライラセミナーは非常に意義ある催しであり、このような素晴らしいセミナーを19年も前から実行している我々第2670地区、第2680地区の先達のひらめきに心から感謝したいと思います。

ライラセミナーの特徴は、マニュアルを覚えたり、小手先の技法を学ぶのではなく、指導者としての心構えや精神を学ぶことにあります。哲学としてのバックボーンを持っていればどのような現実の変化にもとまどうことなく適切に対応していくことができます。

今年度は第2680地区のお世話で「これからどうして生きるか」というテーマに基づいて開催されます。

経験豊かな講師の皆様の講話や、心ゆくまで語り合うブレーンストームを通じて有意義な3泊4日のセミナーとなりますことを祈念してご挨拶といたします。



# 受講生の皆さんへ

ディーン 山口 徹  
(神戸 R C)

受講生の皆さん！

このRYLAセミナーにご参加いただきましたことを心より歓迎申し上げます。間もなくやって来る21世紀を担うのはあなたたちです！共生社会の創造を目指して『これからどうして生きるか』をテーマに講義を聴き、共に考え、語り、遊び、自らが何を大切にこれから行きしていくべきかを確認し合って下さい。この大自然の中で、それぞれが自覚と責任を持って交わり、多くの人の出会いを大切にして下さればきっと素晴らしいセミナーになることでしょう。

そのために、ロータリアンは、「明日の指導者は、今日つくられる」ことを信じて、さまざまなお手伝いをさせていただきたいと思います。セミナー終了時にきっとそれぞれに大切な「気づき」があることでしょう。そして、明日に向かって大いなる夢と勇気と希望を持って、雄々しく、新しい歩みをして下さるよう祈ります。

現代社会に生きる私達は、心の奥底にある貧しさを痛感しているのでしょうか。

- 1) 愛さなければならぬのに 愛せない
- 2) 許さなければならぬのに 許せない
- 3) 悲しみを悲しみとして 心から受けとめられない
- 4) 苦しみを苦しみとして 心から受けとめられない
- 5) 憎しみやつぶやきがとりとめもなく出てくる



# RYLA参加の皆様に

## RYLA運営委員会

第19回 R Y L A セミナーに皆さんと共に過ごせることを大変嬉しく思います。

この R Y L A の趣旨を生かすためにも、次のことを大切にしてほしいと思います。

### 1. 出会いを大切に

見知らぬ皆さんが、 R Y L A の心を求めてこの余島に来られたのです。良き友と出会い、良き先輩のカウンセラーやロータリアンと出会った喜びをかみしめ、また最高の恩師である講師に出会い、リーダーとしての心構え、より高い境地へ飛躍する心の向上は出会いから始まり、親睦に至ります。心を磨いて仲良くしてください。

### 2. 自由を大切に

皆さんはリーダーばかりですので、スケジュールは自主管理を前提として組んであります。時間的規則も最小限度にし、十分な自由意志によって自律してください。

### 3. 時間を大切に

時間は全員の共有財産であります。みんなで何かをするときは他人への思いやりの心をもって時間は必ず守ってください。それ以外の時間は皆さんの自由です。自律におまかせします。

### 4. 自然を大切に

素晴らしいこの余島は決して一日で成ったものではありません。1949年に今井パストガバナーが発見し、神戸Y M C A の野外活動センターに仕上げ、この期間 R Y L A のために借りきってあります。孤島でありますので、火事などには十分注意し、自然を大切にしましょう。

### 5. その他

タバコはグループ討論中は禁止です。お酒は皆さんの自覚と責任におまかせします。



## 「RYLAについて、および ロータリー用語について」

セミナーアドバイザー

三木 明  
(姫路RC)



みなさん、こんにちは。ようこそ RYLA セミナーにお出でくださいました。ロータリーとか RYLA セミナーとか、皆さん方、あまりおなじみのない言葉や、単語がたくさん出てくるかと思いますので、少し、簡単に説明をさせていただきたいと思います。お手元の袋の中に、この「RYLA」という小冊子とピンクの「ロータリー用語早わかり」というのがあります。それを参考に見ていただきながら、お話を少し聞いていただければありがたいと思います。

皆さん方、各地のご自分のロータリークラブからの推薦を受けられて、こちらにお出でになったと思います。ロータリークラブというのは、一言で簡単に説明してしまうのは難しいんですけども、奉仕の理想を、個人生活であるとか、職業生活であるとか、社会生活であるとか、そういうことを実践の基盤としている職業人のクラブであると、大ざっぱに受け止めていただきたいと思います。

ロータリークラブは1905年、今から92年前に、シカゴの町に生まれました。ポール・ハリスという方が、3人の仲間と始めたわけなんですけれども、このとき最初の発想は、お互いの職業をより栄えるものにしようという、大変エゴイティックな考え方であります。しかし、お互いが良ければいいんじゃないかな、ということで始めていったわけです。しかし、どうもそれでは良くない、そういうエネルギーを社会にも向けようと、現在は、社会生活、職業生活を通じて奉仕を続けていこうという考え方で、日々努力しております。

このロータリークラブというのは、一業一会員であります。この後にもご説明申し上げますが、地域にはいくつかのロータリークラブがありますが、そのクラブの中には、一業種から一人しか会員はありません。私は歯医者ですが、歯科医師という職業分類を持つ人間は私以外にはおりませんし、いろんな業界の方、それぞれが、1名だけそのクラブの中

入れるということあります。その一業一会員制の中で、お互いの職業における考え方、あるいは知恵を交換しながら、毎週1回は必ず例会を開いています。

そんな中で、このRYLAセミナーを始めたんですけれども、このRYLAセミナーも、ずいぶん歴史が古うございまして、世界的なレベルからみると、一番最初に発生したのが1949年といいますから50年近く前です。50年近く前に始まったキャンプの形式が、今に引き継がれているわけです。今回こちらで開催しておりますRYLAセミナーは、19回を迎えております。ですから19年目ということでありますけれども、これも約20年という長い歴史を踏まえて現在に至っているということあります。

これは、皆さん方のような、地域で活躍する若いリーダーとか、これからリーダーになりたい、そういったことを学びたいという方々にお出でいただいて、ここで3泊4日間の研修をつんでいただく。あるいは仲間同士の出会いを見つけていただく。

それと、皆さん同士の、若い方々だけではなく、ここにありますロータリークラブの会員たちと親しくしていただいて、ロータリークラブの会員がどんなことを考えているのだろうか、ロータリーは将来、皆さま方を通してどんなことを社会に貢献していったらいいのか。そんなことを考えてるわけでありますので、ぜひとも、受講生同士の皆さん方の関わり合いだけではなくて、ロータリーのおじさんたちとも深く関わっていただいて、その精神を少しでも、見たり聞いたりしていただきたいと思うであります。その見たり聞いたり、あるいは、学ばれたことをご自分の地域社会に持って帰っていただいて、その各地の地域でのヘッドクオーターとして、地域のまた、若い人たちに広めていっていただきたい、そういうふうに考えております。

RYLAセミナーの、プログラムは、その小冊子にちょっと書いてありますけれども、五つの特色を持っております。高いレベルの講義、あるいは討論。そして、グループタイム、自由と規律、余島の自然、カウンセラーシステム。今回は、辻野ナオミ先生、ネグロスの教育里親運動を展開されている方であります。それから2日目は、片岡実先生。この方は、身体が不自由ですけれども、その心身障害児のために一所懸命働いておられる方であります。こういった方々から、実践をされてる方からのお話を通じて、皆さん方にいろいろなものを考えていただきたい。そして3日目は、ここにあります今井鎮雄理事、国際ロータリーの理事から、また、2日間の講義の流れの中から、皆さん方にお話をさせていただくというふうに考えております。

2番目のグループタイムですけれども、もう皆さんすでにご承知のように、A、B、C、D、四つの班に分かれておりますが、この四つの班の皆さん方はお二人のカウンセラーと共に、3泊4日の間、寝食を共にするわけであります。ですから、この4日間の出会いを大切に。そしてよりいっそう深いものにしていただいて、皆さま方がお互いに情報交換をしながら、親睦を深めていっていただきたいというふうに考えております。

三つ目の自由と規律でありますけれども、このセミナーは、あまりうるさいことを言わ

ないというふうにしております。例えば、「まあ、1食ぐらい抜いたらいいよ」とか、「朝、眠いから、ちょっと食べたくないな」とか、そういった方は、食事はしていただかなくとも結構ですし、夜、何時に寝ようと、他人の迷惑にならない限りは、自由です。朝まで起きていたければ、起きていていただいてもいいですし「10時消灯。はい、寝なさい」ということはいっさい申しませんので、ぜひ、その自由を満喫していただきたい。

ただ、プログラムにあります、皆さん方が全員集まって、例えば講義を聞くとか、フォーラムをするとか、そういったときは、遅れることのないように、時間は守っていただきたいというふうに考えております。時間は万人の共有物であるとよく言われておりますけれども、一人が何分か遅れることによって、あの全員に迷惑をかけるということが起きます。ですから、皆さんで共同で何かするときには、必ず時間厳守ということで、それぞれの会場に集まっていただきたいと思うわけであります。

お酒ですが、少し飲んだほうが寝やすいという方はどうぞ。他人の迷惑にならない、あるいはキャビンの中での会話の邪魔にならない程度で、多少楽しんでいただく程度には、お飲みいただいても結構かと思います。

タバコもお吸いになる方が、いらっしゃると思いますが、キャビンの中でたくさん人間が集まったときに、タバコの煙はやはり周りの方に迷惑をかけることがありますから、そのあたりも相手に対する思いやり、やさしさを發揮していただいて、ちょっと外で吸うとか、場所を決めて吸うとかをキャビンの中で決めていただければいいかと思います。それは皆さん方の自由におまかせいたします。

それから4番目の余島の自然ですが、この島はたいへんすばらしい環境にあります。1949年に今井先生が、いい環境の島があるなと見つけられまして、ここの神戸Y.M.C.Aの野外活動センターを開かれたわけであります。ですから、50年近い歴史をもったたいへん自然の豊富な美しい島ですから、この自然を壊すことなく、島の皆さん方とスタッフの方々が常に手入れをして美しい自然を楽しんでもらえるように努力なさってますので、この自然を守りながら、楽しんでいただけたらいいと思います。

ヘル・ポップ彗星も、ひょっとしたら、お天気がよければ見えるかもしれません。

それから、カウンセラーシステムであります。これは皆さん方の各班に、男性と女性一人ずつのカウンセラーがおります。男性はロータリークラブの会員で、女性はロータリークラブの会員の奥様です。ですから、ロータリークラブのことに関してはすいぶんよくご存じの方ですので、いろんなこと、どんなことでも結構ですから、質問を投げかけていただいたり、あるいは、そのカウンセラーから、ロータリーがどんなことを目指しているのかというふうなことを受け止めていただければいいと思います。

そういう意味でのカウンセラーを大いに利用していただきたいと思います。それから皆さん方が何か困られたことがあったり、不自由なことがあったりしたときも、ぜひカウンセラーに言っていただければいいと思います。それ以外にも、カウンセラーが、ちょっ

とその辺に見当らないときには、こちらおりますスタッフに何でも聞いていただければ、どんなことでも対応できるようにはしておりますが、たぶん大丈夫だと思います。

3泊4日の長い期間ではありますが、こういったスケジュールを消化していただきながら、私たちロータリーが、何を皆さん方にお願いしようとしているか、そういったことを考えながら、地域へ帰られて、それが、例えば、花が開くのは3日後じゃなくてもいいんです。1年後でも、5年後でも、10年後でもいいんですから、ここでとらえて経験して消化したことを地域の若い人たちに広めていっていただければありがたいと思います。

単語を少し、簡単にご紹介申し上げます。ピンクの紙を見ていただけるとありがたいんですけども、一番最初、R Iと書いてあります。これは、国際ロータリー、Rotary International の略です。国際ロータリーというのは、世界中のロータリークラブの連合体であります。これは、本部はアメリカのイリノイ州にあります。エバンストンにあります。国際ロータリーに理事会がありまして、この理事の一人が今井先生であります。世界中に17人の理事がおりまして、日本からは、昨年度と一昨年度は、時計のセイコー社の会長の服部禮次郎さん。任期は2年ずつですので、オーバーラップしながら、去年と今年度は、今井鎮雄先生が理事であります。その次はまた、札幌の方です。

その下に、3番目に District 地区というのがあります。これは世界中に521の地区があるそうです。日本には34の地区があるんですけども、2670地区というのは四国4県すべてを指します。2680地区というのは兵庫県であります。四国には71のロータリークラブがありますし、2680地区、兵庫県には72のロータリークラブがあります。

それぞれに、そこの地区には国際ロータリーから指名された管理の役員がおりまして、それがガバナーです。パストガバナーというのは、過去にガバナーを経験した方であります。ほとんど一生こき使われながらパストガバナーの役割を果たしていくという、決して年寄りを甘やかさないのがロータリーでございます。ガバナーのミニーというのは、ガバナーにノミネートされた方です。松下さん、吉村さん、こちらにおられるお二人がノミニーで、この7月1日からガバナーとして就任されお仕事をされるということであります。

この地区には、いろんな委員会がありまして、このRYLAセミナーを主催しておりますのは、青少年奉仕委員会、青少年活動委員会のRYLA委員というセクションがいろいろ、お役に立とうとして働いているわけであります。

大変、ざっぱくなお話で分かりにくかったかも知れませんが、また、これから4日間の間におじさんたちを見つけて、どんなことでも結構ですから、お聞きいただければ、お答えできると思いますので、よろしくお願ひいたします。こんなところで失礼いたします。どうもありがとうございました。(拍手)

# 「プラス思考を産むために」

ごあいさつ

国際ロータリー第2670地区

ガバナー

三宅 洋三

(高松RC)



皆さんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました、四国の地区、2670地区の役員をしております、高松ロータリークラブの三宅と申します。今、三木さんからも、いろいろロータリーのご説明がございましたけど、きょういらっしゃる方には、ロータリーとかロータリークラブというは何だろうというふうに考えられている方が非常に多いと思います。あまり知られていないと思いますので、一応、ロータリーというのはどういうものかというようなことを簡単にご説明をさせていただきます。

ただ今もお話をありましたけれども、1905年、ちょうど92年前に、アメリカのシカゴで、ポール・ハリスという弁護士さんが3人の友達と一緒に始めた奉仕団体であります。当時のシカゴはゴールドラッシュといいますかアメリカで金鉱が見つかりまして、金のためであれば人間ぐらいどうでもよいというふうなことで、人が全然信用できない。シカゴの町で仕事をしていても、自分の利益のためであったら、人を裏切るぐらいは当たり前だというふうな、ひどい時代だったようであります。

ポール・ハリスは子供のときから田舎のほうで育ちまして、そういう生き馬の目を抜くといいますか、そういうひどいシカゴに行きまして、非常に寂しかった。お互いの仕事をするために人を信用できないのが非常に困るということで、お互いに友情をもった仲の良い友達同士、お互いに信用できる友達を集めて仕事を一緒にやろうと、もともとは、そういう情報交換と友愛ということを目的にスタートしたわけであります。

お互い自分の利益を確かめ合って、非常に順調にいっていたわけです。あるとき、ある人から「あんたたちのやっていることは、いわゆる利己主義的すぎる。自分たちのことばかり考えて人のことを考えてない」ということを言われました。

また、シカゴで生活できる、自分たちが生活できるということは、結局、シカゴの地域

社会の中に、自分たちが支えられているんだということに気が付いたわけです。お互い自分たちだけのことじゃなくて、シカゴのために何かできないかという考えが発生したわけであります。

その当時は、シカゴという町はどんどん大きくなりまして、人口が増えてくる。しかし、それだけ多くの人が集まっているのに、街に公衆便所がない。人が街へ出て、用が足したくなると、お店に入って何か物を買って、そこのトイレを借りるという非常に不自由をしていました。それで、ポール・ハリスたちがシカゴの市の当局とか、有力者の方と相談をして、初めて公衆便所をシカゴにつくった。これが、いわゆるロータリーの人に対する奉仕という第1番の仕事であります。

そのような状態が続いておりましたが、だんだん、交通が発達しますし、情報網が発達する。いわゆる世界中が小さくなるといいますか、非常に近くなってくる。初めは自分の周囲の地域社会だけを目標にしておりましたが、だんだん世界が自分の身近に近寄って来る。お互いに外国との付き合いが繁くなるといいますか国際理解を深めなくちゃいかんという状態になってきたちょうどその時期に、1947年でありますけど、創始者のポール・ハリスが亡くなられました。

世界中から、そのポール・ハリスの死を悼んで弔慰金が集まりました。その資金を原資といたしましてロータリー財団の親善奨学生制度という制度を作りました、若い学生さんに外国へ行って勉強してもらい、お互いに学生が交流することによって、国際理解を深めるという制度が始まりました。この50年間に27,500人の生徒さんが世界中で交流を深めています。日本では5,042名。昨年中、日本から留学に出ました方々が、96人であります。

ところが、これは考えますと、いわゆる受益者負担といいますか、皆さんがロータリーの財団に寄付したお金を元にしていろいろ留学が決まるわけです。ということは、お金をたくさん寄付できる国の方は、たくさん留学できる。お金を寄付できない、いわゆる発展途上国といいますか、そういう方の国にとっては、いわゆる高嶺の花で、一つも自分たちのプラスじゃない、ということが続いたわけです。

しかし、世界がだんだん近くなるにつれて、世界中には私たちよりも、もっともっと困っている人がたくさんいるんだということが、非常に親身に分かってきた。そういうことから、もう少し私たちの、できる範囲の奉仕を、もっと世界に広げようということから、現在では発展途上国の子どもさんの教育、字が読めない人の識字率の向上といいますか、自分で文章を書いたり、本を読んだり、いうようなことを手伝ったり、それから、学校を建てたり、飲み水の世話をしたり、そういうことを現在はやっております。

中でも、この10年ほど前から、世界中で今一番子どもさんの悲惨な病気であります小児まひを、なんとか世界中から撲滅しようと今、世界中のロータリアンの方がお金を集めて、ワクチンをもって行って、中国とかインドとかの子どもさんに飲ませています。この2005年がちょうどロータリーの100周年に当たりますから、2005年までになんとか小児まひを

世界中から撲滅しようという運動もやっております。

結局、人間というものは、自分にこのようなことをしてくれたらいいなという欲求があります。また反対に、人を見ると、あの人にはこういうことをしてあげたいなという願いがあります。この両方をかみ合わせまして、現在は、何か自分にしてほしいということを誰かにしてあげようというのが、今のロータリーの一応の目標であります。

こういうことから、ロータリーは、やがて、この4、5年で迎える21世紀を担う皆さんに非常に期待をかけておるわけであります。このＲＹＬＡもその期待の一つであります。今からちょうど100年前、19世紀の終わり、いわゆる世紀末という言葉がはやりました。ゲーテの「若きウェルテルの悩み」という本が発行され、それに感激した若い子女が非常に自殺に走った。19世紀の終わりは、その若い人の自殺で飾られたという非常に大きな問題が起こったようであります。

現在、私たちも20世紀の世紀末を迎えているわけであります。考えますと、民族問題とか、民族の格差問題、テロの問題、麻薬の問題、世紀末というものは非常に難問が山積しているようであります。ロータリーが若い皆さんに期待するのは、この非常に困難な時代を生き延びるためのバイタリティ、理念、また行動力、指導力であります。

ただ今、三木さんからもお話がありましたが、この2680、2670合同の余島のＲＹＬＡというのは、ここにいらっしゃいます今井先生、また、つい1週間ぐらい前に亡くなられましたけれども、松山の梶浦先生、また皆さんのご協力でようやく19年目を迎え、来年は20周年ということになっております。

最近非常にベストセラーになっております、春山茂雄さんの「脳内革命」という本がございます。400万部売れたといいますから、ここにいらっしゃる方、だいぶ読まれた方がいらっしゃると思いますが、この「脳内革命」という本を見ておりますと、人はいわゆるプラス思考、いつも上向きに考える人、またマイナス思考、いつも下向きに考える。こういうふうに人が分けられる。プラス思考の人は常に明るく健康で、多くの友人を持って、楽しい幸福な一生を送る。人は気持ちの持ちようで一生がどうにでも変わる、いうふうなことが書いてあります。

そのプラス思考を産むためにはどうするか。まず、第1に高タンパクの食事をする。ただし、カロリーを抑えた食事ということが書いてあります。それから、2番目は運動をする。最後が瞑想をする、ものを考える。この三つがプラス思考を産む原因であるというようなことが書いてあります。

この余島は、ただ今お話にありましたように、あすからすばらしい講師の先生のお話があります。私は、まだ3回目なんんですけど、来るたびに非常に印象に残るといいますか、なんか心が洗われたような気が、いつもいたしております。そのすばらしいお話、それから山海の珍味があります。今晚、この後、パーティーがございますが、非常においしい、すばらしい食事ができます。それから、いろいろなスポーツがあり、また、最後に瞑想の時

間というのがあります。結局、春山茂雄さんのいう「脳内革命」のプラス思考を育てる一つのすばらしい行事だというふうな気がしております。

どうぞ、みなさん、この3日間、今、三木さんは、長い3泊4日と言いましたが、私は、非常に短い3泊4日というような気がいたします。帰るときは、ほんとに帰りたくないような気になる3泊4日であります。新しい友達と議論を闘わし、また、21世紀に向かう英気と信念を養っていただきたい。この余島のすばらしい自然を一生思い出に残していただきたいというふうに思います。

それからもう一つ。最近私がなんとなく気になることは、今の地球が非常に傷んできているといいますか、とくに資源が欠乏してきている。このあいだ、エネルギーの専門家で、日本の第一人者である東大の名誉総長の有馬先生のお話を聞いたときに、皆さんのが今ままの状態で、エネルギーを使えば、いわゆる化石燃料といいますか、石油、石炭、天然ガス、こういうものはここ4~50年したら底をついてしまう。日本は96パーセントのエネルギーを輸入している。例えば40年でもし石油が無くなるとすれば、日本に入って来る石油は、ここ20年したらストップするだろう。20年すると、今まで行くと日本の車は動かなくなるし、電気はつかなくなる。そういう状態に、今、もう来ているんだ。それをなんとかしなくちゃいかん。

あのエネルギーというのは、今よく問題になる原子力の発電、それから核融合によるエネルギー、この二つしかない。原子力発電というのは、今、日本は唯一の被爆国ですから、非常に原子力というものに対して反応が強い。しかし、原子力発電のいわゆる元になりますウランは40年でだいたい底をつく。しかし、これはプルトニウムという格好で再生すると2000年使える。

今、フランス、ドイツ、イタリアが、やはり日本と同じ90パーセント以上のエネルギーを輸入しているそうです。フランスが、今、電気の70パーセントを原子力発電に切り替えた。ドイツとイタリアは、そのフランスから電気を買う約束ができている。ということは、2000年体制がヨーロッパは整った。日本はまだその対処が全然できていない。

この核融合によるエネルギーが実用化するまで50年かかる。この50年の間を何とか原子力の電気を使うか、今の資源を繰り伸ばしするか、これしか方法はないんです、というようなお話を聞きました。

それに関係しまして、もう一つ変わった話をしますと、日本には、ゴミの焼却場が1,841あります。アメリカは300。ドイツ、フランス、イギリス、イタリアは50ぐらいしかない。それだけゴミの出方が日本と外国は違うということね。ゴミの焼却場を造るときには、非常にもめますけど、それよりもゴミを出さなくしなくちゃいかん、いうふうな話もありました。

そんなことを聞いておりましたときに、あるクラブに行きますと、額が置いてあったんです。見ますと「自覚」と書いてある。自分一人ぐらいと思ってゴミを捨てる。地上の一

億のゴミが落ちる。自分だけでもと思ってゴミを拾う。地上から一億のゴミが消える。

このごろとくにそういうことが気になっていましたから、すばらしい言葉だなあと。でもって聞きますと、その作者の方が、京都福知山ロータリークラブの小藪実衛さんて、お坊さんです。高校の先生を17年してから、おうちの家業だったんでしょう、お坊さんになられている。そこで、この詩がすばらしいから使わせてほしいと手紙を出しました。

すぐ、そうすると、この本を送っていただきまして「心に悲しみを持った」という本で、この中に「嵐に耐えて花は咲く」というふうな為書を書いてくれました。非常に感激しまして、このいただいた本を読んでみると、なんとなく、人の生き方といいますか、そんなことをきれいに詩になさってます。非常に平易な詩で、どなたが読んでもすぐ分かる詩だし、なんか読んでいるとジーンとくるような感じがしますので、今日はここへお邪魔した記念に、皆さんに1冊ずつ進呈しようかということで、持ってまいりました。どうぞ暇なときに読んでみてください。

# 「自由のために、責任をもって」

ごあいさつ

R I 理事  
R I 第2680地区 P.G.

今井 鎮雄  
(神戸西 R C)



今井であります。皆さんはもう、うんざりしてるだろうと思います。さっきから、おじいさんばかり出てきて、何か言うとるぞ。(笑い) ね、笑っているのはその通りだと思ってる証拠ですね。後ろのほうに、おじさんたちがたくさんいて、これどうなってるんだと、オリに繋がれている子羊ではないかと。子羊のわりには、大きなすごい子羊がおられますけども、いったいどうなるのだろうかと思ってる方もおられると思います。

実は皆さんには大変なお金がかかってるんです、これ一人。往復の旅費とね、滞在費いくらですか。4万ぐらい、7万ぐらいかかるって皆さん一人ひとりハイヤーしてきたんです。ハイヤーしてきたというのは、あなた方に新しい時代を担ってもらいたいからです。

皆さん方が、来るときに、私たちがロータリーのクラブにお願いしたことは「あなた方の地区で最もすばらしい青年を1人だけ推薦してください。その推薦してくださった方の旅費も、滞在費も、全部ロータリーがもってください。そしてその方々は将来自分たちの地域の中で、青少年と一緒に一生懸命頑張ってくださるリーダーだといわれる方々、あるいはリーダーになろうと思っている方々を1人だけ推薦してください」とお願いをいたしました。

だからここでは公募をして、ほしい者来いといって来たわけじゃありません。皆さん方は、一つひとつのクラブから推薦された、そして、3泊4日、余島に来て、勉強していくだいで、私たちが住んでる地域社会の中で、青年として、あすを抱るために頑張ってくださいね、とお願いをしようと。これが私たちの魂胆であります。

なぜ、そんな魂胆を私たちがしたか。ロータリーというのは、基本的に、新しい時代を何とか担っていきたいということを考えている団体なんです。

そこに、二つ旗が出てます。向う側の旗が、今年度、世界中の人人が約束をして、これを

考えようという旗であります。英語で書いてあるのは、ロータリーというのは国際団体でありますから、みんな英語で書いてますが、上に書いてあるの何かと言ったら、“Build the future” 将来を作ろう。その将来を作るためには、“With action and vision”、行動と21世紀へ向かってのビジョンを一人ひとりが持つことによって、それを行動に表すことによって、新しい未来を作ろうではないかというのが、今年のテーマであります。

そして、今年から来年にかけてのテーマは、“Show Rotary cares”、そのような気持ちを持ったときに、ロータリーの気持ちを持って、地域社会の中の一人ひとりのことを考え、そして、その人のために何か仕事をしていくことを示そうではないかと書いてあります。本質的にロータリーというのは、遊びの団体ではなく、実は奉仕の団体であります。

この奉仕の団体が、今、若い皆さん方と一緒に考えたい。なぜならば、私たちは、そんなに長く生きてないんです。みんな顔を見たら、「そうやろな。お前なら、もう後10年はもたんやろな」思ってる人おるかも知らんけど、10年ぐらいもちまっせ、まだね。(笑い)でも、諸君たちは、まだ、50年、60年もつわけです。その諸君たちに、こういう新しい世界を作るということを、何とか託そうということが、私たちの気持ちです。

その気持ちを表すために、今年のこのロータリーのR Y L Aのセミナーでは、皆さんたちと一緒に考えるテーマを、「これからどうして生きるか」としました。

それは、今までならば、私たちが長い伝統の中で生きてるときに、私たちは日本人として生きていけば済んでるんです。国が何とかの方向を決めてくれるだろう。そこで、私たちは、それにしたがって生きていけば済むんだ。そんなこと習っとらんから、ワシは知らん。もう先輩から言われたことをやりさえすれば、何とかなるよ。ワシら一人が、どんなことしたって、たいしたことはできないよ。こういうふうにして言ってきた世界が、21世紀に向かって非常に大きく変わろうとしている。

今、三宅先生のお話は、化石燃料、要するに、石油の話が出てまいりました。後30年しかもたないよ。まだボクは乗れるけど、あなたがたは自動車に乗れなくなるかも知れない。そういう時代が来ました。

ノストラダムスの大予言というのがありますね。1999年、なんとあと2年です。2年で地球は滅びると書いてあるんですよ。どうする、あと2年で地球が滅びる。それについて、みんながワァワァ言ってるんですけども、それは、ある見かたをすれば真実であります。

どういう見かたをしたら真実か。今まで国家というものが一番力を持っていた。ソビエト連邦共和国という国が力を持っていた。アメリカ合衆国という国が力を持っていた。あるいは、その他の国が、いろんな国が力を持って、中国も力を持ってるし、日本も力を持っていた。国民国家と言われる国家が、そして、これこそが一番、自分たちが生きる根拠の枠組み、人間として枠組みであると思ったものが、壊れちゃったじゃないですか。

ソビエト連邦共和国というのはなくなっちゃったんです。そして、その中で出てきたのは、なんか難しい、カザフスタンとかトルキスタンとか、変な名前の国がたくさん、10い

くつ、ソビエトの中にできたでしょう。できた理由はなんだろうか。自分たちの民族やらを大事にする。もっと言えば、人間個人を大事にするということを中心として国が変わるんだ。世界が変わるんだということが示されました。

1999年まで待たずに、もうすでに、その意味においては、国民国家による地球社会、世界というものは崩壊したと考えることができます。そういう考え方から言うならば、1999年に、あらゆる今まで持ってきた価値の体系が変わって、違った形の世界になるということが、私たちの前に突き付けられたとするならば、ノストラダムスの大予言も、決して荒唐無稽のことではない。

さあ、そうなったときに、私たちは何を根拠にして生きていくんだろうか。これからどうして生きるかということは、何を根拠にして生きるかということを問うてる。これからなあ、昼寝して生きるわ、とか。オレはそのうちに、こんなふうな仕事をして、こんなお金持ちになって、こんなお嫁さんをもらって、こんな人と結婚して、ということを考えるために、これからどう生きるかという題が出ているんじゃないんです。

皆さんの個人的なもの、私たちの世界が、そのようになったときに、その世界の責任を持つあなたがたは、どう生きようとするんですかということを、一緒に考えよう。これが私たちの課題であり、そのことのために、1人7万円出して、そして、ハイヤーしてきたんです。最も優秀だと思われる青年諸君をこれだけ集めてきた。皆さん方を推薦したクラブが、この人こそ、このRYLAセミナーに送って、みんなと一緒に語り合ってもらうにふさわしい青年ですという人たちを集めた。

## 信念に従って生きる

先ほど、三木さんが、ここは自由ですと言いました。お酒を飲もうと、ご飯を抜かそうと、昼寝をしてようと自由ですよ。たった一つ、私たちがこうして一緒に考えるときだけは、決してそれをはずさないでくださいね。後は自由です。

というのは、後は皆さんの責任において考えて。自由というのは、どうしてもいいということじゃないんです。自分の信念に従って生きることが許されてるということです。自由ということは、責任を必ず伴う。どういう責任を持つかということは、皆さんのが自由であります。でも、その責任を持って、ここに集まってきた。そして、これからどう生きるかを考えることであります。

今年はね、二つの問題を出そうと思います。一つは、あしたの講師、辻野さんという方は、実は、フィリピンの女性でありますし、貧しいネグロスの生まれの方であります。大学出て日本に来て、日本で勉強しているときに、幸いにすばらしい男性と結婚して、辻野ナオミさんという日本の名前になりました。でも、フィリピンで生まれた方であります。

この方が、日本で生きながら、自分の母国であるフィリピンとどう関わっていくのか、という体験を通して、皆さんに語りあげることの中から、私は一つの問題を皆さん方に提

起したい。

それはどういうことか。違った国、異文化の人たちと、どのように私たちは交わることができるのだろうか。これから地球社会の中で、私たちが生きるということは、そのような異文化、違った形を持っている人と仲良くやるということは、どういうことなのかということを、ここで考えていただきたい。それがなければ、21世紀の新しい地球社会の中でリーダーシップを取る人にはなれないと思うよ。これからどう生きるかというとき、その異文化の世界の中において、価値の違う人たちとの間に、どう生きるかということを考えてほしい、ということが一つあります。

2番目は、片岡さんという、先ほどもちょっと見えましたけども、実は、小児まひにかかる、片手と片足が動かない。実は困ってるんです。ここに来るのに、車イスで来てもらわなきゃならないのですけども、神戸から来てもらおうと思っても、船に乗れない。船には階段があるから乗れません。

しかたないから、実は、奥さんが、車に乗せて、フェリーに乗せて、ここまで運んで来てます。ここまで運んで来た船から、下りたところからは、ここまで、車イスで押してこなきゃならんだけれども、この階段をあがることもできなければ、自分のキャビンに入ることもできない。私は皆さんにお願いしたい。片岡先生を大事にして、あがるときとおりのとき、たった1日しかいませんけども、ひとつ助けてあげていただきたい。

この片岡君というのは、私が育てたんですけども、小学校の3年生のときに、小児まひのキャンプを私がいたしておりましたが、そのキャンプの子どもとして入ってきました。一生懸命ここで学んだ。そのときに、「手が少し短かろうと、足が少し不自由であろうと、それよりも自分がどう生きるかということを真剣に考えて、自分ができるだけのことを一生懸命やれや」彼はそのことを身に受けて一生懸命勉強しました。ことに、この人は頭をやられたわけではありませんでしたから、知恵遅れではありません。彼は一生懸命勉強して高等学校に行き、京都の高等学校から関西学院の社会福祉に入ってまいりました。私と大学の間も3年間一緒に暮らしました。

大学を卒業したあとで、彼は、「自分は身体の不自由な子どもたちのために生きたい」そう言うので、心身障害児福祉協会というグループを作って、そこで彼は身体の不自由な人たちと一緒に一生懸命生きてきました。今、多くの施設をもって、そして、その中の不自由者と一緒にいますけども、彼はときどき私に、「先生、また行ってください」「どこへ行くんだ」、「今度はイギリスに行ってください」「今度はインドネシアに行ってください」「今度はマレーシアに行ってください」「身体の不自由な人を連れて、私も一緒に行きます」

そして、そのときに、この身体の不自由な人たちが、ハンディキャップを持ってるということを、私たちは忘れてしまうほどに、すばらしい仕事をするんです。ハンディキャップを持ってるということは、どんな形か。彼は自動車に乘ります。片手片足ですけど自動車に乘ります。いつもその自動車に乗せてもらっているのは私です。

ときどき、字が見えないから、「おおい、読んでくれや」残念ながら、年とってくると見えないんですよ。この字は読みますけどね。もうちょっと小さくなると、もう読めない。「ちょっと片岡君、それ読んで」。どっちがハンディキャップがあるかというと、私のほうがあるんですね。でも、人はそう言わないでしょ。あの人は障害の何級のせがれを持っている。

でも、彼と一緒に生きるときに、障害を持った人、これも違った価値の体系や、ものの考え方を持った人たちが、私たちと一緒に生きるのはどうするのだろうか。このことを私たちが考えるときに、私たちの社会が本当に世界の人たちと一緒に生きる社会を作るための一つの違った側面を見せてくれます。

この二つの例を、あすとあさって、皆さん方に示します。2人の講師を通して、そして体験を通して、皆さん方に、いったい私たちは、どうこれから生きたらいいんだろうか。狭い地球、外国の人たちとも一緒に学ばねばならないし、身体の不自由な人たちとも一緒に付き合わなきゃならない。あらゆる人間が共に生きる社会を作るためには、何をどのように生き、どのように考え、何をしたらいいのかということが、私たちの課題になるでしょう。

そして、それは、ただ単に、そういう体験をすることだけではなくて、それが、21世紀という世界を開くことのための一つの鍵になるんです。その鍵を使って、21世紀をどのようなものにして作ろうとしているのか。21世紀があって、あなたがたがそこへ入るんじゃないんです。21世紀は、あなたがたが作っていくんです。その作っていくときの理想の社会、それはいったい何だろうかということを自分で発見して、そして、それに向かって歩んで行くという役割が、あなたがたにあるということを覚えていただきたい。それをここで体験していただきたい。

## 震災直後のRYLA、なぜ？

20年間、この小さな歩みを続けてまいりました。3年前に、実は3月に同じように、このRYLAセミナーをいたしました。兵庫県の方は知ってるだろうし、もちろん四国の方も知っておられるでしょう。その年の1月の17日に、阪神・淡路大震災がありました。6,400人の人が亡くなりました。いまだに仮設にたくさん住んでいる人たちがいます。お年寄りの人たちもいますし、いろんな人たちがたくさんいます。

こうした中で、ロータリーも、多くの人たちが家を失ったり、多くの集会場がなくなったりしたために、ロータリーは、その間、集会をしないで、大会も止めました。そのときに、いったい、このRYLAをどうしようということになりました。やっぱり3月の終わりですから、震災が終わって2カ月後であります。他のあらゆる集会は、神戸の街の中では、何もできなくなって、どうにもならない。じゃあ、止めようか。当然そのような案が出てまいります。

でも、そのときに私たち、何人かの者が一緒に集まって考えました。今年、地震があつて大勢の人たちが今日食べることができない。まだ、たくさんが体育館の中にいて、あの人たちのために給食もしなければ、何かしなければならないと忙しいんで、青年たちをここに連れて来て、食ったり飲んだり遊ばせるような暇はないじゃないかと言う人たちもたくさんいました。それよりも、一人ひとりにボランティアとして、そこへ行って働いてもらったらいいじゃないか、という案も出て、私のところには投書が来ました。「止めろ。今頃そんなことするなんて、どういう感覚だ。お前らの感覚、鈍ってないか」

そのときに私たちが決心したことは何か。なるほど、地震でたいへんな人たちがたくさんいる。そして、そのことのためにボランティアを今必要とするけれども、今、たった4日間、青年がそこに携わらなくても、ここに来て、これからずっと生涯を通して、ボランティアの仕事を通して、あるいは、他の人と生きることを通して、あるいは、どのように生きるかということを学んで、育ってくれるならば、それほうが、今、3日間、みんなが給食のお手伝いすることよりも、将来に向かっては、もっと大きな意味があるんじゃないかな。だから私たちはRYLAをしよう。

多くの人たちの非難を、片一方で浴びながら、片一方においては、多くの人たちの称賛を浴びながら、私たちはここで、今日と同じようなRYLAを2年前にいたしました。それほど、私たちは、このRYLAについて、思い入れを持っております。諸君たちと一緒に四つに組んで、諸君たちと一緒に考えて、そして、私たちの後輩としての諸君たちに、新しい時代を担う、そういう目を持って、ここから行ってもらいたい。

そして、来年じゃない、さ来年じゃない、ロータリーのためではない。世界人類のために、私たちの仲間のために、地域の人たちのために、あらゆる人たちのために、あなたがたがどうして生きるかということを、見出していただいて、ここから散らばって行くならば、Build the Future というような、そういう大きなロータリーが持ってる一つの理想主義、人道主義、そういうものにしたがった多くの後輩たちを得ることができるだろうと思うから、私たちはこの会をしているわけであります。

大勢のロータリアンが、一緒に参加しているのは、そのロータリアンの方々が、自分のささやかな夢を、若い人たちと一緒に担っていける、その相棒を捜すためです。

何をしてもよろしい、自由です。たった一つ、その皆さんの自由のためには、皆さん自身が責任を持ってこうしようというものだけは、ないといけないんじゃないか。それを、ぜひ皆さん方にお願いをする3日間にしたい。

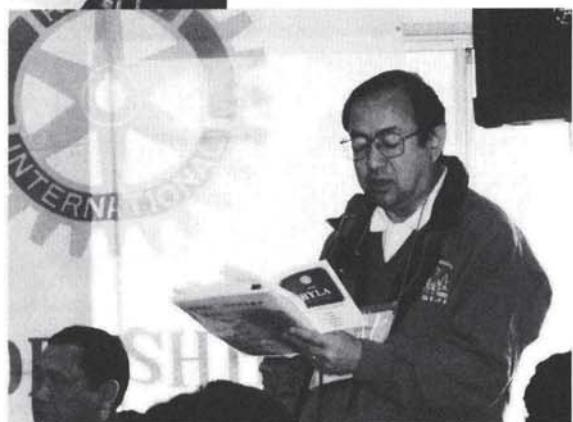
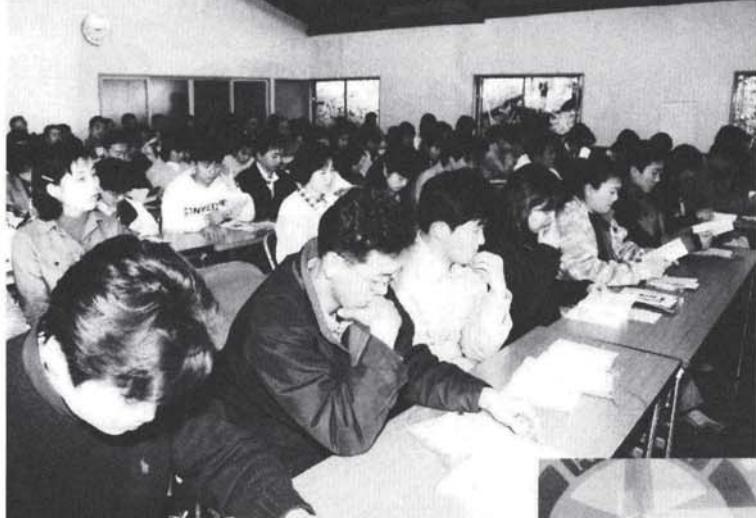
3月の終わりといえば、会社を持つての社長さんたちにとっては、大変な忙しいときです。でも、それを黙って伏せて、とにかく、この時間を皆さんのために捧げようと集まってくれたロータリアンの皆さん、何かいいものをそこから求めて、ここから帰っていたたくことを、私たちは心から願っています。これを私は申し上げさせていただいて、最初のご挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

# オリエンテーション



## 第19回 RYLAセミナー

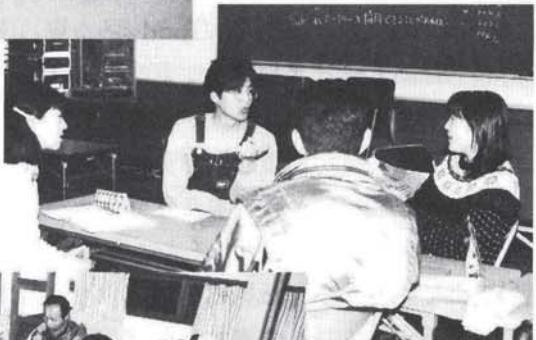
997.3.27~3.30 於、神戸YMCA奈島野外活動センター  
主催：R.I.第2670地区・R.I.第2680地区・RYLA運営委員会



# オープニングパーティー



# キャビンタイム



# 「人を愛して、人を care する」

ネグロス教育里親運動  
宝塚会

会長 辻野 ナオミ氏



ロータリーの今井さん、そして、ガバナーの三宅さん、ディーンの山口さん、Ladies and gentlemen、Good morning. おはようございます。「これからどうして生きるか」のテーマに合ってるか、私も分かりませんけど、私の生き方、これからの生き方を話したいと思います。

私は田舎で生まれました。そして、自分の両親から生まれたのですから、その両親の教え方、家の教育です。そして、私が教会の中にいるからと思います。つまり、Christianity ですね。

Christianity の話というと God is love. ね、Love is God. ね。私は人を愛して、人を care することを教育されたと思います。

だけど、教育としては、日本みたいに朝から晩の11時まで勉強ばかりしたことないです。私は7時に学校へ行って、お昼帰って、親と一緒にごはん食べて、そしてまた学校へ行って3時になったら、お家帰ってお家の周りで遊ぶだけです。別に両親から、「勉強、勉強、塾に行きなさい」なんか聞いたことがないです。もちろん、フィリピンには塾がないからだと思います。

そして、もう一つは、私のお母さんは、戦争のために、中学校も行かなかったからと思います。私のお父さんは、ちょっと大学行ったから、lucky かなと思ってます。でも、私の友達のほとんどの両親は、戦争のお陰で、中学も、高等学校も、行かなかったです。

## <辻野ナオミ氏>

フィリピンで最も貧しい島と呼ばれるネグロス島に生まれる。敬虔なプロテスタントの家庭に育つ。ラ・コンソラシオン大学で経営学を学ぶ。1983年に辻野真一氏と結婚して来日。1985年に I W E C (国際婦人英語クラブ) を創設。そのメンバーから募金を募って文房具や古着をフィリピンに送る運動を始めたが、2年間の現地との交流の中で本当に必要なものは教育だと気付かされ、NEHA (ネグロス教育里親運動) をはじめる。NEHAは現在、会員数1,000人を超えて、貧しさのために学校に通えないネグロス島の子供たちに教育を受けられるよう援助しているばかりでなく、現地に図書館や幼稚園を建てたり、養豚場を作りて住民の生活向上にも努めるなどの活動を行っている。

Christianity というたら「何でも食べる前、感謝してください」とうるさく言われました。そして、年寄りに会ったら挨拶してくださいと言われました。その人が、どこから来た人にも関係ない。

そして、もちろん、聖書に書かれている、悪いことしたら地獄行くとかが一番恐かったです。だから、何にしてもすぐ恐くなります。例えば、私たちの時代は、マリワナは目の前にある。drugs 目の前にある。でも、それにどうして触れなかったか。もちろん、教会、Christianity の教育が、あったからです。「これ触ると悪くなる。悪くなったら、私、地獄行くんやな」と。それが一番頭に入って、触ることができない。

私たちは、この半分ぐらいの部屋で、10人ぐらい住んでいます。そしたら、10人ぐらい住むと、田舎から来た子どももいるし、都会からの方も来るし、売春する人も、そこに一緒に部屋にいます。そしたら、マリワナする人があれば、その部屋でもマリワナしてる。drugs してる子があれば、その部屋でも drugs します。それは、自分自身で決めるだけなんです。そういうセンスだった、あのときは。

だから、学校の教育なんて、もう地図も見たことなかった教育だったからですね。先生がね、こう向かって、ここが北、ここが南、東と西、そういう教え方だけなんです。地図もない、丸い globe (地球儀) もなかった。だから、今でもフィリピン人は、どこへ行っても、日本に行っても、どこの国へ行っても、口で場所を聞きます。

「これはどこですか、どこで乗りますか」、これもいいことがあったです。どうしてか。地図がないから、北もどこにあるか分からない。どうするか。やっぱり、communication。それで、「あ、すいません、これはどこですか」それで友達になって、いろいろな人間に、会って、その人間は自分の恩人になります。だから、私は、「ああ、よかったな」地図、読みなくても。

そして、私、日本に来たときも、日本語が何もできなかったから、駅の名前だけしか知らなかつたので、そしたらどうするか、やっぱり、「あ、こんにちは。梅田、梅田」それで、みんなが一生懸命教えてくれて、そして、友達になった。

ほんと私一番うれしかったのは、日本で一番友達になった人たちは、年寄りです。日本の年寄りは、とっても親切です。だから、ほんとに尊敬します。だけど、若い子とか、若い男の子に聞くと「ええ、ええ」それで「ああ、すいません」、それで終わっちゃうです。でも年寄りは、たぶん 学校、行かないから忙しくないかもしれませんね。今になってそう思うけど、でも、あのとき思ってなかった。今になって日本人に教えられた。年寄りはすることないから親切にできると言うた。(笑い) ごめんなさいね。だけど、その、いつも教えてくれる方がね、行く道は反対側なのに、わざわざそこまで送ってくれます。その親切さね。だから、今の若い日本人もそれと同じだったら、日本はとてもすばらしい国じゃないかなと、私はそう思っただけです。

## Love and care

そして、もう一つは、Love and care。もちろん、Christianだから、私たち信じることは、Christianじゃなかったら、Love and careもできないと、そう信じてます。その、Love and careね、私のお母さんとお父さんの教えていたのは、“Bring food to neighborhood.”ね。食べ物は近所の人に持って行ってくださいと。おかげないからおかげ持って行ってねと。それで、私たちが持って行きます。お母さんが「あなたは、大きくなったら、食べ物持って行ってね」そうじゃなくて、いってるだけでも勉強になったです。

もう一つは、“Bring all the children at home and eat together.”あそこは親がないから、今ごはんないから、連れて来て、ここで一緒に食べましょ。うちもね、物もなかった。でも、一緒に食べましょと言うてるのは、分けることの意味です。余ってる食べ物があるからじゃなくて、分け合いましょうの意味です。そういう意味と私は思ってます。そして、私は大きくなって大学生になったときでも、古い服がなかった、一つもない。どうして古い服がないか、今考えたらお母さんはちょっと大きくなったらすぐ、近所の人配ります、自分の、私の、私たちの古い服です。

そして、もう一つは、私たちの、furniture, tools, kitchen utensilsですね、家の道具すべて、neighborhoodの道具です。みんな誰でも借りに来られる。みんなが来て、「ああ、お皿ないから貸して」「ああ、ハサミないから貸して」それも最初はね、私の両親はアホやなと思っちゃった。なぜか、フィリピンではね、「貸してください」言うたらね「戻るのを考えないでください」(笑い)絶対戻らない。もし、戻るならね、壊れています。(笑い)日本だと、壊れていたら「弁償しますから、すいません」、でもフィリピンではそうじゃなくて、「へへへっ、壊れた。ゴメンね」、それで終わります。

そして、お母さんはね、ほんとに、今日、私たちのあしたのごはん、あしたの米、誰かが来ましたら、泣いてるお母さんが「私たち、今晚ごはんないから、ちょうどだい」と言うたら、ごはんまで渡す。信じられない。

だけど、その朝にね、お父さんは5時に起きて、他の近所の人に、またお金借りて、私たちのごはん買うからです。だから、意味はね、God is rich.ね、神様はお金持ち。絶対なんとかすると、私たちは、そう信じてます。その借りたところも、別にお金持ちじゃないでしょ、たぶん、ないと思うけど、でも、お父さんが、困っていると思って、お金も貸してくれた。でも、その人も、たぶん、その後に、どこかの近所の人に、お金借りたと思います。それが私たちの近所の付き合いです。それが、私が一番ありがたいと思います。ああ、あの教育も良かった。こういう両親で生まれて良かった。今はそう思ってます。

## 一番大事な助け合い

そして、もう一つは、私たちの家は、Public hall 公民館。テレビをつけると、みんな入ってテレビ見る。お父さんは、もう、そこで寝てるのに、近所の人はまだ帰らないです。だから、そのつらいところもありますね。もう10時になって、11時になって、まだ、みんな帰らない。でも、別にね、金持ちやからテレビがあったじゃなくて、それも毎月払うテレビです。だから、私たちには大事なテレビだけど、近所の付き合いのために、みんな、いつでも見てくださいという、その気持ちが好きです。今でも好きです。

台風にあったときでも、みんな家に来て、別に私たちの家は、コンクリートとかでっかい家じゃない、ただちょっと大きいだけだった。どうしてか、みんなが、まとめると、何かがあったときに、みんなを助け合えることを一番大事にしてる、私の親は。

そして、車は救急車になります。誰かが病気したときに、これは私たちの車じゃないでしょ、あのとき車やから、近所の車。その近所の車も救急車 public ambulance になります。誰かが病気になって、車貸してください。その車で病院行く。別にね、いやあとか、こんな考えるじゃなく「あ、どうぞ、どうぞ、早く、早く来て」そういう気持ちです。「ああ、どうしよう、私の車、どうしよう、どうしよう」とか、それはないです。すぐ手を出す、Open hands です。Open heart と言うたら、これも、Christian の教育ですね。手をさしだしてください、誰でも。

そして、もう一つは、その近所の人の車がなかったとき、その近所の人が、お金出す。「はい、このお金、ちょっと悪いから、車がなくて、じゃ、このお金使ってガソリンを買ってください」と、みんな助け合いの責任があった。それは自分の責任と思ってますという感じですね。

そして、もう一つはね、年寄りには席をゆずってください。バスにのっても、jeep にのっても、caravany にしても、席をゆずってください。今でも、私は、日本で、年寄りがいれば、自分の席をゆずっています。これは、もう、身についた教育だから。ときどき、自分が日本をずっと見てて「いや、あの人は、若いのに席をゆずってないのね。なんで、私ゆづるのかな」と思うときがある。

だけど、でも、やっぱり、イライラする。自分が座ってて、真前に年寄りが立てるのができない。やっぱり、なんか気持ちが悪い。やっぱり立ちますね。それが、また日本人の年寄りを助けるとね、すぐに自分のもっている物を渡す。もらうためにゆずったんじゃないのだけど、貰わないと、また、その年寄りが傷つくから、貰うしかないです。

傷つくといえば一つ傷ついたことがあってね、日本に私が初めて来たときに、障害者ですね、私が手を出したときにね、断られたことがあって、1回、2回、3回もあって、それでも私はやめない。I never give up. ね。私に身についたものは絶対に忘れない。だから、どうして、こういう教育になったかと、私は思った。なんで、この障害者たち

は、友達になりたい人を断るのかなとそう思っちゃった。友達になりにくくなっちゃったかと、思った、疑問にね。それはあまりにも日本が賢くなって、だれかが言うたね「神様も助けもいらない」言うたぐらい。この間かな、おなかが空いて死んだ日本人がって、手紙の中に「神様の助けいらない」と書いてますね。なぜ、なぜ、そうなったか、私は理解できない。

でも私は、人の助けは必要。私、今でも、独りでは生きられないと、自分はそう思っています。小さいときから、私たちみんな一緒に助け合ってるから。だから、自分自身今、独りでは生きられない。That's true man can not live alone. ほんと、それは。人間は独りでは生きられない。いくらあなたが賢くても、いくらあなたが世界一の金持ちでも、私たちの助けはあなたは必要です。なぜかね。お金があっても絶対お医者さんは呼ばないといけないから。その真夜中のときは、お医者さんとかの助けがいる。だから独りでは絶対生きられないですね。

*God is sweet. God is love.*

そして、もう一つは、*God is sweet.* ね、*God is love.* それが別に「これ、覚えとけ、覚えとけよ」とかじゃなくて、ただ、毎日、私の親を見てるだけで、身につきました。それが今の生き方になってると、私はそう思っています。

そして、私たちのネグロスの島ですね、ちょっと話したいと思います。私たちは、四国より小さい島です。でも350万人ぐらいが住んでいますね。そして、私たちの producton は砂糖だけです。サトウキビが60パーセントです。そして、私たちの給料は、今になって、300円になりました、1日。10年前は100円です。今になって400円のところもありました。

そしてそれを、私たちの communication に使って。communication は radio。radio が、100パーセント。どうしてか、テレビ買えない人は、たくさん。テレビ買える人は、今になって、20パーセントぐらい。そして、newspaper 買える方がだいたい30パーセントぐらい。だからほとんどは、radio を使ってます。

そして、乗り物は、caravan、tricycle と jeep。でも人々は、friendly、friendly ですね。友達になりやすい、人々はね。friendly な私たちの町は、どういうか。“de quare city”，“the city of smile” smile の city だって。どうしてかね。おなか空いてるにしても、絶対、人の顔見たら、smile します。

そして絶対人しゃべるときは、目を見る。それが、私が日本来たときには、なんで、日本人は、私にしゃべってるけど、私の目を見ないのかなと、私は不思議です。ほとんど、皆、どこか見てる。それが、すごく違うと思います。

## ネグロスに教育を

こういう「ネグロス教育里親運動」が、始まったきっかけですね。私が、83年、日本に来ました。ほとんどの日本人は、日本にいるフィリピン人は、ジャパユキさんと思ってますね、みんな。でも、私は違います。先に言います。でもね、ジャパユキさんはね、悪い人じやない、悪い子供じやない。家族のために働いている。フィリピン人は family tie が、とても strong 強いですね。That is true blood is thicker than water. ね。だから、それが本物の血が濃いの意味ですね。

だけど、日本から見ますと、違うと思います。日本で晩に働いている女性は、ほとんど、親が困っていません。みんな Chanel と Christian Dior 持ってます。ね、そういうために、だいたい働いてます。

でも、フィリピン人は違います。自分の妹、自分の弟、教育させたいから、仕方がなく日本に来ましたというだけです。もちろん何パーセントか、売春のために来たフィリピン人もいると思いますけど、でも、それは、2パーセントだけなんです。日本の manager か、travel agency か知らないけど、フィリピン行くときは、田舎者探してます。だから、ほとんど何も知らない女の子が、日本に来て おいしい話を聞いて、「あ、おいしいから、じゃあ行こうか」と思ったら、裸の踊りをさせて、ホステスさせて、売春させて、morphine 注射をして、そしたら、恥ずかしいから帰国もできない。

昔の昔だとね、外国から帰ったと言うと、大きな顔で鼻高い。「私は外国から來た」と言えるけど、今は、フィリピンは違う。昔はね、「私は、JAPAN 行ってきましたよ」と言えるけど、今は、大きい声で言えなくなったんですね。だから、ここに來てるジャパユキさんはほとんど、私と同じ田舎者が多いです。

私が運動を始めたのは、マルコスが悪いことする、前ネグロスはお金持ちだった。働いている人たちも、毎日ごはんが食べられた。だけど、10年後、マルコスが座った後に、だんだんだんだん変わっていきましたですね。それが、1979年からちょっと苦しくなって、私が83年に日本に来ましたときに、まだネグロスはそんなに貧しくなかった。あのときはまだ、残ってる力があった。

1985年に帰ったときに、ネグロスは dead city だった。もう死んだ島思っちゃった、私が帰って來たとき。サトウキビの値段がすごく下がって、11軒の工場が、1軒しか残っていなかつた。10軒のさとう工場がつぶれるとすると、10軒の人たちがクビになったことなんですね。つまり、2万5千人ぐらいの人々が仕事なくなつたときです。

それで私は、as a Christian ね、as a human being ね、同じ人間として見ることができない。自分がいい国にいる lucky な人でね、こういう苦しい人たちを見ることができない。これが、たぶん、親の教育だったと思います。どうして「助けなければなりません」と思ったかというと、新しい furniture 、新しいTV、日本では、捨てるだけでしょ。

そしたら、たまには、ネグロスに捨ててくださいと、お願いしたら、ネグロスに捨ててくれるんじゃないかなと、私は甘くみた。

でも、もちろんほんとだった。日本に帰って来て、あのとき、1985年だったけれど、英語勉強したい奥さんたちがいっぱいいた。そして、英語の先生も少なかった、あのときですね。そしたら、私は That's my weapon. ね。「英語、教えたら、いっぱい人が来て、その人に話しょうか」と、ピンときました。私は、男の子の16歳、18歳の、破れてるスリッパを見て、働きたいけど仕事がないのを見て、とても、かわいそうに思いました。そして、もう一つは、ゴミの山に、子どもたちが、紙を集めてたのを見て、「何に使うのですか、それ」と聞いたときに、「ノートにします」と言ったときに、心が壊れました。

「ああ、私たちのときは、ノートぐらいはあったじゃないかな」と、私たちより、なんか貧しくなった感じですね。それで、日本で、英語を教えたときに、30人ぐらいの奥様が来てまして、それで、古着送って、薬送って、文房具送って、YMCAが一番声かけて、一番先に私を助けてくれた。そして、ずっと文房具送って2年間やってきました。

ただ、これが残念なことがあります。その古着とか貰うときにサインが必要なんです。サインね、signature。でもフィリピンの若いお母さん、16歳のお母さんが、18歳のお母さんは、自分の名前でも書けない。そこで、「ああ、失敗した」と思って、「古着じゃない、古着じゃない、食べ物が、問題じゃない。ああ、教育だった」そう、頭にきました。教育が問題だった。

だからみんながここまで、ネグロスの人たちが、手に血が出るぐらい働いても、身体が壊れてしまうぐらい汗が出ても、自分の子どもに教育ができなかつたのは、ああ、教育の問題からだったです。それで、また、頭にきました。ネグロスに着いたときに、私のメンバーに、私は古着を送るのをやめたい。できるだけ、古着は台風のときとかだけ、必要なときだけ送りたい。できたら一人でも教育に生かしたいと伝えました。

そのことを話したとき、残念だったのは 日本の奥さんたちはね、「これは、大変なことでしょう」「これは責任がありますよ」と、negative な答えばかりがありました。そこで私は別のところに声をかけて、ネグロスの人たちの教育のために協力をお願いしました。あるおばあちゃんにそのことを言うと、すぐに賛成してくれました。そこから友達が友達をよんで大きなつながりになり新聞にもとりあげられました。そしてNHKのTVでもとりあげられさらに協力してくれる人が増えました。神さまは生きているんですね。こうしてみんなが支えてくれた。そしてできた団体、NPO、NGOですが Negros Educational Helping Activities (ネグロス教育里親協会) そこから、incorporated (法人) ができました。

でも、日本では incorporated じゃない。フィリピンでは incorporated になってます。日本ではね、incorporated になると、YMCAみたいに大きくならないと、無理なんです。まだすごく小さいので、日本ではできないです。そして、foster parent (里親)

が支えてる子供（里子）が、学校行けるためのお金が、1年間で小学生が1万5千円、中学生が2万3千円。そして、membership がありますけど、その贊助会員が年間で5千円です。

## どうやって里子を探すか

まず最初はね、どうやって、私たちが里子を探すか。里子が、私たちの事務所に来て「私、里子にしてください。私の子どもは里子にしてください」それだけでは、里子になれません。私たちはちゃんとその子どもの家を見に行って、ほんとに助けが必要か、ほんとに困っていますか。それを見てから里子にするかどうかを決めます。

年間にフィリピンで3万5千ペソをもらっているお父さんは、自分の子を里子にはできない。どうしてか。3万5千ペソはそんなにお金持ちじゃない。でも、何とか頑張れば、子どもは絶対学校に行けます。だから里子にはしない。3万5千ペソ未満もらってるお父さんの子どもを里子にします。

3万5千ペソというたら、1カ月が、3,500ペソですね。1万7,500円が毎月の給料です。それは、フィリピンでは食べられる金額ですね。だから、ぜいたくしなかったら、サンリオのノートじゃなく、きれいな鉛筆でもなかったら、何とか学校行きます。でも、その3万5千の下の人たちは無理なんです。ただし、3万5千の下にしても、子どもが1人だったら、里子にしない。だから、ほとんど3万5千の下だけど、2人以上の子どもを持ってる家族。そして、もう一つは、3万5千の下だけど、10人子どもあれば、里子は1人だけにします。10人だから、10人すべて里子にするんじゃない。1家族に里子1人。どうしてかというと、もし他の兄弟の分も面倒をみたら、その家族だけお金持ちみたいになってしまう。助けが必要な家族が1万人くらいもいるのに。だから1家族に里子1人にしています。

今、里親となっている人は日本人だけでなく、アメリカ人、ドイツ人、シンガポール人もいます。その里親の気持ち、お金をムダにしたくない。私たちの運動はモノではなくて教育。教育があれば自分で仕事できるようになってきます。そして身につく。頭に残る。死ぬまで自分が教育を受けられたのは里親のお陰。そういう意味で感謝から平和がある。これが一番大事なことです。

## 関心を持ってください

私が皆さんにお願いしたいのは一つだけです。concern ね。love じゃない。concernだけです。concern、関心、関心を持ってください。それだけです。自分と同じ human being ね、同じ人間のことも考えてください。年寄りが電車ですわれるぐらいだったら、眠たくても立ってください。席をゆずったから自分 lucky になるんじゃないです。いつか、それは、あなたが知らないところで、God is looking at you. 神様が見てますから、

私はそう信じてます。

だから、一人の年寄りにイスあげるぐらいで、それがすべていいことじゃないんですけど、でも、それは絶対、give and take が自分が知らないところにはあります。今だって、あなた服があるでしょ。靴があったでしょ。他の国、見て、皆、何もないじゃない。それが、神様があげたもの、自分のものじゃないよ。自分が一生懸命アルバイトして、この服を買ったからじゃないよ。あなたが元気だからです。神様があなたに元気をつけたから働けただけなんですね。もう自然に貢ってるのよ。だから、あなたたち、私たちがやることは、あげるです。your life 自分の命だけを貢ってるんだから、これは、自分のをあげることを考えないとできない。私は、そう思ってます。

私、この命貢ったから、これがすべてと思ってますから、これができるだけ、1 パーセントだけでもあげたいという気持ちだけです。だから、みんながそうだったら、みんなが手をつないだら、この世界は美しいと思います。beautiful world ね。この世界が美しくなるのは、若い人たちにかかっています。私たちは亡くなりりますから、あなたたちの時代にまかしときますので、お願ひします。それが私の生き方なんです。

And this is my life and I will never give up. And I will never give up to say thank you. And I will never give up to say “コンニチワ”，「こんにちは」だけです。That is my weapon. 私が今まで、ここにいるのは、Y M C A の中、入って、“コンニチワ” 言うたときに、日本語が分からなくてもみんなが友達になった。ただ、“コンニチワ”だけ。近所の人に、顔見たときに、「こんにちは」。だから私の子ども、できるだけ、勉強はいいから「こんにちは」と「ありがとう」、「ごちそうさま」、「いただきます」、だけを忘れないでください、と言っています。good human being それが大切だと思います。

私たちの plan ね、私たちの里子の夢はどんなかね。私たちの力で、政府が何もやらなくても、私たちの力で、Negros をもういっぺん、元通りにしたいですね。私たち、Negros 元通りになると思ってます。それを信じてます。

Negros に工場、建てたい。Negros に学校、建てたい。Negros で働きたい。私たちの里子は、日本に行って働くんじゃない、マニラに行って働くんじゃない、そういう教育じゃないです。Negros で勤めて、Negros で税金払う。Negros で、食べもの買う。物、買う。Negros を、また戻すために。それが私たちの夢です。

だけどこれは、皆さんのがいなければ、human being の温かい支えがなかったら、これは無理です、日本でも。日本でも、なんぼお金持ちあっても、世界の温かさがなかったら、日本としては、独りではできない。私は独りでできない。山口さんの助けが必要です。今井さんたちの助けが必要です。ロータリークラブ、皆さん、学生の助けが必要です。Believe me. Men never live alone. ですね。So, thank you very much. Do you have any questions. どうぞ、聞いてください。

## 質問・意見

——はい、どうもありがとうございました。今、最後に質問あつたらということですので、また、ご意見でも結構です。いかがでしょうか。あの、先生はね、日本語はきちっと習ったわけじゃないんですよ。だから、ちょっと分かりにくい言葉あったかも知れませんけれど、一生懸命お話しくださいました。何か、ご質問とか、ご意見ありましたら、どうぞ。ロータリアンの方でも結構ですよ。なお、NEHAニュースを先ほど置いておきましたが、先ほど、先生がおっしゃった、NEHAの教育里親制度につきましては、このチラシ、コピーが少ししかありませんので、カウンセラーにお渡しをしておきますので、また、カウンセラーを通してご覧いただくなり、また、説明を聞いてください。

**辻野** ああ、私はね、日本語勉強してなかったです。私は、もう、自然で日本語勉強しましたので、だから、ちょっと変な日本語で、polite な日本語じゃないと思いますので、許してください。

——はい、いかがでしょう。はい、河合さんどうぞ。

**河合** あの、一度里親になりますでしょ。で、1年、その子が卒業するまで、だいたい1人の子を育てるんですね。一応、中学が終わるまでですか。

**辻野** それは、他の里親はね、Negros 行って里子の生活見てね、大学まで行かしてる里親もいますけど、それは自分の（皆さん）希望です。

**河合** それで、里親の子と、foster parent が、こう手紙を送って来るとか、成績を送ってくるとか、あるんですよね。

**辻野** そうです。report とか、手紙とか、貰います。

**Q** 小学校、中学校の制度はどんなですか。学年の制度は。

**辻野** あのね、義務教育というたら、日本では、学校が free (無料) で、本も free だけど、フィリピンでは、義務教育といつても、自由なんです。行くか行かないか、それは自分で決めること。だけど、小学生が6年間、そして、フィリピンはね、中学校と高校がないです。中・高4年。

フィリピンではね、two-year secretarial とかね、2年間で秘書の勉強とかあります

ので、それでやりたい方は、それでできますし、もちろん、日本みたいに、弁護人とか医者は8年かかります。だけど、high school 卒業しても、日本の高校生にはならない。勉強が足らない、もちろん。2年違う。

だから、high school 卒業したら、会社では働けない。office とかはダメ。たぶん、デパートの saleswoman、salesgirl でも。今でもね、salesgirl も例えば、マニラのデパートだったらね、せめて2年大学行かないと、働けません。

ただ、よく皆、勘違いするのは、high school 終わったから、もう、義務教育いらないじゃないか、もう、それで働くと思っている里親がいっぱいいます。でも、そうじゃない。メイドとか、baby-sitter とかそういう仕事になってしまいます。だけど、これがすべて絶対やってほしい仕事じゃないですね。もちろん、向こうの子どもたちは広い、高い夢持っています。どうしてか、やっぱり、例えば、今のお兄さんたちだったら、せめて妹か弟は4年大学は行かせたい、そういう夢持っています。もちろん、子どももそうです。そして、現在ね、Negros も、ラモスが大統領になってから、工場が2軒ぐらいできました、ラモス大統領になって。今のラモス大統領は、いい大統領です。

ただ、ちょっと問題になったのは、ミンダナオですね。Muslim の Government が作られるようにしたことに対して、ちょっと、フィリピン人はよくないと思ってますけど、でも、それが平和のためにしようと思ったら、私たちは、もういっぺん見て、これで平和だったら、だけど平和になってなかった。先週も戦争があったですね。

昔の戦争はね、フィリピン人の guerrilla と政府だから、それでまだましだったけれど、今の戦争は怖い。Muslim と Christian みたいな感じになったから、教会と教会が戦争してるようにになったから、ちょっと大きな問題じゃないかと、皆、怖がってるんですけど。

でも、今、機材とか、ほとんど、ミンダナオ島に、力入れてるから、経済が良くなれば、また、Muslim も、戦争しなくなるじゃないかな。Muslim の気持ちも分かってますよ。今まで放っとかれたことに対してね。それは、もちろん、政府の責任と思ってます。だから、日本人たちも、ロータリーも、何か、ミンダナオ島で一生懸命やってると聞きました。きのうも聞きましたし、だから、とても、ほんとうに感謝しています。ありがとうございます。

——はい、他に、もうよろしいでしょうか。はい。深川先生、どうぞ。

**深川** たくさん子どもが出てくるようなんですが、子どもを産むのを制限するということは、宗教上からできないんでしょうか、Catholic の信仰とか、あるいは、国の法律で、それを禁じているものがあるのかどうか。もう一つは、夫婦が別れる離婚というのは、宗教上の制限があるのか、あるいは、法律上、離婚の自由がないのかどうか、そのへんの

ところを教えていただきたい。一つは子供を産む産児制限ですね、そういうものは、宗教上の理由から禁じられているのか、あるいは、法律の制度で禁じられているのか。それから、夫婦が別れる、離婚というのも、離婚の自由があるのかどうか、なければ、それは宗教上の、Catholic の方の信仰からくるのか、あるいは、国の法律で、それを規制しているのか、そのへんのところを教えていただきたい。

**辻野** フィリピンの政府は、教会と関係がある。もちろん。昔、離婚することについて選挙があって、離婚しますか、憲法を作るか、しないか。80パーセント、No だった。離婚するのを、Catholic も Christian も嫌がっていた。それは、私も嫌。子どもがなかつたら、毎日、離婚してもかまいません。(笑い) でも、子供があるときは、離婚してほしくないです。

女人の人と男の人が一緒になることは、喧嘩することが当たり前の意味。喧嘩することもあれば、いいこともある。そして、例えば、喧嘩して別れることもあったよ。親元に帰って。だけどね最後に、仲人が16人います。これが大きいです。日本では仲人は1人ですね。その仲人16人が、毎日、家に来たら、離婚できないよ。(笑い) どうやって、毎日、「あなた、考えて、子どものためにどうする。社会も恥ずかしいじゃないか」それ、みんな、毎日言うたらね、なんば石みたいにかたい心あっても、軟らかくなる。

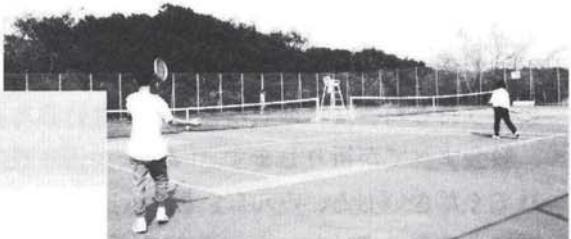
教会すべてが祈りします。「ああ、お願いします。あの夫婦が、今喧嘩してるから、助けてください」と、みんな、教会、子どもからおとなまでがお祈りします。どうやって離婚できるの。歩けないよ、道を。(笑い) もし、離婚したかったら、その島から逃げるしかないですね。そしたら、まっすぐ歩けるわ。(笑い)

そして、子どもの関係ですね。これは、一つはね、もちろん、Christian だから、赤ちゃんはね、なんば、1日とか1週間とか、1カ月とか3カ月といっても、We believe it's human being. それでも、3カ月でも人間信じてるから、私も反対。だから、おろしたらダメ。それは、みんなは反対、そこでね。お母さんの命が危かっただいいでしょ。かまいません。

もう一つ、問題がある。電気がない。(笑い) もう、7時には寝てしまうから、テレビもないから、することないから、それも一つの問題だと思います。答えになりましたか。

——はい、他にいかがでしょう。はい、それでは、とくになければ、終わらせていただきます。先生にもう一度感謝の拍手を。(拍手) ありがとうございました。

# レクリエーションタイム



# キャンプファイバー



# 「みんなのことを考えていこうと…」

兵庫県心身障害者福祉協会

専務理事

片岡 実氏



おはようございます。きのう、私は、この余島に来まして、実は私にとっては、40数年ぶりの余島訪問でございました。皆さんのが生まれるもっと前に、私は小学校3年生の時に、初めて島にやって来ました。正直、そのときの余島というのは、もっと、でっかい島であったというように、子どもでしたから、思います。こころ辺りも、もっと広かったように思います。きのう、来て「これが余島だったかな。もっと広かったはずなのにな」なんて思いながら。しかし、島に上がって、だんだん「ああ、そうだ。そうだ。これが余島だ。ここにこれがあったなあ」てなことを、思い出しておりました。

私が余島に来たのは、小学校3年生、9歳、昭和28年です。もう、ほんとに大昔ですけど、もちろん、こういう建物も何もなくて、ちょうど、今こうしてお話をさせてもらっている場所は、私がテントで生活した場所です。この右手が、子供の頃にクリケットを、初めてクリケットを昭和28年にして「こんなにおもしろいものがあるのか」とて楽しんだようなことでした。確か、食堂の場所辺りが、なんか、水を汲んだりするようなところではなかつたかな、なんて思い出しながらおります。ほんとに懐かしい思い出であります。

ただ、私にとって、余島というのが、懐かしい思い出だけではありません。私の人生を大きく変えた島が、実は、余島であるなあというように思っております。その意味で、大

<片岡 実氏>

1944年生まれ。小児麻痺の後遺症で、四肢体幹機能障害を持つ。

1968年、ボランティア活動を中心に財団法人兵庫県心身障害児福祉協会をつくる。兵庫県下の心身に障害を持つ子どもたちの療育事業やレクリエーション事業、車イスで行ける町づくりなどの啓発事業、ボランティアの育成等を行う。

1981年、社会福祉法人ひょうご障害福祉事業協会を設立し、障害を持つ人たちの家庭に代わる場として、イギリスのシェシャーホームと提携し、日本で最初のシェシャーホームとして、身体障害者療護施設「はりま自立の家」をつくる。さらに1985年に身体障害者療護施設「はんしん自立の家」をつくる。

現在、財団法人兵庫県心身障害児福祉協会及び社会福祉法人ひょうご障害福祉事業協会常務理事。

変感慨深いものがございます。

私は、昨日から、たくさんの人にお手伝いをしていただきながら、この島に入らせていただきました。きょうも朝から、一所懸命おぶってもらって、私のキャビンから食堂に、そして食堂からここに連れて行っていただきました。今、松葉づえ1本使っておりますが、小学校3年生のときも、これよりももっと背の短い松葉づえをついて、この島にやってきました。なかなか、足が不自由なんです。左手も不自由なんです。足が不自由なために、船着場から坂を上がるのが大変だったんですよ。

皆さんですといとも簡単にさっと走って上がれると思いますが、私にとっては、小学校3年生のときに大変な坂でした。もう、ハアハア言って。おそらく私が小学校3年生までに初めて経験した坂道ではなかったかなというように思います。私は、ということは、それまで、道を歩くというようなことは、長い道を歩くということは、ほとんど経験がなかったんです。

ちょっと距離があると、親がおぶって連れて行ってくれましたし、ましてや、坂道なんて上るのは、「危ない！」と言って、親が行かせませんでした。たいてい、親がおぶって連れて行くようなことでした。でも、この余島に来て、何でも自分でしなければならないということを初めて知ったわけです。

## 40数年前の余島キャンプへ

昭和28年に、この余島で、日本で一番最初に私のような障害を持つ子どものキャンプが開かれました。肢体不自由児療育キャンプという日本で一番最初のキャンプです。そのキャンプ、きのう、ファイサーのときでも、お話をされましたが、今井先生が主催されたキャンプでございました。日本で最初に開かれた最初の肢体不自由児のキャンプに、私、最初のキャンパーとしてやって来たわけです。

私は、生まれも育ちも京都、京都市内なんです。この中には京都の方はいらっしゃらないと思いますけれども。神戸のYMCAというところが、障害を持つ子どもたちのためのキャンプをするらしいという情報を、私の父親が新聞で入手しまして、それで、「お前、行くか」と言うから、私は、てっきり、どんな楽しいところかなあとというふうに期待をして「うん、行く。行く」と言って、父親と母親に言った覚えがございます。

阪急電車に京都から乗って、神戸というところに行って、神戸の中山手通りにありましたが、神戸のYMCAの、前のYMCAですが、そこの事務所に集められて、「今から余島へ、(最初『よしま』と、よう読みませんで、『あまるじま』なんて読んでたんですけども) その『あまるじま』というところへ、行くんだ」と思ってですね、「どんな楽しいことがあるんかなあ」って思っておりました。

障害を持つ子供たち、仲間が10人集まり、20人集まりました。私が一番障害が重かったようなんです。それで、私の母親がついて来ておりましたけれども、母親がずいぶん心配

をしまして、「うちの子が独りで行けるでしょうか、今井先生」と言ったら、「いやあ、大丈夫です」って今井先生が言っておられましたけれども、母親はどうしても心配になって、「私も一緒にいて行きたいです。いいでしょうか」、「いやあ、それは、やっぱり基本的には困るけれども、お母さんがどうしても心配ならば、数日だけはいいでしょう」ということになりました、私だけ特別例で、キャンプに母親がついて来るようなことでございました。

小豆島に行くというので、私にとっては、神戸に来たことも初めての経験でございましたけれども、バスに乗って、中突堤に行って、関西汽船の、あれはたしか、「こがね丸」とかなんとかいう船だったかと思いますが、その船に乗って、大きな船でした、私から見ると。それに乗って小豆島というところに着いた。

「ここで、キャンプをするのか」と思って、またバスに乗って、今度、小舟に乗ると言うんですね。「これだけ、電車に乗って、バスに乗って、船に乗って、またバスに乗って、まだ、舟に乗るのか」見ると小さい舟だったんです。ボートのような、ほんとに小さな舟で。私はなんか、「どっかに捨てられてしまうんかなあ」と、そういう怖れを持ってですね、「これは、うまいこと言って、私の父親と母親がどっかに捨てに来たんかなあ」なんて、あの舟でちゃんと帰れるかなあ、というような不安感を持ったような覚えがあります。

着いたのが、余島の小さな浮き桟橋のようなところだったですけれども、それに行きました、そして、「さあ、歩け」っていうわけですね。母親がさっそく、「いや、おぶります」と言ったら、今井先生が「いいや、歩かすんだ」というわけです。私、まあ、試練が始まったと思ってですね、こりゃ大変と思いながら、まあ、しかし、ここで下手に今井先生に逆らうと、いよいよ帰してもらえんと大変だあと思いまして、ともかく、ひたすら、必死になって松葉づえで上がって、そして、これから、確か5泊6日ぐらいのキャンプ生活でございました。「キャンプだ」というわけです。キャンプというのも、もちろん、経験がないですし、こんな離れ小島で生活するのも初めてです。それでも、「お母ちゃんがいるから、大丈夫だ」と、私はお母ちゃんがいるからということで、来たことでした。

「寝るところはここだ」といって、なんかむしろのようなもの敷いてあって、そのところに毛布が1枚敷いてあるんです。で、上はテントだけなんですね。「こんなところで人間が寝られるのか」というように思いましたけれども、それでも寝ないといけない。

私、松葉づえですから、床の上に転がるというの、なかなか難しいんです。イスに座って、それから、こう、よいこらしょっと、するんですけども、イスも何もないし、ともかく、ここで寝るんだということです。それでも、やりましょうと思って、よいこらしょっと、床の上に転がって、「ここで生活するんか。不安だなあ。ま、それでもお母ちゃんがいるから」と思いながら、気を取り直してキャンプ生活が始まったようなことでした。

「ごはんだ」って言うから、「ごはんだあ」って、持って来てくれるんかなと思ったら、

そうじゃない。食堂まで、また、歩いて行かんといかんのですね。よいこらしょっ、よいこらしょっ、よいこらしょっ。私にとっては、すべてそれが初めての経験だったように思います。

行って、手を洗う。手を洗うというのも、あの頃、水道っていうのがなかったですから、なんか、ポンプでガッチャン、ガッチャン、ガッチャン、ガッチャンとしてですね、それで、「ハイ、手を出して」と言って、洗って。「水は貴重だから、あんまり使うな」なんて言われながら、そして、食堂でごはんを食べて、カレーライスを食べたように思いますけれども。お風呂も、なんかドラム缶のようなお風呂でした。そこで、ジャブンと入れてもらって、お風呂に入る。キャンプを何日間か、キャンプ生活を始めました。

きのう、私、ほんとに40何年ぶりのキャンプファイヤーを経験しました。「ああ、今井先生、40何年前も同じこと言ったなあ」なんて思いながら、キャンプの話を聞いて「ああ、でも、先生のお話、あの話だなあ」と思って、非常にそれも感慨深いものがございました。

私は、非常に過剰保護の中で、親の愛情いっぱい、愛情があまりあり過ぎるぐらいの中で育ちました。ですから、親と離れることが1日たりともなかったようなことでした。しかし、2日経ってからでしょうか、今井先生が私のところへ来られまして、「なあ、片岡君、もう、お母さん、いいだろう。お前独りで暮らせるだろう」「いえ、ダメです」と、こう。「ダメです。お母ちゃんは、いります」と言いました。

「いいじゃない。他の友達、見てごらん。みんな、お母ちゃん、いないよ。君だけだよ。お母ちゃん、いなくていいだろう」ところが、友達の顔、見ながらですね、なるほどまあ、独りで來てるし、「ああ、そうかあ」、私、ひとりっ子なんですよ。ですから、親としか暮らしてなかつたし、友達と暮らすということがなかつたんですね。「まあ、そうか。まあ、いいです」と言って、お母ちゃんのほうもですね、なんか寂しそうにしてですね、帰るわけですよ、坂を下りてですね。上から、こう見て、涙が出ました、あの頃。しかし、それでもいいやと思って、また、気を取り直して、また、遊ぼうと言って、遊んで。その日の晩も、キャンプファイヤーがありました。昨日の同じ、あの、『遠き山に』を歌うんです。『遠き山に』を歌っているうちに母ちゃんのことを思い出して。またシクシク泣いてですね、その一晩中、その晩は寝られなかったようなことを覚えてます。

## 生まれて初めての殴り合い

あくる日は、また、ケロッとして、生まれて初めての友達とのケンカというのをしまして、このキャンプのサイトの中で大ゲンカをやりまして、ポカンポカンと殴り合ったようなこともございました。すべてが、私にとっては初めての経験がありました。親から離れて生活するというのも初めてでしたし、自分独りで坂道を上がる、坂道を下りるというのも初めてでした。でも、最後のほうにはくたびれて、「先生、とてもじゃないけど、よう上がりません」、しかたなく、あの昨日の今井先生が、「じゃあ、おぶってやろう」と言っ

て、あの先生の背中でもって、あの坂道を上がったり下りたりしたようなございました。今じゃとてもできないと思いますけども。(笑い)

私は、ここで、余島で、自分で生きる自信というのを身に付けたように思います。ただ、私、友達もたくさんおりましたけれども、もう一つ貴重な存在というのが、キャンプのリーダーの存在でした。キャンプのカウンセラーの存在でした。たいへん嬉しかったのは、私を一人の人間として扱ってくれるんですね。子どもでしたけれども、ちゃんとした人間として扱ってくれる。障害を持つ人間としてじゃなくて、一人の人間としてちゃんと見てくれたことです。

きのう、また、嬉しいことがありました、40何年前に私のリーダーだった人が、きょう、ここにおられるんですよ。ちょっと立ってくださいよ。(拍手) ほんとに私のテントのですね、キャンプリーダーでですね、イメージそのまま、今も、お変わりなく。まったく。『はくすいさん』と呼んでたんですけども、大変優しいお姉さんだったんです。

僕が服を着たりするのに、自分でなかなか、その頃、もっと甘えてましたからね、「着れない」と言ったら、「ああそう、着せたげるわ」と言って、着せていただきました。「靴下、はけない」と言ったら、「ああ、はかせてあげるわ」と言って、京極さんが全部してくれて、優しく、「歩ける」と言って、手を取ってやってくれました。

実はね、これも、あまり言うと怒られるかもしれないけども、もう一人、優しいお兄さんがおりましてね、京極さんのとなりに優しいお兄さんがいて、その人も一生懸命になって、「やったげよう。やったげよう」と言って、今、その京極さんの旦那さんが、そのリーダーなんですよ。(笑い) なんか私、キューピッドの役をしたんかなあと思って(笑い)感謝してもらいたいなあと僕は思ってるんですけども。後でなんかごちそうしてもらいたいと思います。

リーダーを通じて、人間を通じて、「ボクを見守ってくれてる人が、親以外にもいるんだなあ」ということが、ものすごく気づいたんです。「ボクの友達というより、ボクをずっと支えて見守ってくれる人が、ボクの周りにもいるんだなあ」ということを、この余島キャンプで初めて知りました。

自分で歩いて行かないといけないということと、自分をいつも見守っていてくれる人が周りにいるんだなあということを、私は、この余島キャンプで教えてもらったと思います。そんな余島で、こうして、皆さんと会えるのは、また、何か、一つのいいきっかけになるんじゃないかなと思って、今日は、ほんとに嬉しい気持ちでやってきました。

この余島のキャンプですが、私にとって、そういう小さな小学校3年生のときの思い出が、ほんとに、心に深く刻まれていきました。そして、将来、私も大きくなったら、そういう京極さんのような、優しいお兄さんやお姉さんをいっぱい育てて、障害を持つ子どもたちが、そういう優しいお兄さんやお姉さんにいっぱい守られるような世の中を作っていくみたいなというように、小さいときにそんな感じでおりました。

自分を受け入れてくれる人は、親だけじゃなくて、いっぱい世の中にいるんだなということも強く思ったようなことでした。私にとって、余島のキャンプというのは、大きな一つの自分にとっての機会でありましたし、それは、自分の人生を拓くチャンスでありました。人間にあって、いろんなところで自分の人生を切り開くチャンスというのはいっぱいあるんじゃないかなと思います。それを、チャンスにできるか、できないか、それは、やはり自分が何とかその上でやってみようという気持ちを持つか持たないかということではないかなと思うんです。

## 39度以上の熱が出て…

私は、なんで、こんな障害になったかと思います？ お分かりですかね。交通事故だと思いますか？ それとも、病気だと思いますか？ 何だと思います？ どなたかお分かりになる方はおられます？ あなた、何だと思います？ 僕は小児まひになったんですね。生まれて1歳のときです。ですから、生まれて1歳のときということは、歩いた経験というの全然ないですよ。ヨチヨチ歩きはしたんかも知れませんけども、自分の記憶の中にまったくありません。走った記憶もありません。ですから、走るということが、どんなことかというのは、自分の中に感覚的にありません。京都で生まれて、1歳まではすごく元気な子供だったんだそうです。ヤンチャでしかたがないといって、親が言っておりました。そんな赤ん坊で育ちました。

でも、1歳になったときに、ある日突然、熱が出まして、39度以上の熱が出たんだそうです。親は私を、どうしたんだろうと思って、近所のかかりつけの小児科のお医者さんのところに連れて行きました。そしたら、その小児科のお医者さんが、「ああ、お母さん、これは、いつものおなかこわしから、心配せんでいいから、この薬でも飲ましといたら」って、薬を貰って飲ましたんだそうです。でも、いっこうに熱は下がらなかった。

おかしいな言いながら、あくる日、京都の大学病院に連れて行きました。そしたら、その大学病院で「ちょっと待ってください。今日は帰れませんよ」と、こう、言われたんだそうです。「えっ、入院ですか。そんなにやっぱり悪いですか」「今日だけじゃなくて、数日、ちょっと帰れませんよ」と言われたんだそうです。母親がお医者さんに、「何の病気ですか。おなかでしょうか。風邪でしょうか」と聞いても「いや、分かりません。でも、おなかでも風邪でもないと思います。今日は入院です」

父親も来て、心配そうに、病院で寝泊まりをいたしました。1日病院で寝、あくる日も病院で寝、3日間ほどその熱が続きました。そして、4日目に、その熱が下がりました。「ああ、熱が下がった」喜んだものの、私の身体は、もとどおりの身体ではありませんでした。

それまで、4日前までは元気で、ヤイヤイ言ってた赤ちゃんだったのが、熱が出て4日後に、私の身体はまったく動かなくなってしまったようでした。ベッドで寝たまんま、首

も座らないし、横に向くこともできないし、手も足も動かすことができない。もう、ほんとに何もできない身体になっていたようです。

母親は「先生、どうしたんでしょうか。何かお薬でも効いてるんでしょうか」と言ったら「いや、麻痺してる」と言います。「身体が麻痺して動かなくなってしまったんです」こう言われるんです。「ああ、そうですか、先生、早く何とか治してください」先生、3人いました。でも、お医者さんは、「いや、お母さん、残念だけれども、今の医学では、この子どもの病気は治せません」こう言われたんだそうです。親はびっくりして、「何の病気で、何でこうなったんですか」「いや、これは脊髄性小児麻痺、ポリオという病気です。これは現代の医学では、原因も分からぬし、治療法もありません。仕方がないんです。このまんま、医者としても何もしようがない。手術もすることもできないし、お薬もない。もう、帰っていいですよ」と、こう言われたんだそうです。

「ここは大学病院でしょう。病気の人を治すのが、大学病院の役割でしょ。何とかしてくださいよ」でも、医者は何もできない。薬も何もない。そういうことです。それでもって母親が、お医者さんにすがるようにして言いましたら「お母さん、残念だけれども、この子どもの命は、そう長くはないよ。せいぜい、長生きをすこしでもさせてやりたいと思うならば、栄養のあるものを食べさせてやりなさい。それが何よりの薬でしょう」と、こんなように言われたんだそうです。

しかたなく、父親と母親で私を抱いて家に連れて帰って、あれだけ元気で私が遊んでいた6畳の部屋にお布団敷いて、ゴロンと寝たまんまの状態になってしまったようでした。親が心配そうに、私の顔をのぞきながら「どうしたもんだろう、どうしたもんだろう」と言いながら、相談をしておりました。

今ですと、栄養のある食べ物なんて、昨日も、私、たくさん食べさせていただいたけれども、いくらでもありますよね。ローソンもあるし、ファミリーマートもあるし。でも私の生れたのは、昭和19年、それで、私が小児麻痺になったのは、昭和20年。昭和20年の時代というのは、もう存じませんけれども、後ろの、きっと、ロータリーのおじさんたちは、昭和20年ていうと「ああ、あの時代か」なんてお分かりなんだろうなと思いますけども、物がなかったんだそうですね。卵一つ手に入れるのも大変な時代だったようね。配給でお米もあって、食べ物を探す、お肉を今日食べたいと思っても、食べられるような時代ではなかったようです。

それでも、親が、お金持ってっても買えなかっただようで、家にある着物だとか、いろんなものを持ってって、農家を回って、お米を分けてもらい、鶏を分けてもらい、いろんなものをもらって来て、私に与え、育てていったようあります。ご近所の方々も、「あれだけ元気だった『みのるちゃん』が、どうしたの」「やあ、寝転がって動かなくなってしまった」ご近所の方々があちこちから、田舎から送ってきたからって、「うちの子は後回しでいいのよ。まず、『みのるちゃん』に」と言って、おいしいところを持って来てい

ただいて、いろんな人たちが、「みのるちゃん」を助けてくれました。

## それでも「みのるちゃん」元気で育つ

お医者さんは、数年で亡くなるだろうとおっしゃったようですが、お陰さまで「みのるちゃん」は、すくすくと動かないまま元気で育っていました。私はそうやって、毎日、奥の6畳の部屋の天井を見て過ごしておりました。今と違ってテレビがなかったんですよ。ラジオしかなかったんですね。ラジオも民放がいくつもあったんじゃなくって、NHKですね。ラジオつけてても、尋ね人の時間とかね、つまらんのばっかりやってたんです。

「ほんとに、つまらんなあ」なんて思いながら、それでも一生懸命、耳をすまして、そればっかり聞いて育っておりました。ひとりっ子ですから、情報としては、父親、母親からだけです。なかなか他の情報が入ってきません。でも、私、幸い言葉がしゃべれました。近所の子供の声が家の中から聞こえるんですよ。「ああ、あの子が遊んでるな。この子が遊んでるな」というように聞こえます。大きい声で家の中から、「A子ちゃん」とか「B子ちゃん」とか「C子ちゃん」みんな女の子ばっかりなんですよけども、(笑い)一生懸命、呼び集めるんですね、そうすると、A子ちゃん、B子ちゃん、C子ちゃんは、しかたなく「ああ、また、みのるちゃんが呼んでるから、しょうがないから、遊びに行ってやるか」で、やって来てくれますね。A子ちゃん、B子ちゃん、C子ちゃんとワイワイ言って遊んでもらって、私が、お布団の周りで、彼らがママゴトをしたり、いろんなことをして遊んでおるようなことで過ごしました。

今、障害を持つ人たちに、小さなときから訓練をしようということをします。リハビリテーションするわけです。でも、私の小さいときには、リハビリテーションというような言葉はなかったんですよ。だけども、何か、よくなることをしないといけない。母親、一生懸命考えて、私の手をさすったり、身体をさすっておりました。

今でも、そうですけど、私の手足というのは、ほんとに冷たいんです、血の循環が悪いんです。いろんな人が、誘いに来てくれて、何とか何とか教という宗教が、よく効きますよとかね。また、何とか何とか教というおまじないの方が、もっと効きますよとかですね。ま、いろんなところにもお誘いいただいて、母親は、少しでもよくなればと思って、いろんなところへ連れてってくれました。ある人が、「実ちゃんの手足は冷たいから、これ、もっと、マッサージの先生のところ連れてったら。あんまの先生のところに連れてったら」というように言いました。母親は、「そうねえ」と言って、私をおぶって、あんまの先生のところに京都の市電に乗って連れて行きました。あんまの先生は、目のご不自由な先生でした、おばあちゃんだったんです。

その、おばあちゃんが手さぐりで私の身体をさわって、「わあ、冷たい身体の子、こんな小さな子ども、うちの患者さんには一人もいないわ」って言うんですね。それはもう、来る患者さんというのは年寄りばかりですよ。やれ背中が痛いの、肩が痛いの、そん

なの揉んでるばっかりです。私のような小っちゃい3歳ぐらいの子供なんて一人もいないですから、私だけ。「それでも何ができるのかねえ。私、こんな子供触ったことない、ぐにゃぐにゃじゃない」と言うてくれるんです。「何か、先生、してやってくださいよ」「鍼っていったって、こんな子どもに鍼を刺して大変だから、まあ、さすってあげようか」と言って、さすってもらいました。

毎日、毎日、それをさすってもらって、マッサージっていうんですね。それをしてもらひに、毎日母親は連れて行きました。そうしましたら、不思議なことに、私、お布団の上でゴロンと寝転がってて、こうして、座るっていうことできなかったんです。この座るというのは、簡単なようですけど、実はこれ、大変難しいんですね。バランスを自然にお尻で取り、足で取ってるわけでしょう。もし、皆さんが、足を離してじっと座るだけでも、なかなか、こう、自分でバランスを取ってる。私にはそれができなかったんです。

ところが、だんだん、そのマッサージの先生のところに行って、さすってもらって、血の循環をよくしてもらっていく中で、なんとかこうしてお布団の上で座れるようになった。わあ、すごい。そのマッサージの先生が、「わあ、なんとか座れるようになってきた。お母さん頑張って」でも、まだ、首はうまく座らなかった。

「もうちょっと首に力を入れるように、肩に力を入れられるようにしよう。筋力をつけよう」と、一生懸命またマッサージをしてくれました。まあ、1年、2年、3年と、ずっと、マッサージの先生のもとに通いました。そして、一生懸命、揉んでもらい、血の循環をよくして、私は、今度、首がちゃんとすわるようになってきました。すごいもんですね。お布団の上に座れて、首がちゃんとすわれるよう。「次は何とか」親心です。「立たしてください、先生」と言うんですね。

私、だいたい、お昼の1時にそのマッサージの先生のところへ行きました。そうすると、私、ひとりっ子で、甘えたんですけども、しゃべるし、昔はきっとかわいかったんだろうと思うんです。今もかわいいつもりでいるんですが。(笑い) まあ、「みのるちゃん」って言って、結構人気がありまして、その俣野先生というおばあちゃんの診療所ですけど、午前中の患者さんが弁当持ちで来て、待つとるんです。何を待ってる? 私、「みのるちゃん」を待ってるわけですよ。「かわいい、みのるちゃんが来るから、あの、みのるちゃんに今日はアメ玉を持って来てやったから。あげたいと思って」3、4人待ってる、おばあちゃん、おじいちゃんが。

そのおばあちゃん、おじいちゃんが、みのるちゃんは、おんぶされてやって来て「ここにちは」って言うと、「ああ、みのるちゃん、来たか。来たか」って言ってですね「これ食べるか、あれ食べるか」って言ってですね「みのるちゃん、あれも食べるよ、これも食べるよ」って言ってですね。その患者さんも一緒になって、「みのるちゃん、頑張って、もうちょっと頑張って、手、伸ばして」とか、「足、伸ばして」とか、一生懸命、応援団がいるんです。(笑い) もっとも、じいちゃん、ばあちゃん、ばっかりの応援団ですけど

ね。

まあ、それでもいいや、応援団がいて、一生懸命やってくれる。みのるちゃんも励ましてですね、だんだん、こうつかまり立ちができかかった。「先生、ここらの柱のところに、みのるちゃんが掴まれるような手すりを作ってやろうと思うんじゃが、エエかいなあ」とおじいちゃんが言います。目の見えない、按摩さんですから、「はい、どこなど、私の当たらんところにしてくれたらエエよ」と。「それじゃあ」と言って、おじいちゃんが、トントントントン、俣野先生の家に、手すりを付ける。みのるちゃんは、それを持って、よいしょとするわけです。

「ここんところのトイレに行くところにも手すり付けたら、これで、つかまって、歩く訓練ができるから、先生、エエかいな」と、「まあ、エエよ、エエよ」と。先生の家は、みのるちゃんの訓練道具みないなもんですよ。いっぱい、あっちこっちしてくれて、つかまり立ちをさせてくれて、何とか立ち上がることまでできるようになりました。

母親が、ネンネコに私を抱いて私、毎日連れてってくれたんでしょうね。そして、たくさんの人の応援団があって、そして、何よりも僕が感謝したいなと思うのは、その俣野先生という目のご不自由な按摩さんが「私、こんな子どもは触ったことがない。だけども、私がしなかったら困るだろうから、何とかやってみよう。私が何とかしてみよう」と思つてくれたお陰で、私は、こうして、イスに座ることができるようになった。何とかつかまり立ちもすることができるようになったわけです。その先生が、やってみようと言わなかったら、私は、未だにお布団の上でゴロンと寝っ転がったままかも知れませんよ。まあ、そうやって過ごしました。

## 小学校に進むことができた

私、実は、幼稚園行ってないんです。というよりも、幼稚園という言葉を親は教えなかった。幼稚園があることすら知らなかった。もっと言うと、小学校、学校という言葉も、親は、敢えて教えようとしなかったんですよ。内緒にしてたんですね。それはどうしてかというと、私のような障害を持つ子どもは学校には行けるはずがないと思ってました。現実に私を受け止めてくれる学校というのは、まず、なかっただろうなと思います。

ところが、私が、学校と言葉を知り得たのは近所のA子ちゃん、B子ちゃん、C子ちゃんのお陰なんですよ。親が内緒にしていても、子どもは子ども同士、すぐ分かる。ある日、A子ちゃんが得意になって、背中にカバンを乗せて来るんです。僕は、それが何かなあと思つて、初めて見るカバンでした。赤いカバンでしたよ、皮のね。もちろんランドセルですよ。私は、A子ちゃんに、「それ何っ」って言って聞きました。そしたら、A子ちゃんは、まあ、回らぬ舌で、「ランドセル」って、こう言うんです。「ランドセルって何?」って聞いたら、「これ、学校に行くの」、「学校って何?」「勉強に行くの」学校も勉強もランデセルも、「そして、この中に教科書を詰めて」と言いました。教科書という言葉も、私

はなんにも聞かされたことはなかった。「ふううん、そんなものがあるの」

私は、ひとりっ子で、甘えたで育ってますから、何でも、親が、言ったものは買ってくれました。例えば、「キャラメルが欲しい。グリコのキャラメルが食べたい。カバヤのキャラメルが食べたい」って言ったら、必ず、買ってくれましたよ。で、私は、その日の夜、父親は歯医者をしておりましたから、歯医者の診察が終わって、下りて来て、「ごはん、今日は食べない」と、こうやったんです。だいたいハンガーストライキをすると、親は一発で「ああ、そうか、そうか」と言って、いうことを聞いてくれましたから。

「食べない」「どうした、何が買って欲しい。カバヤのキャラメルか」って言うから、「いいや、違う。ランドセルを買って欲しい」と。「ほお、お前、ランドセルなんて、どこで見つけてきた」と言うから、「A子ちゃんが持てて来た」「ああ、しまった」と、親は思ったでしょうね。その次に、馬鹿ですね、分からぬものですから、ランドセルのとなりに学校も売ってるもんだと思ったんですよ。カバヤのキャラメルやランドセルみたいに学校、勉強。ついでに、「学校も買って欲しい。勉強も買ってくれ」と、こう言ったんです。

そしたら、父親が笑って、「ランドセルはしかたがないから、買ってやる。大丸かどうか行って買って来てやる。だけどもな、学校と勉強だけは、どこ行っても売ってないんだ」と、こう言いますよ。腹の立つ言い方しますよね、父親も。「ああ、そう。じゃ、どこ行ったら売ってるの」「残念ながら、売ってない。あれは、学校というところへ行って、勉強というものをするもんだ。教科書ぐらいは、どっか行って見つけてきてやるけど、お前は行けないから、家で、教科書でもって勉強するんだ」と、こう言います。

「なんで、ボクが勉強できない。なんで、学校行けないの」また、ハンガーストライキをやるわけです。毎日、毎日やってですね、「まあ、頼むから食べてくれ」「まあ、一口ぐらいは食べてやろうか」なんてことを言いながら、過ごしてきました。

そういううちに、A子ちゃんのお母さんが、大変、責任を感じられましてね、「うちの子がエライものを見せて、みのるちゃんにエライことになって、どうしようか思ってる。なんとか、みのるちゃんも一緒に、京都市立（私の校区は、衣笠というところ、金閣寺の近くなんですが）衣笠小学校へ何とか行けないもんだろうか」 A子ちゃんのお母さんが、家へ来て相談します。

ただ、私の父親も母親も、「いやあ、それは無理ですよ。いくら何でも、この子を連れて行くことはできないし、第一、通学の方法がない」私、きょう、この小さい車イスを持って来ますけども、その当時、車イスなんてなかったんです。「とてもじゃないけど、行けっこない。だから、そんなこと言わないで、あきらめさせるから。適当に、本でも買って来て、あきらめさせるから」「それでも、何とか」って言って、A子ちゃんのお母さんが一生懸命になりました。通学の方法を考えないといけないということですね。

A子ちゃんのお母さんが、「うちの子が、A子が使っていた、小さい三輪車がある。あれに乗せて、みのるちゃんを連れて行こう」と、こう言いました。ところが、あの三輪車

のサドルに乗れるほど、私は、障害が軽くはなかった。三輪車のサドルというのは小さくて非常に安定性が悪いんです。コテッといっちゃうんですね。「無理。やっぱりダメです」。

そしたら今度、近所のおじさんたちが集まって、何とか、みのるちゃんが落ちないような、今でいう車イスを作つてやろうということで、三輪車と三輪車をひっつけちゃうんですね、鉄工屋さんのおじさんに「これを何とかひつ付けて、みのるちゃんが落ちないように考えてくれ」と言ってですね、車イスづくりをやってくれたんです。変てこりんな三輪車を付けた車が届きました。それなら、私、乗れたんです。

で、こうして押すと、うまくいくんです。A子ちゃんのお母さんが、「何とか、これで学校へ行けるようにしようよ」と、「学校へ頼みに行こう」ということを言いに行きました。仕方なく、私の親は、「じゃあ、そんなことは無理だとは思うけど、まあ、まあ、いっぺん、学校に行ってみようか」ということで、衣笠小学校というところにまいりました。

1年生、4クラスあったんです。ただ、受け入れてもらえるかどうかは、新しい担任の先生が判断するということでした。4人の担任の先生がおられまして、今、覚えてますのに、男の背の高い先生が1人、おばあちゃんの先生が1人、中年の女の先生が1人、若い若い学校の先生になりたての先生が1人、この4人の先生が、私を面接するということだったんです。

校長室で4人の先生が、入れ替わり立ち替わり私にいろんな質問をします。「これはなに？　これはリンゴ？」「これはバナナ？」「これはなに？」いろんな質問をしました。私、まあ、結構、ひとりっ子で、ペラペラしゃべるのは慣れてましたから、「ああだ、こうだ、こうだ、ああだ」って、好き勝手言っておりました。「よく、しゃべるのね」なんて思われてたと思いますけれども、こまっしゃくれた子どもでございました。

そのうち、男の先生が、校長室から出て行かれました。おばあちゃんの先生も出て行かれまして、中年の先生も「ちょっとお先に」と言って出て行かれまして、残ったのは、先生になりたての先生、中村律子先生とおっしゃいました。

音楽の先生なんですね。音楽の先生で、「みのるちゃんていうの？」「はい、ボク、みのるちゃんです」と、こう言いまして、で、その先生が、まあ、寄って来んでもいいのに、ツカツカツカッと私の横へ寄つて來たんですね。そのときに、私なりに思ったんでしょうか、「この先生を捕まえとかないと、この学校へ入れないんじゃないかな」というような（笑い）幼いながらも、そういう予感がしたんでしょうかね。思いっ切り、その先生のスカートをがばっと握つたんです。カッと離さなかった。

その先生といろんにお話するうちにその先生がですね「みのるちゃん、学校に来たい？」「みのるちゃん、来たい。ここで勉強したい」こう言ったんです。そしたら、その先生が、私、スカート離さんもんですから、もう、いたたまれんようになって、校長先生と教頭先生に「先生、私は教師になりたてで、ましてや、障害児教育、特殊教育なんてことは勉強したことありません。だけども、私、この子どもを何とかうちのクラスに入れて、一緒

に勉強させてみたいと思います。やれるかどうか、正直、自信はない。自信はないけれども、私がいっぺんやってみよう。他の経験のある先生は、お帰りになりました。私しか残ってません。私がやってみようと思います」と、こう、先生はおっしゃってくださったんです。

そしたら、教頭先生と校長先生も、「おお、あんたがやる言うなら、私も手伝うよ。一緒にやってみよか」と言ってですね、その先生、受け入れてやってくれたんです。

600人、全校生徒おりました。4クラス、私、1年2組だったんです。ただ、私、もう、私の悪い癖、ペラペラようしゃべるからね、うるさくてしょうがないんで、お約束で、「みのるちゃんはトイレにも行きやすいように、お母さんと毎日来なさい。そして、その三輪車じゃない、その車イスに乗って、教室の一番後ろの端っこ、出口に近いところにいてちょうだい。あんた、やかましいからね」(笑い)「はい、分かりました」、そういうことでございました。

1週間、教室に行きまして経ちました。他の子どもというのはおとなしいんですね。先生がいろいろ質問されるけれども、はあいって言うの僕だけなんです。あんまり僕の声が大きかったからか、他の子供、圧倒されたんでしょうね、何も言わない。そのうち先生が、中村律子先生が手を焼きまして、私を受け入れたからじゃなくて、私がうるさいから。ちょうど「もう、お母さん来なくていい。子どもたちが、教科書、持って、カバン持つて、連れて帰ってくれるし、その三輪車で送り迎えしてくれるから、お母さん来なくていい。みのるちゃんもいいから、もう一番前に来なさい」ということになりました。この教壇のまん前のここの席においてもらいました。

その代わり、こんな、ちょっとサシみたいな持ってね「はあいっ」と言って、じゃあ、「黙って」と、(笑い) こうやられるんです。ああ、うまいことやったなと思ってですね。「この歌、歌える人?」「はあい」「分かった、分かった。黙って」って言ってもっぱらそんなことで、小学校を過ごしました。

楽しい思い出もいろいろありました。運動会っていうと「ボクは、何の運動するんかなあ」と思いまして、その先生、音楽の先生ですから、いろいろ考えてくださいって、「みのるちゃんは走れないね。リレーができないね」「はい、できません」「お遊戯できないね」「はい、できません」「でも、お口達者ね」(笑い)「はい、達者」「じゃあ、応援団長しましょうね」「はあい」そういうことになりまして、大太鼓を与えてもらって、ドーン、ドーン、「ガンバレ、ガンバレ」と言ってですね、そういう役割をさせていただき、なかなか、いろいろ考えていただきました。

小学校、そんなことばかりしゃべってると肝心の話が、ないんですけど、まあまあ脱線はしかたがないですが、まあ、私、おしっこ、固いほうだったんですけど、それでも、お昼前ぐらいになると「みのるちゃん、おしっこ行く」と、こう言うんですね。

「まあ、行かんでもいいけど、まあ、行っとこか」と思ってると、「連れてってあげる」

って言ってですね、女の子、また、A子ちゃん、B子ちゃん、C子ちゃんばかりですよ。男の子だれも寄って来ないけどもね。それで、連れてってくれるのが女子トイレ。もう、ほんと困るんだけども、しょうがないし、女子トイレ連れてってもらって、「おしっこ、した？ 出た？」って言って、こう言われて。「出た」そんなふうに、大変、小学校のあいだでも、親切に、子どもたち同士、助け合ってやってくれました。

## 子どもたち同士の助け合い

みんなですね、小学校、そう、3年生くらいまでは、その三輪車を使ってたんです。いや、車イスを。その車イスというのは、みんな、珍しいでしょ。ちょっと聞きますけど、この中で、車イスがほんとに必要だったので、乗ったことがあるよという方、ちょっと手を挙げてください。お一人？ 一人。ほんと。そうですか。じゃあ、必要じゃなかっただけれど、車イスには一度くらい乗ってみたことがあるよという方、手を挙げてみてください。ああ、ありがとうございます。私の小学校、衣笠小学校の私がいたときの生徒は、ほとんど全員、私の車イスに乗ってます。用がなくても。その頃、友達がですね、「ちょっと貸してくれ。坂道どれぐらいまで降りるかやってみよう」とか、まあ、いろんなことをして、友達が私の車イスで遊んでおりました。

小学校のですね、私が、1年生のときに、5年生に、でっかい男の子がいたんです。ほんとにでっかい、お相撲さんのような、でっかい男の子がおりました。それがまた、いじめっ子だったんですね。ポカン、ポカンとやってですね、みんな怖れてるんです。その子が、ボクのとこへ近づいて来るじゃないですか。「おお、なんでボクに用事があるの？」思ってですね、そしたら、その子が来て、「おい」「はい」「貸せ」と言いますね、その車イスをですね。「ちょっと待って、あんた乗ったらつぶれるよ」と思ったけども、そんなこと言ったら怖いし「ううん」と僕が渋ると、こんな消しゴムを一つくれて「これ、やるから、貸せ」と言うんです。「まあ、しかたがない。消しゴム貰えるならいいか」なんて思いながら。そしたら、その男の子、とてもじゃないけど、乗れない。大事そうに、こうやってみたけど、「いいな、お前の。お前の自動車いいな」と言って、帰って行きました。そんなこともありました。

この松葉づえ、小学校3年生からついてます。松葉づえをついたことのある人ありますか、ちょっと手を挙げてください。ああ、ありがとう。その人たちはあれでしょう、病気の人もいるかも知れないけども、たいていの人がやんちゃで、スキーで足の骨、折ったとかいう人じゃないですか。

でも、私の小学校3年生以降、中学校、高等学校、大学でもですけれども、ほとんど、この杖、私の周りにいる人は、「ちょっと、貸してくれ」って言って、ついてますよ。またね、これ、貸してあげると、せんでもいいのに、階段を行ってね、「こけるぞ」と言ってるのに、ドタッとこけてね、(笑い)「ああ、危ないな」なんてなこと言いながら、「当

たり前なのにな」と思いながらいってますよ。関西学院では大学の先生まで、「貸してくれ」と言ったぐらいでございます。(笑い)「まあ、大学では、松葉づえ学なんてなこともやらないといけないな」なんて思ったです。

それほど、私の周りの人は、私のことを、非常に一人の人間として、受け止めてくれたなと思います。ですから、車イスにしろ、松葉づえにしろ、別に何でもない道具の一つで、大変、不思議な物でも決してないんです。こうやって、私、小学校生活を送りました。実は、小学校に入る時点で、私自身、中学校というのは、普通ですと、衣笠中学校といって、金閣寺の山の麓にあるんです。とてもじゃないけど、遠くて、その車イスでも行けないようなところで「ああ、これはダメなんだな。小学校でおしまいかな」というふうに、私は思っておりました。でも、私の家の近くにある日突然ですね、くいが打たれてですね、何やら工事が始まるんです。「何をするんかな」と思ってたら、どうも、学校が来るといううわさが立ちまして「何の学校だろうな」と思ったら、中学校だというんですね。「へえっ、中学校、私が小学校出るまでにできるといいな」ちゃんとできるんです。私立のカトリックの洛西中学校っていうんですけども、それができまして「じゃあ、これができたら、私ここへ行きゃいいんだわ」と思ってですね、その洛西に行きました。また、その隣りに、洛西高校っていうのがちゃんとできまして、世の中うまくなってるもんですよ。きっと皆さん的人生も、世の中うまくなってると思います。洛西中学校、高等学校、行ってですね、まあ、樂々とその学校に行くことができました。

## K君のこと、M君のこと

でも、一つだけですけど、私の人生にとって、やっぱり寂しい気持ちをしたことがあります。それは、どういうことかと言いますと、中学校1年生のときに、ベルがピィーンと8時半に鳴りますでしょ。ピィーンと鳴ってからでも間に合うぐらいの距離なんですよ。洛西中学校っていうのは、隣りですから。ほんとに道挟んで隣りなんです。

友達で、K君という友達ができまして、毎朝、私のカバンを持って学校へ行ってくれます。「一緒に行こう」って言って。8時29分ぐらいに来て、そして、一緒に行って、階段が、ぜんぜん上がれなかったですから、K君がおぶって上がってってくれました。1年間、K君がそうしてやってくれました。うれしかったです。で、K君と大変仲のいい友達がありました。

1年生の終業式のときに、突然、中学校、高等学校、合同でしたので、突然、その校長先生、ヨゼフ・ナドウという外国人の先生、校長先生なんです。ヨゼフ・ナドウ校長先生が、「片岡君とK君」と呼ぶんです。全校生徒の前ですね。1学年100人ぐらいでしたけども、3クラスしかなかったです。で、「何かな、何か悪いことやったかな」と、こう思って、そしたら、「表彰、特別に表彰してあげる」と言うんです。「へえ、なんでだろう」と思ったら、「片岡君は、1年間、自分の障害にもかかわらず、一生懸命通学した。休まず

に通学したから、全校生徒の模範とする。また、K君は、その片岡君を一生懸命支えて、1年間やってくれた。これも全校生徒の模範だから、表彰する」と言って、何やらこんな小さな記念品と、貰って、大変うれしい思いでございました。

で、そうやって、K君と春休みが終わって、2年生の新学期になりました。K君がいつものように、8時29分に迎えに来てくれて、カバンを持って行こうと。でも、何やら、去年までのK君とちょっと違う感じがしたんです。8時半のベルが鳴って、職員室で先生方が職員会議を、簡単にされて、上がって来られるのが、8時33分ぐらい。いつもなら8時30分には、K君が片岡君をおぶって行こうと言って、上がって教室まで行くんだけども、K君がなかなか動かなくて、8時33分になると、K君がおぶって行ってくれる。そういうことになった。

「なんですか、なんで、K君、すぐに上げてくれずに、こんなところで2分ほど待つかな」と、私は不思議に思いました。そしたら、8時33分になってK君が上げてくれると、そこに職員会議を終えられた先生方がざあっと教室へ行かれる。「お、K君、頑張ってるな、今日も、カバンぐらい持ってやろう」と「いや、先生、いいです。大丈夫です。ボクがやりますから」そういうことでございました。毎日。毎日、8時33分でないと、K君は上げてくれなかった。

僕は少し早めに行って、カバンをセットしたいなあと思っても、8時33分。そして、今日は校長先生が、カバンを持ってくれた。今日は数学の先生がカバンを持ってくれた。今日は、他の先生が、「おお、K君、頑張れよ」と言ってくれた。なんか、そういうものをK君が待ってくれてるような気がして、しかたがなかったんです。で、帰りしな、3時になっても、K君は、さっと僕を降ろしてくれるんじゃなくて、誰か先生が来るときを見計らって、「じゃあ、降りようか」というような感じのようにとらえてしまったんです。

で、「きょう、ボク、もう、学校、行きたくないんだ」と言ったことが、何日間かありました。母親が、「どうして、お前、調子でも悪くなったんか」「いや、なんか行きたくないんだ」母親もどうしてなのか分からずに、「どうしてなの」「いや、別に、何もない。でも、行きたくないんだ」何日間か、学校、行かなかった日がございました。

母親は、「どうして」って言って、しかたなく、「いや、そんなことはないと思うんだけども、K君が、今までのK君と変わったみたいに思うんだ」と、こう言ったんです。母親は怒りました。「そんなことがあるはずがない。お前の考えすぎだ。何ちゅうこと言うか」で、ずいぶん怒りました。「ああ、そうなんだ」と思って、また、気を取り直して、学校に行きました。でも、相変わらず、K君のそういう行動が、僕の心に突き刺さるようになりました。また、学校、行きたくない。今度は父親が、私の頭をぶん殴りました。「仮にそうだったとしても、ありがたいと思って行け」こういうふうに言いました。「ああ、そうなんだな」と思いました。僕はなんか、こう、耐えられないような気持ちで、勉強も手につかないような時期がしばらくありました。

親が、母親が、学校の先生に相談に行きました。学校の先生も、「そんなことがあるはずがない。K君みたいな立派な人が。ああ、片岡君の変なひがみ根性が出てるんだ」「ああ、そうか。ボクはひがみ根性が出てるんかな」自分でも思いました。「まあ、我慢して行こう」と思いました。8時33分、僕にとっては、わずか2、3分の時間というのが耐えられないような時間でございました。

そういうしているうちに、僕のそういう表情を、M君という僕の友達が見て取ったようです。8時30分に、K君が来て、カバンを持って、そして、階段の下で、2分ほどつぶす時間のときに、M君が、さっと僕の横に来て、「片岡君、上に上がるんやろ。ボクが連れてってあげよう」こう言いました。K君は、「いやっ、これはボクの仕事だからいいよ」「いや」M君が言うのに「片岡君は、今すぐに上がりたそだから、連れて行くわ、ボクが」

その日から、僕が階段を上げてくれる役割は、M君が取って替わりました。M君は背丈の小さい人なんです。僕よりもまだ小さいぐらいの人なんです。力がなさそうなんですけども、M君がずっと教室の2階、あるいは、教室の移動の3階も、ずっとM君が付き添ってくれました。先生が来るのを見計らってではなくて、僕が降りたいと思うときに、降ろしてくれました。

K君とは、それ以来、お付き合いはありませんけども、M君とは、今もずっと親友であります。何か、私が中学校時代に、あのK君が、もし、ああして表彰されて、何かしてあげてるんだという気持ちを持たなければ、きっと、K君とも、いい友達でいただろうなと思って残念でしかたがない。人間の心の中に、何か評価されるための、してあげてるんだというような気持ちが潜んでいるとしたら、それは、僕にとっては、寂しいことだなあと思うようなことでございます。私は、小学校、中学校、高等学校、大学と楽しいことばかりでしたけども、たった一つだけ寂しいことがあるとしたら、そのことでしょうか。

## ケネディ大統領からの返事

でも、まあ、私、いろんなことがありました。そんなスランプの時期がありまして、英語が0点の日が続きました。それでも、英語が0点でもいいやと思いながら、まあ、僕は他の友達と違うことをしよう。

当時、アメリカの大統領はケネディ大統領でございました。「いいや。ケネディ大統領に、手紙でも書こうか」なんてなことをやりました。コンサイスの英語の辞典を引き引き、自分で下手な英語を綴ってやりました。「まあ、返事なんか返ってくるはずないや」と思いながら、それでも、ケネディ大統領にワシントンのホワイトハウス、プレジデント、ケネディ、と英語の手紙出したんです。

コロッと忘れておりまして、半年ほど経って返事が来たんですね。びっくりしましたよ。「ええっ、ウソだろう」と思ったら、大統領の秘書官から、「こないだ、あなたの出した手

紙を、ケネディ大統領が、実際に見たよ。それに対してケネディ大統領が、『こうこう、こういう返事をしとけ』ということで、『書いとけ』ということで、私が代理に書きます」ほんと来たじゃないですか。「やれば、できるんだなあ」なんて思って。

その中身はですね、「ボクのような障害を持つてる人が、アメリカでは、どんな生活をしてるのか、ボクは知りたい。知るためにボクはアメリカへ自分で行きたいし、いつかアメリカに行けるチャンスを作ってくれ」と、こう出したんです。それに対して、アメリカの教育健康省ですか、そこからちゃんと返事が来て、アメリカの障害を持つ人たちの学校生活についての論文のようなもの、それは、よう読まんかった、英語が難しくて。でも来ましたし、それから、「あなたが高等学校を出たら、受け入れたげる用意はあるよ」と、そういう返事がきました。「こう、やったぞ」と思ってですね、大事にしておりましたですけれども。「何でもやってみることだなあ。スランプが結構プラスになるじゃないか」いうように思ったようなこともあります。

私は何でも興味を持とうと思いました。そして、何でも好奇心を旺盛に持とう。やっぱり夢を持とうと思いました。それは、余島のあのカウンシルファイナーで今井先生から教えてもらった、あのキャンプファイナーの薪は、自分を明るくし、自分を熱くし、そして、周りを明るくすることができる。自分が動かずして他人を動かすことができるか、いう教えに基づいたものであったなあというふうに思います。何でもすることをしました。

もう一つ、私、難しい問題にぶつかりました。高等学校を卒業して、私の学校は、わりと受験校だったんです。みんな京都大学だとかに行くんです。僕は公立の大学は、なかなか受け入れてくれませんでした。もっともあんまり勉強もせんかったからなんですけれども。体育が、やっぱり正規の授業だということで、なかなか受け入れてもらえなかったです。

僕、ほんとは教師になりたかったんです。京都の教育大学を何とか受けたいと思ったですけれども、こう言われました。「それだけ重い障害があったら私が教師で教えて、もし地震が来たらどうやって生徒を避難させられるか」こう言われました。「ああ、そうか。じゃあ、ボクはダメだな」。今、そんなこと言いません。車イスの先生もいるぐらいですから。でも、その当時はそう言わされました。

仕方ないから、父親が、「お前、歯医者にはなれない。でも、薬屋さんにはなれるかもしないから、京都薬科大学へ行け」、僕は数学と理科、大きらいだったんですけども、仕方なくまた数学と理科、取り直して、薬科大学で前年まで、私のような障害を持つ生徒も受け入れてたという実績があったので、行けるということでした。で、最終で入学試験の選考の前に、もう一度問い合わせてもらったら、「今年から障害者受け入れないことに決めた」と言われまして、がっくりきました。「何で?」と聞いたらですね、劇薬の薬を、片手でやっぱり調合できない。危ないです。事故があったんだそうです。「だから、ダメなんだな」と、こう言わされました。「障害者ダメだ」と。「ああ、そうですか」ということ

になりました。

で、仕方なく、1年間、浪人生活をしまして、遊びました。ほんとに遊びました、僕は。まあ、高等学校まで結構勉強させられましたので、まあ、思いっきり遊べと思って遊びました。ただ、遊びましたといつても、私、松葉づえでしょ。電車に乗れない、バスに乗れないんです。友達がいて初めて「松葉づえ持っててね」で乗れたんです。その友達が全部、大学、行っちゃったから、私独りで乗れないんです。

で、しょうことなし、「これ、困ったなあ」と思ってですね、友達が自転車やバイクに乗せててくれてましたけども、それもダメになりましたでしょ。で、自分で動かないといけない。でも、歩ける距離といったら、ホンのしたたもんですから、ダメです。2、300メートルでも、よう歩かんでしょうね。で、タクシーフラットって、当時、1メーター60円だったんですけども、それにしろ、タクシーだって金がかかって仕方がないじゃないですか、とてもじゃないけどダメだ。

## 自動車を自分で運転できるように

「自分で自動車を運転できないかなあ」と思って、毎日、こう新聞を読む。若い方は、もちろん、ご存じないですけども、昔、マツダにですね、マツダクーペという軽四輪の自動車がありました。それが、オートマチックというのが出たというんです。オートマチックというのはノークラッチですよ。で、ブレーキとアクセルだけでいい、はずなんです。私、「そうだ、大丸百貨店に電気自動車があったなあ」と思ってですね、自分の小遣いをですね、もう、ありったけの小遣いを持って、その子供が並んでるところへですね、高等学校出たてのおにいちゃんが行ってですね、電気自動車に乗って、アクセルとブレーキと、こうやる。うまくじゃないですか。ノークラッチの自動車というのはあれと同じ原理、バックはなかったんですけどね、大丸の自動車には。

あれと同じ原理だろうと思って、やってみよう。で、また、母親のもとに行って、「母ちゃん、自動車が欲しい」と、こう言ったんです。(笑い) さすがにハンガーストライキはようせんかったけど「母ちゃん、自動車が欲しい」。何でも買ってくれる母ちゃんのはずだったんですけども、さすがに母ちゃんはノーと言いましたね。「そんなもの乗れるはずがない。危ない。ダメだ」、「それでも何とか、母ちゃん」と言ってね、頑張って、頑張って「うちにはそんな自動車を買ってやれるよな金はない。うちはしがない貧乏歯医者だ」と言って、そう言うから、「ああそうか。それもだけども、何とか買ってよ、あれがあつたらボクはどこでも行けるんだ」

まあ、仕方がなくって、中古車のオンボロのマツダの軽四輪、R360クーペっていうのを、どっかから調達して、夜の8時ぐらいに、その自動車を自動車屋さんが持って来くれました。「片岡さんとこ、誰か運転できる人いるんですか」と、「誰もいません」と言って、「どうするんですか」、「まあ、これ息子が乗ってみて、ちょっと乗ったらかっこだけ

でいいんですよ」といって母親が言いました。「で、もう、あきらめるでしょうから」、「ああ、そうですか。ここ、置いときますよ」玄関、入ったところにですね、ちょっと庭みたいなどこがあって、そこへ置きました。

私、こうしてさわってるんです。こうして、ちょっと自動車のマニュアルみたいなもの読むと、エンジンスイッチって、スターターとか書いてあるから、ああだなあ、こうだなあと、これでいけるんだなあと思って、ブルブルッとかけるとかかるじゃないですか、うまいこと。これで、クラッチはノークラッチですけれども、ドライブレンジにガチャッと入れると前へちょっと行くし、バックに入れると寄って行くし、ブレーキ踏むと止まるし、ああ、これで行けるんだな。「ちょっと、母ちゃん、そこ一周だけしてくるわ」と、こうやったんです。「あんた、ほんと、大丈夫」と言うから、「まあまあ大丈夫、大丈夫。そこ一周だけだから、せいぜい洛西の学校の周り一周だけだから」と言って、一周うまく行けたんです。

「やれるじゃないか。もう一周だけしてくる」、もう一周。晩の8時からですね、帰ったのが夜中の1時。(笑い)それで、京都市内を夜中のドライブ、さあっと。「ああ、これ、来たことがあるわ。河原町四条だわ。ああ、これ八坂神社の前だわ、これも行ったことがあるわ。ああ、これ京都駅だ。ここ、俣野先生、マッサージの先生、ここだったな」と思いながら運転できるんですよ。

だから、もう母親が心配してね。もう寝られず、ずうっと表で待ってましたよ。帰ってきたら、エライ怒られましたけども。それから、あくる日は、朝早くから起きて、また、この自動車、もちろん無免許。(笑い)自慢じゃないけども、私、半年間無免許やった。(笑い)そのとき、京都の同志社大学を見に行ったり、何やら西のところに、のんびりした牧場のような学校があるというので、それは関西学院とかいう学校だちゅうことで、いっぺん行ってみようと思って、自分独りで道路の地図、見ながら、「171号線ちゅうの、これかなあ」なんて思って、途中で間違えて宝塚、行っちゃって、宝塚からファミリーランドの中、通って「ああ、これは母ちゃんと一緒に来た、宝塚ファミリーランドか」なんて思いながら、無免許でずうっと行って、西宮まで行って、やっと関西学院というところに行って「ああ、ここが関西学院か」思ってですね。それから、京都ヘトロトロと帰ったようなことでございました。

で、ある日、京都に御室という、仁和寺というお寺があります。その仁和寺の裏っていうのは、いつか皆さんご案内したいと思うけども、なかなかいいところなんです。風情のある非常にいいところで。ただし、細い道なんです。自動車が1台通ると、もう通れないぐらいの道なんです。そこに、私の友達1人を乗せて、浪人時代ですが、そこそこ腕はよくなっています。無免許で十分熟練して、うまくなっていますから。ずうっと山道をずうと、下からだんだんだんだん上がって行ったんです。

そしたらですね、前から来るのはパトカーじゃないですか、白と黒のだんだらの車で、

「あれっ」と思ってた。後ろに下がるかですね、向こうが下がるかでしょ。後ろに下がる「これ、バックでかあ」と思って、ずっと坂道ですよ。そしたらですね、パトカーのほうが、向こうが下がってくれました。しかし、これはヤバイなあと。逃げるに逃げられんしね。いよいよと思ったら、横に乗っとった友達も、「お前、仕方ない。オレも免許持てないし、お前、捕まらんとしょうがないわ」って言ったら、「ああ、そうか、これで、いよいよ一巻の終わりか」と思いながら。そして、待避するところがありまして、ずっと行きました。

そしたら、おまわりさんが、窓をスゥーッと開けるわけです。で、私もしょうがないから窓を開けないといけない。今どこのパワーじゃないからガードと開けるわけですね。「ハイ」と小さくなってるんです。そしたら、「どこ行くの」「いや、ここ山、ずっと上へ上がって、原谷というところ、あるんですけど、原谷からずうっと行こうと思ってるんです」、「あっそう。気をつけてね」「ハイッ」「ワーアー」(笑い)「ヤッターッ」と思ってですね、6カ月目の試練やったんですけども、逃げました。「ああ、危なかった」と思って。それまで、そういう危ないことは1回もなかったです。

昭和38年当時私のような障害を持つ人が乗れる自動車を置いた教習所なんてのは、まったくありませんでした。竹田というところに京都府の公安委員会の自動車の運転試験場があるんです。毎回100人ぐらいの人が受けるんですが通るのは10人かそこぐらい。教習所だとね、いちおうコース受けたら通るんですけど、そこは飛び込みで行く人が多く、通らないんです。私、そこへ行きました。

ただ「障害者の人、一番最後」ちゅって、一番最後です。私の番が来るまでに、どんどんどんどん落とされるんですね。「これ、厳しいな、ダメだなあ」と思って「まあ、コースをよく覚えなさい」と言われて、コースを覚えました。結局自動車の教習所には1度も行かずに、本だけ買ってですね、信号は、赤はこうだ、青はこうだ、レーンはこうだというだけを覚えてですね、それで、試験官がいよいよ隣りに来ました。試験官って恐そうな人でしたよ。その人、警察のマーク着けてるから「こりゃ、おまわりだなあ」と思ってですね「コース、わかる?」「はい。何とか覚えました」「じゃあ、行って」「はい」ずっと、こう行くんです。一旦停止もできだし、車庫入れもできだし、クラシクでバックもできだし、クラシクのバックなんてひどいもんですよね、私なんて、ミラーだけでバックするわけです、首、後ろ向いてなんかできませんし、ミラーだけ、バックミラーだけ見ながら、だあっとバックして行くんです。それで行ったり、時間内に。そして、いよいよ終わりました。

「まあ、合格」ちゅうて言うてもらいました。「ほんとですか、合格ですか」「うん、合格」、ポンッと判を押しまして合格。「1週間後に京都の西陣警察署へ行って、免許証をもらって」「はいっ、わかりました。ありがとうございました」「やっ、ちょっと待って」「はい」「あんた、どこで練習した?」(笑い)「あんた、どこで練習したの? どこの教習

所?」「いや、いや」。言えないですよ。「いや」「どこ、どこ。また、障害者の人、来たら教えたげなイカンし。どこの教習所で?牟田野か?」「……」

下向いて、「あのお、ちょっと聞いていいですか。ほんとに合格でしょうか」「合格。判は押してある」「ほんとにこれで免許証はもらえるんでしょうか」もう間違いない。絶対間違いない、「ああそうですか。ほんとですね。おたく、警察官ですね、絶対にウソは言いませんね」(笑い)「絶対、大丈夫」。「実は、ボク、教習所行ってません」「そやろな、京都市内であんたのような人、受け入れる教習所、1カ所もないもんな」言いました。よう知っています。「いえ、無免許で」「何ヵ月?」「6ヵ月」「そやろな、これぐらいやったら6ヵ月やな」よう知っていますねんね。私ハラハラして、「でも大丈夫ですね」、「まあ、大丈夫。帰り道はだれかに運転してもらひなさいよ」「わかってます。わかってます」。私、今、免許証持ってますよ。昭和38年に取ったもの、確実に持つります。まあ、私の人生で大変貴重な経験をいたしまして、警察官を欺いて免許証を手に入れたようなことでございましたすけども。こうやって、私、ずっと過ごしてきました。で、大学は、その自動車に乗って、親から離れたいと思ったんです。

親元で、同志社に行ってたら、きっと甘えたに育つんだろうなと思って、親から離れて下宿生活をしたいと思ったんです。親は、もう、言い出したら聞かないの知っていますから、「まあ、かってにせい」と言いました、「かってにする」ちゅってですね、できました。でも、みんな友達たくさんいましたし、最初の下宿、で、甲東園で見つけた下宿は「あんた障害があるのねえ。じゃあ、うちはダメよ」って言われたの1軒ありましたけども、でも、すぐ近くで、また、「いいわよ、一緒に生活していいわよ」というところがありましたから、そこで行きました。

まあ、自分にとって、ほんとに独りで生活するというのは大きな経験でございました。第一、調理をするなんて、したことがなかったですから、ラーメンを自分で作ってですね、ネギも入れようと思って、ネギを買って来てですね、ネギ買って来て、ネギ切るのに、「ああ、ネギは切らんといかんのだなあ」と思ってですね、ハサミで切って、ハサミじゃうまいこと切れんから、包丁、買わんといかんのだなあと、包丁、買って、包丁でネギを切って入れたりして、ネギだけのラーメンを作ったり、あるいは、「洗濯も自分でせないかんのだなあ、洗濯というのは、ああ、石鹼がいるんか」と思って、「石けんも化粧石けんではダメなんだ。洗濯石けんがいるんか」いろんな貴重な経験をして、過ごしたようなことでございました。

## 私の周りにたくさん友達が

まあ、私、こうして、皆さんの前で話ができるのは、ここにお医者さんもいらっしゃるんですけども、お医者さんによるよりも、いわば素人の按摩さん、マッサージの先生に、この子をなんとかやってみようと思う気持ちがなかったら、私、こうして座っておれなかっ

たろうと思いませんねエ。

それから、あの音楽の先生、なりたての先生ですよ、ほやはやの。中村律子先生という先生が、「この子を受け入れてみよう」という熱意と勇気を持って、してくださいなかつたら、私は文字も読めなかつただろうし、皆さんにこうしてお話することもできなかつただろうなと思います。この二人の先生は特別の先生ではなかつたと思う。きっと皆さんのように「何でもやってみよう。ようし、何とか自分の勇気と熱意でもつけてやってみよう」という人であつたろうなというように思います。

そして、私の友達もやってあげてるという気持ちを持ちたい友達ではなくって「君が友達だからしてあげよう」という友達、その友達が、私の周りにたくさんいて、今日の私があるものと思います。やってみよう、育ててみようというのは、特別の人がするのではなくて、皆さんの中からできることではないかなと思う。人間を作ることは皆さんができる仕事であろうというように思います。

さて、私は、けっこう重い障害です。3年ほど前に足首の骨を1本折ってまして、それからよけいに歩けなくなつて、もう、この壇、上がるのもフウフウいいますよ。皆さんだつたらとも簡単でしょうけども、私は、やはり、いろんな事ができる能力が皆さんに比べると、はるかに劣ります、障害があります、ハンディキャップがあります。

私は、何よりも小児麻痺という障害を持っている。で、手が悪い、足が悪い、身体が不自由という障害。そして、その障害からくる、階段を上がることができない、坂道を上がつたり降りたりすることができない。長いあいだ歩くことが、長距離を歩くことができない、という能力的な障害も持つてゐるというは事実であります。できることや、できないことが、私にはいっぱいあります。

でも、こんなことというのは、誰にも、そういう障害があるんじゃないでしょうか。例えば、皆さんの中に眼鏡かけてる方、少ないんですけども、後ろのロータリーのおじさんたちは、眼鏡を、外したら、きっと見えないと見いますよ。おじさんたちも眼鏡、外したら障害ですよ。

このあいだ、今井先生と一緒にあるホテルに行きました、そこのメニューがやたらに小さい文字で書いてありますね、それで「見えないじゃないか」と今井先生、えらい僻んでる。「ここのホテルは、年寄りは来るなというホテルか」ちゅって、えらい怒り出しました。「先生、まあ、そう僻まずに」(笑い) 僕はあわてて抑えたんです。先生も、そういう意味では障害だなあなんて思っております。まあ、眼鏡だけじゃなくって、いろんなハンディキャップというのはあると思います。

で、私のように身体に障害があつて、目に見えるものと、ひょっとして、皆さんの中にも、いろんなことを深く心の中で思つていて、気になって仕方がないという心のハンディキャップもある人もいるかも知れません。表に現れないだけかも知れません。いろんなハンディキャップというのは、私は思うのに、私のハンディキャップも、私という人間を作

る個性ではないかなあというように思っております。だけども、大方の人は、皆さん若い人たちはどうかも知れないけども、私に「気の毒にねえ」という言葉を言われます。「かわいそうにねえ。そんな障害があって、気の毒にねえ」ってことを言われます。私は、あんまり気の毒と思ったことがないです。困ったなあ、不便だなあということはあっても、それほど不幸だとは思わないし、かわいそうだなあと自分でも思わないです。

## 西村君と梅原龍三郎先生

私の友達に、西村雄三という男がおります。西村雄三というのは、脳性小児まひでして、脳性小児まひというのは、私とはちょっと違う障害で、生まれたときに障害を負ってですね、そして、なかなか、手を伸ばしてこのコップをとろうと思っても、うまく取れない、ひっくり返してしまったりする。

彼の場合には、歩くのもうまく歩けずに、バランスを取りながら歩いたりします。もう、ひっくり返るんじゃないかと思うけども、うまく歩くんですね。言葉がうまくしゃべれませんで、よだれが出てしまうし、よだれを拭かないといけないし、そんな感じなんです。

実はさっき言いました、キャンプのテントで一番最初にケンカしたのが、その西村雄三なんですよ。にくたらしい奴だったんですけどもね、今、友達ですけども、何やらエラそうなことを言いましてね、「オレの親父はエラいんだあ」と言う。

「どこがエラいんだあ」ちゅって言ったら「オレの親父は国会議員だぞう」なんて、そのときに言うんですよ。「何の国会議員だあ」ちゅって言ったら、民社党というのがあって、もうなくなったんですけども、西村栄一さんという民社党を作った方なんです。「それの息子なんだ」「親父がエラくても、息子はエラくなんかないものだ」ちゅう、それからケンカになったように思いましたが。(笑い) ポカン、ポカンと殴り合って、私が勝ったように思います。(笑い) 「民社党をやっつけたな」ちゅって言ってやりましたけども。まあ、そういう悪仲間でございました。

その彼は、堺の養護学校を出ましてから、絵ごころがあって、絵が好きで、「オレは絵を描いて絵かきになる」と言ってやっておりました。で、もっぱら、絵筆を、ふつうは手に持つんですけども、彼の場合には手が不自由なので、足の指に挟みまして、足で絵を描きます。なかなか器用に描きます。

この余島のインフォメーション・センターに1枚花の絵が、バラの絵だったと思いますが、掛っております。あれは足の指で描いとる絵なんです。帰るとき見て帰ってやってください。まあ、ずいぶん大きい絵を、ここへ、余島に差し上げたなあと、結構あいつは高うとるはずなんんですけども、きっと、タダで今井先生に贈ったんだろうと思います。なかなかの絵かきになってます。

西村雄三君と、昔、西宮北口というところで待ち合わせをしたことがあります。私「車で迎えに行ってやるから、西村君、西宮北口、出たところで待っとけ」と言いました。私、

ちょっと20分ほど遅れてったんです。そしたら、彼はパンとむくれて怒ってるんですね。「遅い」って言うから「いやいや、オレの20分ちゅうの早いほうやで。1時間20分なら怒ってもいいけど」と言ったら、エライまた、怒ってですね「ふざけとる」彼は脳性まひでフラフラしてますでしょ。ちょっと顔が赤いんですよね。よだれは出てるし前にキャンバス、後ろに絵の具の箱、持って、そして、振り分け荷物の形でバランス取って歩いとるんです。

で、それがエライ怒るから「エライ、今日は、ひとつ怒るなあ」「いやあ、さっき、西宮北口で、女学生がいっぱい寄って来て『このおっさん、昼間から、酔っ払うて、エエ調子やなあ』ちゅって『オレは酔うとるんと違うんや、酔うてのうても、こうなるんや』ちゅっても、なかなか、それを、また『酔うとるわ』ちゅうて聞かんのや」と、エライ怒っておりました。

私は、そのときに、彼に車の中で、「ほお、お前は、よだれも出て、不幸になあ。ボクは脊髄性、お前は脳性だから、それだけ不幸なんじゃ。気の毒に、かわいそうになあ」と、私が言うたら、またエライ怒りましてね。「気の毒とは、なんということを言うか。かわいそうとは、なんということを言うか。不幸とは、なんということを言うか。ボクの障害に対して、なんという、脊髄性のほうがエエような言い方をするなあ」と怒るんですね。エライ、きょう、ほんとに飲んどるやないかなと思うぐらい（笑い）、ちょっと、こう、疑ってかかったわけですけども、エライ言います。

「何で、ボクやったら、こうやって、しゃんとしてて、誰も、昼間っから酔っ払いやは言わんぞ。お前は、昼間から酔っ払いやと言われるやないか」と、「お前の障害、そのもの見たって不幸やないか」と「ましてや、足の指にはさんで描かな、ボクは手の指で描けるわ」と、こう言ってやりました。障害者が障害者どうしの喧嘩をするわけですね。みっともないもんですけども。

そしたら、彼は、エライまた怒って、「お前、これは、ボクにとってのトレードマーク、これがなかったら、ボクは絵かき稼業ができる」こういうふうに言っています。僕は言ってやりました、「はあ、障害を売り物にして、絵を売っとるんか」（笑い）と、こう言うてやりました。また怒りましてね、「なんということを言うか、オレの絵がすばらしいから、人は買う。足の指で描くから買うような人はおらん」ちゅてエライ言いますね。「ああそう、どこが不幸でないの？ どこが気の毒でないの？」と、僕が、またやりますと、彼が、とくとくと講釈をいたしました。

「お前、梅原龍三郎さんを知っとるか」と、こう言います。「梅原龍三郎ちゅうのは、どこやらで聞いたことがあるな。あれは絵かきさんと違ごたか」と「お前のような絵かきじゃない、立派な絵かきやろう」と言うたら「そりゃそうや。日展でも、もう、すごいんや。ボクはよう知っとるんや」と、こう言います。「いや、ボクだって知っとるで。新聞にも出てるやろ」「いや、ボクは直接知っとるんだ」と、こう言います。「どうして？」と、こう言いますと、「絵かきで、いい絵かき、もう、りっぱな絵かきになるためには、

いろんな先生の教えを乞わないといけない」と言うんですね。

「自分で得心してて、自分でこの絵はよう描けたなと思ってもダメなんだ。やっぱり見る目のある人に見てもらって『キミ、この絵の色づかいはダメだよ』とか、『このタッチはダメだね』とか、いろんな批判をしてもらわないといけないんだ」と。「ああ、そう。それで、梅原龍三郎さんとどういう関係があるの?」こう言いましたら、彼が、「ボクはこのかっこうで、大阪の天王寺の美術館に行く。美術館に行って、いろんな先生方の絵を見てくる」「はあ、誰でもするでしょう」「でも、その先生が、例えば、梅原龍三郎さんが来られてるときを狙って行く」「で、行ってどうするの?」「梅原龍三郎さんの周りには三重ぐらいの人垣がいる。その人垣の中へ『ちょっと、すいません』『ちょっと、すいません』『ちょっと、すいません』ちゅって、ボクは行く」と言うんです。「へえっ」「たいていの人はのくよ」そりゃあねえ、そんなかっこうをしてね、行ったら、みんなのきますよ、そんなもの。

「梅原龍三郎さんの真ん前まで行くことができる」「行ってどうするの?」「すみません、梅原龍三郎先生。私、手が不自由です。私の胸ポケットには、私の名刺が入っています。先生、見ていただけますか」、先生は、「どれどれ。西村雄三、汎太平洋学派、ほう、あなた絵かきさんなの」「そうです。私、先生に、きょう、お目にかかりたいと思って。先生の絵の前で先生にお会いできる。これは光榮でございます」と、こうやるんだそうです。

「先生、私、1枚だけ絵を持ってきました。先生にぜひ見ていただきたいと思います」他の人は、のいちゃうんです。梅原先生は「ほう、そう」「先生、おそれいりますけど、このキャンバス、取っていただけますか」と。先生は取ってくれる。(笑い)ね、余程のもんですよね。他の人は取るはずはない。彼だからこそその特権です。取ってくれる。

「ほう、あなたが描いたの」「私、手が使えず、足で」、「ええっ、足で描くの、これを」先生、びっくりする。梅原龍三郎さんでも足で絵は描けないですからね。(笑い)びっくりする。「ほうっ」「先生、私を障害者と思わずに、絵かきとして見ていただいて、この絵のどこが問題か見ていただけますか」と、こう言う。そしたら、「ああ、そう。ほんとに言ってもいいかなあ。気を悪くせんでね。この絵はダメだねえ。このタッチはダメだねえ。こんな弱いタッチではダメだねえ」と、こう言うわけです。「ありがとうございました。また、先生、いつかどこかでお目にかかったら、教えてください」「ああ、そう。あんたの名刺、いただいとくよ。西村君だねえ。頑張ってねえ、いい絵を描いてね」「ありがとうございます」

それから、半年ほどして、東京で、梅原龍三郎さんの展覧会が、三越百貨店の画廊で開かれる、そのオープンのときに、テープカットのときに、彼はまた、あの姿でもって、(笑い)今度は5枚ほどキャンバスの絵を抱えて持ってくるわけです。案の定、人垣で一杯。わあっと盛り上がってる。

そうすると、ところが、もうそのときには、「あっ」、先生のほうが、梅原先生のほうが

「あなた、確か大阪で会った、お名前こそ失礼だけど忘れた」「西村雄三でございます」(笑い) やるんですって。「先生の絵を見たくって、やってきました」「わざわざ来てくれたんかね、東京まで」「はい。先生、今日は5枚ほど持って来ました」(笑い) 絵を並べて、彼は、「ボクが脳性麻痺で、フラフラして歩いて、そして、ボクがよだれでも出てなかつたら、普通の絵かきなら、梅原先生のほうから、声をかけるようなことないよ。ボクは、自分のハンディキャップは、不幸では決してない。ボクにとって、かわいそうなことはない。ボクはハンディキャップがあって、よかった。芸術家になるためにプラスに生かすことができてるよ」そういうふうに言いました。

## 個性をもったキラキラ光る人間

「ハンディキャップは決してマイナスのものではない。ハンディキャップをプラスにすることもできるんだ」と、そういうふうに言いました。「なるほどなあ」と私は思って、「うん、そうだ。障害を持つ人を不幸だとはとらえてほしくない」そういうふうに思います。

ただ、私は、障害を持つ人が不幸になることもあるというふうに思うんです。それは、私が小学校に入るときに、障害があるからダメだと言われ、大学に入るときに、障害がある人は教師にはなれないと言われた。障害がある人は、別の人間だというふうに思われたときに、私は不幸だなあと、皆さんとおんなじ人間でありたい。それなのに、そうでないというレッテルを貼られたときには、寂しいなあ。そのときに初めて、障害を持つ人は不幸になるなあ、障害を持つ人はみんな個性を持った、キラキラ光る人間であろうと思うけれども、その個性を潰してしまうのは、レッテルを貼ってしまうときだなあというふうに思います。

私は、きのうから、この余島にやって来て、もし、私独りで、この余島に来いと言われたら、階段があるし、とてもじゃないけど来れないと思う。だけども、皆さんがピッタリ助けてくれて、とくに井奥さんがおぶってくれて、助けてくれて、私は、この島の住人になれて、昨夜からきょうまで、皆さんとおんなじ立場の普通の人になることができるわけです。

こうして皆さんに迎えていただくから、障害を持つと持たなくとも、普通の人として暮らすことが、障害があってもなくても、こうして普通の人として、暮らすことができるわけです。私は、余島だけじゃなくって、日本中が、やはり、こうでなければいけないなあと思います。

障害を持つ人は私とは関係がないよ、ではなくて、障害がある人も、あるいは、目の不自由な人も、耳の不自由な人も、あるいは、歳がいって歩きにくい人も、病気の人も、だれもが一緒に生きているということ、それが当たり前の社会、そして、そこで互いに支え合って、助け合って、分かち合っていくんだという気持ちが持てる、そういう社会が、こ

の余島であり、さらに、日本全国にならないといけないと、そう思います。

私たちは、今まで、私も皆さんに近づけるように、努力をして、障害を持つ人が障害を持つ人に近づくような努力を一生懸命してきたわけです。でも、とてもじゃないけども、皆さんに追い着くところには至りません。今、世の中は、だんだん、皆さんのが障害を持つ人のことも含めて考えていくという時代に変わってきています。

例えば、まあ、すでにご存じだと思いますけども、皆さんのポケットの中に入ってるお札、千円札、五千円札、一万円札、あれの端っこに、小さな突起物、突起が出ています。あれでもって、一つあるか二つあるか三つあるかで、五千円札、千円札、一万円札、違いが分かる。目が不自由でもそれで分かるようになってる。だれでもが使いやすいようになってる。

私も頭、洗います。シャンプーとリンス、目つぶりながら洗うと、どっちがシャンプーで、どっちがリンスか分からなくなる。でも、この頃の同じようなシャンプーとリンスの端っこに、ブツブツッと付いてるほうがシャンプーで、付いてないほうがリンスという方が出ています。こういうのをバリヤーフリー、障壁のないっていうんですね。だれでもが使いやすいような。今井先生と一緒にあって、そのホテルには、たまたま小さな文字でしか見えないメニューしかなかったけれども、本当は、もう少し大きなメニューにしといてもらったら、みんなが使える便利なものになっていくわけです。

今、神戸の市バスに、わずかですけども、車いすのまま乗れるリフトの市バスが通るようになりました。アメリカでは、5年前から法律が改正されて、アメリカの路線バスは、ほとんどのバスが車いすで乗れるように、リフトを付けないといけないというふうに改正されました。そして、建物も障害を持つ人が利用しやすいように改善しなければいけないというふうに変わってきます。街自体が障害を持つ人も、お年寄りも、みんな一緒に暮らしていくのが当たり前の街だというように、当たり前の社会だというように変わってきてるわけです。

私は、今、障害を持つ人の自立の家というのを運営しております。社会福祉の法律上では、社会福祉施設と呼んでます。私、施設は作りたくなかったんです。私自身、小さいときに「余島に捨てられるのかなあ」と「施設というところへ捨てられるのかなあ」なんて思ったことがありますから、施設は作りたくない、こう思ってきました。そうじゃなくて、障害を持つ人の家を作ろうと思って、三つの自立の家を、今、運営しております。

そこで住む障害を持つ人たち、重い障害を持つ人たちばかりですけれども、すばらしい人たちです。このあいだ、知的障害の人と一緒に街へ行きました。その知的障害のYさんという人ですけども、Yさんは、すでに、お父さん、お母さん、亡くなっています。きょうだいがいます。きょうだいのお兄さんに、お嫁さんをもらうことができて、何よりも喜んだのはYさんだったです。「お兄ちゃんにお嫁さんが来た」喜びました。

だけども、Yさんは、結婚式には呼んでもらえませんでした。Yさんは障害があるから、

来てもらうと、相手の親戚に具合が悪いから来なくていいというわけです。そして、Yさんのお兄ちゃんは、結婚して子供ができました。お嫁さんもいい人なんですけども、Yさんと暮らしたくないと言いました。Yさんは、仕方なく、私の自立の家で生活をしています。

Yさんと一緒に、このあいだ、買い物に行って、自動販売機へ行ったんです。「Yさん、何を買う？ コーヒーがいいか、コーラがいいか、ジュースがいいか。ボクは、ん、お茶がいいな」で、110円入れました。自動販売機で出てきました。「Yさんは、何するの」って聞きましたら、Yさんは、隣りのほうで、「私はオレンジジュースがいい」と言って、110円を同じように入れたんです。ガチャンとジュースが出てきました。同時に、チャランチャランという音がしました。アレッと思ったら、Yさんの自動販売機は、壊れていたんでしょうか、110円、また、落ちてきたんです。

「やったじゃない」と私、思いました。(笑い) 今、笑った人、みんな、そう思うんですね。Yさんは、そう思わなかった。Yさんは、「これ、返す」って言うんです。私、思わず「いいじゃない」と言いかかったんです。「でも、私のジュース、ここにあって、110円は、私、ここに入れたけど、これ、機械が悪いから、これ、お店に返す」って言うんです。「返さなくていいじゃないの。もう1本もらって」私は思わず、そういうことを言いかかったんですけど、Yさんは、「お店に行く」って聞かないんです。

Yさん、正直なんですよ。こんな正直な人と、私は一緒に暮らしているんです。Yさんは、お嫁さんに嫌われ、結婚式にも呼んでもらえなかった。だけども、こんな素晴らしい心の持ち主の人です。そんな人と、私は暮らせる喜びを味わいながら、一緒に生活をしています。

## 障害者からの震災募金

この前、阪神・淡路大震災がありました。「はりまの家」の重い障害を持つ入居者の人たちから、「震災で被害を受けた人は大変だろう」自分たちも、年金、わずかな年金をもらってるけれども、その中から、募金をして、その人たちに送ろう。障害を持つ子供どもたちも、きっと震災で苦しんでいる人もいるだろう。送ろうということになりました、彼らが募金をしまして、だいぶ、お金が集まりました。職員も一生懸命募金をしました。職員そして入居者から、30何万円ほど集まったんです。60人の入居者の人たち。

ところが、それに、あと100万円追加で募金があると言うんです。「ええっ、100万円」130何万円になる。片岡さんも一生懸命募金をして入れたんですけども、100万円別に募金がある。うちの職員が「実は、これ、ちょっと困っているんです」一番重い障害の西村さんという人が「どうしても、100万円したい」と言うんです。

彼は、お父さんもいませんし、お母さんもいません。もう、身寄りはお兄さんだけです。彼は、毎日テレビを見て、阪神・淡路大震災の人たちのことを思って「自分はなんにもす

ることができない。自分は電動の車椅子で、身をゆだねているだけで、何もしてあげることができない。自分にとって、100万円というのは、年金をためて、ためて、ためて作った大切なお金だけれども、自分でできる最大のことといったら、こんなことしかできない。このお金をそっくり阪神・淡路大震災の人たちに使ってもらいたい」こう言ってきたんです。

30何万円プラス100万円というのは、彼の100万円で、まだ、彼の100万円は、ちょっと宙に浮いてるんです。職員が「そんな大切な、大きなお金をまるまる持ってっていいんだろうか」こう言うんです。「お兄さんがおられるから、お兄さんの許可を得て」彼はがんとして反対するんです。「兄の金じゃない。自分が作った金なんだ。自分がこれを寄付したいと思うんだ。使ってくれ」「ま、それでも」って、私、お兄さんに電話をしました。「こんなことをおっしゃてるんですけど、このまま、いただいちゃっていいんでしょうか。あまりにも金額が、1万円、2万円なら分かるけれども、100万円なんですよ」お兄さんは、「いえ、本人の気持ちでしょうから、受け取ってやってください」そう、おっしゃいました。彼の100万円を合わせて、130何万円、阪神・淡路大震災に、被災者の人たちに持つて行きました。彼は自分でほんとうに動くことも何もできない。でも、自分の虎の子、大事なものを人にあげることで、彼は何か貢献できたと思ったと思います。

みんな、やさしい人たち。いろんな個性を持つ人たちばかりです。社会の片隅に置かれてるのではなくって、そういう、やさしい、素晴らしい心の人たちと一緒に生きられる喜び、そんなものを、私たちの日本が持っていないといけないなあ、そして、そういう人たちみんなと一緒に暮らしていくこと、みんなが幸せに、一人残らず、一人残らず、だれも落すことなく、幸せに暮らしていけるような社会を作ることが、福祉の文化はしないといけないなあというように、私は思います。

私、こんな重い障害を持って、まあ、2、3年しか生きられないでしょうというようにいわれておりました。でも、今年52歳、もうすぐ53歳になります。よく生きて来れたなあと思います。

私は、大学でボランティアの組織を構成しておりました。大学生にボランティア活動に従事してもらって、そして、障害を持つ子どもたちのボランティア活動をいろいろやりました。そして、仕事について、実は、僕、6カ月で最初の仕事をやめちゃったんです。

兵庫県の行政の枠の中で、県庁の8階の衛生部の医務課というところに、机一つ置いてもらって、最初、仕事したんですけども、僕は、ああいうなところでなじまなかった。はんこ12個押して、初めて決済というような仕事を、僕はなじまなくって、「すぐやる課」でないと、僕はダメだったんですね。「もう、やめます」と言って、やめちゃって、もういっぺん、ボランティアの組織を編成して、自分の下宿、6畳一間の下宿を事務所にして、最初、電話もなかったけれども、一生懸命やってるうちに、障害を持つ子どもたちの親の会が、「電話ぐらい、私たちの親が金集めて、ひいたげるよ」と、ひいてくれたところから

出発しました。

最初、心身障害児福祉協会という組織は、ボランティアの組織でスタートしました。お金はなかったし、私、歯医者の小せがれですから、とってもじゃないけど、金ももらえなかつたし、自分の自動車、維持するだけで精一杯だったですから。親の会が最初3万円ほどお祝い金をくれまして「これで頑張りね」ちゅって「私たちのために頑張ってね」ちゅつたところから。

最初からやったのは、学生さんに頼んで、募金箱持って、阪神・西宮の駅に立って「皆さん、障害を持つ子どもたちに車イスをプレゼントしてください」それからスタートいたしました。で、車イスを何台か買って、一番最初に置いたのが、神戸のそごう百貨店でございました。そして、大丸百貨店にも置き、車イスがもっと親しめるようにというふうにしていたことからスタートいたしました。

## 障害児のゴールデンウィーク

昭和43年当時ですけども、ある障害児の親が、こんなことを言いました。「こないだ、ゴールデンウィークに、うちの子を連れて阪神パークという遊園地に連れてったら、楽しいはずの遊園地が、うちの子どもにとっては何にも楽しくなかった」と、こう言うんです。「どうして?」って聞いたら、「みんな、動物園の動物、見るんじゃなくて、うちの子供、見るんだ」ちゅうんですね。「子供だけじゃなくて、おとなまで一緒になって『おもしろい歩き方してるよ、ほら、見てごらん、見てごらん』て、こんなふうに言うんだ。寂しかった。悲しかった」って言います。

私たちは、ボランティアの人と集めて、「そう、そしたら、障害を持つ子どもたちのゴールデンウィークしょう、作ろう」って、神戸女学院という学校の芝生を借りて、障害を持つ子どもたち、いっぱい集めて、家族も集めて、きょうだいも集めて、思いきり楽しめるような、大学の文化祭のようなことをして過ごしました。第1回目から数えて、今年、もう29回目になります。

そんなことをしたり、歩道橋がどんどんできて、車イスで行けなくなって、なんとか車イスでも行けるようにしてほしいなというような運動を起こしたり、障害を持つ子どもたちの言葉の訓練を、もっとしていこうということをしたり、あるいは、障害を持つ人の家を作ろうということで、自立の家を作ったりして、やってきました。最初は、ボランティア、出資金は3万円からスタートしたんです。今、私たちの自立の家では、160人の人たちが毎日生活をしています。

神戸の障害児福祉協会から130人の子どもたちが毎週訓練に来ております。私たちの仕事は、どんどん拡がってきました。でも、このお金は3万円から出発し、募金活動をし、いろんな人に協力をしてもらって、仕事を進めることができます。最初、私は西宮から仕事をしたんです。西宮市で、学生さんと一緒に、「西宮で、なんか有名な人で、こ

の人が何かしたらお金が集まるというようなことはないかなあ」そんなことを考えました。今井先生に動いてもらうと、一杯お金が集まるんですけども、今井先生はなかなか忙しいし、何かしてくれることはないかなあ、といろいろ考えました。

「そうだ。西宮の仁川というところに、ヴァイオリニンの辻久子さんという人が住んでるよ」そういうふうに言ってきました。私、いっぺん頼んでこようと思って、行きました。でも、いろんな人から「辻さんというのは難しいよ。とてもじゃないけど、そんなことしてくれる人じゃないよ」と言われました。でも、まあ、やってみないと分からなと思って、ピッとベルを鳴らして、「実は、障害児の福祉協会なんです。初めてですけども、お願いがあって来ました」言いました。そしたら、辻さんは話を聞いてくれて、「私は、要するに、チャリティコンサートをして、ストラディバリウスという名器でもって演奏、そのお金が、あなた方のところにいったらいいのね。私は演奏を演奏することで、あなた方の役に立つのね。それだけでいいのね」「それで結構です」。

西宮の市民会館、1500人入るんですけども、一杯になりました。「辻さん、ありがとう」毎年のように、辻さんがコンサートをしてくれました。うまくお金を得て、いい仕事をしようと思いました。

次に、クロード・チアリというギタリストがいるんです。「ああ、そうですか。それじゃあ、お願ひできますか」神戸の文化ホールでいたしました。2000人入ります。一杯になりました。「ありがとうございます」

笑福亭仁鶴さんのところに行きまして、「子どものためのゴールデンウィークをしたい。みんな子どもたちに聞くと『仁鶴がいい』と言うんです。仁鶴さん来てくれませんか」「いつ?」「5月5日」「オレ、一番かき入れのときや。行くわ、行くわ、行ったらエエンやろ」ちゃんと、やって来てくれました。次、月亭八方さん、「やってみようじゃないか」月亭八方さんも、電車で赤穂まで行こうというツアーの駅長となって、やって来てくれました。

障害を持つ子どもたちがあこがれる、あの力強い相撲取り。「だれがいい? だれを呼びたい? 何でもやってみよう。ボランティアの力は強いんだあ。当たってみよう」と、子どもたちに言いましたら、現役の相撲取りじゃなくって「高見山がいい」と言うんですね。東関親方がいい。「じゃあ、大阪場所で来られたときに、いっぺん交渉して来よう」行きました。

「いいよ、ハワイでは、それ、当たり前」(笑い)と、こう言われました。「ああ、そうですか。ほんとですか。ほんとに来てくれるんですか」それで、フェリーを借りて、その一日船長さんを高見山関もボランティアでやってくれました。

障害を持つ人たちの理解を広めるために、もっと、いろんな人たちも呼んで、お話をしてももらいたい、思います。桐島洋子さんにも来てもらいました。瀬戸内寂聴さんにも、私、手紙書くんです。「実は、阪神大震災で、この地域の人たちがたくさん被災しました。あ

なたはテレビに出て、『みんな、がんばるのよ、がんばるのよ』と言っているけども、本物の姿を見せてくれたら、もっと頑張ると（笑い）思います」そしたら、3日して瀬戸内さんから、返事がきました。

「行ってあげるわよ。どこ行ったらいいの」「じゃあ、実はうちの『はんしん自立の家』宝塚へ来てもらえますか。迎えに行きます」「いや、北口まで迎えに来てくれたらいいわ」言われました。来ていただきました、ボランティアで。「私、今日ボランティアで來てるのよ、ボランティアで」こう言ってもらって、1時間半、楽しいお話を聞かせていただきました。

ヨットの堀江謙一さんも来ていただきました。ヴァイオリンの五島みどりさんもコンサートをしてくれました。私、あんまり皇室は好きではないんですけども、ヒゲの殿下の三笠宮の寛仁親王さん、今ガンになってますけども、彼のほうから「あんた、自立の家を作るんなら、オレも手を貸すよ」と応援団でやってくれました。

ボランティアの力というのは強いもんですよ。ボランティア、すなわち、皆さんですよ。何でもやってみようと思ったら、いろんな人を動かすことができる。いろんな人が協力をしてくれる。私たちの福祉、日本の福祉を動かしていくのは、皆さんそのものだろうと、私は思います。

ただ、もし私が、辻久子さん、クロード・チアリさん、仁鶴さん、八方さん、高見山潤、瀬戸内さん、桐島さん、堀江さん、五島さん、いろんな人に、「実は私がお金儲けをしたいんです。みんなが幸せになれるようにするために、あなたも力を貸してください」と言ったら、日本人はみんな優しい。いや、ハワイの人も優しい。フランスの人もみんな優しい。誰もが力を貸してくれるはずなんですよ。

私は、自分のためにだけ考えるのではない。みんなの、すべての人のことも考えてしまうとしたときに、何でもできるんだなあというように思います。私は、今、私も含めて、人の幸せを作る仕事に携わっている喜びを感じております。私は毎日充実しております。素人の皆さんのような、普通の人が熱意と、そして勇気を示してくれて、2、3年しか生きられないだろうと思っていた子供私を一人の人間にしてくれたわけです。そして、その私が、何事もチャンスだ。何事もやってみよう。何事もプラス志向、マイナスに考えずに、プラスに考えていくときに、私は、皆さんもきっとこれからどうして生きるか、充実した人生を過ごしていただけるのではないかなあと思います。

人間は、ふたとおりあると思うんです。何事もマイナスにとらえていくタイプの人間と、何事もプラスにとらえてみようという人間と、ふたとおりあると思います。どうせ、生きていくならば、プラスに取っていったら、すばらしい人生が送れることと思います。

きょう、この中に学生さんもいらっしゃるでしょうし、お仕事についている方もいらっしゃると思う。なにも、私と同じように、社会福祉の仕事につかなくてもいいと思う。でも、自ら主体的にプラス志向でもって、もう一人の自分を発見してみられたら、自分で何

事でもいいから、自分のことを考えるのではない、人のことを考えていくうというところに、私はボランティアがあると思います。人から言われてじゃなくて、自分から人のために何かをしてみようというときに、本物のボランティアが生まれると思います。それをすることによって、今ある自分ともう一人の自分を発見することができると思います。

どうぞ若い皆さん方、これから的人生を、楽しく過ごして、私と同じように充実した人生を過ごしていただけたらと思います。長くなりました、私のお話、これで終らせていただきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

## 質問・意見

——ありがとうございました。たいへん感動いたしました。先生に、ちょっと、このへんのご意見とか、あるいは、聞いておきたいがありましたら、おっしゃってください。

**Q** 失礼します。先生の、非常に心打つ体験談を、拝聴しまして、私も、実は、身体障害者の4級、おそらく、私の所属するロータリアンの中に、私一人がハンディキャップだと思っております。私は、徳島県出身でして、梅原龍三郎画伯、それから瀬戸内寂聴さん、お二人とも徳島県人。非常に感銘深い。友人の西村さんと、梅原画伯とのいきさつ、それから、瀬戸内寂聴さんにお手紙出されて、すぐ返事が来たというように、今まで先生そういう有名人で、お手紙を出されて成功率をちょっとお聞きしたいんですが。

**片岡** はい。そうですね。正確な数字は出ませんけれども、私は、だいたい90パーセントぐらい、皆さんに賛同していただけると思っております。実は瀬戸内寂聴さんと、福岡マラソンの君原健二さんですねメキシコのオリンピック。君原健二さんにもお願いをして、それから、もう一人、向井千秋さんという宇宙飛行士の方と3人に去年そういうお話をタダでしていただけないでしょうかというふうに、厚かましくお願ひいたしました。

もちろん、私どもの団体のことをよくご理解いただいてのことですけども、そのうち、瀬戸内寂聴さんと君原健二さんは、応じて、すぐに来ていただいて、講演会が実現いたしました。君原健二さんは、障害を持つ人も、参加者も一緒になって1kmほど走ってやっていただきました。

それから、向井千秋さんも、ご主人から、「ぜひ参加したい。あなたの考えている震災で苦しんだ人たちを励ます、セミナーに、あなたのボランティア団体がする、営利ではない団体がするのに、ぜひ参加したいと思うけれども、残念ながら今、アメリカに行ってるんだ。それがためにそれができないので、その代わりに、向井千秋さんが特に作られたビデオを1本送るから、それで勘弁してくれ」という手紙がきました。これからいっても、だいたい90パーセントの確率で、皆さんボランティアを応援していただけると、こう確信しております。

Q 障害は個性と、普通の一人の人というのが、ちょっと聞き逃したんですが。

片岡 ああ、そうですか、はい。私は、思いますのに、障害というのは、マイナスではなくて、一人の個性、一人の人間の個性の一つであるというふうに思っております。普通の一人の人というのは、私は世の中に障害者という種族そういう人種はいないと思ってるわけです。障害者という人種はいないけれども、障害を持つ普通の人はいっぱいいるであろうと、こういうふうに思っております。

ですから、私自身は障害者ではなくて、障害を持つ普通の人であると。ですから、皆さんには、障害者として、私を認めるのではなくて、障害を持つ普通の一人の人として認めていただきたいと、こういう意味でございます。

——はい、他、いかがでしょう。はい、どうぞ。

Q 障害者ではなくて、障害を持つ普通の人っておっしゃったんですが、学校の現場では、障害児教育というのがあって、先ほどの講演の中でも、特殊教育、障害者教育という言葉が、出たんですが、今、障害を持っている子どもと、健常児を、どんなふうに教育していくかということで、日本全国で、今、悩んでいるような時期だと思うんです。

今、大きなこととしては、障害を持っている子どもだけを集めてる養護学校、それから、普通の学校の中に、障害児、特殊学級というのを作って、普通の学校の中に障害を持つ子どもが入っている教育、それから、いろいろな形はあるだろうけど、普通の持ってるクラスの中に、障害を持つ子も一緒に勉強していくというような形の教育とか、いろいろあるんですが、僕は、ほんとは、みんな一緒に、障害を持った子も一緒に教育できていったらしいなと思うんですが。

そこで思うのは、障害を持つ普通の人ということやけど、その障害に対応した教育というか、障害を持った人には、いろんなふうな訓練であるとか、勉強であるとかしていかなければアカンなあと思ってます。だから、全部一律に今の教育の現場で、一緒にやっていくのは、かなり難しいかなというような悩みもあって、どんなふうな教育をやっていったらいいのかなあと今、考えていたところなんです。どんなふうな教育の形が理想かなと思われているのか、お教えいただければ幸いです。

片岡 はい、分かりました。非常に専門的なことだろうと思います。今と私の時代は必ずいぶん変わってきてるわけですね。今の時代そのものであれば、私はおそらく普通校で勉強ができるかもしません。もう少し前ならば、私は肢体不自由児の養護学校で勉強していたかもしれません。

まあ、しかし、いずれの時代にしても、障害を持つ子どもたちだけの場で教育をされる

だけでなくって、やっぱり、障害を持たない普通の地域の子どもたちと、やはり一緒に統合されて教育はされるべきではないかなあという気がいたします。私は、そうはいっても、運動会で応援団長しましたよ、と言いました。でも、私のためだけの体育もしたかった。分かります？ 私、体育の時間が、なかった。私のためだけに考えられた体育もしたかった。だから、算数、国語は、皆さんと一緒にできるけれども、私のためだけの体育の時間の教室を作ることができるならば、そういう教育のあり方が、私は望ましいなあと。

もっと言うと、普通校で障害を持つ子どもたち、あるいは障害学級で学んでいる子どもたちも、ある部門、ある部分については、健康な子どもたちと同じように学ぶことができ、ある部分については、その子ども、その子どもの特性に応じた教育がなされなければならない。だから、一律に、一つの養護学校の中だけでなくって、養護学校で勉強するときもあっていいし、こういう普通学級の中で一緒に勉強するときもあっていいのではないか。

結論としては、特性に応じた教育ができ、なおかつ、普通の皆さんと同じ時間を過ごせるような場も積極的に設けるべきではないかなと、こういうふうに思います。よろしいでしょうか。

——はい。ありがとうございました。石井先生どうぞ。

**石井** 明石のロータリークラブの石井でございます。本日は長い間、素晴らしいお話をありがとうございました。私、外科医として、現在、普通の一般の病院と、4年前から老人保健施設をやっております。そういうことで、高齢化に関係のある介護の問題でいろんな本を読んだり、友達から聞く話ですが、介護保健、特に介護する場合に人手がやはり大切であって、先進7カ国なんかの形で話しますと、やはり、アメリカと日本だけが効率のいい施設を作って、そして、一つの制度を作ってやろうじゃないか。

ところが、フランスとかヨーロッパ、ドイツ、まあ、イギリスも含めたですね、それから、スカンジナビアの福祉先進国の、人々は、やはり、みんなの連帯でやらないと、うまくいかないと、そういうようなことを強調されてるようです。先生のお話を、聞きました、やはりみんなが理解し合って介護なり手を差し伸べるという気持ちがないとダメだなということがよく分かりました。

しかし、教えていただきたいのは、これから日本は、今、単純計算ですけども、おむつを替えないといけないような年寄りが、1日、5回か6回ですね。少子化現象とかいろいろなことで、高齢化も交えて、あと40年たつと1日1回のおむつを替えるのがやっとになるという単純計算だそうです。まあ、そういうのを解消するためには、どういうような形が一番よろしいのか教えていただければ、また勉強になると思いまして。

片岡 大変、難しいご質問でございます。後に控える今井先生あたりがお答えになる方が一番なんんですけども。ただ、私は、日本人がですね、今まで、福祉というのは困ったもんだということの概念を持ってたと思うんです。福祉は困りもんだと、困りもんの人を何とかするんだと。ですから、そこには、恵んであげるもんだというような、持つ者が持たない者にという、上から下への原理が働いてきたと思います。

実は、ほんとうは、福祉というのは、そうではなくって、みんなが幸せになれるように、みんなが作っていく、スクラムを組んで作っていくんだというものに変えていかないといけない。

先ほどちょっと、福祉の文化というようなことを言いましたけども、福祉というものの考え方自体を、上から下へではない、みんなの間で作っていく、支え合っていくもんだという、そういう気持ちを国民全部が持つことによって、それは文化になることができると思います。これを福祉文化と私たちは称してるんですけども、そういう時代をつくっていかないとダメであろう。

ですから、先生のおっしゃるように、確かに、高齢者の人がどんどん増えて、支えていく若い人たちがどんどん少なくなっていく、そのへんで、危機感を持つというのは、上から下へのものの考え方を持つときに危機感を持つものであって、それが、そうではなくて、私たちは文化として、そのおむつをみんなが交換をしていく役割を私たちが喜んでいくんだという気持ちを持つときに、その怖れはなくなるのではないかというように思うわけなんです。

ですから、そのために、私は皆さんに障害者というのは案外、かわいそうではないんだなという気持ちを、もし持っていたら、これは一つ一步前進したことではないか。福祉というのは、なにも氣の毒なかわいそうな人のためだけじゃないんだなと気持ちを持っていただいたとしたら、もう一步前進したことではないか。そういう、皆さんが非常に親しい気持ちを持って、みんなで自分たちの世の中を作って、日本を作っていくことが、これから必要なんだという気持ちを前に前に持っていっていただくときに、私は、あまり危機感を持たないわけなのであるんです。

私は、一昨年、スウェーデンにも行きましたけれども、確かに、すべて税金でまかなわてる感じがいたしました。日本で、今、消費税が3パーセントから5パーセントになる。やいやいやって反対をしてるところもありますけれど、いやあ、5パーセントになっても、私たちの生活が、みんなで見ていく世の中になるなら、それでいいじゃないかという気持ちを持てるときに、日本は、そう危機感を持たないのでないか。

おおかた30年ほど前に、私、初めてヨーロッパに行ったときに、バスの運転手とオランダで話をしました。「あんた、税金いくら払ってんの」って聞いたら、「収入の内の7割ぐらい税金で取られてしまう」「ええ、たった3割しかもらわないの。少ないなあ。気の毒だなあ」と言ったら「いいや」と言ってニコニコしてる。で、どうしてかなと思ってたら、

「私の父も、親も、今、幸せに、私の税金でもって暮らしていることができてるから」って言いました。

まあ、ヨーロッパの国々は、そういう考え方でいってます。一方、アメリカのシェアホーム、障害者の自立の家は、ほとんどボランティアで運営されている。片方、税金出して、片方は、税金じゃなくて、労力を出してやってる。やはり人間の連帯、支え合いでもって、社会を構成してるんだなあというように思いました。

ところで、私、きょう、神戸へ帰りますけども、中国縦貫道、3車線走ってるところに、4車線は非常用においてある緊急用の路側帯ですけども、渋滞してると、その横を通って、われ先に行く人がやっぱりいる。窓から空き缶をポオーン捨てる人がいる。自分さえよければいいんだというものの考え方が横行しているかぎり、日本は、まだまだこれから頑張らないといけない。皆さん、これから頑張って、日本を変えていかないといけないなあ、そう思うわけです。

ですから、福祉というものの考え方が、一部特定の人の気の毒な人を救うための考へではないという考え方方が前に進めば、私は、先生のおっしゃる危機感は、少しづつなくなっていくのではないかと、そう思っております。

——よろしいでしょうか。ありがとうございました。

# 「福祉文化の形成を目指して」 その心構えと実践 —ロータリーとの協働

司会 セミナー・アドバイザー  
R I 2680地区P.G.

深川 純一（伊丹RC）



司会（深川純一氏）

——それでは、ただ今からフォーラムを始めたいと思いますが、最初に2、3、お願ひをしておきます。フォーラムというのは、皆さんご存じのように、いろんな意見を、皆さんからお聞きします。しかし、結論は出しません。これは、決議をするところではございませんので、いろんな意見を聞きながら、そして、それぞれ、自分の学ぶべきところがあれば取る。取らないところは取らない。そのようにしてお互いに学び合うところであります。これをフォーラムといいます。メインテーマは福祉文化の形成を目指して、その心構えと実践。サブテーマとしてはロータリーとの協働です。

まず、A班、B班、C班、D班の代表の方が、ここへ出てきていただいてね、昼間、バズセッションで、このA班では、例えば、どのような意見があったのかということを、他の班の人たちに発表してください。最初はそれについて、この点がわかりにくいということがあれば、問題の趣旨の質問を受け付けます。それについて、発表されたA班の方が、それに対して回答する。その中身の討議は後にしてください。それはまた言います。順番に、すべての班が、ここで、自分たちの、こういうバズセッションの結果がこうだということを、皆さんで、ご披露いただいて、その上で、ディスカッションを続けていきたいと思います。

それでは、D班から、前へ出て来て、代表の方。どういう意見があったか。

## 「福祉文化は一日にして成らず」 D班の意見



D班 そしたらD班の発表をしたいと思います。

今、拡げたのは、D班の結論です。「福祉文化の形成を目指して」ということについて、話し合った結論です、これが。いいですか、D班の皆さん。

すばり、福祉文化は一日にして成らずということですね。「ローマは一日にして成らず」という諺があるんですけど、それを、ローマのところを福祉文化ということにしてね、ちょっと作ってみたんですけど。

まず、私たちはね、福祉文化とは何かということについて考えたんです。そして、福祉とは、すべての人が普通に一緒に暮らせるような社会やなあっていう話をして、そういう環境づくりをすることが必要なんじゃないかと考えました。そうですね、福祉文化とは、そのような環境が形成されるような文化であると、そういうふうに考えたんです。そして、そういうってもですね、福祉文化とは、すごい大きなことなんで、その前に皆さん、こんなシーンを見たことがありませんか。

——通勤電車です。勤め帰りのOLやサラリーマンで一杯です。老人が入ってきました。(笑い) おやおや、詩集で顔を隠していましたね。どこかで見たことがある詩集ですが、せっかくいい本を読んでいるのに、やってることはいただけません。隣の人はどうでしょう。たぬき寝入りですか、困ったものです。その隣の女性も席を譲りたくなさそうにしています。

——他の3人はどうして席を譲ることができなかつたんでしょうか。以上です。

僕たちの班ではね、今、やつたような、こういうエピソードが出たんですよ。それで福祉文化と言つたら、すごい大きなことなんで、まず、私たちは自分たちにできる身近なことから、今の席を譲るとかね、そういうことから始めようということになつたんです。

遠藤先生、ご老人でないにもかかわらず、ご協力ありがとうございました。(拍手)

そして、次のサブの問題、もしロータリーと共同できることがあればということなんですけど、僕たちが考えたのね、この三つです。1番、有益な話をしていただくこと、ロータリアンの皆さんにですね。僕らにとって、ためになるような話を来ていただきたいなということ。あとは、福祉情報の提供をしてもらいたい。これは、ロータリアンの皆さんとのネットワークとかを使って、僕らにできるようなボランティアの情報を提供していただきたいなと。そして3番目は、福祉コーディネーターの養成ということです。福祉コーディネーターの養成、ちょっと説明したほうがいいですね。山中さん、ちょっと。

——福祉コーディネーターというのは、現在ボランティア活動とか、小さなことから、福祉から始めようとしている場合に、ボランティアどうしが結構、連絡がつかなかつたり、あるいは情報が散乱していたりして、それをうまく一つにまとめたほうが、よりよい福祉が得られるんではないかという意味で、福祉コーディネーターというのが、設けられたらしいのではないかということを考えております。福祉コーディネーターというのは、例えば、ロータリークラブで青少年の海外交流というのがありますけれども、いわゆる、アメリカなんかの先進諸国もさることながら、福祉の進んだ国々へ派遣したり、あるいは、福祉専門家といったようなことの養成に対して、協力をしていただけたらいいのではないかということで挙げさせていただきました。

——後は、小さな力ではね難しいっていうか、大きなことをするには、やっぱりお金が必要だと思うんですよ。それで、そういうところも、ぜひ援助していただけたら、とかいう意見も出たんです。はい、以上がD班の意見です。終わります。(拍手)

**司会** ありがとうございました。今、D班に意見、発表していただきましたが、発表した意見について分からぬところがあれば、ご質問ください。これは、どういう意味ですか、とか、今、福祉コーディネーターの説明がございましたが、それ以外にも分からぬところがあれば、おっしゃってください。ございません。それでは、次はB班、お願いします。

### 「住みやすい社会を目指す」 B班の意見

**B班** それでは、B班の意見を、言わせていただきます。まず、皆さん方、最初にこち

# 第19回 RYLAセミナー

1997.3.27~3.30 於・神戸YMCA余島野外活動  
主催: R.I.第2670地区・R.I.第2680地区・RYLA運営



らのテーマを、いただいて、何て漠然的で難しい問題なのかなと思われたことと思います。先ほど、深川牧師がバナーから、結論は出なくてもいいとおっしゃっていただいて、われわれもちょっと安心した部分があるんですけども。

まず福祉について、福祉とはいったい何なんだろうというところから、われわれ、まず壁にぶつかりました。みんなそれぞれに、福祉とは何かということについて個人の意見を持ってまして、高齢者福祉であるとか、障害者福祉、青少年育成、奉仕活動、あるいは女性問題、環境問題、こういったものすべて福祉というふうな非常に大きな課題になってしまいますので、かなり話のほうがいろんな方向に飛んだり、大変まとめにくかったです。

最後に、ある意見で、福祉とボランティア、これを一緒に考えるからちょっと難しくなるんじゃないかなと、あちらの方に書いてあるということで、福祉というのは、みんなが住みやすい社会を目指すものである。福祉の「福」というのは、幸福の「福」である、というふうな定義付け。ボランティアのほうは、営利、利益、見返りを求めない社会奉仕。こういうふうな定義を、まあ、仮りにということで、定義しました。

これで、先ほどね、片岡先生からお話をあった中に、K君とM君の話が、あったと思うんですけども、K君の方は、どう取られるかは皆さんによって違うんですけども福祉じゃないかと。M君のほうから片岡先生をかつぎ上げられた方がボランティア、営利を、見返りを求めないボランティアじゃないかと、いうふうな話も出ました。

では、なぜ、今われわれ含めて日本人は、自然に、格式ばったことを考えずに行行動できないか。それには、まず社会的背景があるんじゃないか。日本は資本主義国家ですから、どうしても企業は利益を求める。そういう中で、福祉というものが後回しになってしま

る。

歴史的背景、これに関しては、もう戦争ですね。戦争の後、皆さんのが幸福な生活を求めるために、利益を追及した社会が形成された。今欧米の方では、福祉が、非常にね、活発になってるんですけども、戦争が終わった段階で日本が福祉を優先させたら、今の日本はなかったんじゃないかな。ある程度の経済レベルがこの段階まで来た段階で、福祉というものが見直されるようになった。

ですから、欧米と比べて、なぜ、日本が欧米と同じようなことができないかということ、これはもう、歴史的にどうしても無理があったんじゃないかなという部分で結論を、出しました。後は、国民性。まあ俗に言われる島国根性というやつですね。それから、個人の価値観。宗教問題もいろいろ出ました。神社で働くかれている方もいてましてね、宗教問題、キリスト教だけとかじゃなくて、いろんな宗教がありますから、まあ、オウムとともに含めてですけど。そういう個人の価値観の違いというのが集まった民族ですから、どうしても、その一つのものに対して同じ方向に向けないという部分で、それがすべて、そういう原因になっているんじゃないかなということです。

では、いったい、理想的な福祉文化というのは、何なんだろう。ちょっとまとめてしまって、これが正しいかどうかはわからないんですけども、現存の福祉施設を最大限に生かす。今、日本にある福祉施設を最大限に生かし、個々が自分の環境、職業とか、いろんな環境を含めて、能力、意識の中で、何にも左右されることなく行動ができる。それに、福祉に対する言動、私も含めてですが、皆さんのような状態、言動、行動を皆が理解し、自然に活動できる環境を形成できれば、こういった問題は解決されるんじゃないだろうかという結論でした。

では、この理想的な福祉文化に、ちょっとでも近づけるには、具体的にどうすればよいか。これ、ちょっと、具体的じゃないんですが、大きな問題なんですが。福祉に対する行政機関の形成と再構築。それから、教育における福祉に対する取組みとカリキュラムの向上。

あと、これがすべてであると言えば、行き着くところはここなんですが、個々の意識の向上と、私なんかも今、百貨店で働いているんですけども、企業の福祉に対する考え方の向上、要は、経営者の考え方ですね。例えば、こういった場に「実はこういう場があるんで、行きたいんですけど」と言ったときに「よし、行ってこいや」と言えるような経営者が上に立っていただければ、こういった場に参加できる方々も増えて、どんどんとよくなっていくんじゃないかなということです。

ただしね、こういうことをするには、今、いろんな問題点があります。ちょっと少ないんですが、当然、私たち一人ひとりとか、小さなグループでは、こういった大きな問題は解決できません。それに、自己主義社会というのは、まあ、自分の身が、やっぱり一番、誰でもかわいいですよね。ちょっとでも自分が幸福になるということを、まず前提に考え

てしまします。そういった根本的な自分らの心の中にあるものが、この問題点になっているんじゃないかなというふうに考えました。

じゃあ、具体的に、こういった問題点を解決するには、どうしたらいいんだろうかというふうな問題に入っていくんですが、これも非常に大きな考え方ですけれども、マスメディアによる普及。今、テレビの方でね、Jリーグの前園選手がいじめについてやってますよね。それから、西村知美さんが手話についてやってますよね。ああいった形で全国的な民間ネットを通して普及するとですね、とくに若い子、意識のレベルがある程度高い子とかに関しては、わりと影響力があると思います。

そういうことが当たり前になる世界、国の、そういうことが当たり前のようになればね、少しでもよくなるんじゃないかなというふうなことで話が出たんですけれども、今、言っているのは、あくまでも卓上論であり、個々の意見であり、希望であり、理想であって、実際に、われわれがここで話して、そんなことが解決できるのかというと、これはもう絶対できない。現実問題として、ここで話したところで、絶対にそんなことはできない。もう、これが本音だと思います。

それじゃあ私たちは、どういった結論を出そうか。まあ、最終的には私たち一人ひとりが、どういったことをすればいいのかということで、ウソ偽りのない本音で言える、あすから自分らがほんとにできることは何なんだろうということを、みんなで出し合いました。ほんとは、ここに書ききれないぐらい出たんですけれども、まあ、出た順に書いたということで、簡単な小学校の道徳の授業みたいになるんですが、

- ・ありがとうの感謝の気持ちが言える。
- ・友人を大切にする。
- ・知識を身に付ける。これは、いろんな本が出てると思います。私も勉強不足で、どれぐらいの本が、誰がどのように書かれていたとか何か分かりませんし、どういったレベルの本が出てるのかも分かりませんけども、おそらくいろんな本が出てると思います。これ、読むことは誰でもできます。あす、帰りに皆さんのが本屋に寄って、立ち読みすることもできます。で、こういったものから知識をとりあえず身に付ける。どういった方向に自分は進めばいいのか、どういった考え方を持てばいいのか、こういった知識は、ほんとに誰でもすぐにできる問題です。
- ・口先だけではものは言わない。これは、よくいう、「困っている人がいたら、助けましょう」よくある言葉ですよね。でも、実際、先ほど、D班がやっていたように、行動に移すときに勇気がなくてできない。これ、現状の問題やと思います。これも、口先だけで言うんじゃないなくて、本当にやるんだと。これはできます。明日から、皆さんできるはずなんです。で、これを、本当にやっていこう。
- ・関心を持つ。
- ・家族、友人関係とのコミュニケーションをとる。これも、かなり問題で、活発な意見が

出たんですけども、家族の中でコミュニケーションがとれずに、家族の、親戚の中でいろんな問題があるのに、他人に福祉だとえらそうなことは言えない。ですから自分らの身辺の中から、まずいろんな話をして、親、兄弟姉妹、親戚、そういった中で、いろんな話し合いを持って、ある程度の知識を身に付け、考え方を身に付けたうえで、福祉というものを考えるべきじゃないかと。そのへんのところが、この、かなり議論になりました。

こちらのほうで、最終的にロータリーと共同できることは、ということで、D班の方と多少くっつくとこもあるんですが、情報の提供です。圧倒的に、ロータリーの方々は、いろんな情報を持ってらっしゃると思いますので、そういった情報を、いろんな場でわれわれに提供していただければ、それに対する意見なり、応えることができると思います。それから、人脈の活用。皆さん方、ほんとにすばらしい人脈をお持ちだと思います。到底これは私たちにはどうしようもないレベルですので、こういった人脈を通じて、していっていただきたいと。あと経済的援助ですね。詳しいことは分かりません。分かりませんので、どうしても、経済的、人的援助というのは、もう、ある程度やむを得ないなと思います。

ということは、ここに戻るんですが、ロータリーの方を通じて、こういうところに、今私たちが話したり、こういう場で言った意見を吸い上げていただきて、その中でこれは使える、これはたんなる意見だと、いうふうな話をまとめていただきて、吸い上げたものを、どこかに提供していただきたい。で、提供していただいたものの中から、ある程度、今後につながるような結果を出してもらって、また私たちのほうに返していただきたいなというのが、まあ、希望というか、お願ひというか、あります。

最後ですね。ほんとにロータリーの方々にお願いなんですけども、この3日間、ほんとに私たち真剣にね、この福祉であるとか、ボランティアであるとかについて話し合いました。多分、これだけ真剣に話したら、私なんかこれだけ仕事したら、むちゃくちゃ成績上がるんじゃないかと思うぐらいね、マジでやったんですけども。こういうセミナー、ほんとに共鳴しましたんでね、今後、絶対に続けていってほしいというのが、1点。

それから、今日、これから、あと2つ班がありますし、いろんな意見を、皆さん方、今、聞かれていると思うんですけども、発表した後、意見を吸収して、今後のロータリー活動に、ぜひ役立てていただきたいと。よく、私たちで、社会生活の中であるんですけども、企画の段階、あるいは、結論が出る直前までは、かなり綿密な計画を練ります。ところが、結果が出た後、それが成功しても、失敗しても、その結論に対して、反省とか、次回これをこうしたほうがいいというのは、意外と持たれてないんですよね。当然、ある部分もあるんですが。その反省を踏まえたうえ、あるいは、意見を吸収したうえで、それが今後の活動に生かされていないという部分が多くありますので、この場が「ああ、発表、よかったです」で終わるんじゃないくて、ぜひ吸収していただきて、今後の活動に生かしていただけたらなと思います。

最終的に、私たちの班が決めたことは、先ほどのね、「あすからできること」というこ

とを踏まえたうえで、「今、できることを、結果を求めず行動に移す」これがすべてなんじゃないかなということです。今回、このセミナーに参加して、非常にテンション、高くなっていると思いますから、この感激、感動、知識等を、これから皆さん職場であるとか、学校であるとか、地域に戻られたときに、生かせたらいいなと思います。まあ、私たちの最終の結論は、結局、個人的に、自らが、今日話されたことを、自分らの生活に戻っていかに生かせるか、というところじゃないかなということです。(拍手)

**司会** ありがとうございました。だいたい、ご説明の趣旨は分かったと思いますので、もし分からぬことがあつたら、ご質問ください。ないようですから、次は、C班、お願ひします。

## 「福祉という言葉がなくなる社会に」 C班の意見



**C班** 僕たちもほとんど、似たような意見というのが出ました。僕たちC班でも、3組に分かれて、いろいろ考えたんですけど、ほとんど3班とも同じような意見が出まして僕たちの意見をまとめて、こういうふうな形で、ポイントだけ書きました。あと、このポイント以外のことについて、いろいろ、皆さんのはうに、とりあえず、まとめっていうんじゃないけど、考えたことを伝えたいと思います。

それで、心構えというか、福祉文化の形成を目指してというすごい抽象的なことについてなんで、分かりにくかったんですけど、その心構えということで、福祉文化の意識レベ

ルの構造ということでまとめました。現状では、欧米社会とかでは、福祉とかボランティアでありますので、それが、一応、社会的に評価されているんです。ですが、日本では、やっぱり、現状をみんな見てもらっても、そういう福祉関係が、あんまり評価されていないと思うんですよ。

福祉を職業としてやっている人は別なんですけど、一般に普通の職業についている人たちが、自分たちが何ができるかと考えたとき、今、福祉の意識が低いっていうのは、要因として、自分たちが今までボランティア活動とかそういうことをしてきたことがあまりないということで、その精神が土台として、あまりちゃんと成り立っていないということがあると思います。

だから、そういうことで人の目が気になるとか、職場では、「ボランティアやりたいんですけど」って言っても、なかなか敬遠されてしまうとかがあるんで、その意識改革をしていくには、後でいろいろ説明しますけども、今後、子どもたちとかに、その教育や家庭、地域での福祉教育っていうのを充実させていって、どんなことができるのかという、その下積みを、どんどんどんどん、ちゃんとしていったら、福祉文化というのが当たり前にできる、なにも人目を気にせずに、みんなが一緒になってすることができるという、社会ができていくんじゃないかなと考えました。

そうですね。できたら、僕たちのピュアな意見からしたら、お医者さんとか、教育者の方とか、福祉に携わる方は、できれば、聖職的な立場で、そういう利益を追及するのじゃなく、意識レベルを高く持って、自分の仕事にプライドと自信というのを持って、やってもらえたならと思うんです。「でもしか先生」って、よく言われますけど、そういう「でもしか先生」と呼ばれないような教育者づくりとか、お医者さんでもそうですけど、おじいさん、おばあさんばっかりのお医者さん、病院にならないような、お薬ばっかり出すような病院にならないような、そういう、福祉を意識したことを目指してほしいなと思います。

それでは、実践の方でさまざまな人との交流ということなんんですけど、とりあえず、自分たちC班のグループでは、ちょっと一つ出たんですけど、街中とか歩いていたりすると、ハンディキャップを背負った方なんか、結構よく見かけると思うんです。そういう方を見かけたときに、白い目っていうか、色目をつけたような目で見てたりしたことがあると思うんですよ。今現在は、ほぼなくなっていると思うんですけど、実際、今から、10年、20年、30年ぐらい前、それこそ、外国人の方なんかが、日本に到来して来た頃なんかには、アメリカ人を代表にしましたら、とりあえず、白人とか黒人とかって人種差別がある中で「あ、外人が、また来てる」とか、変な目で見てたりしてたと思うんです。

なんか、そういう外人の変な目とかいうのは、今、最近、結構、減ってるというか、もう、ないんじゃないかなと思うんですけど。ただ、自分、福祉関係で、就職してまして、障害者とか、そういう方に対する、視線を感じてしまう毎日を、過ごしています。

それも、一応、こちらが、施設とかっていう、そういった建物内で、隔離っていいたらすごく言葉、悪いんですけど、外へ出て行こうとしないっていう、なんか、閉じこもりになってるのもダメなんですけど、もうちょっと地域の交流を。やっぱりボランティアっていうのも、そこに来て、結構、「今回、お祭りをします」とか、「どっか旅行に行きますんで、ボランティアの方、どうぞ」みたいな感じで言うんですけど、それも、ここは、してあげてるというか、して成績が残っているみたいな感じがあって、そのためにしてるっていうことで、ほんとに自分の心から、ボランティア、お手伝いをしてるんでないのではないかというのが、ちょっときました。

実践として、もうちょっと、みんなの目をすっかり変えて、ほんとに交差点なんかで困っている人がいれば、先ほども言いましたけど、周りの目を気にせず、そっと手を引いてあげるとか、白い杖を突いていれば、皆さんのが手を伸ばしてあげるとか、車イスの人がいれば、後ろから押してあげるとか、やさしい、ちょっとしたことなんんですけど、恥ずかしくないように、もうちょっと皆さんのはうから入っていってあげれば、施設のはうとしたら、喜ぶというか、最初は「何のことか分からんなあ」と思うと思うんですけど、施設側としたら「ありがたいな」って「ほんとにやってくれてるんだな、ありがたいな」って思うと思いますんで、皆さん、もうちょっとね、いろんな方の援助等のはうで、触れていけばいいと思います。

——今日のお話にもあったように、どうしても色眼鏡で、身体障害者の方を見てるようです。ですから、身体障害者の方側からの意見っていうのは、普通に接してほしいと、そう思ってるらしいんですね。

僕はそういう身体障害者じゃないので分からないんですけど、たくさんの方のお話を聞くと、そういうふうな話しがいつも出ますので。ですから、たくさんの身体障害者の方との交流を、皆さんのが持てば、それが当たり前になるんじゃないのかと。今、外人が歩いてても、ぜんぜん珍しくないように、身体障害者の方のトイレとか、駐車場とか、そういうふうなのが、当たり前のように整備されてきたときには、もう、それが当たり前なんじゃないかと。このことをこういうさまざまの人との交流という形で書きました。それでは次は、子どもの頃から教育ということでお願いします。

子どもの頃からの福祉教育の充実ということが出たのは、どこの班でも出たことなんですが、当たり前として、お年寄りの方が来られて席を譲るとか、困っている人を見て、助けてあげるとか、それが、やっぱり自分でちょっとするのに、周りの目を気にするところがあるんで、そういう目を気にするっていう状況をなくしたいっていうか、気にしなくても、それが当たり前になる社会が理想じゃないかなということです。

そのためには、「鉄は熱いうちに鍛て」というように、小さいうちから、純粋な頭の柔らかい子供のうちから、いろんなことを体験していったら、その子たちが、後々大きくなつてから、そういう社会ができるんじゃないかなということで。たまたま、私たちの班は、学

校の先生とか、あと、ボイスカウトで活動されている方とか、あと、行政側の方とかが、いらっしゃったんで、学校関係のほうに話がいってしまったんですけれども。

なんで学校かということに、こだわったのは、今、日本で、過疎が進んでる田舎とかもあるんですけども、都会では、核家族が増えてきて、あと、地域社会のつながりで、隣の人が何してるか分からないような社会になってきてるんですけども、その社会を、嘆くんじゃなくって「昔はよかった。昔は助け合いしてた」とか、「しつけを、おじいちゃんとかおばあちゃんとかから、してもらってた」とか、昔を懐かしむんじゃなくって、今、この状態でやってるときに、何ができるかというふうに考えたら、小学校とか、中学校の義務教育のうちに。そうすれば、みんなが平等に、いろんな福祉関係の教育を受ける機会を与えられるっていうか、持てるんじゃないかということで、学校教育というふうに、結論、なってしました。

それはべつに、学校の先生に押しつけてるとかそういう意味じゃなくて、そういう場がほしいなというか、義務教育だったら、ほとんどみんなが行きますよね、だから、全員がそこで、さまざまな人との交流、例えば、身体障害者の方の施設に行って、なんか手伝いするとか、おじいさんとおばあさんの世話をするとか、そういうのがあったら、全員がそういう体験ができるんじゃないかと思って、学校というふうになりました。

ですから、子どもの頃から習慣が、普通に当たり前のことだから、当たり前のことをして恥ずかしいと思うような習慣にするのではなくて、当たり前のことだから、当たり前にする、それを習慣化、子どものうちからさせることができれば、長い目で、ほとんど、みな結論、一緒なんです。僕たちの結論も、ほとんど一緒に、長い目で見れば、そのうち習慣化されるのではないかと。ボランティアも、後で結論で言うんですけど、長い目で見れば習慣化できるのではないかと思ってます。

ちょっと、話、飛ぶんですが。キャンプしてまして、どっかの班でも、法に頼らないでしたっけね、そういうのが出たんですけども。今いろんな施設ができますよね。あの施設とかも、形だけで、そういう障害者の方がトイレに行けるようにスロープを作ったりとか、手すりを作ったりとか、今、できてる公民館ですとか、図書館とか、いろいろ作られてると思うんですけども、実際、私がキャンプをしてる施設では、あるんですが、それを使うのは、どうも難しいというのが多くて、作ってるのに役に立たないというか、本当に必要としている人の役には立ってないものが多いっていうのがあって、きょう片岡先生が、障害の持った子どもも、その子だけのための体育の授業がしたかったと言われたんですけど、それと同じで、障害を持った子も、普通の子も、同じ立場で、同じレベルでっていうか、みんな一緒に同じことを分かち合える、例えば、キャンプで、どちらも楽しめるメニューとか、考えるうえで、施設の形だけっていうのが、すごく気になったので、そういうのも含めて、子どもの頃からのそういう下地づくりが一番大事だと思って、子どもの頃からというふうに、「小さいうちから」というのを強調したいと思います。

それでは最後に。僕たちが、心構えとしてこれから僕たちが、一日一日目指していくなければならない大きな目標に向かって、やはり、目標がなければ努力する意味がないと言うたら、語弊があるか分かりませんけど、やはり、意識づけとして、福祉という言葉がなくなる社会を作りたいなと思ってます。

なぜ、福祉という言葉がなくなる社会かと言いますと、福祉、福祉、ボランティア、ボランティアってそういうふうな言葉があること自体おかしいと思うんですね。さっき言ったみたいに、当たり前のことだと思うんですよ。与える者が与える範囲で与える。ですから、老人の方がトイレに行けなかったら、手伝ってあげるとか、先ほどのD班みたいに、老人の方が電車で立ってらしたら、席を譲ってあげるって当たり前のことですよ。ですから、その当たり前っていう言葉が当たり前になるようにという形で、福祉という言葉がなくなる社会っていう形でまとめさせてもらいました。

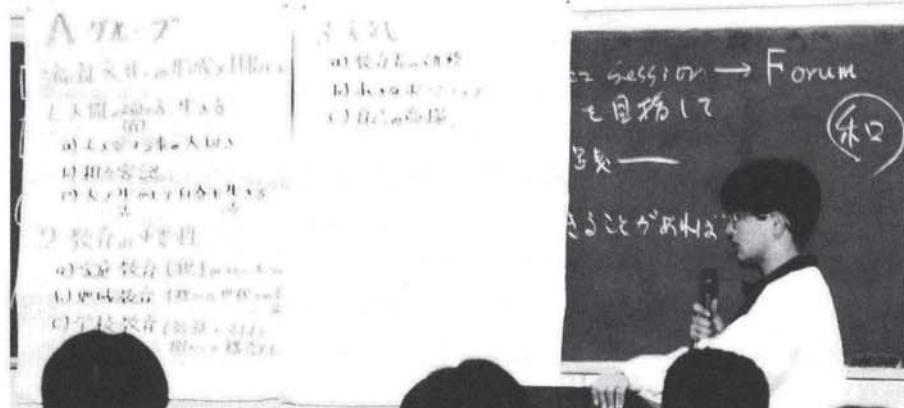
ですから、タバコの例なんですけど、10年、20年前っていうのは、タバコはもう、アメリカとかでも、そんなんんですけど、どこででもタバコを吸ってたと思うんですね。ですが、それが、タバコを嫌いな方たちの運動とかによって、マナーを守ってほしいとかという運動によって、禁煙場所、喫煙場所っていうふうな形で動いてきたと思うんですね。ですから、今、現在でも、先ほど、僕たちがキャンプに入ったときとかは、すごいタバコのことを言われましたよね。タバコ吸う方は、どうのこうのマナーを守ってほしいということを。ですから、そういうふうな長い年月をかけて、今のタバコの例にしても、ここまで来ました。ですから、福祉とかボランティアっていうことも、今、現在、皆さんこうやって集まって真剣に考えられた皆さん一人ひとりが真剣に、自分一人ひとりの立場から、自信とプライドを持って、コツコツとやっていくことによって、周りが変わってくるんじゃないかと思います。

ですから、ちょっと、話、飛ぶかもわかりませんけど。シンガポールですか、シンガポールなんかは、法などで規制して、タバコ捨てたら罰金とかって決めてますけど、そういうふうに決めてしまったらルールになってしまいますんで、当たり前じゃなくなってくると思うんですね。ですから、そういう決まりごとではなくて、みんなが当然のことになるような習慣化っていう意味で、僕たちはまとめました。以上です。(拍手)

**司会** ありがとうございました。だいたい趣旨について疑問はないとは思いますが、もし、この点ちょっと説明を補足してほしいというご意見ございましたら、おっしゃってください。今、発表になったことで、意味が分かりにくいとかそういうことがあったら…。ございませんね。それじゃ次、A班、お願いいいたします。

# 第19回 RYLA ビー

1997.3.27~3.30 於. 神戸YMCA余島野外  
主催: R.I. 第2670地区・R.I. 第2680地区・RYLA



## 「人を愛することの大切さ」 A班の意見

A班 ちょっとね、失敗したと思ったのは、最初にやるべきやと思ったんですよ。（笑い）こんな立派な発表、聞いてから何言えっちゅう感じなんですよね。どこの班でも同じことだとは思うんですけども、2時間半、もっとですか、2時からずっと話してきたようなことを、長い間たくさんの人間がしゃべったことを、全部、こんな短い時間で発表せい、と言うのはむちゃなことで、どうしても、報告者としての僕の私見が入ってしまうことは否めないということで、そこらへんのご了承はよろしくお願ひいたします。

われわれは、ずっとこういうことを、各班の発表をまとめた結果、こういう形になったんですけれども、人を愛することの大切さ、というところから、話をていきたいと思います。

これはどういうことかと言いますと、それぞれに存在価値がある。それぞれの人間に存在価値があるということです。当たり前と言えば当たり前のことなんですけれども、どうしても忘れてしまうことがある。そういうことですよね。それぞれに存在価値がある。そういう人たちを、人を愛すること、つまり自分自身を、家族を、もっと言えば、心を開くことそのものの大切さっていうのが、ここの「人を愛することの大切さ」という中で、われわれが述べたかったことです。

おそらく、ほとんどの人間ていうのは、本来優しい人間だと思うんですよね。もう根っ

からこいつ悪人やというのがいたら、僕は、天然記念物指定ぐらいにしたいんですけど、そんな権限はないんで、できないんですがね。おそらく、でも、われわれは、本来持つてそういう優しさっていうのを認識できてないんじゃないかということなんですよ。

こういう言い方すると、ちょっと語弊があるかもしれないんですけども、きょう片岡先生にお会いして、明るさとか人間的なすばらしさっていうのは、おそらく皆さん、感じられたと思うんですけども、あれは、小さい頃からそういう壁、壁ではないんですけども、人の優しさを気づかされることが多かったことによって、自分に気づいた優しさだと思うんです。そこから生まれてきた優しさではないかなと、A班は思うわけです。

どうしても、逆に言えば、われわれというか、普通の生活をしているかぎりでは、その本来持つて優しさっていうのが認識できないこと、あるいは気づきにくい、さらに言えば、気づいていても出しにくい。逆に、ちょっとクサイ言い方になりますけど、愛を持ってふれ合うことで、その愛が引き出されるっていうこと。さっきの片岡先生、僕がさっき引いた片岡先生の例のように、その、お互いに愛を持ってふれ合うことで、なんて言うんですかね、そういうことです。

まあ、bの方に入るわけなんですけど、相互容認というのは、この、まあ、さっきaの最後にも言いましたように、愛を持ってふれ合う人々というところもあるんですけども、それ以前に、われわれは、さっきから何回か出でてはいるんですけど、われわれは、差別をほんとなくすことができるのか。という問題があると思うんです。実際に、自分と違う人としてあるんじゃないかな。例えば、分かりやすい例で言いますと、小学生のグループがバアッとありますて、その中に一人黒人の子がいたら、おそらく、日本人の中でね、黒人の子が一人いたら、おそらく、その日本人のうちの一人は「何で黒いん？」っていう質問が出ると思うんです。それは当たり前だと思うんです。

それ、何も言わずに、接せられたら、それはそれで素晴らしいことではあるんですけども、おそらく、そこで、「何で黒いんやろ？」っていう疑問は、その子らの中に生まれるものだと思うんです。これはまあ、簡単な例ではあるんですけども、何より、そういう変な目をなくそうというんではなくて、逆に、自分が差別していることを認める。そこから始めることのほうが、僕は、大切じゃないかなと思います。

おそらく、黒人の例って言いましたけれども、そういう例じゃなくても、実際に「えっ、この人！」って思ってしまうときっていうのは、あると思います。

逆に、僕は福祉の現場に携わってるわけではないんですけども、福祉の現場に携わっていればいるほど、そういう自分のイヤな部分、自分がイヤやなと思ってしまう自分のイヤさ、ちょっと表現が二重になって難しいんですけども、自分が嫌悪感を抱いてしまう自分っていうのに対する嫌悪感ですね。自分が差別していることに対する嫌悪感ですよ。そういう、それを認めること。自分が「自分は、今、差別をしているんだ」ということを認めないと、何も始めることはできないし、おそらく、それを認めることが、認める、あるいは、

認められないかもしれません。そこらへんに葛藤することが、自分の成長っていうのを引き出すことになり、ひいては福祉っていうものに、つながっていくと、僕は思います。

Cの方に入るわけなんすけれども。人を生かして自分も生きる。さっき言いましたように、他人を見て、そういうふうに差別っていうのを感じて、それを自ら認めるっていう、それも、そのうちの一つですし「情けは人のためならず」ですね。人を助けることによって、自分も助けてもらう。自分の成長、あっ、これが本来の意味ですから。「情けは人のためならず」っていう、情けは人のためにならないから、やっちゃダメよじゃないですかね。人を助けることによって、自分も助けてもらう。で、自分の成長を引き出す、そういうことです。

もっと言えば、自分もボランティアされている。自分も気づかぬうちにボランティアされている。実際に、今回のこのRYLAのセミナーを通して、たくさんそういうことはあったと思います。実際にここに、そのそれぞれに、皆さん感謝、僕もそれぞれに感謝はしている気持ちではいますけれども、おそらく、感謝しきれてない部分、僕の見えないところで、有形無形のいろいろのボランティアというのがあったと思うんです。

でも、それに気づいてない。おそらく、それに、すべてに気づくのは無理です。でも、ボランティアされているんだということを知ることで、こう、人を生かして自分も生きるっていうことが生かしていけるんじゃないかなと思うわけです。

はいっ。じゃあ、2番のほうに入っていきたいと思います。教育の重要性という話です。これは、他の班の方々もたくさん言ってらっしゃるんで、あんまり、うちの班で長い時間とってしゃべるのもなあ、とか思うんですけども。まず、一番最初に置かれてる家庭教育、親とのコミュニケーションという、かっこ書きで書いてありますけれども、やっぱり、ここは、教育の原点になると思うんですよね。その、家庭内での教育というのは。

その、「三つ子の魂百まで」と言いますけれども、幼少間の体験は、その子の人生を決めるものになります。やっぱり愛情を受けて育てれば、愛情豊かな子供になるっていうのは、おそらく正しいことだと思うんです。ほんとの意味での愛情を受けて育った子で、すごいことになったというのは、想像し難いものだと思います。かといって「あの親は、愛情が足りへんかったんや」というのは、間違いだと思いますけれども。でも、愛情を授け、愛情を与えるながら育てるっていうのは、ほんとにそれが、実際の人間のあるべき姿だと思いますし、教育の原点であると思います。

で、次の地域教育の方に入るわけなんすけれども。さまざまな世代間の交流と書いてありますが、まあ、これはC班の方が言われた、様々な人との交流っていうのと、まあ、ほぼ同じ話ですよね。実際に、世の中にはいろんな人がいるわけですよ。で、そのいろんな人たちと、いろんな人たちが、いろんな人たちどうしで、あるいは、いろいろな人たちがいろんな形で、いろいろと知り合うこと、交流することで、より上のものが目指していくんではないかと。

地域教育ということも絡めていえば、地域としての連帯感というのも、その中から見出していくことができるのではないかと思います。例えば、子供会の活性なんかそうですね。皆さん子供会に昔は属されたことがあるとは思うんですけども、ああいう縦のつながりなり、例えば、お祭りとか、そういう形での地域としての、もっと言えば、中央一律ではできない、もっと密なコミュニケーションというのが、ここでは図られていくと思います。

で、Cの方に入ります。学校教育、福祉に対する関心と機会を持つという話なんですかね。これも、他のところの班がたくさん言われているんで、あんまり言うこともないんです。今の社会っていうのは、どうしても知育偏重、知識偏重、偏差値教育、いろいろ言われますけれども、どうしても、そっちのほうに偏った教育がなされているっていうのは、ウソではないと思います。例えば、親の教育ひとつ取っても、やっぱり、自分の子は進学校へ行かせたいと思ってる人は多いんちがいますか、実際のところ。

まあ、こういう冷たい言い方しますけど、おそらく、僕に子どもができます、社会がそういうふうな方向であり続ければ、自分の子どもに「じゃあ、勉強しろって」っていう教育の仕方になってしまうんじゃないかなっていう恐れが自分自身の中にあるから、こういう言い方をするわけなんです。

じゃあ、そうすればいいかっていう話になります。やっぱり、道徳とか美術とか、そういったところの重要性を再認識すること、それから、身障者の方や、人権問題、国際問題、環境問題、こういったさまざまな問題に対する関心を持たせる場を作り出すこと。実際に今でも、そういう、ホームのほうに、子どもたちが行ったりというのがあっても、どうしても社会科の見学と一緒にですね。見学者という立場では、それで終わってしまって、それ以上の、実際に体験したものとか、そういう形では子どもたちの中に残っているのかなというのは、どうしても、疑問になってきます。

それから対話の授業、自分で判断させることの必要性。何よりも、そういう生徒たち一人ひとりの意識の改革、変革というところが、学校のほうでできれば。まとめて言えば、全人教育という形で教育を行うことができれば、次の社会、次の世代っていうのは、だんだんにいい方向に向かっていくんではないかと思うわけです。

で、3番の実践のほうに話は移ります。教育者の研修。さっき教育の問題について言いましたけど、その、教育の現場において、それを教えることのできる人間の育成。それから、何よりこの教育者っていうのは、親も入りますよね。実際の両親というのも、一番身近な、かつ、人格にもっとも影響を与える教育者だと思います。親自身、それから、こういう各サークル等の指導者、例えば、話の中に出てきましたけれども、カブスカウトやボーイスカウトといったスカウト活動の指導者や、もっと僕の個人的なことに引き付けていえば、柔道のところの先生とかね。そういうところの指導者の教育。次に何ができるかっていう、ただ柔道の先生が柔道を教えるだけじゃない、といった部分の指導のための研修

というのは必要になってくると思います。

で、実際に何ができるか。じゃあ、われわれはどうすればいいのかっていうことになって、小さなボランティアっていう話になるんです。皆さん、他の班の方々言ってらっしゃいますけれども、身近にできることから始める。率先垂範という形で自然にゴミを拾うなり、まあ、例えば、外の靴が乱れてたら直すなり、おそらく、身近にできることっていうのは、今までも自然に、皆さんやってらっしゃると思うんです、そのボランティアという意識なく。それが、もっともっと当たり前に、もっと手広く。例えば、「今までゴミは拾ってたけど、靴は直してなかったよ」っていうんだったら、靴を直すようにしましょう、それが自然にできるようにしましょう。そういう身近にできることから始めていく、始めていくのがすごく重要なことになってくると思います。

まあ、諺でいえば「義を見てせざるは勇なきなり」なんていうのがありますけれども。実際に、そういうやらないといけないを見て、しないというのは、おそらく勇気がない。周りの目を気にしている自分というのがいるからとだと思うんです。それに対して、身近にできることからやっていこう、これは自然なことなんだ。勇気のあるなじじゃないです、おそらく。もう、これが当たり前なんだ。それこそ、食べる前に手を洗うのと同じぐらいの常識度で、自然にゴミを拾う、靴を並べる、そういったことができるようになれば、ほんとにわれわれが自分自身の立場でできることっていうことになっていくんじゃないでしょうか。

そういう小さなことから始まって、でも、できないことはたくさんあります。というのは、こういう大きな組織の力を借りないとできないことがおそらく、いくつか問題点としてあがってくると思います。その中で、こうしたロータリーの方々なんかにお願いしたい。具体的に何がっていわれると、われわれはそこまで話す時間がなくてまとめる時間がなくて、話し合いできていませんけれども。

例えば今回の三国のボランティアの話にしても、三国重油ボランティアセンターっていう組織がなければ、行こうという意識があっても行けない人々というのを生み出してたと思います。たくさんの人々がそういう形で、三国のほうに行つてもやることがない、あるいは、行ったのはいいけど、溺れたとか、そういう話になってたと思います。でも、あのボランティア組織、三国重油ボランティア本部っていう組織があったから、各人が自分ができることから始めることができた。こういった大きな組織のあり方というは、学んでいくべきだと思います。

で、最後のところになるんですけども、自己の高揚という話です。きのう、きょうと、おそらくあすも言わされることだとは思うんですけども、プラス志向で生きていくこと。それから、個人のレベルでも、まあ、全体的なレベルでも、ボランティアへの理解を深めていくことっていうのが、やっぱり、中心になっていくと思います。長々と一人で話をしまったわけですけれども、おそらくどこの班でも同じだとは思うんです。

一番最初に話すときに言いましたように、きのう、きょう、まあ、それからあすも含めて、ずっと、おそらく、ここで発表された以上のものを、皆さんは得られていると思います。僕自身は、もちろん得ているつもりでいます。だから、この自分の中で変わってくるもの、自分の中で変化していったもの、自分の中で何が変わったか。その変わったものって何なのか。何を得た、このセミナーを通じて、自分は何を得ることができたのか。それを大切に、これからやっていくことが、必要となるというより、それが一番根本になっていくのではないかなと思います。というわけで、ご静聴ありがとうございました。(拍手)

## ディスカッション

**司会** どうも、ありがとうございました。たいへん素晴らしいご意見であります。これからディスカッションを始めたいと思います。先ほど、各班から素晴らしいご意見の発表がございました。ほとんど議論する余地もないと思うんですが、この、発表なさった意見よりも、まだ、こんな意見があるよっていうところが残ってそうな気もしますので、若干のディスカッションを続けていきたいと思います。まず、福祉文化の概念定義であります。これは実は、福祉文化とは何かというところから、ディスカッションしていくと、いくら時間があっても足りません。これはあすの午前中、今井先生がですね、総括をなさいます。そのところで、詳しくご説明があると思いますので、これについてのディスカッションはやめときます。そして、皆さん方が、一応、福祉文化とはこういうもんだというふうにお考えになって、そして、それを基にして、いろんな意見を出しておられるわけですから、それに基づいて議論を進めていきたいと思うんです。

で、一つ基本前提になるのは、現在の日本国社会っていうのは、まだ福祉社会になっておりません。たくさんいろんな施設ができておりますけれども、これは、施設ができるだけあります。ほんとの福祉施設っていうのは、きょうちょっと申し上げましたが、そこに携わる人、そしてそこの中に入ってる人、そしてそのぐるりの人、国民全体が、福祉っていうことについて、本当に福祉の心を持たなければ福祉社会といえないわけです。これ、基本前提でありますね。それを基にして、この話を進めていきたいと思うんです。

これは、どこでしたかな。A班の発表がございましたが。人を生かして自分も生きるっていうところで、この「情けは人のためならず」って、自分もボランティアをされてることに気がついていない。で、こういうご意見があったんですね。これについて何か、皆さん方で、自分はこう考えるんだけれどっていうお考え、あったら、発表してください。何かございませんか。何でも結構です。ございません? 一貫田君、どう思いますか? 「人を生かして自分も生きる」っていうご意見が出ております。これについて、先ほどご説明がありました。自分も実はボランティアされてるんだけども、そのことについて

気が付いていない。それが現状じゃないかというご意見だったなんですが、そのへんについては何かご意見ございますか。いや、なけりゃ結構あります。

あの、実は、この意見を聞いておって、私は思い出したなんですが。森繁久彌さんがロータリーの地区大会に来て、昔、講演したことがあります。人間ていうのはね、生まれてから15歳になるまでに、だいたい200万人の人の世話になってる。それ、どういうことかっていうと、まず、生まれおちて、お父さん、お母さんの世話になります。きょうだい、学校の先生、それから、着ておる物を、作った人、お米を食べます、お百姓さん。

そういうふうにして、ずっと考えていたらですね、15歳までにだいたい200万人の人の世話になって、そこまで成長してきてるんだ。で、これは、実は、15歳になった少年はですね、その事実にまったく気がついておりません。私だって15歳のときに、そんなこと気がついたこともありません。なぜ、そんなことが言われだしたかというと、15歳で自殺をする人が多かったんです。

自分の命を自分で処理するのは、それは勝手だろうという理屈で自殺するのは、とんでもない話だと、自分の命を自分で処分するのであつたら、今まで世話になった人に、全部礼を言ってから死ね、そういう意味を込めてね、そういう喩え話をなさいました。

ですから、この、自分自身がボランティアされていることに気がついてないというのは、これは、実は、福祉の文化を考えるときに、たいへん重要なキーポイントだと思うんであります。みんなが、もうちょっと、つき進めていきますとね、みんなが、やはり、この障害を持つ人だ。今日、片岡先生、おっしゃってましたが。

そういう謙虚な気持ちっていうのがなければ、自分の能力とか知識で、自分が今あるんだと、そういう思い上がった考え方を持っておればですね、なかなか福祉の文化ってのは出てこない。そういう思い上がりがあると、どうしても、他人を下に見たり、見下げたり、自分だけ良ければいいんだという考え方で走りがちであります。何かございませんか。いい意見だったら、「いい意見だ」っていいんであります。「自分はちょっと違うんだ」という考え方があったら、おっしゃってください。みんなで勉強になるわけですから。

M君がよくて、K君は それじゃあ、論点を変えます。B班で、先ほどね、みんなが住間違いと言ひ切れないみやすい社会にする。片岡先生のK君のことを取り上げました。そして、ボランティアっていうのは、実は、営利、見返りを求める世界だ、社会奉仕だ。これは実は、M君のことじゃないか、いうふうな分析をなさった。これ、おもしろいなと思ったんですが。これについて、何かご意見ございますか。K君の場合は、みんなが住みやすい社会にする。福祉イコールみんなが住みやすい世界。これは、実は、K君のことじゃないか。それからボランティアっていうのが、実は、M君のことじゃないか。というふうに分析をなさった。これはおもしろいなと思った。

皆さん、これについて、ちょっと違うぞという考え方をお持ちになる方ありますか。K君っていうのは、一生懸命片岡さんをおんぶして、上へあがって、そして、校長さんから

表彰された後で、今度はちょっと態度が変わって、3分ぐらい階段の下で待ちだした人ですね。できるだけ、校長先生とか他の先生に会うために3分遅らして、そのうちに、片岡さんが、もう学校行くのイヤだということで、それに気づいてM君が、今度は取って代わって、教室まで運んだ。M君のほうがボランティアだ。で、このK君の場合は福祉だ、というふうにおっしゃったんです。これについて、ちょっと違うぞというふうなご意見、あつたら、おっしゃってください。ありませんか。どう思う？ あんた。何でもいいや。おっしゃってください。

**山中** 私は、これ、かなり理想論だと思うんです。

**司会** 理想論、ふん、なるほど、なるほど。

**山中** そりゃ、こういうことは、できたらいいと思うんですけど。現実、不可能だと思います。というのは、それだけ時間を、かなり費やすわけですし、それなりの時間を損失する分だけ、例えば、自分の生活に圧迫を及ぼしたりするわけじゃないですか。これは、例えばね、会社とか、あるいは、そういうところで、ある程度認めてあげないかぎり、そういうことは現実問題、不可能ではないかと思います。

**司会** それ、あのM君のほうも、理想論だっていうことですか。

**山中** M君の場合は、結構、立派な。

**司会** 立派なほうだよね。K君の場合？ 毎朝、片岡さんを迎えて、教室まで運んで行って、そして、座らせとった。それが、校長先生の目について、表彰された。表彰された後で、今度は、階段の下で3分ぐらい待ってから上がりだした。それはなぜかというと、3分ぐらい遅らせると、職員室から先生方が教室へ来る、ちょうど会う時間を調整するために3分遅らしたんじゃないかなと片岡さんが思いました。それで、何か、自分が誉められる見返りを求めておるので、片岡さんがイヤだなあと思ひだしたということをおっしゃってた。だから、そのこと自体も、ちょっと理想論にすぎるっていうことですか。

**山中** 望ましいことは、K君じゃなくて、M君みたいな性格が望ましいんでしょうけども、それを否定てしまえば、成り立たないと思うんですよね。M君のほうが良くて、K君の行為を間違っていると否定してしまうことはイケないと思うんです。それは不可能なことだと思うんです。K君の行為はそれで立派で3分遅らせるのも無理はないと、片岡先生にはまことに申し訳ないのですが、K君の行為でもやむを得ないと思います。

第1回  
1997.3.27~3.30 於 神戸YMCA余島里  
主催: R.I.第2670地区・R.I.第2680地区・RYI



司会 やむを得ない。分かりました。今、こういう意見です。K君がね、表彰された後で、3分待ったと、それを責めるべきじゃないんだと、やむを得ないじゃないかな。そういう考え方方が一つ、今、出てきました。これに対して、自分は、もうちょっと、ニュアンスが違うだと。どうぞ、おっしゃってください。

川田 私も基本的に、なんか、ちょっと、中山さんの意見に賛成なんですけれども。現実的には、M君のように、見返りを求めずにできるってことも少ないですし、K君のように、誉められるってことを、ちょっと、目標にしていたとしても、そういうふうに、なんか、人助けになるようなことを、なかなかできないと思うんですよ。それで、たとえ、ちょっと見返りを求めてたとしても、そういうふうにして、何か行動に起こすっていうことのほうが重要なんじゃないかと思います。

司会 大事だと。分かりました。ですから、見返りを求めたって、とにかく、少なくとも、K君のような行動を起こさないと、福祉社会の実現には遠のくよってということですね。大事なことだと。分かりました。他にございますか。

朝倉 先ほどの意見を、片岡さんのお話を聞いていた中に、非常に疑問に思ったことは、まず、校長先生がその人を表彰したということに、僕、ちょっと、どういう表彰したのかなというのを、もう少し聞きたかったというのが事実なんですよ。で、小さな子供の表彰の仕方に、その子どもをそっちの方向へ向けていったという教育者のあり方っていうのに、少し僕は疑問を感じたんが事実なんですね。で、実際に、後で、廊下で待たずに迎えに、連れて行く。そのM君の考え方。理想なんですけども、K君もそんな悪気があって、そういうことをやったんではないと思う。ただ、そこに指導者の人との、そやから、教育の力というのは大きいんかも分からぬけども。そういうふうに仕向けていったとこに問題があったんではないかなと。そこを、逆に言えば、そこを理解できなかった片岡さんにも(笑い)問題があったんではないかなと。

——欠席裁判なってきたぜ。(笑い)

司会 ありがとうございました。今、ああいう意見です。確かに、その、なぜ表彰したのかっていうことも、実は、問題でもありますし、それから、表彰された人が、それに、

やっぱり、期待を持つというのは、人間としてやむを得ないことじゃないかというご意見なんですが。他にいかがですか。そういうこと、先ほどの女性の方のご意見は、やはり、そういうことも、やっぱり、3分待ったって、そういうことを咎めることをやっておったら、ますます福祉社会は遠のくぞ、というご意見もあったんですが。いかがですか、その点。ああ、どうぞ、どうぞ、カウンセラー、どうぞ。

**カウンセラー** B班がまとめてるときに、何も言わないで聞いてて、感じたことなんですけれども。K君とM君との例にたとえて言ったのは、なにも、こちらがいい、こちらが悪いっていうことではなくて、ボランティアと並行して、そういう褒美、それから、有償、今から福祉施設に勤めるメンバーがいて、その方から出た話なんです。その、福祉っていうのは、有償、ペイをされてとか、褒美をもらって、それでするっていう人も必要だっていうことから、ボランティアと、そういう福祉関係のほうのことは必要だってことであって、こちらが理想である、こちらがダメだっていうことで、その2つに分けたんじゃないっていうことを、ちょっと補足したいと思います。

**福祉とボランティア  
を分ける必要?**

**司会** ありがとうございました。はい。こういう意見が出てきましたのは、こういう状況だということを、今、ご説明いただいておりますが。他に意見ございますか。例えば、福祉とボランティアを分ける必要があるのかという意見もあって当然だと思うんですが。重なり合っている場合、福祉の中の一部門として、ボランティアがあるだろうし、そういう意見もあっていいと思うんだけど、そのへん、何かございますか。あなたは、どう思う。うなずいておって、(笑い) 何でもいいですよ、おっしゃって。思いつくままおっしゃって。

**B班** そのとおりだと思います。福祉の中にボランティアがあるんですけども、そこに、ほんとに福祉文化というものを、実際に現実のものにしていくには、やはり、ボランティアには限界があるというところに、僕たちB班としては、結論に至ったというのがあります。その意味でどうするかってことで、福祉を、福祉社会というものを実現するために、その中にも書かせていただいたんですけども、そういういろんな教育改革とかですね。他の、ボランティア以外で、何かできる方法と同時に、私たちが個々の中で、そういうボランティア意識っていうんですか、それを、もちろん、僕らから、下から、底上げしていくものですし、同時に上から、私たちを支えてく、そういう、僕の意見としては、ビジネスというのを挙げたんですけども。

ボランティアだけでは、福祉文化の形成には、ちょっと、苦しい、時間がかかる、現実として、なかなか、僕らが、そういう、高齢化社会を迎えるにあたり、そのスピードに、僕たちが追い着かないって言うかね、ボランティアだけでは、やってけないというような。

要するにね、先生の言われるよう、そういうボランティア、福祉の中にボランティアがある、それ、まったく、そのとおりだと思います。

**司会** ありがとうございました。こりゃボランティアというものの概念の広さですね。範囲をどのへんで捉えるかによって、いろいろ変わってくると思うんです。今のご意見は、ボランティアって、ある程度狭く理解なさってですね、例えば、ロシアの船が沈んだ、あれに出て行くとか、大震災のときのボランティアとか、そういう具体的な活動を眼中においてのボランティア。実は、ボランティアの概念というのは、もっと広い場合もあるんですね。と言いますのは、今の、例えば、地方自治体の仕事なんてのは、建築審査会の委員とか、公平委員とか、いろんな、その委員会の人、これ、まったく、ボランティアですね、その市政に参画しておる。そういう人たちが一齊に仕事を止めたら、地方自治体の仕事はマヒするんですね。

そういう意味では、やはり、ボランティア、あの人たちもボランティアなんであるしね、それから、ロータリークラブのロータリアンが、何らの報奨も求めずに、ひそかに、社会のためにやっておる、これもボランティアなんあります。ですから、福祉社会を実現するときに、ボランティアだけでは、ちょっと難しいという考え方は、確かに、それはあります。ボランティアっていう概念をどの範囲で捉えるかで決まってくると思うんですね。この点どうですか。他に、「自分は、ボランティアっていうのは、もっと別の意味で見てるんだ」っていうふうな考え方があったら、お出しください。ございませんか。

**神谷** B班の神谷といいます。私は、ちびっ子のキャンプとかを、ずっと手がけているんですけど。もちろん無償ですよね。ボランティアっていうのは、営利とか見返りを求めないって、今、言ってたんですけど、求めてます。その、求めてるもの何かっていうのは、自分が吸収できるもの、それは、自分より年上の人であったり、ちびっ子であったりするわけですけど。

その、出て行くことによって、自分が何かを絶対吸収して帰って来ると思ってるんで、出て行くんですよね。で、自分が楽しくないと、そういう何か興味を引くものがないと、そういうボランティアというか、お金であったり、物であったり、物欲をなくして、吸収することだけを求めて、行くことってできないと思うんですよ。自分が、ほんとに楽しいからやってるんであって、それは、私の中では、ボランティアっていう言葉に当てはまらないんですよ。それを、物とかお金とかで求めずに、私は、何か、ボランティアっていう

のは、自分が得るものがあって、出て行くものだと思います。

**司会** ありがとうございました。今、また、いい論点が出てまいりました。

じゃあ、今、ご発言、ありましたが、ボランティアってのは、もともと、無償の行為として出てきたんだけども、最近は、実は、有償のボランティアも出てきております。これについて、どのようにお考えになっておられますか。何かご意見があったら。あくまでも、ボランティアっていうのは無償に限るんではないかというご意見があるかも知れないし、有償でもいいんだ。有償でもいいんだったら、その根拠はこうだということをおっしゃっていただければ。どなたかいらっしゃいますか。はい、どうぞ、どうぞ。

**高芝** B班の高芝です。すごく個人的な意見になるんです。先ほど、福祉職場に就職するっていうのも私なんです。それで、前の補足説明もさせていただきたいんです。私が言ってた福祉っていうのは、仕事としての福祉で、それで、さきほどの話の中でK君は、結果的に先生から誉めてもらうという、給料の代わりのご褒美を貰ったじゃないですか。結局、それが貰いたいために、片岡さんの自己表現している、昇りたい気持ちを、拒否したというか、分かっているにもかかわらず無視して、自分の、ご褒美を貰いたいという気持ちを優先した。

ご褒美にしろ、給料でも、給与でも、そういうものを貰う、それが、仕事としての福祉と違うと思うんです。その福祉の基本には、やっぱり、ボランティアと福祉もおんなじ共通した、「人のために、幸せのために」というのがあるんです。ボランティアのもともとのものは、先ほどもおっしゃいましたとおりに、自ら志願して、自ら自発的に行うのがボランティアだと思うんです。それで、M君は、その気持ちを汲み取って、ほんとに上がりたいという気持ちを汲み取って、一人の人間対人間というコミュニケーションのほうを優先して、というか、人間対人間のかかわり合いを大切にして、そういう、自分から、「私がやる」って、行動に移したと思うんです。

だから、福祉のほうは、下からの要請とか、そういう要望からで、そういう声を、行政のお金のほうで仕事としてするもの。あまりいい言い方ではありませんが。私もそういう仕事に就くんんですけど、生きていくためにもお金は必要じゃないですか。そのために仕事として、そういうふうになってしまふところを、ちょっと汲み取っていただきたいんです。そのコミュニケーションの問題と、貰えるものの問題で。

有償ボランティアと無償ボランティアなんんですけど、私は、どちらでも、ボランティアっていうのは、志願してやるものですね。すごく意見はいろいろと分かれてきて、また、反論とか出てくると思うんですけど。私の個人的な意見としては、どちらでも、自分が志願してやるのはいいと思うんで、無償でも有償でも、私としてはいいと思うんです。新聞とかでも載っているんですけど、気がねして、やっぱり、お金払わないっていう人もい

るじゃないですか。だから、いろんな形があっていいと思うんです、ボランティアにも。私は無償のボランティアのほうを選んでみたいと思うんですけど。いろんなボランティアがあって、皆さんがしてくるようになったら、いつか、自分自身のボランティア観も築けると思うんです。

司会 ありがとうございました。今また、たいへんいい意見だと思うんですが、ボランティアが有償であってもいいっていう、この、お考え。そして、ご自身は福祉施設に、これから、お勤めになる。仕事として、自分の所得を得るために、福祉施設を選んでおる。で、そういう目から見て、有償のボランティアであってもかまわない。これはね。

ですから、その考え方を一步つき進めますとね、ボランティアの中で、例えば、労力を提供するボランティア、時間を、尊い時間を提供するボランティア、そして、反対給与、自分の収入を犠牲にするボランティア、いろんな面のボランティアが出てくる。そういう分析を前提にしてね、労力と時間を提供するボランティアがあってもいいじゃないか、反対給付を貰っても。例えば、交通費とかね。それぐらなものは貰ってもいいじゃないかというお考えだろうと思うんです、分析をしていきますと。これについて、何かご意見ございますか。

あの、今、福祉施設に就職しようと、仕事を求めておられる。のこと自体はね、ボランティアとは、私は、関係はないと思います。いわゆる聖職的な仕事におつきになるということであって。誰でも、この資本制経済社会でありますから、所得を得なければ生きていけない。その、どういう職業を選ぶかということは、憲法の保証する「職業選択の自由」の問題でありますから、それは、どういう職業のお就きになんでもよろしい。ですから、営利企業にお勤めになっても、福祉施設にお勤めになんでも、その勤め以外のところですね、ボランティアとして活動するときに、それが有償であるべきか、無償であるべきかという問題だろうと思います。何かございますか、ほかに。はい、どうぞ。

山崎 A班の山崎です。ボランティアっていうのは、例えば、「ゴミ、落ちてるじゃない」言われて、拾うじゃないですか。でも、誰も知らないところで拾っていたら、べつに、ボランティアと周りは思わないかもしれないじゃないですか。でも、その人の心の中で、ゴミを一つ拾うことによって、地球がきれいになったとか、そういう気持ちがあれば、そういう、普通なら無償じゃないですか。お金を貰わない、心の豊かさを求めるボランティアっていうのはあってもいいんじゃないでしょうか。

司会 ありがとうございます。今のご意見いかがですか。他にもあったら。

——すいません。プロの、例えば、ボランティアというか、福祉のプロなんかがね、必要

な時代が、やっぱり、来ているんじゃないかと。今、NHKで司会されてる丸山さんという方ですかね、手話のプロがおられますけど、の方、初めて、プロで、金を貰って手話をやるという人で、すごい反対あったらしいですね。でも、やっぱり、そういうプロの手話の方が必要な時代になってきてるので、有償の、福祉の有償、それがボランティアという言葉で表すかどうか別として、福祉のほうのプロに、どうしても、金を、有償で、そういう福祉の仕事をする人があったら、絶対必要ないかと思うんですけど。

**司会** 分かりました。ありがとうございます。そういう仕事も必要だと。だから、それをボランティアと言うべきかどうかは別にして、福祉社会になれば、そういう、今で言えばボランティア的な仕事が必ず必要だというご意見であります。

### なぜボランティア するんでしょう

なぜ、ボランティアするんでしょうかね。そのへんのところを。自分の労力を割く、自分の時間を割く、そして、自分の収入が入るのを犠牲にする。あるいは自分の金銭を寄付したりして、動いていく。そこの根本的な、先ほど誰か言ってましたね。楽しいからやるんだっていう意見がありました。これ、一つ大変問題だろうと思うんですが、そのへんの意見。例えばね、私が、なぜこれを聞くかと言いますと。人間てのは、自分が一番かわいいんです。で、先ほど森田君が、なんかそれに関連すること、ちょっと、おっしゃってた。その延長線上のことをおっしゃってたと思うんですが。自分が一番かわいいんです。本当は人のことなんか、したくないはずなんです。で、それが、人のためのことをやるっていうことは何かということなんです。

というのは、これは片岡さんでしたかね、人間てのは、独りで生きられないんだ。だから、独りで生きられないんであれば、自分だけ勝手な行動、自分だけのことしか考えない行動をしておったら、人々から見放されていくんだろう。だから、みんなと仲良くするために、自分は人のために何かをする。これが実はね、人間は本来はエゴイズムの塊みたいな、自分が一番かわいいんだけれども、人とうまくやっていくために、人のために何かボランティア活動をやってる。これは、エゴ、人間のエゴを前提にした、なぜ、ボランティアをするのかというときの、一つの考え方です。で、そうじゃなくって、人間は本来、やさしいんだ。先ほど、森田君、ちょっと、おっしゃってた。やさしいんだよ。だから、そこから当然、ボランティアが出てくるんだというという考え方も出てきていいと思います。このへんのところ、なぜ、人間はボランティアをするんだろうか。そのへんについて、意見があったら、お出しください。はい、どうぞ。

**里見** C班の里見です。僕の個人的な意見なんですけど、人間やっぱり、一生生きていく中で、何回感動するか、何回満足するかで、人生の充実度って言うんですか、それが決まってくるかなと思うんですよ。それと、やっぱり何回人から「ありがとう」って言われ



C  
班

思うんですけど。

るか。自己満足かも分からないんですけど。そういう満足が得られるかっていう、そういう、やっぱり、「ありがとう」って、言ったほうも気持ちがいいし、言われたほうも気持ちがいい、お互い気持ちがいいっていう、そういうことを何回味わえるか。ですから、それだけでも、ボランティアする意味はあるのじゃないかなと思うんですけど。

**司会** なるほどね、分かりましたです、はい。今のご意見、自分は、ちょっと違うニュアンスだっていうご意見があったら、おっしゃってください。ありませんか。森田君、何かありますか。あったら言ってください。

**森田** A班の森田です。僕自身、じゃあ、なぜ、僕自身がボランティアをするのかということの問いかけだと思うんです。まず、例えば、僕がゴミを拾ったりとか、そういうことをするのは、自分の罪悪感、これを放ってたら、自分は自分としてダメになるんちゃうかなっていう、そういう罪悪感。

だから、ある意味、ちょっとへんな言葉になりますけど、贖罪というような形でボランティアを、僕はやってます、それをボランティアと呼ぶなら。今回、僕は今年は、三国のほうに寄らしていただいたんですけど、そっち側に関しては、おそらく、最終的な部分では、自分は自己満足のために行ったんじゃないかなっていうのを、すごく、最近になって、三国のボランティアに関して、自分はこういうことをしたんだよっていう報告書を書くんだになって、やっぱり自分は自己満足のために行ったんじゃないかなっていうのを、今、最近は感じてます。だから、どこまでが自分の罪悪感でやってて、どこまでが自分の自己満足でやってるのか分からないですけれども、僕のボランティアっていうのは、その二つだと思います。

**司会** ありがとうございます。大変謙虚な反省の上に立ったご意見だと思いますが、他に。はい、どうぞ、どうぞ。

自己満足からでも  
いいんじゃないかな

——自己満足の話が出たんで、ちょっとニュアンス的に、悪いほうのニュアンスで聞こえたんですけど。1日目にこの班で、自己

満足について、1時間ぐらい討論したんです。まず、自己満足からでもいいのじゃないかと思うんですけど。何でも、小さな親切でも何でもそうなんんですけど。まず、自分が満足して、それから、それを続けることによって、他人に、うまい説明できないんですけど。

まずは、そういう気持ちのある人が、そういう自信を持って、「お前、自己満足違うか」「それって、自己満足だけ違うか」って言われても、「そうじゃ」って、「自分、満足しとるから」って、自信持って言える、そういう気持ちで、一つ一つやっていくべき。だから、自己満足でも十分かまわないと思います。それにその罪悪感をもつこともないと思います。自己満足にもっと自信とプライドをもったほうがいいと思います。ちょっと悪いニュアンスで「自己満足」が聞こえたので。

**司会** 分かりました。今、そういうご意見であります。弁護士になられます、の方は。(笑い) 他に何かご意見ございますか。ああ、和尚、どうぞ。

**小池（ロータリアン）** 遅れて来てすいません。RYLA委員の小池です。一つ、いつも思うんですけど。受け手の人への感謝というのも、あっていいんじゃないかな。ボランティアって、行くほうの人の気持ちばかりんですけど、その、自分の行為の完成ちゅうのは、相手の受け止めがあって、初めて一つの行為が成り立つということやから。相手が受け止めてくれなかったら、それは、もう、自己満足しか満足できない。その、相手への感謝って言うか。ボランティアを受けてくれた人に対して、ボランティアをした人が感謝すべきという考え方が、仏教で言う、「施し」という福祉ではないかな。よく言いますけど、席を代わってくれた人に、席を代わって、座ってくれた人に、立った人が、「ありがとうございました。私は、お陰でいいことをさせてもらいました」。それが、初めての行為の、一つの完成やないかというようなことを、今、ずっと、お話を聞かせていただいて思いました。自分の満足も、もちろん、結構なんですけど、それを受けた人がいて、初めての、その行為ではないかということを一つ。

**司会** ありがとうございました。の方は、ずっと、カウンセラーをやっていただきましてね、小池弘三さんていう、須磨寺の管長さんで、たいへんお偉い方なんで、お忙しいもんですから、今、お見えになりました。ご紹介します。今、たいへん、びっくりするような意見が出てまいりましたが。どうですか、他に。はい、どうぞ。

**河原** D班の河原です。うちの班で、電車の中で、席を譲るというような、趣旨の劇をやったんですけども、そのときに、逆の意見で、席を譲ろうとしたんですけども、そのお年寄りだか何だかに、断られてしまったというお話をあったんですよ。だから、そういうのを考えたら、ほんとに譲ったときに、ありがたく受けたなら、すごい、それ

だけでも、なんか、うれしいことだ  
なあと、さっきの話、聞いて、思っ  
たんです。

**司会** ありがとうございました。  
確かにね、私も2回ほど、席、譲ら  
れたことがあって、びっくりしまし  
た。(笑い)俺、まだそんな年じゃ  
ないのになと思ったんだけど。そ  
ういうときは瞬間的に、「どうぞ」って断ってしまうんです。だけど、それは本当は、譲  
ってくれた人に対して悪いなと思うんですけどね。例えば、これ、よく聞くじゃない  
ですか。障害者、障害を持つ人を、助けようと思って、手をそえようしたら、それを断  
られて、それから、もう、障害者の、障害を持つ人の、助けようとすんのはイヤだと言  
出した人もあると思うんですね。そのとこ、大変難しいんですが。そういう経験ある、  
持っておられる方おられますか。障害を持つ人を助けようしたら、それ、障害を持つ人  
から断られたっていう体験を持つ人、ありませんか。ない。で、それに関連して、何かご  
意見あったら、おっしゃってください。はい、どうぞ。

**山崎** A班の山崎です。僕は、体験じゃないんですけど、行ったんだけど、断られたっ  
ていう人の話を聞いたことがあるんで、ちょっと、それを。それで、障害者の方が、なぜ、  
断ったかというと、自分でできることを助けてもらうのは、それは、自分ができるんだか  
ら、別に手伝ってもらうことじゃなくて、本当にできないことだけを手伝ってもらいたい  
というふうに云われて断られたというのを聞いたことがあります。

**司会** なるほど、ありがとうございます。他に何かございますか、今に関連して。

**大矢** C班の大矢といいます。さっき、三国の重油の話が出ていましたが、うちのほう  
も重油のほうの被害あります、ボランティアの受け入れということでやらせていただい  
たんですけど、来ていただくのは、なんぼでも結構なんです。来ていただくための準備の  
ためのボランティアということもあるんで、確かに、来ていただいて、してもらって「ど  
うも、ありがとうございます。じゃあ、帰ってください」言うて済む世界じゃないんで  
すよね。昼ごはん、食べさすにも、炊きだせないかもしれません。そのためのボランティアは、  
うちのほうが準備させてもらう。大変なんですよ。だから、まあ、来てもらうのも、善し  
悪しと、(笑い) いうこともあるんです。本音です。

**司会** ありがとうございます。今のご意見に関連して、何かございますか。反省する。ああ、一貫田君、どうぞ。

**ボランティアを  
受け入れる組織も**

**一貫田** 宮町の一貫田です。私のほうは、阪神・淡路大震災で大変お世話になったところで、私とこも初めてボランティアを受け入れました。こんな経験したことなかったんです。われわれ行政としても非常に困りました。私のところで、ボランティアの受け入れ担当したんですけども、最初のうちはどうしていいのか分からずに、ただもう、来た人に仕事をまかす「何々してくれ」というお願ひすること「まあ、できることから適当にやってくれや」という感じの行政の受け入れが本音だったです。

それが、途中から、四国の4県の社会福祉協議会の一つの大きな組織の方が入って来られて、うちのほうで、その、ボランティアの組織の、四国から来るボランティアを受け入れて、その人たちが、それぞれのボランティアを「こういう仕事がありますから、してください」「こういう仕事がありますから、今日はここへ行ってください」「こういう仕事がありますから、あなた方、きょうはここで助けてあげてください」いうふうに割り振りをしていただいて、それと、炊きだしも自分たちでやってくれました。やっぱり、そのボランティアを受け入れるボランティア組織を作れる組織も必要ではないかなと、ちらっと思いましたね。

**司会** ファッションとしてのボランティアが来られて、迷惑したことありますか。

**一貫田** ああ、それはございます。たくさんあります。一、二、紹介しますと、女の子が一人来られて、「わたし、ボランティアしたいんですけど。何かさしてください」と。「あなた、どうして來たの。今日は、寝泊まりなんかどうするの。何か用意かなにかけて」「いや、あの、役場のほうで、どっか泊めてくださいよ」とか、そこにいる人たちを頼らないとできないようなボランティアの方がいらっしゃるね。慣れた人々は、自分の食べるものは、自分で弁当を持って来て、何にも人に頼らずに、きれいにボランティアやってくれて、帰ってくれます。

**司会** ありがとうございました、はい。他に何かございますか。はい、森田君、どうぞ。

**森田** さっきの有償ボランティアっていう話にも関係してくると思うんですけども。僕、実際、三国に行けたのは、ほんとに、すごいたくさんのボランティアのためのボランティアのお陰なんですよね。それは何かと言いますと、まず、僕は東京在住してたわけなんですが、行けたのは、まず、JALさんが、切符を無償提供というのを、各1便につき

20名ずつ出してくださってました。それがあったから僕は行こうと思いました。

正直な話、帰省のついでで寄るとかそういうのだったら行けるなとは思ってたんですが、逆に、そういうJALさんのがあったから、じゃあ、それならタダで行けるならっていうのが心の中にあって、行かせていただきました。実際に、向こうに着いた後も、おそらく、見てて分かる、見てるほうが辛いぐらいに、ボランティア本部っていうのは、すごく大変な仕事でした。

というのは、吹きさらしのテントの中、もう、下は雨でぬかるんでます。その日は晴れてましたけれども、それでも、低地に本部を作ってるらしくて、下がぬかるんでいる中で、寒い吹きさらしの中で、ストーブが1個や2個しか、まあまあ、もう少しあったかもしれないんですけど。そういう中で、皆さん、すきま風と闘いながら、仕事をしていらっしゃいます。受付業務も並大抵の苦労じゃありません。

その上に、僕らだって、いろいろ、無茶な文句も言ったかもしれません。というより、言ふ人もいると思います。で、その上に、お昼は炊きだしをしていただきました。それが、どれほどありがたかったことか。それから、実際に、その現場のところまで、車で送っていただきました。で、泊まるところはユースだったんですけども、ユースホステルっていうのは、基本的には、そこは3600円。で、ユース会員なら2600円。でも、ボランティアに来てる人やったら、2000円一律なんですよ。で、「ほんまは、タダにしたいんやけどねえ」、おばあさんがそう言うんです。

さらにいえば、あそこらへんの地域は、まあ、東尋坊がありますから、その観光で儲けるべきはずなのに、お風呂は無償提供ですし、もう、そういうのがあったから、ものすごく助かったと言うか、畏れ多いほどでした。で、2日目、3日目と、僕の場合には雪が降っていたんで、ボランティア本部って言うわけじゃないんですけど、福祉協議会っていうほうに行きました、救援物資の届いてる現場に行ったんです。そしたら、そこの仕事、何をしてるかとうと、皆さんが送られた物、何か、いろいろあると思うんですけど、例えば、お米を送られた方なり、長靴を送られた方なりいらっしゃると思います。それに対する礼状を皆さん書いてらっしゃるんです。

そのための住所はワープロ打ち、僕もちょっと、そのチェックの作業をさせていただいてたんですけども、その打てるときの苦労を思うと、字が読めない人がいるわけですよ、きたないとか、走り書き。それは、その人は悪意ではないんですけども、でも、実際にそれを見ると、「ああ、これは、ちょっと、兵庫県のどこや」そういうのはありました。そういう中で、だから、僕は自己満足という言葉を使ったのも、どうしても自分にはできない、自分にはできないと言うと、自分はそちら側の人間ではない、こちらのほうがボランティアさせていただいてるということをすごく感じたから、自己満足という言葉をさっき使ったわけなんです。そのボランティア本部っていう話になると、おそらく、あれは有償じゃないとできません。誰かが、さっき福祉のボランティアの人が必要というこ

とをおっしゃってましたけど、そうではない部分でのボランティアのプロっていうのも必要なんだなというのを痛感させられました。

**司会** ありがとうございます。他に何かございますか。どうぞ。

**中山** Dの中山です。結局、うちとこの反論とも一致してしまうんですけれども。福祉といつても、小さい福祉、先ほどの例えば、電車の中で席を譲るという話と、それと大きな福祉があると思うんですよね。そういう小さな福祉だったら、問題にならないと思うんですけれども、大きな福祉だったら結局、組織だった行動をしないと、各ボランティアが、ガタガタ動いてしまったんでは、はっきりいって邪魔になると思うんですよ。そういう意味で、例えば日本では、法的には社会福祉士とかいうのは制定されておりますけれども、社会福祉士がそこまで活動しているかというと、はなはだ疑問なんですよ。そういう意味で、もっと広い視野に立てた、例えば、そういう救急の事態とかが起こったときに、連携の取れるだけの広い視野を持ったような人材の養成とかが、機運だと思います。

**司会** 分かりました。ありがとうございました。今、小さい福祉と大きい福祉に分けて、意見を述べられたんですが、この点いかがですか。何か「オレ、こう思う」っていうのがあったら、おっしゃってください。

これは、先ほど、どっかから出てたな。C班ですか。この法律とか行政に頼ると、ほんとの福祉はできないとおっしゃってたと思うんであります。で、施設がいくらできても、結局、形だけのものになってしまうんじゃないかな。昔、JRのある駅で、障害を持つ人のためのトイレを作ったら、使う前に「1時間前に許可を得ろ」とか、エレベーターを作ったら「3日前に、許可を申請しろ」とか、非常に非常識なことを言って笑われたことがあります。ですから、国家主導型の福祉というのと、民間主導型の福祉、これはアメリカとかそういうところでありますが、そのへんのところで、ずいぶん違うと思いますが。今のように、例えば、行政がね、何かやったときに「これは形だけで、これじゃダメだな」というふうなご経験を持つ方、ご意見あったら教えてください。ありません？

昔、八代英太さんていう車イスに乗った、参議院議員の方おられますね。の方は、兵庫県で身体障害者の福祉学級、社会学級の集いというのをやっておりまして、兵庫県が主催で、ロータリーとかライオンズあたりが後援をしてやっとった。私、それ、ロータリーからの委員で出ておったんですが。そのときに、やはり、八代英太さんが車椅子で壇上でお話をなさいました。で、今の世の中、どうしても、健常者を中心に作られてる世の中なんで、ですから、障害を持つ人にとっては大変不自由を強いられて、その後で、今日、片岡さんがおっしゃってたように、指で触ってわかるお札が出て来たりしましたが、あのときは、まだ出てませんでした。徐々にではあるが、障害を持つ人のための社会には

なってきておるだろうと思うんであります、しかし、まだまだ、障害を持つ人にとっては大変だろうと思います。

片岡先生が、今日、気の毒にというような気持ちを持ってもらわなくとも、自分は不自由であるけども、そういう気持ちは持ってないとおっしゃっておられました。だけど、実際はね、それこそいろんな辛い思いをなさったと思うんであります。そういうものを乗り越えて、今、ああいうお気持になっておられると思うんであります。そういうところで、この福祉社会、今井先生のおっしゃる福祉文化を、今度は逆にね、阻害しておるような要因、こんなことがあったらダメじゃないかなということが、もし、皆さん方が体験なさってたら、ご意見を出してください。ありませんか。一貫田君、ない？ ありませんか。

**一貫田** 私とこの町の学校の教育の現場を見ても、僕も行政マンでありながら、障害を持つ子どもたちを受け入れるような施設づくりはできないように思います。それから、小さな役場の施設を見ても、ただ、スロープをつけらんとあかんからスロープを付けるだけで、そしたら、トイレは改善されてるんかと言ったら、改善されてない。不十分なところ、そういう面は、何か知らん、行政のやることは、前に見える、表に見えることだけをやって、中身がないような気はします。それが事実ですね。

人間は優しいか  
いやもっと残酷か

**司会** ああ、そうですか。ありがとうございます。他に何かありますか。

先ほど、A班でしたかね。人間は本来優しさを持っておるから、当然、いろんな福祉文化に向けての行動ができるっていうことをおっしゃってましたが、本来、人間は優しさを持っておるって、これについてもいろんな考え方があると思うんですが、何かご意見ございますか。そうじゃない。本来は、人間はもっと残酷なもんだ。例えば、古代ローマの諺にね、「人は人にとてオオカミである。人間ほど恐ろしいものはない」っていう諺が残っています。そのへんのところを何かお考えがあったら。はい、どうぞ、ロータリアンの方。

**山下（ロータリアン）** 高松グリーンロータリークラブからまいりました、山下と申します。私、専門が神経内科学なもんですから、ちょっと、先ほどの自己満足ということと関連して、少しお話しておきたいことがあるんです。皆さんによく考えていただきたいことが、例えば、自分が人からしてもらったときに、嬉しいと思います。それと比較していただきたいんですけど、自分が人にいろんなことをあげて、相手が喜んでくれたときに、自分が嬉しいと思う気持ちと、どちらが大きいか。よく考えてみると、人にしてあげたときのほうが非常に自分の心がやすらぐと言うか、嬉しいというか、そういう気持ちになると思うんですね。

それを医学的に少し説明させていただきますと、われわれ、オピオイド・アルカロイドっ

ていって専門用語なんんですけど、 $\beta$ -エンドルフィンであるとか、エンケファリンであるとか、そういうような人間の脳の中にある神経の伝達物質が、人に対してもいろいろなことをしたときに、たくさん出てくるということが、今、医学的に分かってます。結局、自己満足ということは、おそらく、こういうことが原因だろうと思うんですね。そういうようなオピオイド・アルカロイドがたくさん出てくることによって、人間が快感を得たり、気持ちいい thought 或いは felt したり、嬉しい thought 或いは felt したり、そういうふうに考えるようになるわけです。

だから、人のためにしてあげるということが自己満足ということなんだけれども、身体がそういうふうに欲求しているわけですね。どうして、そういうふうにオピオイド・アルカロイドが、人に対してもいろんなことしてあげたときにたくさん出てくるか、これに関しては、今の医学では分かってません。

ただ、私が考えるのは、おそらく、そういうふうに神様が作ってくださったんだろうと思ってるんですが、それは、どうしてか。いろんな人からしてもらうのも、もちろん嬉しいわけですけど、われわれがいろんな人のためにしてあげることによって、人間の社会が、滅びずにますます発展していくんだろうということを考えると、やっぱり神さんがそういうふうに作らないと。人間を作ったのも神さまだろうと、私、思ってますから。そういう意味で、そういうふうな仕組みに作られてるんじゃないかと思うんです。だから、自己満足自体を、罪悪感を持ってとらえることはないんじゃないかというのが、私の考え方です。

**司会** ありがとうございます。神さまがそういうふうに作られたというご意見なんですが。(笑い) ハッハッハ、一刀両断であります。他に何かございますか。

**山崎** A班の山崎です。中国の思想で、性善説と性悪説とあるじゃないですか。僕は、ちょっと、教科書で、漢詩をちょっとやっただけだから、詳しい内容は知らないんですけど、最初から持って生まれて、優しさとか、そういう、人間はいい動物だというのが、さっき森川さんも言われてたように、そういう性善説で、性悪説ってのが、人間はもとから悪いやつだ、悪い人間だから、それを生きてる間に償っていかないといけないという考えが性悪説じゃないですか。僕は両方正しいと思うんですよ。それは、生きている環境、やはり教育の現場、今でいえば教育、だから、親とのコミュニケーション、学校の生活、そういう環境が、人間を、善にするか悪にするか、のような考えなんですけど。だから、ボランティアも、それに反映されて、だから「べつにボランティアせんでもエエやん」とかって言う人間もおれば「ボランティア、せなアカン」という人間も、きっと、いると思うんです、この広い世の中には。だから、そういう環境づくりをしていけば、きっと、福祉っていうのは、みんなに知れわたってしないといけないというものに変わるんじゃないでしょうか。

司会 ありがとうございます。要するに、人間が性善であれ、性悪であれ、要するに、環境づくり次第では、ボランティアが自由に動ける福祉社会が実現できるんだという考え方ですね。はい、はい、分かりました。他にありますか、何か。はい、どうぞ。

遠藤（ロータリアン） 老人Aです。（笑い）仙台からわざわざ。ボランティアとか福祉とか、そういう言葉等の問題じゃなくて、歓迎パーティーのときに「ちょっと、何か、やれ」って言われて、やったことで。実は、その中に、ほんとは必要なことがあったんですけども、僕らも飲んで酔ってた部分もあるんで、まあ、ゲームということで終わりにしました。

で、最初、4人出ていただいて、コップ一杯にした水を4人で運んでもらいました。みんな酔っ払ったはずなのに、みんな真剣になって見てたはずなんですね。見てた人たち、どう思ったか。実際に、そのものを運んで、そこに4人並んだ人たちが、どういう気持ちで、あれを次の人に渡したか。それ、みんな同じような体験をしてるはずなんですね。

で、多分、まあ、意識下にあったのか、あるいは、無意識下にあったのか、人それぞれ違うと思います。で、最終的に、あのリズムが調和したでしょ。ということは、みんな一緒になっちゃったということで終わりになってしましましたけれども、あのグループの中で、誰かが無意識的に、いつの間にかリーダーの役割を果たしてしまってたというのが、ああいう中にあるんだよってことを、ほんとは言いたかったんですね。

で、それを、今度8人に増やして8人になってきたら、どうなるだろうかも含めて、やった人と、それから、周りで見てる人たちの意識と、それも、ほんとは皆さんの意見を聞いたかったわけです。あの、人間の意識と無意識という中で、自分の中で、それを見ながら、同じことを体験したということを感じている人もいれば、それから実際にやった人は、自分で自己満足したかも知れませんし、あるいは、緊張して、うまくできなかったという反省があったかも知れません。でも、いずれにしても、どっかで必ず、誰かは誰かのリーダーシップに、ついていってしまってた部分というのがあるだろうと思うんです。

それが福祉だろうが、ボランティアだろうが、住みやすい社会ですか、やっぱり、意識的な部分で、それをとらえてる人と、無意識下の中で、にじみ出る中で、知らず知らず、それをやってるっていうことが、実際にそういう世界なんだろうなと思います。

もう一つは、その学校教育なんですが、宮城県では毎年20人ぐらい、青少年交換で日本以外の国からの高校生が宮城県内散らばってやってます。で、その高校生たちに、自分たちの国の話を聞くと、ジュニア、シニア・ハイスクールですか、学校の中にボランティアという単位がありまして、それを報告することによって、点数化されていくって、そして、評価になる。その評価によって大学のほうの受け入れが、また違ってくるということで。実際に、そういうものが形、有償と言いますか、無形じゃなくて有形のものとして、アメリカの社会ではあるわけですね。

どうも、日本民族の中では、有形のものというものに関しては嫌われるという、ひょっとしたら儒教、仏教もあるんですか、宗教的なものの中では、そういうことが考えられるんだと思いますが、日本民族にとって、このことを決めていくってのは非常に難しい問題があるだろうと思いますし、言葉の問題も、いろいろ、われわれ考えなければいけないですし、かつて「ソクラテスの弁明」なんて読みながら、反感をかったこともありますけれども、それを書いたプラトンの「饗宴」なんか見るとおもしろいと思いますし、言葉の選択っていうれば、アリストテレスの言葉なんて読んでたら、全然分からぬ。われわれは、どうも言葉がうまく使えない国際民族じゃないかというような気がしますので、それは僕の個人的な意見。ただ、前のほうの昨日のゲームは、実は、そういうところがあったということで、また、単に遊んだということだけじゃないので、ぜひ、覚えていただければと思います。以上です。

心にとめ、地域に  
持って帰って下さい

**司会** ありがとうございます。ぼつぼつ時間が迫ってまいりました。先ほど、私は、人間は本来優しさを持ってるという、あれについて、そうじゃないっていう意見があるかということも申し上げました。どうして、そんなことを言ったのかと言いますと。その後で、山下先生のほうから、神様の話も出てまいりました。実は、昔、なだいなだ先生の本で読んだ記憶があるんですが、ある心理学者がね、実験をしたんです。七面鳥の耳を聞こえなくして卵を抱かせました。そして、そのヒナがかえってきましたらね、その七面鳥の親鳥は、そのヒナを全部、突き殺してしまったんです。これは、まさに、神様が、七面鳥に一つの生き方を教える。卵を抱く、そしてヒナがかえってくる。そのときに、そのヒナが、ピヨピヨピヨピヨ鳴く。その鳴き声が聞こえたら、それは自分の子どもだから、それは殺さない。ところが聞こえない。で、その自分の巣の中へ、外から入って来たものは、すべて殺してしまっていうふうに、神様が、そういうふうに作っておられるわけです。ですから、選択の余地がないんです。ヒナの鳴き声が聞こえないからですね、それを全部つぶす、外から入って来たもんだと思って殺してしまう。

ですから、鳥の愛情てのは、人間の愛情と比較にならないほど、その、愛情が深いというようにいってるけれど、例えば、ホトトギスなんてのは、他人の巣の中へ自分の卵を入れて、ご丁寧に一つだけポンと、そこの巣にあった卵をですね、外へ蹴散らかして、数の勘定合わまでやっときます。そうすると、その親鳥はですね、かえったヒナを自分の子

7～3.30 於・神戸YMCA余島野外活動センター  
2670地区・R.I.第2680地区・RYLA運営委員会



どもとして、ホトトギスのヒナを育てていきます。そして、落ちたヒナが、今度、戻ってきたら、これは、ほんとは自分の子なんだけども、自分の巣の中へ外から入って来たの、全部外敵として殺してしまえという、神様が、そういうふうに作ってます。ですから、人間の目から見たら、「なんて、鳥っていうのは、他人の卵まで抱いて、愛情深く育てるんだろう」と思うんですが、あれ、愛情じゃないんです。神様がそういうふうに作っておるわけありますね。

ところが、人間はそうじゃない。自分の子かどうかの見分けもつきますし、それをどのように育てるかということも、選択の余地があります。それにもかかわらず、赤ちゃんをコインロッカーに入れたり、殺したりね、そういうこともやるわけですから、本来、人間ってのは非常に動物よりは残酷なんじゃないかなという仮説も出てまいります。

で、そのへんのところから、それじゃあ、そうすると、非常に人間てのは残酷なん、それじゃあ、どうして、そういう残酷なものと仮定したとしてもね、ボランティアをやるのかということになってきたら、先ほどの、自分の身を守るために、エゴから出発したボランティア、それをやらなきゃ、自分が社会からはじき出されるじゃないかと、そういう考え方も一つ出てくるわけでありますからね、このへんのところ、いろんな他にも考え方があるかも知れない。それもまた、何かの機会に、皆さん方、同窓会なんかで、意見の交換もなさって、いろんな意見があったら、交換していただければと思います。

あす、今井先生が、福祉文化についてのお話をなさいます。福祉社会っていうのは、高齢化社会、高齢者福祉もあります。児童福祉もあります。障害者福祉もあれば、精薄者福祉も、いろんな福祉の場面があります。いろんな側面があって、大変広いんです。ただ、私たちが、どうしても考えておかなければならん、福祉文化っていうことを考えておかなければならぬのは、あと30年足らず、紀元2025年になりますとね、65歳以上の高齢者の数が、国民の人口全体の26パーセントに達します。

ということは、100人のうち26人が65歳以上の高齢者で、働けない。大ざっぱに言いますと、4人に1人が働けない高齢者になります。そうすると、3人の人が1人の高齢者を養っていくなきゃならない。実は、その事態はもっと深刻でありますと、この3人の人が1人の高齢者を養っていくんだけれども、その3人の中には、赤ちゃんもおれば、働けない人もいます。だから実際は、2人で2人の人を養っていくなきゃならない。こういう社会はですね、税負担がものすごく大きくて、きょう、片岡さんがおっしゃってましたスウェーデンは、所得の70パーセントを税金で取られてしまう。だけども、スウェーデンは、それほど高齢者ではありません。2人の人間が2人の人間を養うってことはですね、これは大変なことで、こういうことは、今の現代社会の社会制度の下では不可能なんあります。おそらく、すべての社会制度を洗い流してしまう。

弁護士制度も、医師制度も、農業制度も、会社制度も、果ては地方自治体まで洗い流してしまうような激動の社会が、もうあと30年足らず、27年後には、やって来る。これは厚

生省の統計であります。その大津波がやってくるのが、もう、沖合に見えてんです。

で、その激動の社会を、実は、皆さん方が乗り切って行かなきゃならないであります。そのときに、いろんなボランティアとか、人間の本性とか、いろんな意見が出てまいりました。

自分のことだけを考えておったんではね、その激動の社会は乗り切れない。じゃあ、そのために、今から一生懸命社会資本を備蓄してですね、金を蓄めといたらいいじゃないかと言うけども、社会資本を備蓄するためにはですね、たくさん若い働く人がおって、年々歳々その基金にですね、働く人が税金によって、どんどん基金に金を入れていかなきゃならないんありますが、高齢化社会っていうのは、お年寄りが、どんどん増えて、そして、働く人の数が減っていくんですね。社会資本を備蓄する、いわゆる、量による発想ではですね、絶対に、その社会は乗り切れない。

そういうときになったときに、例えば、役に立たない者は、どんどん殺してしまえとか、そういう状況になってきたときに、大変な社会になってくる。そのときに、皆さん方が、その時代を生き抜くための知恵。今からね、もうすぐなんですよ。皆さん方が、ちょうど、国家の中堅の人口を構成するときになったときが激動の社会なんであります。

そのときに、自分だけのことを考えて生き抜いていけるのか。お金をためるとか、税金を納めるとか、その量の発想だけはいけるのか。それは、とてもじゃないけども、新しい時代には、マッチした論理を身に付けておかなければ、お互いに助け合って、福祉社会を生き抜いていく、福祉社会を建設していく、福祉文化を形成するっていうことは、おそらく、不可能になると思うであります。

これは、今井先生が、この第1回のRYLAだと思いますが、教育の分野にですね、ポール・ティリッヒでしたか、3つの分野があるって。一つは、technical education 技術教育だと、もう一つは、humanistic education 人間教育、もう一つは、inductive education、これは、人間とは何かという真実に招き入れる教育、そういう分野があるとおっしゃった。そして、今、humanistic education、それから、inductive education、この二つの教育の分野が、現在の教育体系の中に欠落しておるんだ。そういうことをお説きになりました。私、今でも覚えとんであります。その、一番大事な、inductive education っていうのは、どういうことなのか。一つだけ例を申し上げておきます。

科学技術が、どんどん発達します。物質文明を、われわれは謳歌しております。わずか50年前にはね、私どもが中学校を出た頃には、食べる物も、着る物も何にもなかったんであります。今は、本当に豊かになって、古代の王侯貴族も享受できないような贅沢な生活を享受しておる。しかし、科学技術が発達し、医学が進歩する。人間の命がどんどん伸びていきます。そのためには、高齢化社会にもなるんありますが、その陰にね、何千万、何億という、モルモットや実験動物の命が犠牲にされてるんです。その事実に思いをいたす人は非常に少ない。

で、その、モルモットや実験動物の命を奪っていく、そのことは、果たして、どう考えるのか。人間の幸せのためならば、そういう命をどんどん奪っても、それは当たり前だという考え方方が一つ成り立つかも知れない。しかし、それも命を奪うんだったら、それは罪じゃないか。罪だと考えるんだったら、その罪は、一体、どこで償うのか。私たち人間はね、すべての生きとし生けるものの命をいただいて、生きています。この、すべてのものの命をいただいて生きていく、この人間とは、一体、何か。そもそも、その命とは、一体、何か。そういう真実に招き入れる教育のことを、*inductive education* というのであります。

で、こういう教育の分野が、今、欠落しておる。これは、われわれ日本民族の未来にとつては、忌々しきことだろうと思いますし、そのへんのところの心の整理をしておかなければ、例えば、人間の幸せのためには、モルモットの命なんか奪ってもいいんだという考え方であれば、お年寄りが増えてきたら自分たちが生きていくためだったら、お年寄りは姥捨て山へもって行ってもいいじゃないかという考え方にもなってこざるをえない。果ては、それでも、食えなくなったら、弱肉強食ですね、福祉もなくなってしまう。そういう時代になっていく。

だから、このRYLAで、いろんな意見を交換しておりますが、皆さん方自身の問題としてですね、この、これから、やって来る激動の社会、それは、福祉社会であるのか、あるいは、ジャングルの世界になるのか、そのへんのところは分かりませんが、皆さん方自身が、その激動の社会を生き抜いていく知恵を、お互いの意見を交換しながら、身に付けていただけたらなと思うんです。その知恵を、掴んでいただくためにロータリーが、このRYLAを開いておる。そういうことも一つ心に留めておいていただきたいあります。

これで、フォーラムを終わりますが、いろんな、意見が出ました。そのことを、どうか、皆さん方、それぞれ、心に留めて、地域に持って帰っていただきたい。この後、キャビンタイムで、意見の交換をなさっていただいても結構ですが、ロータリーのほうから、単に問題点の指摘をするということで終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。（拍手）

# 「ロータリーの命を新しい時代へ…」

R I 理事  
R Y L A セミナー顧問  
R I 第2680地区P.G.

今井 鎮雄氏  
(神戸西 R C)



2日間の講義は大変感動的な話でした。フィリピンのネグロスの島に生まれた女性、辻野さんが、いろんな意味で、自分の仲間たちのことを、どういうふうにして、生かしていくのか、一緒に生きるかということを、苦労しながら考えて、日本に来て、幸いといいますか、大変共鳴をする人がおって、結婚をされました。

辻野ナオミさんという名前になりました。その辻野さんは、いつでも自分の故郷に残した自分のお友達のことを考えながら、恵まれた日本人の人たちと一緒にになって、そこの開発をしていきたい、その人たちと一緒に生きる方法を考えたいといって苦労をしております。

彼女も言ったように、日本語を基本から習ったわけではない。経験の中、体験の中からしゃべるので、「私の日本語は大変不完全だけども」と言っておられましたけども、あの人が持てる熱情や問題は、皆さんとこころに伝わるし、あの人が言った言葉の中で、なるほどそうかなと思うことが、たくさん、珠玉のように散りばめて、皆さんの中に染みてきたんだろうと思います。

きのうの片岡さんは、彼が小さいときに、このキャンプに来て、このキャンプの中で、

<今井 鎮雄氏>

神戸Y M C A顧問。1920年、東京生まれ。旧満州・大連へ転居後、同志社大学法學部經濟学科を卒業。幼時からクリスチャンで、福祉の心をはぐくむ。1946年、灘購買組合(現在のコープこうべ)に勤務のあと関学大大学院へ。1948年、神戸Y M C Aに就職。1963年から21年間総主事を務め、1984年に顧問就任。

長年のY M C A活動を通じて青少年の健全育成や社会福祉に尽力。1948年に日本で初めての肢体不自由児キャンプを手掛けたほか、カギっ子対策としての学童保育、里親を求める「愛の手運動」や「いのちの電話」開設、P H D運動など、卓抜した行動力で多彩なボランティア活動を続けている。

また、教育にも関心が深く、兵庫県教育委員、県・市社会教育委員、頌栄短大学長などを経て現在は頌栄保育学院理事長・院長、啓明女学院理事長。

このほか県青少年団体連絡協議会長、ひょうご福祉のまちづくり推進会長、神戸市社会福祉審議会委員長など多数の公職を務め、幅広い政策提言を行っている。

1981年に兵庫県社会賞、1983年神戸市文化賞、1985年神戸市市民福祉顕彰ほか。

障害があってもなくても、自分のベストを尽くすことが大変大事な人間としての役割だということを学び、それから一生懸命勉強しました。

京都で育ったんですけども、私が教えております関西学院にまいりまして、関西学院を卒業いたしました。その後、そのまま、障害者の子供たちのための仕事を続けてきてるわけです。彼も、彼の一生と歩みを通して、何か大事なことを皆さん方にお話をして、いろんな話の中で、皆さん方が受けたものがたくさんあるだろうと思います。

こういうものを通して、きのう、総括のフォーラムで、皆さん方がいろんな問題を出していただいたのを、深川パストガバナーにまとめるようにしながら、話をしてもらいました。ですから本来は、こういうふうの中で、皆さんが徹夜で考え、そしていろんな形で、自分の身体の中で膨らまして、あるいは、心の中で膨らましてくるということは大変大事なことですね。きのう、フォーラムが終わったときに、ある女性の方が「自分の言いたいことが言えなくて、頭の中でまとまらなくて、言いたいことがたくさんあるんだけど、頭の中でまとまらなくて。まとまって発表することができないのが、くやしい」って言われました。そのことが大事なんです。何かそんなに急にまとめて、話ができるわけがない。だけど、自分の中にこんなことも、あんなことも問題になったということを、これから膨らましていっていただきたい。そういう意味においては、私のきょうの話は蛇足でありますけども、整理をしておいて、こういうことを考えてくださいね、ということの話をしたい。

## 文化とは社会が持っている価値の体系

きのう、出た話で、福祉文化っていうことがあります。福祉文化といったら、福祉社会とどう違うのかそれがはっきりしない。概念がはっきりしないということがありましたので、こういうことだけ、ちょっと言っときます。

私たちはいつでも、その社会の文化の中で育ってきます。例えば、私たちは日本人ですから、日本という社会の中で、私たちは一人ひとりの人間が住んでいますね。みんなが集まって、日本の社会を形成してるんです。日本の社会というのは、日本人であるみなさん一人ひとりがいなければ、成り立たない。だから、社会を構成しているのは、皆さん一人ひとり、われわれ一人ひとりであるし、また、私たちが構成した社会は日本社会。そこでこの社会、日本という社会が持っている価値の体系、客観的な複合体を、私たちは文化と名付けます。

例えば高知の人は、タタキを食べて、にんにくを食べて、あした、臭くても平気だと、いうことになりますわね。それは、その社会の中の、その高知人が、自分たちで、その郷土の料理を食べて、にんにくを食べて、そして、それが、ごく当たり前になってくると、それは、高知の社会の中では、にんにくの臭いのは当たり前だと。

このように、沖縄の人はこう、大阪の人はこう、「大阪とは」とか、「何とかとは」とか

言う、そういう特徴は、その人たちみんなが作ったんですよ。高知が作ったんじゃない、高知の人たちがみんなで作って醸成してきたものです。社会の中で、共通に、ある種の価値を持ち、その価値を客観的な複合体として見られるものが文化です。それに対して、こういう中で育った個人、一人ひとりがあります。この一人ひとりは、それを受けて、そういう考え方方が身に付きます。その考え方方は、その人の人柄になります。あるいは人格と言ったほうがいいかな。学問的な言い方をすると、パーソナリティということです。

ということは、日本人は日本人の性格を持っている。アメリカ人とぶつかってると違うことに気づきます。しかし、それは、日本の中に来ると、みんな日本人が同じような考え方を持ってますから、ごく当たり前です。例えば、私はアメリカに行きますと、みんなで“ハロー”と言うときに、どうするかと言うと、こんなおじぎなんかせんで、ハローと手を出しますと、向こうもハローと言う。中には、久しぶりだなって、ハローで話がつづきますね。日本で「こんにちは」ってたときに「こんにちは」なんて言うと「あいつ、生意気やな、なんや、手、出して」と言われます。「おはようございます」って、おじぎするのが、日本の一つの習慣になってますね。それが一人ひとりの人格に、身についてますね。それと違うものがあったら、この人は日本の社会では、「あの人変な人やな」と思われるかもしれない。分かる？

こうした意味において、文化というのは、その社会が持つてる客観的な複合体。それに対して、その文化の中で育った私たちの人柄、人格は、その人の中に留められた主観的な複合体であります。だから、バランスが取れてる。さあ、ここまで言ったら分かりますね。それでは、福祉文化とは何か。福祉というものを価値の大変な体系に置く文化社会を作ろうというのが、私たちの考えてることです。

福祉というのは、福祉って何だろうか。福祉社会というのは、きのうも深川先生から、「建物じゃありませんよ、施設ができたから福祉社会じゃないですよ」と言われたと思います。みんなの心が福祉に向かうということは、みんなが、幸福になることを願って、みんな一人ひとりが幸福になることを、みんなで助け合っていく、そういう価値、そういう考え方の複合体が、日本中に世界中に広まる、そういう福祉の価値の体系が広まる社会を作っていくじゃないかということが考えられる。これが一つの大きな問題がありました。福祉文化の問題について、そういう整理をしておきます。

## 福祉文化の社会がなぜ必要なのか

それでは、なぜ、そんなものが必要なんだろうか。なぜ、みんなが豊かに生きる、心豊かな人として生きるということが大事になってきたんだろうか。今まででは、もっと違った文化が、たくさんあったじゃないか。もっと違った価値があったじゃないか。そういうものが、今どうして、もう一度、人間がみんなが幸福に豊かに生きるってことを大事にする社会を作ろうというふうになったんだろうか。これは、歴史的な産物であります。

その歴史的な産物について、昨日も深川先生の話の中で、私たちの21世紀というのは、特別な、今までとはまったく違った社会ですという表現がありました。その、もっとも違ったということについての一つの現われとして、高齢化社会というような言い方をされました。でも、それは高齢化社会だけではありません。高齢化社会というのも一つの変化の様相でありますけれども、その他にも、たくさんに変化がありましたので、少し、そういうようなものを考えてみたい。

私たちの人間の社会というものは、長い長い歴史を経ています。人類の歴史ということから考えたら、6千年前から私たちは文化がありました。黄河文明の領域の中に、ヤンシャオ文化といわれる文化が生まれました。

岩波新書に「中国の歴史」というのが、上・中・下巻で出てます。その上巻、中国の一番古い部分が書かれた上巻の口絵に、このヤンシャオ文化の一つの土器が出てます。人間の顔が描かれ、お魚が描かれた大きな土器の写真が出てます。この土器が出てきたのが、ヤンシャオというところ。今だと、皆さんが見れるということから考えて、もしも、西安に行く人がいたら、ハンパ遺跡というのがありますけど、ご存じですか。このハンパ遺跡というのは、小さな小さな遺跡であります。全体が体育館ぐらいの大きさで、それに屋根をして、そこに遺跡を造ってますけど、これは今から6千年前ほどの遺跡です。

そういう時代、これは、ちょうど、メソポタミアだとか、チグリス・ユーフラテスだとか、そういう、だいたい世界の歴史の中で、人間が人間の文化を持った。動物としての人間が生まれたのは、だいたい、今、500万年前ぐらいに人間の先祖が生まれたといわれるんです。しかし、いずれにしろ、6千年前ぐらいから、私たちの人間の文化、人間としての営みがずっと続けられてきたんです。ずっと同じように続けられてきたんですけども、それが、大きく変わってきた。このへんの時代は、どうしてみんなが生きてきたかと言うと、農耕の社会。その前は、あちこちにある木の実を採ってたんです。それが、自分で種を蒔いて、自分で耕して食べるようになったのは、だいたい6千年前から。これが農耕社会と言いますか、農耕文明社会と、歴史の人たちは言います。

## 産業社会からコンピューター時代へ

ところが、この社会が、今から、たった200年から300年、せいぜい400年ほど前から、違った社会が生まれてきました。これを普通、私たちは「産業社会」とか、「産業革命が起こった」と習ったと思います。18世紀、19世紀に渡って産業革命が起こって、私たちの生活は、農耕社会ではなくて、新しい産業社会というものが生まれてきたんです。こうして、今までは、自然に頼って生きてきた私たちが、都市に集まって来るという状況が生まれてきたときに、私たちの新しい文化社会というものは、違った様相を見せるようになりましたよ。

この産業社会が、実は、つい20年ほど前から、まったく違った形になります。それは何

かと言ったら、コンピューターであります。宇宙衛星が打ち上げられるようになったということです。私は、皆さんと同じ時代に生きてて、皆さんと年はあんまり変わらんです。この歴史から見るとね。変わらんですけども、それでも、皆さんより、ちょっと前に生きてた私が、皆さんの時代にはまだ軍人でした。その頃は、大学を出ると、すぐ、義務教育で兵隊にひっぱられます。私は兵隊にひっぱられて海軍です。その海軍の航空隊にいました。戦争に負けて、すごすごと帰って来たんですけど、最後の航空隊の基地がどこだったかというと、上海なんです。上海、中支海軍航空隊というのに私が所属して、そこで終戦を迎えるました。

ところが、そこで終戦を迎えたときに、最後は飛行機がなくなって、私は、その中支海軍航空隊の指令塔、ほんとの庁舎の一番上の指令塔の見張りの指揮官をずっとさせられました。その頃のフィリピンから、敵の飛行機が来て、爆弾を全部落していくんです。爆弾がまっすぐ当たったら、もちろん死んどるんですけども、爆弾てのは当たらんもんですよ。みんなよそに当たってね、私には当たらんかったので、生きてるわけですが。

こうして、見張りの指揮官ですから、全部防空壕の中に退避した後も、上の上に立ってるんです。怖いでえ。ダッダッダッダッダッダッダッダッダッと爆弾が落っこって来てる前に立ってるわけですね。そして、今、飛行機、この方向にいる、あそこの方向にいる。そんな、方向にいるなんて報告したって、何の役にも立たん。ダッダッダッダーッと撃たれるだけですから、そこに立って、最後を迎えて終わりました。

その頃には、コンピューターがなかったんです。私たちの乗る飛行機は何で飛んでたか。地図の上でもって、磁石持って乗るんですよ。そして、45度の方向にとか、あるいは、30度の方向に、60度の方向にといってね。風が吹いたら全然違うんです。

ところが、今、どう？ 月の世界にでも、真っすぐに間違いなく、飛行機も飛んでくことができるじゃない。コンピューターのお陰ですね。たった40年ほど前、50年ほど前に、まだ私たちは、そういうことができなかつた時代から、今、まったく違ったものになってしましました。私たちは、そういうふうにして新しい時代に今はいる。要するに、20世紀の産業社会が、21世紀になったときに、違った社会になりかわりますよ。それは、皆さんのが責任を負う時代に、こんな大きな歴史的変化があるんですよということが一つですね。

## 変化の時代の子なんですよ

私たちの覚えておかなきゃならんことは、私たちは普通の時代の子じゃないんだと。特別な、そういう変化の時代の子なんだということを覚えといてください。2000年になったときに困るのは、もう、皆さんも聞いてるでしょ、コンピューターが狂うわけです。

2桁のコンピューターですから、1998年、1998の98のところで整理をしておきましたから、いつでも、98、97、96でもって整理をしておったものが、2000年になったときに、00になったときに、1900年なのか、2000年なのかの区別がコンピューターに今、つかない。

だから、これをどうしたらいいのだろうかということが、会計の問題、処理の問題でも何でも、非常に大きな問題になってるってことはご存じで、そのことに気が付いて、ちゃんと、機械を調整しないと、2000年からコンピューターいうもんは使えない。それが今、非常に大きな問題になっている。大変細かいことですけども、実は、こういう時代の曲がり角であるということあります。

私たちの未来が変わって、この結接点が、皆さんが生きてる時代だ。これが一つです。

そうすると、そこで、じゃあ、この延長上、私たちが今までおった産業社会が持ってる価値の体系、文化の体系と、これから違った方向における価値の体系、文化の体系は、違うんだということが、私たちの皆さんへの主張なんです。福祉文化という名前を付けました。産業社会っていうものは、いつできたかって、これは、西欧近代社会であります。私たちは西欧近代ということを聞きますけども、私たちが育ってきた社会は、西欧近代社会と名付けられる社会の体制であります。これには、先ほどから言ったように、大きな一つの価値の体系を持っておりました。ヨーロッパ社会を中心に、ことにイギリスを一番先達として、ヨーロッパ社会が近代を生んで、そこの近代における一つの大きな価値の体系を持っていましたものが、私たちは西欧近代社会と申します。これ、おもしろいんですけどね。これも、皆さんひとつ読んでください。

国立民族博物館の館長をしております梅棹忠夫さんという人が、「日本とは何か」という本を書きました。その中で、西欧近代社会というものこそ、今の最も先進的な社会、価値の体系を持った社会だというふうなヨーロッパの考え方に対して、日本は、これと同じような一つの社会の体系を持っていたということを主張しています。

梅棹さんは、日本が、明治になってから、西欧近代社会の持てる価値の体系を受け継いだと考えるけども、実は、その前に日本は固有の価値の体系を持ってた。こういうことを主張している方で、大変われわれにあっては、おもしろい本でありますから、これも、参考の一つに読んでいただきたい。ただ、そこで、読んでいただきたいと言っても、中に何が書いてあるかっていうことがないといけないでしょうから、その中の笑い話みたいな話を一つ二ついたします。

彼は、こう言うんですよ。今から400年ほど前、江戸時代に、世界の人たちで、字の読める人の数は非常にパーセンテージが低かった。おそらく、せいぜい20パーセントぐらいだったんだろうと思う。ことにロシアのような、どちらかというと、その頃文化の遅れてる社会の人たちは、17パーセントぐらいしか字の読める人がいなかったと言われます。それに対して、400年前の江戸の人たちは、寺子屋があって、読み書きソロバンを教えてもらって、武士はみんな藩校に行って勉強してましたから、非常に識字率が高かった。少なくとも、世界で最高の水準であった。ロシアが17パーセントぐらいの識字率のときに、もう、江戸では、おそらく、30パーセントぐらいの人たちが字が読めた。

もちろん、私たち、落語に出てきますわね「ここに、手紙に何て書いてある」って言っ

たら「大家さんなら、読めるやろう」って、大家さんに持ってくると、大家さんが「どれどれ、ええっ、なんとかかんとか、なんとか存じ奉り候」そこで何とか言う。「さてさて、もうちょっと読むから」て言って、実は、大家さんも字が読めなかつたという落語の話がたくさんあります。言い替えたら、その頃は、まだ字の読めない人もいたけども、字の読める人たちがたくさんいた。

だからこそ、日本の看板は、みんな片仮名で、「カツラ」だとかね、「アブラヤ」だとか、そういう看板が全部出た。「売り家と唐様で書く三代目」という川柳があったように、唐風で書く、非常にお習字の上手な、そのお金持ちの三代目の人が、放蕩に身を崩して、土地を売るときに、ここは売りますよと、売り家と書く。川柳にそんな話があるように、片一方では、字がみんなが読める時代がありました。

## 字の読める人が少なかった欧洲

そうしたときに、ヨーロッパ諸国では、字の読める人の数は非常に少ない。皆さんの中には、ドイツのですね、ロマンティック街道ていうのがあるの知っていますか。その中に、有名ローテンブルグっていう小さな城下町があります。前をお城に囲まれ、お城のように城壁があって、門が閉まるようになってる。昔は、いろんな国から、いろんなところから攻めて来る。

都市が一つの城郭都市になってますから、そこを閉める。だから、旅をする人は、その門が閉まるまでに、その村とか町に入らないと、泊まることができないわけですね。このローテンブルグにいくつかの記念の物があります。例えば、市長さんがワインを飲み競べて、敵の部隊の大将と、ワインを飲み勝って、そして敵が占領するのを追っ払ったというので、今でも、そういうようなカラクリ人形が置いてあったり、いろんなことがあります。

そこではあんまり気が付かないものがあります。それは何かと言いますと、街中の看板がみんな絵なんです。今ではみんな字が書いてありますけども、昔の看板がそのまま残ってんです。荒物屋さんの看板にヤカンがぶら下がってるんです。帽子屋さんの看板には、帽子の切り抜きの、デコレーションみたいのが看板にかかってます。靴屋さんの看板には、靴の大きなですね、こんな図案のような靴がぶら下がってるんです。みんなぶら下がってます。そうすると、私もこの前行ったときに、日本から来た観光客の人たちが、「やっぱりドイツはすばらしいわね。看板でも芸術的じゃない、どう、あの帽子屋さんの看板」と言って喜んでます。なんのことではない。昔は、帽子という字が読めないから、帽子の型をとった、そういう看板をぶら下げてた。靴屋さんという看板の字が読めないから、私のところは靴を売ってますというので、靴をぶら下げてた。荒物屋さんは自分のとこの大きなヤカンをぶら下げて、私のところはヤカンを売ってますよということを見せるのであります。字を知らなかったから。

日本のはうがその意味においては文化が進んでた。それだけではありません。その江

戸の街ではですね。いろんな形で、産業もありました。交通も日本中に発達しておりました。赤穂の塩が江戸に運ばれるというようなこと。あるいは生野の銀山の銀が江戸に運ばれるということ。あるいはですね、北のほうから北前船でもって、いろんな物資がですね、江戸に運ばれて来るということ。交通がありましたし、交易がありました。治安は遠山の金さんがいましたね。

ちょっと粉飾がありますけど、奉行所がありました。病院はですね、小石川の療養所がありました。消防もその頃からちゃんとありました。こうして見るとですね、その頃 100 万の都市で、世界で一番大きな都市でありますし、世界で一番大きな都市であつただけでなく、治安の面からいっても、消防の面からいっても、教育の面からいっても、商業の面からいっても、交通の面からいっても、交易の面から、貿易の面からいっても、一つの都市の性格を持っておりました。だから、日本は西欧近代社会という一つの文明社会が生まれたときに、私たちは東洋において、それと全く違うけども、同じような価値のある文明社会があったんだと言うのは、この梅棹さんであります。

## 明治維新とは明治革命

ただ、そういうことについて、いろいろ考えることができるんですけど、それが実は今から130年前、新たに西欧近代社会が持つてゐる文化の体系を引き受けことになりました。私たちが今まで長いあいだ持つてたその文化の体系を、ここで大きく変化させます。これを私たちは明治維新と呼びますよ。ほんとは、ある種の、政治的には一つの革命であります。しかし、その政治的には革命であるということは、日本だけで起こったわけではありません。日本は、江戸時代、徳川幕府がありましたけども、そこにはたくさんの藩があって、それが、日本という国を形成していた。それを、明治政府が、私たちの国を全部統合して一つの国にしたのが、明治時代であります。

したがって、明治維新というのは明治革命であって、藩閥の政治から一つの国民政治政府に変わるということ。同じことがプロシャです。今のドイツ、たくさんの国が分かれてたものがドイツ連邦共和国に、やっぱり一つにまとまります。イタリーも同じ頃です。それまではミラノ公国とか、ベネチア王国とか、ローマ公国とか、そのような町が中心になって國の名前が付いてたものを、イタリアという國に一つに統一したのは、同じように1868年前後であります。

言い替へたら、1868年、今から130年ぐらい前に、世界が、それぞれの道をたどって、一つの新しい価値の体系に作り上げられてきました。それが西欧近代社会と言われる社会です。私たちは、この西欧近代社会という社会の一番終わり際に、今、生きてると考えることができます。時代というものはこのようにして大きくそこで変わってまいりました。

さて、今のように、文化というものは、それぞれにあったと言いました。ドイツによっ

てもあっただろうし、日本は、西欧近代社会、ヨーロッパ社会に比肩しうるような立派な文化を持ってたと、梅棹さんは言いました。しかし、1800年代の初めになって、あるいは、1800年代の半ばになって、ようやく姿を現した西欧近代社会というものは、どういうものを中心に置いて作ったかと言うと、産業社会、資本主義の経済体制というものです。私たちは今までの農耕文明社会から、資本主義の経済体制を持った社会に変わってまいりました。そして、その資本主義の経済体制を作ったときに、それを担う中心になる単位が、国民国家というものであります。

交易をしてたときに、島津藩も監札を持ち、琉球藩も監札を持ち、どこどこ藩も監札を持ち、そして、国を制限をし、税金を取るというふうな、そういうようなやり方から、日本という国が生まれてきたというように、みんなそれぞれのところで国民国家という国家が成立をいたしました。それは資本主義の社会体制、経済体制、経済の機構に基づいて、それが生まれてまいりました。そして、この国民国家が生まれてきますと、それらが豊かになってきます。アダム・スミスが「国富論」という本を書きましたけども、国民ということを考えて、これが私たちのあらゆる対象であったという考えでまいりました。

国民が対象である。その国民が豊かになるということを考えるということ。国民が豊かになるためには、どうしたらいいだろうかと。この産業社会で持ってる特徴は何かと言うと、より良く、たくさんの物を、より安く作るという、基本的な考え方であります。それがある人は、欲望の民主主義と言いました。みんなの欲しい物を手に入れることによって、豊かになる。そして、みんなが欲しいと思う物を手に入れることができるという民主主義だ。しかし、それは、欲望の民主主義だから、どうなるかと言うと、国民国家は、少しずつ大きくなってくるにしたがって、自分たちのマーケットを外に拡げる必要があり、自分たちの物をよそから集奪してくる必要がありますから、植民地主義というものを生んできます。

こうして、イギリスが一番初めに、近代国家として脱皮してまいりましたから、スペインとの戦争に勝って、大国になって、あっちこっちに自分の領土を拡げます。近いですから、アフリカに拡げます。同時に、アフリカに拡げただけじゃなくて、今度は、東に進んでまいりまして、インドを自分の植民地化します。マレー半島を植民地にいたします。そして、一番最後にお茶を買いたいというので、中国と交易をしました。ついには阿片戦争にまでいたるのですが。

## 西洋近代社会の論理が日本へ

私たちは、こうして考えてみると、今、西欧近代というものが、産業社会の論理によって育ってまいりました。産業社会の論理は何かというと、なるべくたくさんの物を安く生産する。そして、なるべく多くの物を儲けるということが論理であるし、倫理である。なるべくたくさん儲けることが大事なんです。産業社会の一つの一番大きな目標は、儲ける

ということなんだ。儲けるということは決して悪いことではなく、そのことによって、豊かになるんだという論理であり、みんなが豊かになっていく。

だから、そこを、ある人は、さっき言ったように欲望の民主主義という言い方をいたしましたけども、みんなが一生懸命働いて、お金を儲けることができますよ。これは民主主義です。だから、その民主主義というものをどんどん発展させれば、みんながそれぞれに豊かになる。努力さえすれば、エラくなれるんですよ。こういう論理が働きますから、みんなは、どんどん発展をしていくようになっていく。

しまいには、植民地主義の中から、奴隸などという人たちもでてくる。これは、正当のお金でこの人の労働力を全部買ったんだ。だから、この人は働くのが当たり前、私はお金を払うのが当たり前。これはひとつ論理として、そのときに通じた社会であります。こうして西欧近代社会というものが、実は、生まれたということであります。

この、西欧近代社会の論理と倫理が、日本に移って来ましたのは、明治であります。中国までやってまいりました欧米諸国は、「日本という国がある。これは昔から、ジパングといわれた黄金の国である。立派な文化を持ってる国である。アフリカのように占領してしまうわけにいかないから、貿易を開こうではないか。もし貿易を開かないならば、どうぞ、私は大砲を持ってますよ。大砲で戦争いたしますか。それとも貿易をしてくれますか」というのが、安政の時代の一つの大きな出来事ですね。

「太平の眠りを覚ます上喜撰たった四杯で夜も寝られず」という、そういう状況に、日本の国がなってきたのは、1868年の少し前、1860年。ようやく、西欧近代が日本に及んできた。日本は新しい、自分の独自の文化を持っていたけれども、しかし、そのときに見た向こうの製品、それが鉄砲であっても、あるいはその他の製品であっても、すばらしい製品を持った敵に、日本の人たちは、ことに、大砲でおどかされ、軍艦でおどかされたときに「これは大変だ、日本はこれだけ遅れてるならば、西欧近代を学ばなければならない。学ぶためには、私たちの体制を変えなくちゃならない」「今までの幕藩政治ではやっていけないんだ」日本が一つの国になるということで、明治維新が、それは革命であって、私たちには新しい社会、国、国民国家がそこで成立したと考えることができます。

この国民国家が成立したときに、何が一番大事だったかというとですね、指導者であります。日本の政治、政府が一番最初に手を着けた一つは、指導者を養成して、日本全体を一つの思想、ことに西欧近代を迎えるような思想に耐えなくちゃならない。こうして作った学校が東大であります。

ところがですよ、こうして成了のに対して少しおくれて、その他の大学がたくさんできました。慶應義塾大学が最も古い大学であります。今の慶應であります。早稲田大学、あるいは同志社大学、そういうような大学、私立の学校がたくさんできます。官学、国の政治家を作る、為政者を作るというポリシーに対して、西欧近代をどのように利用して、新しい時代を築くかということを考えたのが、福沢諭吉その他の新しい指導者たちであります。

ます。

この福沢諭吉が、今の慶應義塾を作ったときに、福沢諭吉は、みんなを先生とは呼ばずには、みんなを「さん」と呼びつけるようにしました。福沢さんとか、何とかさん。先生もみんな「さん」だった。これは、西欧の民主主義ということを中心に考えたときに、今までの、お師匠様と、上と下との関係ではなくて、横の関係で、私たちの社会を、もういっべん作らなきゃならないという願いを持ってましたために、福沢諭吉はそういうふうなことを学生に言いながら、新しい義塾を作りました。

この義塾を作った精神、これが有名な、福沢諭吉が書いた「文明論之概略」という本であります。これも、一つ皆さん、覚えといてください、岩波文庫にあります。そのときの文明ということは、西欧近代社会ということです。日本が、長い長い教育、しっかりした体系を持っていたにもかかわらず、まったく違った西欧近代を迎えるようとするときに、その近代西欧の新しい世界の国トップになったものは、モノであります。そこでできてきた精神であります。

上等舶来という言葉があったんです。いいものはみんな舶来、船でもって運ばれて来る。ヨーロッパから運ばれて来る。何でも新しい。ザンギリ頭を叩いてみれば文明開化の音がしてですね、チョン髪を叩いたら、古い思想の音がするっていう、そういう風潮の中で、福沢諭吉は「文明論之概略」という本を書いて、西欧近代社会とは何か。それは上等舶来という見える文明ではなくて、それを作り出した見えざる文明をどのように理解するかが大事ということです。言い替えたら、その文明の精神的基盤は何かということを問わずには、文明の見えるとこだけを取って、靴を入れたり、洋服を入れたりすることだけが文明ではないんだという警告をしてます。

## 資本主義をとり、植民地主義をとる

私たちは、今、こうして考えたときに、西欧近代社会というのは、いったいどういう精神の中になるのかということはいつでも課題にあります。こうして私たちも、明治以来、約100年のあいだ、この西欧近代を追い続けてまいりました。日本も、また、西欧諸国に倣って国民国家として成立をしてまいりました。資本主義社会として成立してまいりました。そうするとそこでどうなるんだろうか。

資本主義社会として成立した日本は、植民地主義をとります。当然、日本も同じように、イギリスがウガンダ、あるいはケニヤを取ったように、あるいはインドを取ったように、私もまた、自分たちの販路を確保しなければならない。こういう意味で拡がってきましたのが、台湾であったり、朝鮮であったりすることは、皆さんのご存じのとおり。

やがてこれが、アジア圏、中国に伸び、あるいは東、東南アジアに臨んで、八紘一宇のような思想になったのも、実は、それは、西欧近代社会が持つてた植民地主義による国家と同じような歩みをしてたからです。ところが、欲望の民主主義という産業社会は、少し

ずつ行き詰まりを見せてまいりました。

1930年頃になったときに、ヨーロッパ諸国は、早く出発してますから、一応の成熟をみて、その成熟の中で、自分たちの持っている問題の矛盾を考え出してまいりました。日本は、あるいはドイツ、イタリーもそうですが、1868年を中心として、国民国家をつくったというところは後発でありますから、後発の国は、先進的な近代社会、フランスであるとか、イギリスであるとかに追い着くために、植民地主義を拡げてまいりました。

この植民地主義、これが帝国主義と言われるものであります。みんな帝国主義だったんですけども、だんだん成熟してくるにしたがって、自分たちの政策は間違ってるんではないかと気が付いてまいりましたときに、後発の帝国主義、日本、ドイツ、イタリーとかいうものは、まだ同じような植民地主義、侵略主義的なあり方を持って、ここに戦争が起こりました。

その当時の世界から見ると、それは帝国主義と民主主義の戦いである、その結果は民主主義の勝利になってまいりました。これが、この前の戦争でありますから、戦争が終わった後で、日本はどうなったかといったら、民主主義というものを新しく導入してくる。デモクラシーというものを導入してくる。デモクラシーというのは、今でこそ、ごく当たり前のことです。

しかし、私は、戦争中には、先ほど言ったように、軍隊にとられました。義務でしたからね。でも皆さん、「きけわだつみのこえ」などというものを読んだときに、私たちの年代の者が、どんな気持ちで戦争に行ったかということは、その中に出てると思います。私たちも戦争に勝つとは思わなかった。でも、何とかして一番いい状況の中で、日本が世界と一緒に仲良くできる場所を作りたいなというのが、私たちの願いがありました。これはそういうものを思いながら、この戦争に携わった者の苦労であります。苦しみがありました。

## デモクラシーって何だろう

こうしてですね、新しい時代になったときに、民主主義。今から50年前に私は新しい日本を担う青年の指導者の一人という意味で、アメリカに勉強に行きました。当時は、民主主義に対する理解というものが非常に難しかった。

民主主義とは何かということについて、私たちは、船の中でみんな、東大の先生や、いろんな先生らと一緒に話しながら行きました。東大の先生であったり、あるいは京大の総長になられた鳥養さんだったり、潮田さんという慶應義塾の塾長さんであったり、津田愛さんという津田塾の学長さんであったり、そういう人たちと一緒に旅行しました。民主主義て何だろう。言葉の中でデモクラシーっていうけども、いったい民主主義て何だろう。一つのイデオロギーが全部の社会を支配し直すというのは、どういうことを考えたらいいのだろうかと、苦労したことを覚えております。

しかし、そういうことを掲げて、私たちは、私たちの国もまた民主主義社会というふうになりました。民主主義社会ということは資本主義社会、産業社会が持つて一つの欲望の民主化であります。こうして、私たちも、どんどん成長して行くという形においては、この近代社会が持つてる理想に追い着くことになりますし、やがて30年、40年のあいだに、日本もまた先進工業国と言われる国になります。

先進工業国という意味においては、産業社会の中で、同じように後発であったにもかかわらず、他と肩を並べることができるような国になってしまいました。ところがですね、今いった近代社会ですね、この西欧近代というものは、何の論理に支配されてるかというと、効率の論理に支配されていると言われます。

だから、そこでは、植民地の中で収奪の思想もまた、正当化されるわけであります。都市の形成ができます。その方が大勢の人が集まって、そして、何かの生産をすることが効率がいいからです。そして、都市に集まつくると、効率よくするためにには自分たちの家族を捨てて、女房と子どもだけを連れて移つてくることが必要になりますから、拡張家族から、核家族という現象が生まれてきます。

## 子どもの教育の目標の変化

もう一つの特徴は何かといったら、教育の目標の変化であります。みんな工場に勤めます。そして、生産に明け暮れます。そうすると、子どもたちは、今まで農村にいたときは、親と一緒にあって、親の働きを見ながら「ああすれば収穫があるんだな。こういうときには、このようにするんだ」ということを学んでくる。そういうことによって、見よう聞きようでもって学んでくることが、真似び、学ぶということの原理でありますけれども、西欧近代ができたときには、親を見習うことができない。親はみんな工場に行つてしまつて、働く。そこで子どもの教育をするための場所ができなきゃならない。これが、子どもの学校の成立であります。

もちろん、先ほど言いましたように、日本の社会の中においては、400年前から寺子屋があったということは言いましたけれども、国が一つの制度を持って国民すべてが教育を受けなきゃならない義務教育をして、そして、それが、みんな生産に寄与するような人間にならなきゃならないというふうにして作り上げられてくる。実は、西欧近代社会の中における産業社会の中における一つの変化の中に生まれたのが、教育制度なんであります。

このことについてフィリップ・アリエスという人が、「子供の誕生」という本を書きました。読みにくい本ですけど、パラパラと読んでください。なぜ読みにくいかと言うと、あまりに実証的に多くのものを取り上げたために、言ってる論旨がどこに行っちゃってるのかということを探すのに非常に難しい本であります、立派な本であります。

この「子供の誕生」ということを簡単にいえば、子どもなんていうものは、人類があるときから子どもは生まれてくるんですから、子どもの誕生は昔からあるに決まってんです。

ところが、私たちが、教育の、養育の対象として、子どもというものを意識したのが、近代社会ができ上がってからだと言います。言い替えれば、近々200年のあいだに、子どもというものは初めて、私たちがトレーニングをすべきもの、次の私たちの世界を継ぐものとして、それを成長させるようになったというふうに言ったのが、フィリップ・アリエスであります、これは非常に大きな衝撃を与えました。

で、これによって示されるように、西欧近代によって、ようやく学校が生まれました。それまではアッパークラスの人は、家庭教師がついて、家庭の中で教育をして、そうでない人たちは、親が自分の身体をもって示したもの学ぶことによって、おとなになり、社会ではこれはいけないといわれるものをやめるようになってきました。

そこに生まれたものが、性別役割の思想です。一番力がある者が労働者として働く、子供は学校に行く、そうすると母親は家庭の中にいて養育するという性別役割というものが、そこで次第に確立してまいりました。

野良で働いてるときは、男も女も同じように働いてまいりました。その前は、男と女が働いて、女のとこに男は通って野良を手伝って来る。母系家族の制度がありましたのが、次第に家系を重んずることによって、父系のほうになってまいりました。

そして、それが産業社会になって、性別役割・分業を行うようになりました。したがって、女性とか男性とか区別が明確になってきたのは、実は、社会の産物、文化の産物であるというふうに考えることができます。だから、困ることは、新しい時代が変わってきたときに、そういうものの自体を一つだけ変えるわけにいかないですね。こういう変化の時代だということです。

高齢化社会の問題も同じであります。みんなが栄養がよくなってきて、長生きできるようになつた。じゃあ、そのことは悪いことかと言ったら、そうではありません。システムとしてそうなったものが、違った意味での大きな問題を生み出している。あらゆることが、このようにして、いろんな問題を生み出してまいりました。

## 天安門事件とベルリンの壁の崩壊

さて、こういう時代が少しずつ変わってきたのは、1980年ごろからです、この変化の曲がり角が見える具体的な印として、歴史学者が挙げるものは、1989年の天安門事件と、同じ年の秋に行われたベルリンの壁の崩壊であります。大変政治的な動きであります。でも、1989年の天安門事件のあれは何だろうか。

人権ということ。民主主義の中の人権ということですね。効率の論理から、人間をどう大切にするかということが問われるようになった時代。日本が戦争に負けたのは、帝国主義という一つの考え方が、民主主義に敗れたんだと言われます。これは大変大きな効果であります。ある意味においては、変化がありました。

日本が戦争に負けて、日本は、台湾も独立させ、朝鮮も朝鮮民族にお返しした。樺太は

ソビエトに返した。みんな、それまで植民地として開いてきたものを、みんなそれぞれの国に返した。

しかし、それは日本だけじゃありません。勝ったイギリスは、インドを返し、マレーシアを返しました。勝ったフランスは、仏領インドシナをラオス、ベトナム、カンボジアに返しました。インドネシアはオランダから独立をしました。多くの国が、アフリカにあつた多くの国々が、それぞれ独立しました。それまで、50いくつの国しかなかったものが、3倍に増えた。小さな国々がみんな独立したというのは、それぞれ、その国の国民の意識に基づいて、その人たちの権利を認めようということでした。

私たちは戦争に負けたけども、長い歴史の中から見ると、私たちが戦争に負けたことによって、世界が民主化されてきたということは間違いない。これは、私たちが負けたという、大変大きな失敗を犯したことによって、世界がその反省の上で大きく変化したということ、そう言うこともできるだろうと思いますね。

ただ、今困っていることは、負けたということで世界が変化したっていうのに、その変化したことに対してではなくて、負けたことに対する承認をしないもんですから、結局、変化させたということに対する承認もすることができなくなって、日本はジレンマに陥ってるというところが一つ問題なんですね。

さて、そこで、今、1989年の天安門とかベルリンの壁が一つの契機になって、私たちはもう一度世界を考えないといけなくなりました。この天安門事件があったときに、この契機になったものは何か。これは情報化社会の到来であります。それまで、ソビエト連邦共和国というのは、鉄のカーテンに仕切られてる。鉄のカーテンに仕切られてるってことは、向こうが見えないということであります。

ところが、新しい科学技術が進んで、情報化社会になったときに、上を偵察衛星がどんどこどんどこ飛ぶようになったら、ソビエトのシベリアでどれだけの穀物が取れ、どれだけのものが取れなくなったか、今年はいったい豊作なのか飢饉なのかっていうことも一目瞭然で、アメリカならアメリカの情報局にちゃんと手に入るようになりました。

大砲がこれだけあるってことをよく調べたら、大砲のこのうちのこれだけが、もう使えない古い大砲で、これしか残ってないということが分かってまいりました。同時にそのような情報は、ソ連のほうにも分かるようになりました。トップの人たちが見ると、アメリカはこれだけのものを持ってるよ、私たちはこれしか持っていない、これは戦争したら損だということが分かってまいりました。こういうふうになってきたときに、突然、形が崩れてしまったんです。

ある日突然にと言いますけれど、突然になる前にみんなが分かって、ポーカーをしてる相手の手の内が全部分かったときには、もう手の打ちようがないじゃないか。じゃあ、戦争したって、これはとってもかなわないからやめようじゃないかとお互いにそういうことになりました。言い替えたならば、そのような宇宙衛星や偵察衛星が飛ぶような、そういう

う私たちの技術の進歩が、世界を一つの世界にしなければならなくなってきたわけです。

## ソビエト連邦の崩壊

こうして、一つの世界にならなくなってきたときにベルリンの壁の後でできたものは何かというと、ソビエト連邦共和国の崩壊でしょ。パックスアメリカーナと言われた国が全部、あるいは、パックスコミュニーナといわれた、その大きな国がバラバラになって、みんな、民族とか部族が中心になった国民国家と言われるそういう単位に分けなければならなくなってきたということは問題であります。

そして、そうなってきたときに、エーリッヒ・フロムという人は、“To have or to be”という本を書いた。これもまた覚えといてください。日本語では「生きるということ」というふうに訳されました。その、エーリッヒ・フロムという社会学者は、To have or to be. つまり、持つことか、あるいは、人間として存在することか、どちらが大事なんですかという問いを、世界に対して出しました。

例えば、皆さんたちが知ってる人の中ではですね、言葉だけ知ってますかね。シュマッハーという経済社会学者が、“Small is beautiful.” という本を書きました。「小さいことは美しいことだ」これは、いろんなことにもじられました。Black is beautiful. だとかね。Japanese is beautiful. だとか、いろんな言葉で使われましてね。基本には、このシュマッハーという経済学者が、Small is beautiful. ということを、今から20年ほど前に書いたのであります。

これらのものはみんな、私たちが今まで、西欧近代が望んでたような欲望の心理学で、持つことによって、効率がいいことによって、私は豊かになるという論理は間違ってる。効率の論理は間違ってるのあって、もういっぺん考え方直さなきゃならないということになってまいりました。

物は生産しなければならない。もっと効率良く生産しなければならない。そして、無駄なものはつくる必要がない。まして、いわんや、値段を上げるために、お米を捨ててしまうということはおかしいことだと。それは論理の逆転だという言葉が出てきたわけであります。こうして、新しい、これらのこととを経済学の中から書いた人が、ピーター・ドラッカーであります。ドラッカーはたくさん本を書いていますけども、皆さんに読んでもらいたいと思う二つだけを挙げておきます。一つは「新たなる現実」もう一つは、「ポスト資本主義社会」という本を書きました。資本主義社会の後に、どんな社会が来るかという本を書きました。こういう状況の分析をして、時代の移り変わりの変化から、新たな論理と新たな方法が生まれる。こういうふうにいわれてます。

ピーター・ドラッカーは、ボランティアについておもしろいことを言ってるのです。資本主義社会が新しい社会に変わると社会のひずみが生まれます。そのときには、効率の論理をもって一つの論理構図が崩れて、新しい論理構図が生まれるまでには、50年とか、

60年の間が空きます。この間をどうしたらいいか。まず、資本主義の倫理が壊れたときに、壊れたために弾かれた人たちのためには、救済するという仕事がいります。救済するための大変な仕事をする人こそがボランティアだといいます。これが救済ボランティア。

もう一つ、新しい社会を作るときに、新しい社会の論理の組立てと方法論と、社会構図が生まれるまでには、いろんなものを補っていかなければならんものがあります。これを社会的ボランティアといいます。

社会的ボランティアというものは、例えばですね、インドネシアであるとか、あるいは、アフリカであるとか、あるいはフィリピンであるとか、私たちと同じように一緒に生きる社会になるまで、そこを助けていくような仕事をするというのが社会的ボランティアといいます。

それで、ドラッカーはアメリカ社会が成立するときに、アメリカ社会の、一番大きな仕事をする人はボランティアだと言う。ボランティアということは、みんなは自分の会社に勤め、自分の糧を得ながら、あるときには、時間の労力を捧げ、あるときは知恵を捧げ、あるときにはですね、身体を捧げる。あるときには自分が持っている経済的なものを捧げることにおいて、その時代のギャップを担っていくことこそ、ボランティアの大変な仕事をあるということをいってます。

ボランティアという言葉は、きのう、たくさん出てまいりましたけども、実は、ドラッカーの言ってるボランティアというものは、ボランティアこそが、世界を新たに産み出すということです。ぜひ読んでいただいたらありがたいと思いますね。

## 「21世紀の社会システム」のすすめ

もう一つ紹介しておきます。「21世紀の社会システム」という本が、岩波から、去年の7月に出てます。この「21世紀の社会システム」という本を訳したのは、河野健二という日本の西欧近代を支えた、碩学の一人であります。東大の丸山真男、京大の河野健二、こういう先生たちは、西欧近代を日本の中に問うてき続けた碩学であります。私たちの社会を成立させる一番根底の論理を作り上げた大変立派な学者であります。

これも読んでいただきたいんですけども、世界はだんだん変わりますよ。もう、見てください。かつてアメリカが世界を支配した。アメリカが世界の警察官であると言われたけども、そうじゃないでしょ。アメリカは衰退しております。それではアメリカの衰退によって、ヨーロッパは力を持ってるか。ヨーロッパは、今までどおり沈滞をしております。日本の超高度成長はどうか。もう終わりで、決して2度と、あのような夢を見ることはできませんよ。そして、意外なことに中国は、これからもっと躍進するでしょう。

皆さんの感覚のとおり。ロシアの資本主義化というものを目指す意欲は、非常に低調です。ロシアになってからは、少しずつ資本主義化してくるというけど、その意欲は低調です、やっぱり。資本主義ということに対して意欲を持ってるけども、大きな社会危機にみ

まわってるのは、東ヨーロッパ、チェコであるとか、ルーマニアであるとか、そういう国であります。

これが、今の状態でありますから、短期的には思いがけないことがたくさん起こったとしても、歴史はそんなに大きく変わらないかも知れないよ。大きく変わらない中で、何が大事かというと、軍事や経済発展というものは、変わってくるだろうけども、もっと違ったところで大きく変化しなきゃならないのは、私たちが考へてる文化なんであります。新しいイデオロギーというものが作られなきゃならないのであります。

ボランティアの論理というものは、どんな論理なんだろうかと。効率の民主主義と言ったときに、いったい、人間を大事にする民主主義って、どういうことなんだろうか。私たちは福祉社会ということを考えたときに、経済が片一方でうまくいってるから、毎日働いてきて、ちょっと後ろを向いて、みんな仲良くしましょうというのが、福祉社会じゃないのであって、福祉社会そのものが一つの体系になる、welfareではなく、well-being. みんなが豊かに生きるという社会を一つの論理として、文化として持とうとするならば、それをどうして見つけてくるのか。このことが非常に大事になってくる。

これからは、経済の戦争であるとか、軍事の戦争であるとか、小競り合いとかいうものは、いっぱいあるだろう。あそこに石油が出たから、あそこを取ろうとか。こちらのところで、もう少し軍隊を配置しようだとか。いろんなことは、あるかも知れんけど、そんな小競り合いよりも、新しく21世紀が生まれるときに、福祉、みんなが豊かに生きることを一番大きなイデオロギーの問題にして、その問題の中で新しい文化を作ることこそ、21世紀に課せられている大きな仕事なんだ。かつての資本主義であるとか、かつてのデモクラシーであるとかという他に、どんなものを見出すか、これがこれから問われてるよ。私たちがここで考へてるのは、そういうことなんです。

## Build the future への努力を

ロータリーは決して経済界でもって、豊かな経済社会を作ることにみんなが努力してるんじゃない。私たちが努力することは、どういうことか。“Build the future”といいます。新しい世界を作ろうといつてます。新しく作ろうというときに、私たちがお金を出して、私たちが軍隊を作ったり、私たちが建物を作ったりして、新しい世界を作ろうといつてるんじゃない。そんなこと、できるはずもありません。

でも、私たちができるることは、どういうことか。180カ国にあるロータリアンたちが、みんなと同じような人たちを集めて、みんなが同じように、新しい社会を築く、それは心豊かな社会なんです。みんなが、みんなをいたわり合うような社会なんです。

そういう社会を作ったときに、世界は、その新しいイデオロギーによって変わってくる。これ、ロータリーの側からいうとこじつけですけども、しかし、社会の側がそういうことを要求しているときに、いつの間にか、小さなロータリーが「みんなと仲良くしようや」

といっていたものが、実は、国連からも、大変大事に考えられてくるようになりました。そういう人道的な考え方を、全部に支配させることによって、世界が新しく生まれるんなら、いいじゃないか。みんながボランティアになろう、こういう雰囲気が出てきたということをお伝えしたい。

私たちは、ロータリーの持つ命を若い人にも伝えたい。そして、それを実践する。日々の実践の中から少しずつ拓げていくことによって、新しい時代が来たときに、私たちがいつの間にか、その中核にあるような位置を占めるようになるであろう。もっと、言いたいこと、たくさんあるけども、やめました。どうぞ、本をいくつか紹介しましたから、後で補っておいていただきたい。終わります。(拍手)

## 質問・意見

——ありがとうございました。質問等、ございますかね。

**西村** 西村と申します。手、挙げたものの、即、何を聞いていいのか、はっきりしないんですけど。学問的なことになるんですが。西洋近代文明の転換の一つに、資本主義になったということがあるんですが、その資本主義の産み出した原点として、先生もクリスチャンなんんですけど、個人的に宗教とは、また、別にして、社会学的な動きとして、プロテスタントの预定説が逆転して、そこに、自分が救われる確証として、ボランティアに励んだり、今ある職業に励むという思想が生まれて、そこから経済が発展していくって、資本主義が生まれたっていうふうに習ったことがあるんですけども、これからの未来を考える上で、そういう歴史とそこに流れる思想とか、哲学、宗教が大事だと思うんですけども、それは、先生は、どう考えになりますか。

**今井** 今のお話、大変大事、十分に私が、話できなかったこと、言ってくださいました。先ほど、「文明論之概略」のときにも、ちょっと感じてくれたと思いますけども、福沢諭吉たちが、資本主義社会というのが成立したときにでき上がってきた、この一つの現象の後ろに、もっと見えない文明がある。これが、思想であったり、哲学であったり、あるいは、そのときを産み出してくれた信仰であったり、そういうものがあります。そのことを理解しなさいと。言い替えたら、資本主義社会、あるいは、西欧近代の後ろにあるプロテスタンティズムというふうなものの意味は何かということを、やっぱり理解しなさいということは、福沢諭吉たちも言ってるんですね。ところがね、ここで大事なことは、私たちはそうして資本主義社会が進んだときに、キリスト教の社会の人たちも、そのことをプロモートしてきたんだけども、やっぱり、いくつかの問題が出てきました。

このことを答えるための本として、例えば、マックス・ウェーバーが「プロテスタンティ

ズムの倫理と資本主義の精神」という本を書きました。これは、1906年に出版されてますから、ちょうど、ロータリーが生まれたときと一緒にあります。ロータリーは、資本主義の社会が爛熟して、いくつかの問題を産み出したときに出てきた運動なんですね。

「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」というのも、物を豊かにして、そして、それをみんなに分け合ってくるということはいいことだけども、物を豊かにさせるという欲望だけが、個人の欲望になったときには、それは間違いだと。したがって、それを作るときには、どういうことが必要かと言うと、自分の仕事は神様から与えられてる天職だから、天職によって儲けたものはみんなに分けなくちゃならないという論理がないと、ほんとの意味で資本主義にはならないよ。こういうことを言うたのが、マックス・ウェーバーなんですね。

だからマックス・ウェーバーは、資本主義社会は、論理としては、キリスト教の精神が、育てたにもかかわらず、いつのまにか物質を中心とする、効率を中心とした社会に変わってしまった。そのことに対する警告を、この著書でします。同じことですけども、キリスト教って、こんなことがいわれています。

神様の真理を知ろうとして、学問が生まれた。だから、学問の一番最初に生まれたものは何かと言うと、天文学であるとかね、あるいは数学であるとかね、そういうものから生まれました。宇宙を支配する神の意思は何かということを知りたいために天文学は生まれたんですね。こんなふうにして生まれた学問が、少しずつ学問の世界として、自分の論理を展開していくうちに、いつのまにか、神様の意思は何かということを考えるのではなくて、どうすればもっと違ったものを知ることができるかという「知の論理」に変わって参りますね。その「知の論理」というものが「欲望の論理」と結び付いて、より多くの物を作るという科学技術と結んだときには、そうなりました。

お医者さんがたくさんおられます。お医者さんの本当の意味は何か。人間の命を救うことだったんだけども、今や、まさに、生きてる人の心臓を取りだしてね、死んだ人の、生きた心臓と入れ替えてね、一丁上がりって言って、部品をくっつけて、一つ新しい製品を作るみたいな技術が、一つの医術になってきた。

これが進んでまいりますと、クローン人間を作ることもできてしまう。そのときに問われることが、いったい人間とは何かということ。片一方に基本的にある、キリスト教であっても、イスラム教であっても、仏教であっても、本当に私たちを超えた大きな力が、人間をどのように成長させるかということに謙虚になること。それは宗教です。

信仰と宗教は少し別にしていただくといいんですが、宗教というのは文化財であります。しかし、究極の大きな力の中で、私たちはどのように謙虚に生きるかということを考える、それを持つことが信仰ということあります。

「キリスト教は、こういいましたね、ああいいましたね」というのは文化なんです。それは時代によって違ってるし、言葉としては違ってるものも、たくさんあります。「プロ

テスタンティズムの倫理と資本主義の精神」というのは、その時代の、神の側から見たら、こう考えて、私たちが考える、その論理。だから、その意味においては、キリスト教が、もう一度力を持つか、あるいは仏教が力を持つか、イスラム教が力を持つか、そして、本当の人間をどう作るかということに力が持てるか。持てなければ、オウム真理教みたいに、ただ、単なる文化として、泡沫になってしまうかもしれない。これも大きく課題として与えられます。

## ごあいさつ

R I 2670地区  
インカミングガバナー

吉村 雄治

(高知南RC)



——今ご紹介いただきました、私、2670地区の7月からガバナーに就任をいたす予定の吉村でございます。皆さん方、この3泊4日は、長いようで短かったんだろうかというふうに、私は思います。今井先生の初日のお話もございましたし、また、先ほどは、非常に詳しく順序を追って、皆さんもお分かりになりよいようなお話をいただきました。RYLAセミナーは、若いこれから21世紀を背負っていく、皆さま方の、いわゆる指導者訓練をしていくという目的で、この19回を迎えておりまして、来年は20年という締めのわけでございますが、皆さん方、いろいろ、先生方のお話を聞き、お互いの討論を経てですね、いろいろの考えが変わった方もあるらされるかと思思いますけれども、指導者としてのいろんな知識を皆さんのが得ていただいたというように思います。

そういう意味で、どうか皆さん方、職場へお帰りになってですね、これから職場のリーダーとして、また地域社会のリーダーとして、グループのリーダーとしてですね、ここで学んだことを、一つずつ実践をしていただくように、ぜひ、お願いをしたいそれが、われわれロータリーの願いでもございます。そういう意味で、きのうのフォーラムをお聞きしておって、一つ感じたこと、それから皆さん方がこれからどうしてもしなくちゃならんことが一つございます。

これは何かと言いますと。きのうのフォーラムの中で、教育の問題が出てまいりました。子どものときから、いわゆる、三つ子の魂と言いますか、いろんなしつけなり、そういうことをしないといけない。とくに、この福祉文化社会を迎えるに当たってですね、とくにそういうことが必要だというようなことを発表されたわけです。

そういう意味からいくとですね、それは、即、皆さん方に返ってくる言葉だと、私は思います。皆さん方も、学校に行っておられる方もおられると思いますけれども、大部分の方が社会で、これから就職をなさる、また現在、職に就いておられるという方でございますし、これから、まもなく結婚もされ、子どももできる年代の皆さん方でございます。そういう意味で、自分たちの責任ということで、一番身近なことで、自分たちができることは、これから、自分たちの作る家庭を立派な家庭にしていただきたい。そして、子ど

もさんができます。その子どもさんの教育もですね、人まかせじゃなしに、やはり親が自分で、自分の子どものしつけをしていくと。これが、私、一つの原則だろうというように思います。

よく、学校の責任だと言われる方もありますけれども、やはり、学校へ就学するまでの子どもさんの、基本的な社会的いろいろな問題、生活習慣とかを、自分の子どもにきちんと躾をして、その上で、学校で、学問の知識を学ばせるということが必要かと思います。私は、皆さん方に課せられた課題で一番大事なのは、自分はこれから、社会人となり、親となり、家庭の人となってですね、自分たちが責任を持って、皆さん方のまた次の世代を育てていく必要があろうかと、そういった意味で、青年としての、いろんな役割、また、親としての役割を十分認識をして、お帰りをいただきたい。これは、昨日のフォーラムの中で、いろいろ出したことの中の一部分でございますけれども、皆さん方は、今すぐできることの一つとして、まず、教育の問題を、自分からひとつやっていただきたいと思います。

私は、3月7日から1週間、アメリカのアナハイムというところで、ガバナーになるための教育を受けてまいりました。そのときに、会議場の入り口に、Enter to learn という言葉が書いてあります。それから、帰るときには、Go force to serve という言葉。入りて学び、出て奉仕をしようと、ロータリーのそういった言葉がございます。皆さん方、ここで学びました。

これから社会へ、皆さん、それぞれの地域社会へお帰りになって、どうか、ここで学ばれたロータリーの精神に基づく、いろんな、これからの中の青年としてのあり方をお考えいただいて、また、ロータリーのことを少しでも、地域社会にご吹聴いただければ、非常にありがとうございます。そういうことによって、このRYLAセミナーの趣旨が十分、生かされるんじゃないかなというふうに思います。どうか、お帰りになりました後も、十分趣旨をご理解の上、地域社会のために、ご奮闘をお願いをしたい。

なお、このRYLAセミナーを運営するにあたりまして、両地区の関係の皆さん方、大変お世話になりました。また、講師の皆さん方にも、大変お世話になりましたことをお礼申し上げ、特に、カウンセラーの方には、この4日間、親身になって、ご指導いただいたことについても、心からお礼申し上げます。

以上をもちまして、閉講の言葉にさせていただきたいと思います。どうも、ありがとうございました。(拍手)

## ごあいさつ

R I 2680地区  
バストガバナー

森 滋郎  
(姫路南R C)



——ほんとは、田中ガバナーが、お出でになるはずなんですけども、身体の調子が悪いというので、お帰りになりました、私が出てきました。

昨日、来たんですけども、この福祉文化というのは、難しいことを今井さんおっしゃったなと思ってびっくりしたんです。それに対してあんた方が、ほんとに正しく、的を得た答えをお出しになっとるのを見て、また、私、驚いたですね。

で、先ほどから、今井さんが、こう行って、キュッとここで曲がった絵、描いたね。あのキュッと曲がったところが、あなた方なんですね。今までのようにスウーッと、こう行きなさいと言うとった、そこで、キュッと曲がらんならん。

つまり、来世紀になりますと、今から25年経つと、深川さんがおどかしましたね。老人がこうだよって。そのほんとのキュッと曲がったところに、あんたがおらんならん。そのキュッと曲がったところを、うまく行くには、今までのように、相手ぶっ潰して、やっつけえというような人間ではダメだよと。そこに、どうしても福祉という気持ちがないとダメだよということをおっしゃったですね。私、あの、老子さんが好きなんですね。孔子、孟子、老子がありますよね。あの老子さんはね、だいたい、嫌なことがあると、山へ逃げてしもてね、あいつは卑怯な男やと、私は、中学校時代思とったんです。ところが、だんだん年取ってくると、老子さんはすごいですね。孔子さんが37歳のとき、老子さんに会ってね、「老子ってエライ人やわ。鳥やったら、弓矢で落す。魚やったら網ですくうけど、老子は、どないもできひん。ありゃ龍や」こう、孔子さんがおっしゃってます。論語に書いてありますね。

それほど老子さん、好き。その老子がね、「三つの宝がある。吾に三宝あり。一つは仁の心」仁の心というのが一つです。「二が僕」僕約の「僕」で、三番目がね、天下のこと先に立たず。ワイがワイがと出て行かないんだよ、というのが、老子さんの三つの宝ですね。

この「仁」というのは、「にんべん」に、「二」でしょ。二人が一人なんですよ。私があなたなんです。あなたが私なんです。これ、先ほどの福祉の心になるんじゃないですか、

ね。2番目が、「僕」ですよ。畳、1畳あったら、それでエエやないか、寝るところあったらエエやんか。御殿とか、そんなものはいらんじゃないかというのが老子さんの考えですね。私は、ガツンときましたね。

私は、もっと大きな家で、もっと立派な、こう思つたけど、「何言うとんの、おまえ、寝るときは、その家いっぱい寝られへんじゃないの」。その老子の、「僕」の心で、私は、いつも、老子さんが、「仁」と「僕」と言うとる。キリストさんに聞いたらね、先ほど、キリスト教の方、おられましたね。あのマタイ伝の7章の13節ですか、山上の垂訓いうのがありますね。

山の上でキリストさんがおっしゃった。「自分にしてほしいことを人にしなさい」キリスト教は愛だと、愛の宗教です。その愛の根元というのは、「自分にしてほしいことを人にしなさい」これが、キリストさんの、いわゆる黄金律と言うんですねえ。これも、結局福祉の、「自分にしてほしいことを人にしなさい」ねえ、そうでしょ。

お釈迦さんは、どないおっしゃってるかと言うとね。18番の願望と、お寺さん、おられますけども、「ひとりでも迷ってる者がおるあいだは、オレは成仏しない」と、こうおっしゃってます。

18ですか。18の請願いうのがですね。これ、結局ね、お釈迦さんも、キリストさんも、老子さんも、みんなね、結局、このボランティアの福祉のね、親玉ですよ。これが、この、曲がったところで必要な、その、曲がった時代の皆さん方に、ぴったりと大事な、きょうのお話の中で、大事なものがあるんですね。皆さん、居眠りせんと、みんな、よう、昨夜遅くまでペチャペチャしゃべっとったようですが、お元気で、その、真面目でやっとられます。私ね、皆さん見て、日本大丈夫やと思いました。ありがとう。(拍手)

## ごあいさつ

R I 2680地区  
パストガバナー  
セミナー アドバイザー

深川 純一  
(伊丹RC)



——皆さん、お疲れだろうと思います。この3日間、あっと言う間に済んだお気持の方も、長かったなと思われる方もおられるかも知れません。いろんなことを話し合いました3日間であります。ことに、障害者福祉の問題が大きな話題にもなってたと思います。で、今、福祉の先進国といわれているスウェーデンであります。そこに知恵の遅れた子どもたちを預かっておられる地域作業所というのがあります。その所長さんの話をご紹介します。

今、福祉の先進国といわれておりますけれどもね、18世紀までは、スウェーデンではね、知恵遅れの子どもさんが生まれると、森に捨てられたんであります。で、夏は熊の餌食になり、そして、冬は凍え死んでしまうのであります。で、そうすることが当たり前のことだとして、何に疑問も抱かなかった。これが、実は、18世紀までのスウェーデンの社会、社会環境だったんです。

ところが、その親ごさんたちが立ち上りました。「こりゃ、どうしてもおかしい。同じ人間でありながら、どうして、そういう悲惨な目に遭わなイカンのか」そして、立ち上がって、そして、それに、福祉運動家たち、それが、だんだんだんだん、意識が拡がって、その救済運動が出てまいりましてね、結局、今では、障害を持ったということが立証されたら、ただちに裁判所によって、国家からの救済命令が出る。そういう福祉の先進国になってきたわけであります。

これは何を意味するかといいますと、やはり、当然だと思っておられた、こんなことを改めるのは、とても不可能だと思いながらも、その親ごさんたち、福祉運動家たちがですね、高々と理想を掲げて、それに燃えて、この運動を続けてきた。そのことによって、今のすばらしい福祉国家が出て来たわけであります。

したがって、キャンプファイヤーのときも、フォーラムを通じても、皆さん方のご意見の中には「自分のできるところから、やり出したい」そういうご意見がございました。これは大変大事なことなんですが、もう一つ、私はね、自分ができるかどうか、分からぬけれども、できることかも知れないけども、いつも理想を高く持って、それに燃えて行動していく、これが、一つ大事なことじゃないかと思うんであります。

だから、できること、それも大事であります、為すべきこと、そして、為すべからざることを、はっきりと心に留めてね、そして、行動していくわけであり、いつも、理想を高く持ってほしい。それが一つのお願いであります。

それから、このR Y L Aで、いろんなことが話し合われて、皆さん方の心に何か灯ったかも知れない。あのキャンプファイヤーの火を見つめながら、今井先生のお話を聞きながら、皆さん方の心に何かあったかいものが灯ったかも知れない。あるいは、灯らないかも知れない。そして、皆さん方が灯らなくとも、地域社会に帰って、何か感ずることがあるかも知れない。ロータリーで、そういうものを期待して、このR Y L Aが開かれておるわけであります。

ロータリーとしてはね、ついには皆さん方の心に何も灯らなくっても、私どもはかまわないとと思っております。ただ、ひたすら、何か灯ることを期待して、そして、その種をまき続ける。そのことが、地域社会の人たちに、ロータリーがやってるということを知られなくても、私は、いいと思うんであります。ただ、黙々と種を撒き続ける。それがロータリーだと思っておるロータリアンもいるっていうことを、心に留めておいていただければと思うんです。

で、皆さん方も、どういうことになるか分からなくっても、とにかく為すべきことを心に決めたら、それを何とか、それに向かって、それを為し遂げようと努力をしていただきたい。これがロータリーからの、ただ一つのお願いでございます。

本当にご苦労様でございました。また、いつか、皆さん方と楽しく語り合える日があるかも知れません。それまでご活躍を祈っております。ありがとうございました。(拍手)

## 閉会の辞 ならびに感謝

ディーン

山口 徹

(神戸RC)

### 第19回 RYLAセミナー

1997.3.27~3.30 施設: 神戸YMCA泥島野外活動センター  
主催: R.I.第2670地区・R.I.第2680地区・RYLA運営委員会



——いよいよ最後になりました。私は、このセミナーで、何をしたかと問われますと、私、何にもしなくて済んだと思っています。皆さんの協力があったからだと思っております。ただ最後に、この4日間、ごいっしょさせていただいて、これからの方々への思いを、少しお伝えしてご挨拶に代えたいと思います。

私は、あの2年前の大震災を通して、いろんなことを学ばせていただきました。もちろんYMCAは、約7万人に及ぶボランティアの人たちの参画を得て、あの地域でボランティア復興活動をさせていただきました。その中で、私は、人が見えてきました。あるいは、地域が見えてきました。社会というものが、よく見えてきました。そして、そのことを通じて、今まで以上に、自分が変わっていく姿を見出すことができました。それはなぜかなあと思ったんです。

それは、日が経つにつれて強くなってきました。皆さん、ご承知の通り、あの震災では、6,425名の人たちが亡くなっています。その中で、私はYMCAという青少年団体で働いておりますから、その関連で申しますと、18歳以下の子どもたちは、566名亡くなっています。その家族の思いがどうなのかと、常に頭にあります。また、天に召された子どもたちのことを思いつつ、逆に、今、残されてる子どもたちが、生きている。あるいは生かされているということの意味を、やっぱり私たちは伝えていかなければならないと、私は痛感している次第です。

仮設住宅にも、まだ、6万8千人ほどいらっしゃいますし、ややもすると、仮設住宅の人たちばかりに注目がいきますが、今、申し上げるような子供さんを亡くした家族に、何をしてあげることができるのかなあと思うときに、やはり、そっとそばにいてあげれる存在でありたいなと思うのです。今、パストガバナーの皆さんもおしゃったように、何ができるか分からなければ、そのそばにいてあげることはできるのではないかと、その中で、どのように手を差し伸べることができるかということを考えていきたいと思っています。

そうしますときに、私どもは、私個人で考えると、どういう教育を受けてきたかなと思

うんです。今井さんが先ほど、社会の変化、地域の変化に、私たちはどう対応していくかということを、ずっとお話をなさったと思います。そのとき、私も思うんですが、私が受けてきた教育というのは、少なくとも、変化していく社会に、如何に、どう適応させるかということを、一生懸命、教え込もうとしてきたと思います。そういう教育を、私は受けてきたと思います。

が、そうではないんではないかということだと思います。すなわち、私たちが理想とする社会を、如何に作っていこうかと考えさせるのが、私は、教育だと思うんです。そういうことに、今、日本の教育は気付き始めているのではないかと思うときに、このRYLAセミナーで、いろいろ気付きがあったと思います。

辻野先生が、最後に、concern という言葉を使われました。いろんなことに関心を持つてもらいたい、ということをおっしゃいました。そして、片岡先生は、取り残されることのない、みんなで一緒に生きる喜びを感じ合える文化、いわゆる福祉文化を築いていこうではありませんかとおっしゃいました。

皆さんのそれぞれ置かれてる立場で考えるならば、社会人も学生もいますけれど、私は、今の情報化時代の中では、決して一方的に受け止めるのではなくて、それをよく、やっぱり、吟味していただきたい。新聞を読んでいただきたい。新聞も一つではダメです。やっぱり二つ以上は、読まなきゃならないと思いますし、皆さん方が、ぜひ、アンテナになって、いろんな気付き、あるいは、関心を持って歩んでいただきたいという具合に思っております。そのために、私は、皆さんに、より良い生活ができるために、陰で努力させていただきましたけれども、私一人では、もちろん、ないわけあります。

ここで感謝をしたいと思いますが。まず、寝食を共にされましたカウンセラーの皆さん、お立ちください。どうも、お世話になりました。ありがとうございました。(拍手)

そして、A、B、C、D班の皆さん、ほんとにありがとうございました。お互いに感謝しましょう。(拍手)

運営委員の皆さん、お立ちください。どうも、ありがとうございました。(拍手)

そして、きょうも、駆けつけてくれました、他のロータリアンの皆さん、どうぞ、お立ちください。ご支援いただきまして、ありがとうございました。(拍手)



參  
加  
者  
感  
想  
文

## A 班



### A班カウンセラー 坂井 幸博

カウンセラーという立場で初めて参加した今回のセミナーで、不安と期待が入り交じった気持ちでした。はたして受講生の指導的存在でいられるのだろうか、開講式まで感じていました。しかし14名のA班の受講生と顔を合わし、キャビンで自己紹介をしたとき、すぐに不安は飛んでしまいました。「仲間だ！」そんな人間としての心に通じ合うものがあったからです。

同窓の大森君、高石さん、鈴木君はすぐに名前を覚えられ、次の日には全員の名前と顔が一致しました。それぞれ地区を代表してきているだけに、素晴らしい方々ばかりです。

リーダーに大森君が選ばれたのも、それからの活動進行に大変適していたようです。女性リーダーの坂東さんもよくまとめました。チームのフォーラムでの発表において、全員の意見を生かして代表して大森君が発表したとき、思わず全員が終了直後に拍手したのは感動させられました。しかしこれは女性カウンセラーの山路さんの目に見えない指導があったことを私は感じました。そしてカウンセラーのあり方を学ばされました。

今後受講生の皆さんのがこのセミナーを通して大きく、心豊かな人間として成長し、社会に貢献してくれることを期待いたします。最後になりましたが、運営委員の方々に心から

お礼を申し上げます。

### 森田 孝明

「これからどう生きるか」というテーマでさまざまに語り合い、考えあったこの4日間は非常に意義深く、その意味で本当に短すぎる4日間でした。

自分のことを振り返って考えれば、「どう生きるか」というテーマについて漠然と考えたことはあっても真剣に時間をかけて考えたことはありませんでしたし、自分の中で何らかのまとまった形をとったこともありませんでした。ですから実際にここに来るまで不安で仕方なく、あまり行く気もありませんでした。今から思えば「そういったことを真剣に考えていない自分」を認めるのがイヤだったからかも知れません。

ここに来てさまざまな人と出会い、さまざまなお話をうかがい、そして真剣に討論して、本当に来てよかったです。正直に言えば、今まで僕は「福祉」という言葉から逃げてきました。「自分には出来ない」と考えて避けてきました。しかしこれからは自信を持って「福祉」というものに相対することが出来ると思います。このような真剣な討論の機会を与えていただいたことで自分の中の「何か」に気づけたと思います。今回のセミナーを通じて、僕が何か変わることが出来たとしたら、そのことではないでしょうか。

僕は「出会いこそ始まり」であると信じています。なによりここで多くの人と出会い、交わされたことは、きっと僕のこれからのかの心の支えになることでしょう。その意味でもっと多くの人ともっと多くの時間をかけて交流を持ちたかったです。

これから自分がどう進んでいくことになるかわかりませんが、どのような立場に立つことになろうと常に「今、自分にできること」を自分に問い合わせながら生きていくこと。これが今回のセミナーを通じて僕が自分に課した宿題です。

書きたいことはまだまだあるのですが、最後に今回のセミナーにかかわってくださったすべての方々に感謝の意を表しつつ、筆をおきたいと思います。本当にありがとうございました。

### 鈴木 武雄

私の日常生活において、新たな分野に一步踏み出すチャンスを今回のセミナーで与えてくれた。

今後の将来を見据え、展望していく上で、友と語らい、討論していく中、新たな自分の発見ができたのではないか。さまざまな業種のある中で、1名を選んだことに討論のおもしろさ、深み、白熱さを生んだ。

キャンプファイアーを取り組み、みんなで一つの火を見つめること、これが今回のセミナーの大きな目標であった、と私は思う。

私が深く感銘した「自分を動かすにして、他人を動かせるか」という今井鎮雄先生の言

葉は、今の私に足りないもの、補っていかなければならないものと受けとめている。

新たなる自分の発見、そしてそれを実践していくことで、今回お世話になった皆様方に恩返しし、若者のリーダーとして活躍、率先していこうと思います。

4日間ありがとうございました。

### 山崎 玄

今回のライラに参加することによって、また新しい人と知り合って、自分にとって新しい意見を聞くことができてよかったです。自分以外の意見が正しいとか間違っているとかないと思っていて、考え方は千差万別だと思いますが、話し合う中で、自分と似ているところ、違うところがあるがよいところを吸い上げて自分に吸収できる場だったので、大変感謝をしております。

現在、私はボイスカウトという団体の中でリーダーをしています。リーダーになる前にボイスカウトの指導者のための研修を受けて、ボイスカウトについて勉強をしました。そして今回のセミナーで講演された人の考え方や、ロータリーの基本的な活動方針が、活動の原点に立ち返ったときに、ボイスカウトとほとんど似ているのではないかと思いました。

私は「何故人間は生きているのか」あるいは「私は何のために生きているのか」という悩みを高校生の時にもちました。何のために生きているのかというのには自分なりに答えを出したのが、人生の中で何か自分にできることを後の世代に伝える、残す、教えるのではないかと考えました。他の人はどう思うかわからないが、私はこのセミナーで他の人の意見を聞くことによって、さらにそう思うようになりましたが、何かについては私はまだ見つけることができません。今後の生活で見つける努力をしなければいけないなと思いました。しかし、何故人間は生きるのかという答えはまったくわかりません。もしこの疑問に答えられる人がいたら教えてください。

今後としてはまだわからないことが沢山ありますが、ボウスカウトのリーダーとして青少年・少女の教育をしていきたいと思います。

### 稻垣 純

初めて余島へきましたが、自然が多く空気がおいしく、環境の整ったところだと思いました。この中でRYLAセミナーが行われて本当によかったと思います。RYLAセミナーを終え、さまざまなことを学び、また考えさせられました。3日間の講演は想像していたものよりも迫力があり、またひきつけられるものがありました。その中で聞くだけでなく考えさせてくれる場を与えてくださり、またグループでの話し合いの場を与えていただいたことにより、他の人の考え方や自分の考え方を確かめることができました。

今、まだ考えがまとまらずにいますが、もとの生活に戻ったとき、この4日間のことを

おもいだしながらこれからどう生きるのかを考えていける気がします。

自分の考えとはまた違った考えを知ることができ、今まで自分を中心とした考えを持っていたことをとても恥ずかしく思います。他人のことを思いやることができるような考えをもちたいです。

そしてキャンプファイアですが、あんなに静謐なキャンプファイアは初めてで、炎をずっと見つめているだけで温かくなり、ジーンとくるものがありました。そのことで自分を見つめることができた時間になったと思います。思索の時間もありましたが、雨で外にでることができず、自分をまっすぐ見つめることができなかったのが残念です。

最後にこのような場を与えてくださったロータリアンの方々、またロータリーの関係者の方々、本当にありがとうございました。

### 西村 雄子

まず最初に、この機会を与えてくださった梶浦先生や小野さん、ロータリーのみなさまに感謝いたします。またお世話してくださった山路さん、坂井さん、大勢のスタッフ、講師の先生方に本当に感謝したいと思います。このセミナーを通して多くの人たちに会い、話し合うことによって、刺激されたり、気づかされたり、またもう一度自分の考え方と共通のものを見いだし、確信を深めることができました。

改めて気づかされたことは、医療や介護福祉に携わっている人から家族の大切さや愛、本当の思いやり、人として生きるということはどういうことかということです。

確信を深めたことは、ボーダレスといわれる21世紀を、一人の地球人として生きていくためには、過去の歴史、異文化の根源となる宗教、哲学、思想を知ろうとし、できるだけ理解することが、すべての人々が平和であるための方法であり、戦争や紛争を予防できる一つの手段であること、21世紀に共通の価値観を見いだす一つのきっかけであるということです。また教育の重要性。順応する教育でなく、理想を現実とする教育という言葉が印象的でした。

「どう生きるか」と問われたとき、個人としては、医療や介護に従事することはできないけれども、老人をいたわり、両親はできるだけ自分で世話をし、自然にゴミを拾い、身障者の手を引いたりすることが無意識のうちにできる人間でありたいと思います。また地球人の一人としてはなにが理想か、正しい道かを自分で判断できるよう、政治や社会、宗教などの情報を多くもち、なにを根拠とするかを自分で考えられる人間になりたいと思います。「この問題についてどう考えるか」と問われたとき「わからない」「知らない」と答えることは、新しい時代を暗いものにしていくと思います。

また、企業家として、利益の追及と福祉の間に矛盾を感じるという人や、それぞれの立場で未来を考える人々に出会えて本当によかったです。ありがとうございました。

## 岸本 直子

今回のこのライラセミナーに参加させていただいて本当に多くのことを学んだように思います。福祉、ボランティアの精神とは何かということがわかりました。大学生になるまでは何気なく生活し、勉強し、大学生となってボランティア活動も「私にはこれだ」と思ったわけでもなく、何気なくやってみようかなという感じで始めたように思います。

しかし活動していく中で多くの疑問、矛盾、壁が私の気持ちの中で生じてき、私はなぜこの活動をしているのか、どうして続けているのかということがわからなくなり、森田君が言ったように、自分自身に嫌気がさしてくることがたくさんありました。そして今回このセミナーに参加し講演を聴き、みんなと論議しあう中で「あっ、そういうことだったのか」と気づかされることが多々ありました。生きた学問とはこれかと本当に感動しました。学んだことを生かしていこうと思います。

多くのことを感じ、書ききれないほどの思いの中で「私の新しい生きざまがここから始まるのでは」ということを言いたいと思います。

ライラセミナーの関係者の方々、本当にこのような素晴らしい機会を与えていただきで言葉に言い表せないほど感謝でいっぱいです。そしてA班の人たち、みんなと話す中で、人間のすごさがわかりました。やはり人は人に支えられ、人によって成長するのであると感じました。ありがとうございます。

## 立山 純子

「これからどうして生きるか」をテーマに学んできたが、自分の生き方、それが福祉文化を作るという共生社会の創造につながるという大きな広い考え方、最初小さな自分が圧迫されそうな気がした。しかし、今、それを目指して生きていこうと思い、実践に移そうと考えることができる。

「福祉文化は福祉の心である」と人間のあり方を考えるとき、人を愛するということの本当に重要なことに気づかされた。キリスト教でいう隣人愛があるが、福祉の職場で働く自分にはその難しさをたびたび痛感し、ある程度のやさしさを他人にはかけるかもしれないが、愛せなくてもいいのではないか、そんなことはあり得ないのではないかというマイナス志向さえ働いたことがあった。

しかし余島で美しい空をみたとき、私の心の中の純粋な部分が揺るがされ、また美しい緑に心がよろこび、自然を心から感謝し、神との交わりを体で感じたとき、本当に人が人に開いて捧げる愛の心も、相手の人の中にある心の清さ、美しさを引き出すことが、本当に自然にあるのだと確信した。そして私自身人の心のやさしさに自分も優しさを引き出される体験を意識を持って感じたとき、福祉文化を目指すことができる、みんなの幸せを願いたいと思うようになった。人を愛するとき、やはり愛せないことがあって何度も葛藤が

起くるだろう。しかし、これからどうして生きるかと前向きに取り組むとき、私自身の中で今までと少し違うものが始まるような気がした。みんなが豊かに生きる社会、文化を目指して進んでいく自信が得られた。また、自分の高揚だけでなく、それを一つの新しい論理として、多くの人々と一つの体系を目指していくよう、セミナーで学んだことを地域で奉仕していこうと思う。できることから…も大切だが、できるかどうかわからなくてもトライする、それぐらいのパワーを持って生きてていきたい。

### 高石 順一

RYLAへの参加指名を受けたときに、どうして私にという疑問がおきました。しかし生来のお人好しで、心の中は暗く、顔は得意気に承諾をいたしました。銀波園に到着したときにも、集合している皆さんは学生風、また就職されて1、2年くらいの方々であったり、ロータリアンの方が私をロータリアンと勘違いして挨拶にきていただくななどのことがあり、場違いなところにやってきたなあ、またお人好しもいい加減にしておかねばと反省いたしました。

しかし、ロータリアンたちの実に気さくで丁重な態度で応対をしていただいたことに、やれやれといった安堵感を抱くとともに、なによりもロータリアンおよび2人のカウンセラーの笑顔、人柄には大いに救われ、学ばせていただいた気持ちであります。またA班と一緒に寝食をともにさせていただいた穏やかな性格の班員にも感謝いたしたいと思います。

研修が始まると講演をしてくれる方々への知識、教養、見識の深さに感心し、私達受講生を頷かせる話、また飽きさせることのない内容に驚きを感じました。

また班員たちのまじめで積極的な生き方はこれまでの家庭教育および素晴らしい環境の中で生活をしてきたことがうかがわれ、これまでの小生の生活を恥じ、反省させられました。

受講内容は帰宅後じっくり復習することにして、教えていただいたことの今、できること、小さなことなどから実践できることから手がけて行こうと決意している次第であります。

### 岸田 親一朗

今回のライラセミナーに参加させていただき、まことに感謝しております。テーマである「これからどうして生きるか」という大変大きなテーマのもと、生きざま等について考えさせられました。近年では「誠」とか「真心」等が必要でなくなってきたと思います。あまりにも自己中心的な「ものの見方」や「考え方」で合わせて好きなところで好きなことができたり、また買えたりでき、隣人のことを、また周りの人々のことを考えなくとも過ごせる、また、それが当然のように認識している自分に深く反省し、気づかせていただきました。

このセミナーを終えて「これからどう生きるか」といわれたら、私は小さなことから世のため、人のために何かご奉仕ができたらよいと思っております。

また今回セミナーに出席された参加者の皆さんと今後も交流をし、社会のために役に立つことができれば大変嬉しいことだと思います。

第19回ライラセミナー運営委員の方々、講師の方々、多くのロータリアンの方々に感謝しつつ、今回学んだことを生かせるように努力します。

多くの皆様、ありがとうございました。

## 浦川 琢至

まず、私の場合、仕事（家業）が自営のため、人生においてもっとも大切なことの一つは、この商売をさらに拡大し、利益を上げ、社員を養い、自分も富を得ることであると考えてきました。

そして、その考えは現時点においても基本的に変わりません。

しかし、この4日間の研修生活において、いろいろな仕事、行事を行う同世代の人々と出会い、それぞれの意見、生活、体験をはなしあったことによって、今までの自分の視野の狭さを実感することができました。自分にはまだまだ知らなければならない現実が数多くあることに気づき、自分がいかに限られた範囲で日々生活しており、ともすればその生活が自分にとって守るべきすべてのものであるかのように考えてきたということ、とにかく私の場合は、この研修にきたことによっていろいろなことに目を向けなければならないと感じ、時には自分を見直しながら、さまざまな人々と交流することの大切さを心にもつことができました。

最後に、この研修に私を導いていただいた関係者の方々に心より感謝いたします。

## 渡辺 秀

今回さまざまな業種（水産業、大学生、学校先生）などで班を作り、本当に人の考えがたくさんあり、今までの自分を考えさせられました。余島に来たとき、不安でいっぱいでしたが、みんな同じバンガローで少しずつ「仲間意識が生まれていく」という感じがでて、とても楽しく、新しい自分、弱い自分が見えてきた気がします。

今回島を離れてしまいますが、同窓会の約束をしました。ひょっとすると会えないかもしれないと思う感じが少しして、悲しく思います。

講義以外は自由行動という中で、本当にのびのび自分の気持ちを整理し、考え、みんなと一緒に発言。そして意見を言い合い、自分が少し今までゆっくり何もせず流されるままに今を生きているのかなと思い、新たな仲間に助けてもらい、胸を張って帰れるという気になっています。同窓会で会うとき他の町で偶然会ったとき、このRYLAでの気持ちと同じに、心からはなしましょう。

本当にありがとう。

### 坂東 香織

今回このライラセミナーに参加させていただいて本当によかったです。こういう場をもうけてくださらないと、普段仕事場において生活していく中では自分で気づくことができなかっただろうことにたくさん今気づきました。

辻野ナオミ先生、片岡実先生の講演では、暗く、すさんでマイナス思考だった自分の生き方に気づかされ、自分が自分より不幸だろうと思っていた人の方が実は本当に充実した人生を送られていて、自信に満ちあふれているのを見て、私も何かしなければと思いました。

自分一人でやれることは小さいけれど、日常では小さなことから、また少しづつボランティアについても勉強して、身近にあるボランティア団体にも参加しなければなと思いました。今日の今井先生のお話や昨日のフォーラムでは、自分の勉強不足を痛感させられました。まだ、みんなのレベルに自分がついていっておらず、少しさがゆい思いをしました。でもプラス志向で考えれば、自分はわかっていないということが今わかったので、もっと本を読んで、いろいろな人とふれあって交流していく中で、自分を成長させていきたいです。

また、A班で話しているいろいろな立場の人間がいて、いろいろな意見があるなどつくづく感じました。みんなと出会うことができて、本当によかったです。この人たちとならみんなもいるのなら私は私なりに帰ってがんばっていこうと思いました。

今まで私は、何か大きなことをする人を助けたり、かけで見守ったりして、その人の夢を実現することを夢としていました。それもいいとは思いますが、人に依存するばかりではなくて、自分の意志で始めていくことも大切だと感じました。一人ひとりに価値があるとおっしゃっていたように私ももっと自分の価値を認めて、けれど現状に満足することなく向上心をもって、自分というものをもって生きていかないといけないと思いました。頑張ります。どうもありがとうございました。

### 高橋 恵里香

大学を卒業して、今は高校で家庭科を教えています。職に就いてからというもの、大学時代と違って、決められた組織の一員として、決められた時間に決められた行動をするという、型にはめられた毎日を送っています。毎日、時間に追われる生活の中で、何か一つのテーマについて考える、その考えを友人と交換し合うという機会はありませんでした。自分とはどういう人間であるのかさえ忘れてしまうような忙しさの中で、生徒に教えなければという職業意識の中で生活しています。

今回のセミナーで福祉について考えましたが、今、自分に何ができるかと考えたとき、

私の場合、家庭科の授業を通して生徒に考える機会を与えることと、部活動でV Y S部の顧問をしているのでその活動に生かすことの2点が思い浮かびました。高校家庭科では専門分野として、家庭・社会の一般的な知識を学ぶとともに、職業分野の選択科目がいろいろある中に「社会福祉」という分野がもうけられています。高校も単位制導入、総合学科などの導入により、学習の選択の幅が広がり、その中で家庭科が担っていく役割の大きさを痛感しています。

福祉といっても高齢者、子女、女性、労働者、障害者に対するものと多くのものがあり、また私たちは資本主義社会の中で生活している以上、何らかの矛盾を感じることが多くあります。しかしこのセミナーで話し合った中で得たこと、論議により受け取ったものを、自分の中でどう整理、理解し、これから生徒に伝えていくことが大切になってくると思います。

日本の歴史、社会の変化、自分たちのおかれている現状、これから社会の創造、それへの対応の仕方という順をおって授業を進めていますが、最後のまとめでいわれたように、対応の仕方を教える教育ではなく、これから社会を造っていく教育が必要になってくるのだと考えさせられました。

グループの中のさまざまな職業、立場、考え方人とふれ合えたことはよい経験であり、改めて自分を見直すよい機会になったと思います。また大学以来、素晴らしい講義、心に響く講義を聞く機会が少なかったので、その点でもよい勉強ができたように思いました。

キャンプファイアーの火の中に入れた「今自分にできることを見つめていきたい」という言葉を胸に止めて、からの生活を送っていきたいと思います。

### 矢野 裕子

まず、今回のこのセミナーを受けられたことを今、心より感謝します。私の最近の日常生活では安易な考え方方がほとんどでした。ですから今回のようにとことんある課題について考え、論議をかわしあうことは、私の人生の中で貴重な体験の一部になるでしょう。

1日目、A班の方たちと会って、一人ひとりがどんな人たちかをお互いにさぐり合う日でした。カウンセラーのおかげで、不安な気持ちもなく、自己紹介後、さっそくリーダーの下に課題にふれていくことができたと思います。2日目、午後からの自由時間、その仲間となりつつあるグループと陶芸とテニスを満喫しながら、余島の自然を楽しむことができました。

そして夜の神秘的なあのキャンプファイアー、心に残る今井先生のお話と松ぼっくりにはさんで燃やした思いも素敵な体験でした。この時になると男性方にはまだ遠慮がちなものの、一緒に夜を過ごす女性方とは和気あいあいの仲になれました。3日目のバズセッションでは、少人数のグループのおかげもあり、2.5時間今までの先生方の講義とグループ内の論議のかわしあいの中で得た新しい知識と理念をフルに活用させ、高いレベルで討議

しあえました。

そしてA班の内容をまとめあうのもグループ全員がそのことに真剣に頭をフルに回転しながら活動できました。そしてリーダーの発表が終わった時は、非常に嬉しく思ったのでした。しかし、欲を言うと、フォーラムの時、深川PGの意見発表で、私が発表したくても後少し勇気がでずに終わってしまったことです。次回こそは、そんな思いをしないよう、とにかく手をあげてみようと思いました。

次に辻野先生の講義で得たことです。両親が敬虔なクリスチャンで、日々の行動が素晴らしいからこそ、それを見ながら育った子も立派な人物になるのだと教えてくれました。やはり、子どもがそうやって育つならば、今の日本社会の親も、親子のコミュニケーションを積極的にとるようにし、しつけや礼儀や正しい道徳観を教えていく必要があるでしょう。

感謝の気持ちを忘れない、Good human being で、friendly で、どんなときも笑顔を忘れず、相手の目を見ながら、というせりふ、どれもがわかっているながらも今の若者にはできていない人が多いのです。頭が良ければそれでいいという学歴社会にも責任があるものの、親が基本なのだと理解しました。

片岡先生の講義では、障害という人種ではなくて、障害という普通の人がいて、ハンディキャップは一つの個性をつくるというプラスに生かすすばらしさを学びました。最後にフォーラムでも問題になったK君とM君とのボランティアと呼べるかという問いかと、どういうことがボランティアなのかという問いかに関しては深く頭を悩まされます。

A班でまとめた、人を愛すること等では解決できない、人間のエゴの部分から発展するのもボランティアと呼べるのか、私は否定できないながらも、もっと他にもあると思います。しかしそれについてはもっと学習して知識を得る必要があります。今の私には断定できないので、帰ってから香川大学R A Cにも呼びかけ、ボランティア運動ももっと積極的にし、かつ香川大学のR A Cで続きを学んでいきたいと思います。このセミナーの体験は、楽しい思い出だけに止めず、活かしていくように努めていきたいと思います。

# 参加者感想文

## B 班



### B班カウンセラー 永田 光春

今回のカウンセラーは2日目の夜から篠原カウンセラーよりバトンタッチでB班に入らせていただき、はじめから参加できなかったことに対し深く反省し、皆様に大変ご迷惑をおかけいたしました。

19回のライラセミナーは全体的に各地クラブより推薦された研修生なので、粒揃いの研修生でした。キャビンタイムにおきましても、それぞれ自分の意見を持って発言され、私自身が学ぶところばかりでした。私のパートナーカウンセラーの河合純子氏（神戸垂水）にすべてお世話になり感謝申し上げます。春の余島に足を運び、今井R I理事をはじめといたしますライラ委員会スタッフの皆様の人間的なふれあい、指導のもと、私自身も少しずつ大人になっていくのかなーと思いつつ、今後とも学ばせていただきたいと思う次第です。ありがとうございました。

### B班カウンセラー 河合 純子

「久しぶりに余島に行ける」そして「なつかしいライラ委員のロータリアンの皆様にお会いできる」この2つを楽しみにカウンセラーとして参加したこの第19回セミナーでした

が、今すべてのプログラムを終えて振り返るとき、10数年前に参加したときより遥かに深い充実感、満足感を味わっている。

それは、自分が年齢を増したため、ゆったりと受講生に接し、プログラムを運んでいたためなのか、受講生の層、質が以前と違っていたのかわからないが、今回に関していえる良い点は、ゲストスピーカーのお話が体験に基づいたものでわかりやすく受講生に好評であったこと、そして野外レクリエーションやキャンプファイアの日も天候に恵まれたことにもよるが、何よりも年齢層も職業（学校）も違う14名の受講生が皆明るく善良で素直な模範的青年で、何事も熱心であったからだと思う。自分の仕事に誇りを持ち、将来のビジョンを話す彼らの姿は本当にたのもしかった。

4日前まで他人であったとは思えないような親しい友人となっている14名を見ていると、いつものことながら、人との出会いが素晴らしいことをこの地で味わえたことと思う。私自身50数年の自分歴を振り返った時に、数え切れない人との出会いを経験し、その人々とのふれあいの中で自分の人生が作り上げられてきたことを思う。受講生の皆さんも、これからも自分の家庭、職場等決められた人間関係以外の場所に自分から自発的に入って、今回のような機会ができるだけつくり、より多くの異質の人との出会いを重ねてほしいと思います。

### 横井 寛太

10年ぶりに船に乗り、いざ余島へ。久々のワクワクする気持ちを抑えきれず、期待に胸がおどります。

小豆島から余島へは渡し船に乗って…というこれまでにない体験ができ、舵をとる方の隣で初めて乗った子どものようにはしゃいでおりました。

自分のキャビンへ到着です。「テレビ」がありません。これもまたワクワクします。はたして4日間もつものか…

そして朝、昼、夕の食事、毎回おいしく頂きました。お代わりができるというのは久々なので、もう目一杯食べさせてもらいました。

2日目はフリーの時間。わがB班のメンバーの距離がグッと近くなりました。ほぼ全員でのテニスレッスン（宮本コーチ！）、朝倉・大宮こんぴらコンビとの釣り大会。もうめちゃくちゃ楽しかったです。「天国と地獄」初めての海釣りでしたが、皆が釣りに魅せられるわけがわかったように思います。

午前中の講義も良いときでした。「福祉」「ボランティア」についてこれほど人の話を聞いたり、自分で考えたりしたことはありませんでした。受講生のみんなの真剣な姿にも心を打たれました。そして、その流れは夜のキャビンタイムへと盛り上がっていきます。とにかく3日間、あのキャビンタイムはB班誰しもの心の中に深く深く残ることでしょう。余島へ上陸してから去るまでのすべての時間が充実しており、何ものにも変え難いものと

なりました。わが人生の中にとても良い体験となりました。

このライラをすすめてくださった大村さん、感謝いたします。

またカウンセラーの河合さん、篠原さん、永田さんありがとうございました。そしてガバナーはじめスタッフの方々、受講者のみんな、本当にありがとうございます。とても楽しかったです。

### 井関 大高

私は、このRYLAセミナーに参加して、さまざまな人々と接して、福祉を通じて意見が聴けたことに大変感謝しています。この余島の自然の大切さや、ボイスカウト活動では得られなかったことをたくさん学びました。福祉の国家を形成していくのは、今の資本主義社会において不可能かもわかりませんが、われわれ一人ひとりが自覚し、活動していくべき到来してくれるだろうと信じています。

「有償」「無償」の問題についてですが、私はあくまでボランティアは主として「無償」であると考えています。なぜならボランティア=自発的であり、「有償」になると「やってあげている」という感情がわくからです。震災ボランティアで経験したことですが、弁当、交通費をもらうのが当たり前という観念がでてきたという現状を見て、また、今回の重油流出事故においてそういう考え方をもつものが多いということで、ボランティアと地元漁師とのトラブルもあり、意欲を持って行動しようとしていた私までいくことができないといったことになり、残念で悲しい思いをしたことがあります。「ボランティアとは何か」を考えたことがあります。

私はこうした中で、日常生活をもう一度見直し、今回学んだことを吸収させ、向上心をもって21世紀を築きあげたいと思います。また、来年就職を目の前にしておりますが、できる限り15年間続けたボイスカウト活動を続け、また「福祉」に携わっていきたい。

最後にロータリークラブの皆さん、ガバナー、カウンセラーの皆さん、また4日間援助してくださった皆さん、班の皆さん、そして父親、母親に感謝の気持ちをこめて言いたい。どうもありがとうございました。

### 山内 健生

私は今回このRYLAに参加してとても良かったと思っています。たった4日間という短い期間でしたが、多くの仲間が一度にできました。日常生活の中で、このように他業種の方々と出会うことはまずないでしょう。

育ちも業種も違う方々と話をし、食事やレクリエーションと一緒にする中で、私は自分を見直すことができたように思います。

私はB班でしたが、この仲間が素晴らしい方々だったと思います。話は別に課題を出すでもなく、思いついたこと、共感できる話題について話をしていただけでしたが、それぞ

れが自分の意見をきっちりと発言し、相手の話（意見）ちゃんと受け止めていました。

私は今日会ったばかりの人たちと、まるで前から知っているかのように話ができるていた様子に感心しました。

みんなと生活を共にする中で、私は多くのことを得たと思います。具体的にそれが何だと問われても今、こういうことですと答えることができませんが、何かをやってみなければ、もっと多くの人生にかかわり合ってみたいと思っています。

今もかかわっている医療福祉からまず、行動しようと思っています。

### 山本 雅子

こんなに充実したセミナーは今までに経験したことがなかった。いろいろな人が自分の思いを言い合い、「えっ！？この子がこんなことを考えていたのか」という驚きの連続だった。これが人とふれあうことの楽しさなのだと思う。

このセミナーを通して学んだことは、人は支えあって生きているんだ、生かされているんだということだ。私は体に不自由もなく、よっていわゆる「障害者」「お年寄り」のように目に見えて助けを必要としていることがない。しかしキャンプファイアーのあの燃やされた木も、私をあたためてくれているのだと気づかされたとき、私は身近な人々の助けの手をすっかり見落としているのではないかと感じた。

パズセッションで「福祉」について考えたときも、まわりの身近な人々が幸せにあるのだという定義が成り立ち、まず家族のことから考え始めなければならないのではないかという答えが出た。その時、日頃の自分の生活を振り返り、私は家族の幸せを真剣に考えているのだろうか？という疑問がわいてきた。今の自分はただ家族に甘えているだけではないだろうか？

このフォーラムで、福祉文化の形成を目指してのその心構えと実践で、最終的な結論は、まずは結果を求めずに行動に移すということになった。まさに今、私がしなければならないことだと思う。

福祉文化というのは、みんなの精神に心が宿っていなければいけない。私たちはいつか家庭をもつと思う。その時、その純粋な子どもの精神に伝えることができたらと思う。そのため、自分で考え、意欲的に福祉について勉強していきたいと思う。

### 高芝 まゆみ

私は現在大学4回生であり、就職を目前として今、期待と不安でいっぱいです。RYLAは今までから参加したことのある友人からよく聞いておりぜひ参加したいと思っていました。今回第19回RYLAに私が参加させていただくことになり、（最後のチャンスでもあったので）大変嬉しかったです。職場での研修期間中でもあったのですが、ぜひ行きたいと職場の方にお願いし、今回来させていただけすることになりました。

しかし仕事のことも心のどこかで気になっていました。ですが、今、私は今回、参加させていただき「今、その時、自分ができることを見つけ、精一杯やることの方が大切であり、そのことがいつかいきてくる」ということがわかりました。目先のことだけではなく、長い目、視野でものを見て、ゆっくりと自分なりに進んでいこうと思います。

開講式の時、おっしゃられていた「今からここで学んだことがすぐにでなくても、10年後、20年後に出でてくれればよい」という言葉がとても心に残っています。子どもへもそういう心構え、態度で接し、見守られるよい保母になりたいと心に誓いました。

今回初めての参加だったのですが、今この4日間を振り返ると、一つひとつが懐かしく思い出されます。講義、レクリエーション、オープニングパーティー、バズセッション、キャンプファイア、キャビンタイム、フォーラム、思索の時間等とても楽しかったです。

今回、私は二つのことを自分の心得たと思います。一つ目は、自分とは異なる民族の方、障害を持っている方からの大切なお話を聞かせていただいたことです。二つ目は多くの人とコミュニケーションをとり、話すことの大切さと楽しさです。他の人の、他の意見を聞き、その中で自分と異なる立場を知り、自らも大きくなれるのです。

最後になりましたが、今回Bグループの人はとても仲がよく、とてもよいグループの一員になれて嬉しかったです。特色として、人の意見をよく聞いて、認めてくれるということが感じられました。それがすごくいいと思います。

「福祉」もこれが基本になるのではないでしょうか。他の人を認め、受け入れること、そして共に成長しようという心構え。それが、これからいきる上で大切なのではないでしょうか。これこそ「これからどうしていきるか」の答えの1つであると思います。

## 藤田 誠人

この3泊4日のセミナーを終え、はじめにあった不安や心配がいつの間にか消え去っていたことに気づく。それは研修生の仲間をはじめ各ガバナーやアドバイザー、そしてカウンセラーの方々のおかげであることはまちがいない。

とくに時間を忘れて語り合ったB班の仲間、そしてカウンセラーのみなさんには言葉に表わせないほどの感謝をしている。各方面で活躍されているみなさんの意見は、私のからの生活においてかけがえのないものになるであろう。私は、県立高校の教師のはしくれとして、これまでさまざまな教育活動にたずさわってきたつもりである。が、しかし今回のセミナーでは「教師とはどうあるべきか」「これからどのように行動すべきなのか」など、これまでの教師生活では見いだせなかった問題を具体的に意識づけることができたのである。

セミナーの内容は、各講師の講話をはじめ、専門的な内容が多く、私たちのこれからるべき行動を、具体的にかつわかりやすく示してくれた。今回のセミナーで得た知識、想いを忘れず、いつまでも守りつづけていきたい。そしてこれから日本を、世界をよりす

みやすい環境にするために変えていきたいと思う。これから世の中を支えていくのは、私たち若者であることを実感し、このセミナーを終えることができたのは、私の何よりの財産であり、生きがいになるであろう。

### 則長 晴子

私がRYLAセミナーを通じて1番嬉しかったことは、多数の友達ができたことです。参加したことによって、今までまったく知らなかった人たちが4日間でこんなにも身近に感じることができたのは初めてです。

いろいろな職種の人が集まり、またいろいろな考えをもった人が集まり、その考え方を人に打ち明けていく時、自分の存在を忘れてしまっていたように思います。個々の考え方や生き方をあれほどじっくり聞く機会は今まで経験したことがありませんでした。

私自身、自分の将来の夢が形になっていなかったので、何もいうことができないと思っていた。ところが、Bグループの人たちは全員、私のわけがわからない話に耳を傾けでくれ、またアドバイス、感想などを述べてくれました。もちろん、「それはちがう!!」といった声もあがりました。しかし、全員が全員のことを本当によく考えて言っていることなので説得力がありました。とにかく素晴らしい人にめぐり会えたと思います。

そして講義をしてくださった辻野さん、片岡さん、今井さんをはじめ、多くのロータリアンの方々の支えが私たちを出会わせ、考える時間を与えてくださいました。言い表せないくらい感謝の気持ちでいっぱいです。

3日間のバズセッションで話し合い、みんなで出し合った「これからできること」私は胸をはって、他の友人に伝え、実行していきます。必ずします。

そして、辻野さんの言うとおり、感謝の気持ちを忘れず笑顔でいられるように努力します。

B班の方々、そしてカウンセラーの河合さん、篠原さん、永田さんから学んだことを吸収し、また次に会ったとき、もっともっと胸をはれる自分になっていたいと思います。

最後に大変残念だったことは、2回も遅刻をしてしまったことです。1日目の夕食の前、カギをおとしてさがしていました。そして4日目の朝は、4人とも9:25に飛び起きるという大変バカなことをしてしまいました。一番はじめに言われた「他人に迷惑をかけない」が守れなかったことが心残りです。

それ以外は、本当に充実した4日間がありました。機会があれば、また参加してみたいと思いました。そして他の友達にも心からすすめようと思います。

### 朝倉 貴光

4日間、それぞれの地域社会で、またそれぞれの立場（学生・社会人）でいきる若者たちが、ここ余島に集い、私たち人間社会の一つのテーマについて意見をかわし、そしてこ

れからどう生きるかを自己に問いかけあいました。

その答えは、決して今すぐ出るようなものではありませんが、自分と同じ考え方の者、また一つのテーマについて賛同できる仲間がいるという心強さを感じることができました。

私は決してこの仲間のことを忘れない…。

そして誇りに思いたい…。

## 掛川原 桂子

もう4日目がきてしまいました。つい4日前までまったく知らなかった者同士が、今となれば別れがとても、とてもつらいです。

こんな素敵なお会いは初めてです。私の人生の中でとても大きな意味を持つでしょう。毎晩、語り合いました。時には深刻な悩みをみんなで意見を出したり、真剣に討論しあったり、涙が止まらないほど笑える話をしたり、いろいろな立場の人々と話することで、自分が大きくなれた気がします。いや、この4日間で確実に得るものが大きく、成長したと胸張って言えます。本当に心からいえます。みなさんにお会いってよかったです。みなさんが大好きです。そしてロータリーの方々にこんな素晴らしい機会を与えてくださったことを感謝します。胸がいっぱいではち切れそうな思いです。今のこの感動、学んだ多くのことをこの先々、人生で必ず役立ててみようと思います。そして、知り合った仲間と末長くおつきあいしようと考えています。

素晴らしい出会いへ、大きな成長の場へ導いてくださったみなさんに心から感謝し、ぜひともRYLAを続けていただけるようお願いします。ありがとうございます。

## 峯山 淳

「長かったようで、短かった」という言葉がまさしく今当てはまります。普段の生活とはまったく違った環境、生活、そして仲間。内容の濃さのため、もう何日もここで暮らしていたような気がするし、それがまた、またたく間に終わったような気もします。

このRYLAに参加して、一番驚いたことは「人間って理想をもって、それを追及していけるんだ」ということです。私は小学校の教師です。21世紀をまさに担う子どもたちを育てる仕事をしています。こんな社会をつくりたい、こんな人間を育てたいという理想を常にもち、それを実現していくべきだと考えています。しかし、現代社会が抱える問題の大さにくじけ、また、日常の忙しさに、理想というものが自分の心の中で失われていきました。

でも、ここ余島には、確かな理想をもち、それを実現させようとする方がたくさんいらっしゃったのです。「これからどうして生きるか」私はこのテーマで本当に話し合いができるのだろうかと思いました。でもこの余島で真剣に語り合うことができる仲間ができたのです。

今、自分の心にちいさいかもしれません、「理想」という名の火がともりました。こ

の火を絶対に消さないで、いつまでも自分の心の中に持ち続け、今後の人生に生かしていきたいと思います。

このような貴重な機会を与えてくださったロータリークラブに心から感謝しています。本当にありがとうございました。

### 宮本 理

一般企業からの参加ということで、知識、情報をもっておらず、不安であったが、いろいろな立場の人たちの意見を聞いて、それに対して何らかの答えを出せる自分に少々びっくりした。

客観的に物事をみてしまうところがあるので、どうしてもロータリーの人たちが私たちに何をさせたいのか、どんな意見を出させたいのかと逆の立場から最初は見ていたが、後半には夢中になって答えを導こうとしている自分がいた。

多くのいろいろな意見や考え方、また生き方や人生観を聞かされ今後の自分の人生の参考にしたいと思う。

ただ一つ残念なことな、フォーラムで各班が提案した「ロータリーに協同できること」に対する答えがいただけなかったことである。本当にロータリーというクラブが金銭的援助と口先だけのクラブでないのであれば、提案に対する何らかの反応と実践を希望する。

### 福原 信子

私たちはたった3泊4日で一つの輪になれることができた。一人ひとりの考え、人間性すなわちパーソナリティに尊敬、感銘を受けた。みんなのことが好きになれた。好きになった。年齢層はさまざま、それぞれの体験、経験談を聞くことができ、また自分のことも聞いてもらった。とても楽しかった。一人ひとりの生きてきた道、今歩いている道が、チエリープロッサムのように感じた。

私は大学生、みんなほとんど社会人。やはり同じ年であったとしてもこのR Y L Aに参加している人たちはみな輝いているし、すごく大人でしっかりしていて、強い自分の考えをもっていて、一緒の仲間であることが誇らしく思えた。

講演においては、ネグロス島生まれの辻野ナオミさん、彼女のいったいくつもの言葉が心に残った。“I'll never give up to say こんなにちは” “I'll never give up to say thank you” “We cannot live alone” “Open heart”

また、次の日の片岡実さんの講演はとてもユーモアたっぷりで楽しかった。やはりいっぱいの愛情を受けて育ったゆえの彼の今の表情、姿があると感じた。

きょうの今井鎮雄先生の講演はまるで「日本と世界、その発展」という大学の講義を受けているみたいだった。世界史の好きな自分としては、とても興味深い話であった。

その他、カウンセラーの人や、ロータリアンの方々のちょっとした挨拶にもおもしろみ

があってとてもよかったです。ユーモアのある楽しい、経験豊富な人たちとふれあうことで、自分が少しでも大きくなれる気がした。参加して本当によかったです。

### 神谷 香里

「名簿に名前がない？何じゃそりゃ？」で始まりました。

何もわからないまま「行ってこい」と言われ、手違いでセミナー前日まで未登録。でも私にとって逆にそれがラッキーでした。スタッフの方々にご迷惑をかけたことによって私の名前を覚えていただき、かわいがってもらえたように思います。「ラッキー!!」「すみません」と共に「ありがとうございました」

「この3泊4日を感想文にまとめろ？そんなこと私にや不可能じゃ!!」この一言につきます。今まで参加したどんなイベントよりも密度の高いセミナーでした。ここまでまじめに話し合ったり、自分の意見を言い合ったことなんてあったかどうか…。ここに来て得たものたちを大切にしていきたいと思いました。吸収したものを生かしたいと思いました。

「これからどうして生きるか」一言、一枚、一日ではまとまりません。あえて伝えようとするなら、このテーマの答えはこのRYLAに参加した人たちの心の中にわいたものを大切にしたいと思います。

またいつか集まれて、わいわい言える仲間になるといいなあ。

みんなありがとう。地に足をつけて、前を向いていきましょう。

### 中平 美恵子

ゆったりとしたプログラムの中で、3人の先生方の講義をお聞きし、真夜中まで語り合うことができ、大変有意義なセミナーだった。

これまでにも大学の寮関係や、職場の研修などでたくさんの人たちと宿泊を共にし、いろいろと話し合ったことはあったが、今回のセミナーほど奥深く、バラエティに富んだ内容のものはなかったように思う。

まず、辻野ナオミ先生の講義をお聞きして、感謝の気持ちをもつことと、挨拶をすることと、地域の人々と協力しあうことの大切さを再認識した。ネグロス島などいわゆる発展途上国の現状など、これまで知らなかつたことなので、初めて私も何かしたいなと、興味を持つことができた。人のために行動している人の言葉は大変魅力的だった。

片岡実先生の講義では、「ハンディキャップは自分という人間をつくる個性である」ということを実感することができた。体が不自由であることでつらい思いをされたことも多々あったと思うが、プラス思考で一つひとつ乗り越えてこられたから、現在の穏やかで朗らかな人柄があるのだろうなとお聞きしていて思った。「障害者」という目で見るのではなく、その人の人格を見つめ、接することのできる自分になりたいと思った。

キャビンタイムやバズセッションではお互いに、これまでの経験をもとに内容の濃い語

らいをすることができた。さまざまな職業の人の意見は大変新鮮だった。また、それぞれが議論していく中で、人の意見を否定することなく、しっかりと受け止め、他の見方をどんどん教えてくれたので、一つのことに関する見方が広がったように思う。その中で、プラス思考で物事をとらえると、前向きに進むことができると言うことを学んだ。

私が教育の道を歩み始めて2年になるが、今、この時にセミナーに参加できてよかったです。私がいろいろな人の意見を聞いて、視野が広がったように、さまざまな悩みや問題を抱えている子どもたちに対して、悩みをバネにして、一步でも成長することができるよう深くかかわっていきたいと思う。人は人とのかかわりの中で成長していくものだから、学校教育の中でも、人対人の教育を行っていきたい。

さまざまなことを学んだ4日間だった。このセミナーに参加するよう声をかけてくださった先生と、企画・運営してくださったロータリーの皆様と、今回集まった班のみんなに深く感謝したいと思う。

# 参加者感想文

## C 班



### C班カウンセラー 永松 潔和

今回19年ぶりにRYLAセミナーに参加させていただきました。このたびはカウンセラーとして、重要な役割として不安な思いで、余島にやってきました。自分は本番に強いと思っていましたが、もうハラハラの連続でしたが、第1回、第2回のRYLAに参加させていただいたおかげで、また受講生のみんなのおかげで何とかその大役を終えることができました。

カウンセラーをやってみて、セミナーの始まりと同時に次第に受講生の顔つきが変わり、言動が変わっていくのを逐一見ることができ、大変有意義な4日間でした。私のC班は受講生にも助けられて、一致団結していったと思っております。

私のこの気持ちが受講生にも伝わり、各地域での活動に活かしていただければ、これほど幸せなことはありません。

最後にこのRYLAセミナーに参加させていただいた今井先生、深川先生、山口先生に感謝しています。

### C班カウンセラー 永田 志津子

今回は昨年に続いて2回目のカウンセラーでした。

昨年初めてのカウンセラー（オブザーバー）は、毎日が感激の連続でした。今回余島へ降り立って、遅くなつたのでインフォメーションへと急ぐ中、前方に、右に左に懐かしい景色が広がっていて、丈の低い水仙が風の中にソッと咲き、桜も少しうす桃色の固いっぽみをいっぱいいつけて、いらっしゃいと迎えてくれました。

自分の仕事の都合で、全期カウンセラーできなくて本当に申し訳ないことで、お詫び申し上げます。

私たちはC班で、14名の受講生、カウンセラーは兵庫地区の永松さん、サブは柳谷さん、私はオブザーバーということで始まりました。

永松さんは第1回余島ライラの卒業生で若いロータリアン。ライラ経験者で医師をされており、今回病院を閉めて余島に来られたそうです。柳谷さんは竹を割ったようなあっさりした方で、2人のカウンセラーの息はぴったりと合ってとても良いコンビでした。

1日、2日と時間を重ねるほどに、受講生たちもうちとけ、それぞれの個性を發揮し、ライラのプログラムにもまじめに取り組んでいて感心してしまいました。前回に続き、今回もオブザーバーをさせていただきましたが、お2人のカウンセラーにはもちろん、受講生のみなさんから反対に多くのことを教えられ、共に同じ目標に向かって進んでゆくことの喜びをたくさん与えられました。本当にありがとうございました。このライラでお世話くださったロータリーの皆様、余島の職員の皆様方、本当にありがとうございました。

今回第19回ライラ受講生の今後の成長と将来のリーダーとを心から祈っています。

### C班カウンセラー 柳谷 舟子

初めてのライラセミナー参加ということで、少なからず緊張いたしました。ロータリークラブについても、セミナーそのものにも十分な備えがなく、お役に立てたのかどうか、今でも心配です。

ただ、多くのロータリアンに支えられ、またライラ第1回のメンバーでいらした永松様とコンビを組ませていただき、カウンセラー、メンバーと両方の気持ちを教えていただきながら、私自身が楽しく成長させていただきました。

メンバー一人ひとりがこのセミナーで何かをつかみ、これから的生活の中に良き刺激として残るものがあればと願っています。

どんな立場でも、どこにあってもロータリアンの誇りを忘れず、他者に仕える者でありたいと考えたセミナーでした。

同時に未熟なカウンセラーの私を、カウンセラーとして認めてくれた（？）メンバーのみんな、本当にありがとうございます。

これから皆の活躍を心から期待しています。

## 沖中 謙二

いろいろな立場の方たちの意見がかわされる中、私はなんとしっかりした考えをもって生きている方ばかりなのだろうと驚いた。自分たちのすべきことに対して、真剣に一生懸命取り組んでいる今回のセミナーで出会った方たちに対して、今の自分には理想や夢を問われても、胸を張って答えられるようなものではなく、ただ、ただ怠惰に毎日を過ごしていくことが情けなくなり、いただいた詩集の第1番目の詩には、胸を一突きされたような思いました。

順番がまわってきたといった感じで参加したセミナーでしたが、この4日間、理想とそれを実現に向けていく行動力をもった方たちとの出会いと貴重な講話は、この機会がなければ今後得ることができなかっただと思います。余島へやってきて本当に良かった。ここへ送ってくれた皆様、この余島で出会ったすべての皆様に対して感謝の気持ちでいっぱいです。

## 大宮 力

今回ライラセミナーに参加させていただき、大変勉強になった部分と、納得のいかなかつた部分等ありがとうございましたが、すべての面で良い経験となりました。

今井先生をはじめカウンセラーの方々の話を聞き、私たちは今、大変な時代の激動期にいるのだと改めて実感させられ、近い将来を見据えた話に今後意識的改革が必要になると感じました。

「これからどうして生きるか」というテーマの中、幅広い年齢層、多種多様な職種の方々との討論、また情報の交換をすることで、日頃固まりがちな考え方の自分、「竹の筒で空を見上げ、これが空だ」と狭い考えでいた自分に気づきました。

もっと広く、もっと大きな視野で物事を考えていく必要性と、多くの人と話すコミュニケーションの大切さを学びました。

今後、自分が地域社会に戻り、実際に自分が何をしていくべきか、何ができるのか、これから入ってくる後輩に対し何を伝え、残し続けていくべきなのかを考え、一日も早く第一歩をふみだし、行動に移していくたく思います。

最後になりましたが、このセミナー開催にたずさわったすべての方々にお礼を申し上げて終わりといたします。ありがとうございました!!

## 松尾 佳世子

私はロータークラブの先輩から「本当に良いお話を聞けるし、多くの人と友達になれるから…」と勧められて参加することにしました。先輩の言うとおり、これからの社会にふさわしいテーマの講演を聴かせていただき、心が洗われたような、何か勇気のようなもの

がわいてくるような気がしました。

これから社会を生きていく中で、人間と人間が共に助け合って生きることや、常に感謝の気持ちを持って生きることの大切さやすばらしさを教えられた。また、RYLAセミナーに参加して、いろいろな年齢や職業の人と出会い、互いに語り合ったり、考えたりする中で、あらゆる分野や角度から見た考え方を知り、視野が広がって、とても密度の濃い勉強ができました。

また、バズセッションやフォーラムでは、みんなが真剣に考え、意見をかわすことができ、いろいろ考えさせられ、また満足感も味わえました。一人では考えないことや、難しいテーマを考える機会を与えてもらって本当に良かったです。この4日間で学んださまざまなことをどこかで生かせればいいなと思います。

### 二宮 紀子

第19回ライラセミナーに参加して、日々のめまぐるしくしていく生活の中で流されてきた大切なことに気づくことができました。

さまざまな職場や学校で生活している人たちと出会い、福祉やボランティアがこれから社会において当たり前の時代になるように、一人ひとりが願い、本音で語り合えたことに深い意味があることを痛感しました。

世界中には飢えで苦しんでいる人たち、障害を持った人たちがたくさんいます。学生時代には学校の中でフィリピンの子どもたちに古着や文房具を送ったり、病院訪問をしたり、自然に行っていたことが社会にでると自然に忘れ去られていたと思います。これでは本当の教育が活かされないと反省し、もっと新聞や本を読んだり、多くの人々と出会ったりして、感性を磨かなければならぬと思いました。

まったく知らない人たちがこの3泊4日で友達に変わり、討議をかわす中で平和と思う気持ちがみんなの心の中にあることを知り、本当に会えて良かったと思いました。

この気持ちをいつまでも大切にし、人間ひとりで生きていけないけれど、ひとりでもできることに信念を持ちたいと思いました。ロータリーの皆様、ライラセミナーに参加させていただき、ありがとうございました。

### 矢野 真維子

ロータリークラブの名前は知っていましたが、具体的なことは何も知らずに、今回のライラセミナーに参加させていただきました。

キャンプレーダーの活動をしているにもかかわらず、このように知り合いはひとりもないというキャンプは全くの初めてで、情けないことに少々不安を覚えていました。でも、カウンセラーの方々や、同じ部屋になった人、同じ班になった人たちのおかげで、とても楽しい4日間を過ごすことができました。

このライラセミナーでまず一番に感じたことは、会って1日2日の人たちと本当に真剣な話ができたということに驚いています。話し合いの中で「福祉やボランティアを特別視されたりしない社会を目指す」という結論で班全員から表現は違っていても同意見が出ました。小さな親切をしようとしてもつい周りの目を気にしてしまうのは自分だけじゃないとわかってとても嬉しいと思いました。また、ほぼ同世代のさまざまな職業の人たちの意見を聞くことができ、このような交流をもてたことは私にとってとてもよい刺激になりました。

また、今井先生、辻野先生、片岡先生の貴重なお話を聞くことができ、本当に良かったと思っています。

このセミナーに参加することができなければ、この4日間で出会った人たちと会うことがなかったのかと思うと私をこの場に連れてきていただいたロータリークラブの方々に大変感謝しています。

先生方の話に、また皆との真剣な討論で感じたことを、その気持ちを忘れないで、これから自分の活動で活かしていきたいと思います。ほんとうにありがとうございました。

## 名定 香織

「これからどうして生きるか」というテーマを初めて知った時、なんて漠然とした抽象的なテーマなのだろうと思いましたが、辻野ナオミ氏、片岡実氏、今井鎮雄氏による講義を受講し、これまで自覚していなかったことに講義を受けるにつれて気づかせてもらいました。

具体的に申しますと、自分の進むべき道は自分で決めること、人間はたった一人では生きていけず、他の人々とお互いの助け合いがなければ生きていけないこと、何事にも感謝の気持ち、笑顔を忘れないこと、人生プラス志向で乗り切っていくこと、また、福祉に関しても福祉文化=皆が幸せになるためにお互いが支えることによって日本の文化と定着することなどを学ばせていただきました。

フォーラムの時には前もってやっていた班ごとのバズセッションをもとに充実した時間を過ごしました。メインタイトルの福祉文化の形成ーその心構えと実践ーといったタイトルを知った時、バズセッションの時にも言っていたことなのですが、「福祉」と一言で言っても、範囲が広すぎてなかなか実体を明確にはつかめないというのが実感でした。しかし、私たちなりに話し合い、結論を出し、発表を終えたときにはホッとした安堵感と充実感でいっぱいでした。

私は結論よりも、結論を導き出すための過程に大きな意味があったと思います。実際途中のバズセッションでは、ない知恵を絞りだし、こんなにも真剣に福祉に関して考えたのは初めてではなかったかと思ったからです。これからは福祉に関する意識レベルの向上でもって、福祉にたずさわっていきたいです。

そして毎夜くりひろげられるキャビンタイムでの班の中の語り合い。夜遅くまで一体そこまで話すことがあるのだろうかと思いながらも、その貴重な時間で、班の仲間との交流が深められよかったです。

最後にこのセミナーに参加させていただき心から感謝します。ほんとうにありがとうございました。

### 里見 和彦

今年度から徳島ローターアクトを創設しまして、私が会長となりました。その初任務として、何も知らないまま、このライラセミナーに参加させていただきました。3泊4日も離れ小島に「かんづめ」ということで、少し不安がありましたが、同じ班の人たちも同じように緊張しており、すぐに仲良くなることができました。

ライラセミナーが始まっても、あまりこのセミナーの趣旨がわかりませんでしたが、日を1日1日重ねるごとに、「あー、これがライラセミナーの目的か」とだんだん理解できてきました。と言うのは、すごく個人個人の自主性を重んじたプログラムや方針になっており、基本的に何をしててもよいという考え方なのです。それにキャビンタイムという時間は、班ごとにわかれものの、何を話してもよい、フリートーキングの時間なのです。

わがC班では、1日目のキャビンタイムに「自己紹介と個々の職業に対する考え方」や「男女差別について」「自己満足について」などさまざまなおかたい話題をみんなで討議しました。しかし2日目のキャビンタイムでは、1日目で頭が爆発した数名の意見により、ゲームをしたり雑談をしたりと楽しさを重視しました。3日目のキャビンタイムでは、午後から9時間もかけて真剣に福祉について考えたフォーラムの打ち上げをしたり、それぞれの住所を交換したり、時には今までたまっていた怒りを熱弁したりと、寝るのを忘れてしまうほど盛り上りました。

今回のライラセミナーでいろいろなことを経験することができ、またいろいろなことについて考え、発言しました。この経験で得たり、感じたことはこれから私にとって必ず財産になると思います。それに何より、このライラの同じ時を過ごした13名の受講生と3名のカウンセラーに知り合い、意見の交換ができたことは本当によかったです。この機会をつくってくださった徳島プリンスロータリークラブのみなさんと、ライラを運営してくださった方に本当に感謝しています。ありがとうございました。

### 滝波 裕之

初日は、自分とはまったく生活環境の違う、知らない人たちが集まることに対して、3泊4日の間、何ができるのかとても不安だった。しかし2日目には、そんな不安はかき消されてしまった。

キャビンタイムでは連日夜遅くまで語り、自分たちの意見をぶつけ合い、さまざまな考

え方の人間がいることに感心させられ、勉強になった。

講義の時間では、先生方の行動力や前向きな考え方に対し、得るものが大きかった。

3泊4日は長いと思っていたが、この文を書いているときには本当に短いと感じてしまった。それほど、この研修の内容が充実していたのだと思う。これから、自分の生活に戻って何か一つでも行動に移し、この研修を本当に意義あるものにしたい。

最後に4日間お世話になったCグループの人たちに感謝します。

### 杉野 比佐子

RYLAセミナーに参加して本当によかったと思っています。~

このRYLAセミナーは、私のまわりには、本当にいろいろな人がいて、いろいろな考えがあって、いろいろな生き方があるのだということをはっきりと感じた4日間でした。とくにそれを強く感じたのは、3日目のバズセッションです。今回のテーマは、私にとっては難しそうな内容ではありました、テーマからかけ離れながらも自分の意見を言い、他の考えを聞き、こんなにも一つのことについて深く考えたことはありませんでした。

いろいろな考えを聞くことは、自分の考えを見つめ直して、自分の価値観を築いていくことにつながるのではないかと、ぼんやりと、わかったような気がします。いろいろな考えを聞く機会はいくらでもありますが、ただ何となく聞くのと、意識して聞くのとでは大きく違うと思います。このようなことに気づかせてくれたのは、このRYLAセミナーです。この体験は私の貴重な財産となりました。

このセミナーの中では、教育の問題がよくあげられていました。私は現在、学校教育の現場で働いています。今回のRYLAセミナーである「これからどうして生きるか」ということは、私の専門教科の家庭科でまず取り上げていかなければならない課題だと思います。このテーマを常に念頭に置き、今後、生徒たちとともに考え、共に大きく成長していきたいと思います。

RYLAセミナーに参加させていただいて、本当にありがとうございました。

### 橋本 七月

今回ライラセミナーに初めて参加させていただきました。最初いく予定だった人の代わりということで、急に参加が決定しました。

ライラという言葉についても、ロータリーという言葉についてもほとんど知識のない状態での参加でした。

どんな人たちが参加しているのか、どんな日程なのか、どんな新しい出会い、体験ができるのか、期待と不安を抱いていました。そして、今セミナーが終わります。直接どの日程からどう思ったというわけではないのですが、全体に終わってみて、強く感じたことは以下のことです。

私は心理学を専攻しています。担当教授は、書物などからのはもちろん、さまざまな人に出会い、さまざまな経験をし、さまざまに思い悩み、「感性」を自分を磨きなさいとおっしゃられています。つらいこと、悲しいことがあっても、それを正面から受け止めるのはしんどいので、「まあ別にいいけど」と感情にペールをかけてしまうことが多いように思います。

何か意見があっても、他の人の意見があれば「それでいいか」とごまかしてしまうこともあります。そんな幸せでもないけれど、不幸せでもない「これでいい、この今まで」と納得しているのではなく、あきらめていることも多いと思います。自分の感情にしんどくても正面から向き合ってとことん考えてみる。このことの重要性、正しさを今回のライラで感じました。今回のライラセミナーこそ、私にとってさまざまな人と出会い、もまれ、いろいろな考えを聞き、そして自分の感情にゆっくりと向かい合うよい機会だったと確信しています。

今回のC班のメンバーは、たった4日間の交わりでも、深いところで知り合え、そしてもっと知り合いたいし、まるで同級生のような気がしています。いつ同窓会をしようかと今から楽しみでもあります。そして受講生のみなさん、ロータリアン、スタッフのみなさんおつかれさまでした。

### 山内 複晃

3泊4日のRYLAセミナーに参加させてもらい、今までとはまた違った自分になれたように思いました。初日の時には、名前も顔も知らない人との出会いのためか、14名他3名の表情も硬く、空気も重く感じました。が、他2日間にしては、グループみんなで協力してゲーム、レクリエーションをし、いろいろの意見が出しあえ、仲間意識も高まったのではと思っています。

夜も遅くまで、真面目な話をしたり、バカな話で笑ってとても楽しめたのではと思いました。自分も普段なく、バズセッションでは燃えてしまい、発表では自分でも笑ってしまうくらい緊張して、おかしかったです。でもああいった時間がなければ、ただの修学旅行みたいなものにしかならないと思うし…。あとおかしかったのが、思索の時間にレポート用紙に俳句をメモしたのを見て笑ってしまいました。

「春の雨 小枝にあたり おじぎする」

本当に楽しく、また参加したいと思ったりもして…。

### 一貫田 達也

何年かぶりで帰ってきた余島。

そこは私の心のふるさと。「帰ってきた」というのが実感。

余島は変わっていた。松が枯れ、緑が少なくなっていた。オープニングパーティで深川

純一さんとお会いし、握手をかわしたとき、今回参加してよかったですと実感する。

今回のライラセミナーには自分を見つめ直したいと考え、参加した。

セミナーが終わったとき、そのことができた気がする。この変わった気持ちをいつまでも持ち続けていきたい。

また、いつか、OB会でみんなに会えることを期待している。

### 一井 正寿

私がこのセミナーで得た、一番大きなものは「私は一人で生きてきたのではなくこれからも一人では生きられない」という「気づき」の心である。この心を持ち続け、これからの21世紀という大波に備え、自己を磨き続けていきたい。

あすから私たちは、それぞれの社会へ帰るのだが、まったく別の環境で育った、見知らぬ人間が、RYLAの旗のもとに集まり、「知人」となった。そして3泊4日を共に過ごす中で「友人」となったのではないだろうか。この「友人」を「親友」へと変える努力を私は行いたい。

RYLAセミナーで出会った人々に感謝いたします。

### 大屋 安弘

最初、余島に来たときは、離れ小島で何ができるのか不安でしたが、カウンセラーや運営委員の皆様のおかげで充実した4日間が過ごせた。

自分には大きなことはできませんが、目の前にある小さなことから少しづつ奉仕していきたいと思う。

最後に私たち青年のために、4日間もの間、一緒に過ごしてくださったロータリーの方々に感謝します。ありがとうございました。

## D 班



### D班カウンセラー 赤穂 哲

今年も余島にやってきて、カウンセラーとしてやらせてもらいました。

3回目になります。毎回、毎回、新しい受講生を迎えて、初めは緊張しますが、終了の時にはわかるのがつらいほど、仲良くなっています。

これもRYLAセミナーの独特の雰囲気、特にその内容の濃さによるものと思われます。普段は仕事に追われて、忙しい毎日を過ごしておりますが、この3泊4日は若い受講生のみなさんと話をし、食事、入浴などを共にして、心のリフレッシュをさせていただいた気がします。特に今回はカウンセラーの小笠原さん、講師、スタッフの皆様に大変お世話になりました。ありがとうございました。

### D班カウンセラー 小笠原 貴美子

今回初めてライラセミナーにカウンセラーとして参加し、大変貴重な経験をさせていただきました。

私はロータリーの知識や経験を十分には持ち合わせておりませんでしたが、このようにいろいろな地域からさまざまな職業の青年たちが一堂に会して、人生を考え、未来を語り、

そしてお互いの友情をはぐくむことがロータリーの精神に通ずるものがあるように感じました。

受講生の方々は皆様、積極的に人生や職業を考えている方々ばかりで、専業主婦である私などはカウンセラーとは名ばかりで、教わることの多い日々であったと思います。

受講生の皆様も、このセミナーでの経験が各自の将来の人生の中できっと役に立つ機会があるものと思います。

「人を愛すること、感謝することを忘れない」この言葉は私自身にとっても今後の人生に大いなる勇気と希望を与えてくれるものと思います。

このライラにかかわって、お世話くださったロータリアンの方々、本当にありがとうございました。

### 落原 康弘

ボランティア活動のことをよく耳にしますが、こんなに熱心な団体（ロータリークラブ）がこの世界にあることを知り、感激しました。また、ライラセミナーを終えて、本当にいろいろ勉強になりました。余島で学んだことを地域へ持って帰り、より多くの人にこのことが伝わればいいなと思います。そして住み良い社会が広がっていくことを願いたいです。またお世話になった皆様へ感謝します。今後「ライラセミナー」を続けていってほしいと思います。

それとこの場へ出させていただいた太田昭男先生、事務所の皆様に感謝します。どうもありがとうございました。

### 新家 香奈江

最初に一言感想を述べようと思ったら、いろいろなことが頭の中をよぎって、何から書けばよいか迷ってしまうのですが、私はこのセミナーに参加できてほんとうによかったと思いました。そしていろいろな意味を含め（講義・フリータイム・キャビンタイム・バズセッション・その他いろいろ）この4日間、この余島で過ごしたことは、これから何らかの形で、自分にとってプラスになるだろうし、社会生活の中で何らかの形で表現していきたいし、まずは身近なところから、私の心の中から少しづつ変えていこうと思いました。

「人に優しく」頭の中ではわかっているつもりでも、なかなか行動に移せないのが多々ある私ですが、少しづつ、少しづつ前向きな精神をもって、まずは自分のうちから変えていこう。そう心に思った4日間でした。

長いようで短かった4日間でしたが、今までにない有意義な時間を過ごせたこと、楽しく過ごせたことに感謝します。

最後に班のみなさん、カウンセラーの小笠原さん、赤穂さん、4日間ありがとうございました。D班らしいカラーが（なんとなく）好きでした。

### 河本 瞳

はじめ、このライラセミナーに参加するのが決まったときは、正直何をするつもりかもわからないし、その前にロータリークラブという団体があることも知りませんでした。ただ単に知り合いの方が絶対自分のためになるから行ってみない？ということで参加しました。参加しての感想は、ほんとうに来てよかったです！と思います。

普段から大学で講義を受ける機会はよくありますが、辻野さんや片岡さんの講義ほど真剣に聴けたものはなかったように思います。その講義について、夜、グループの人たちと一生懸命自分の意見や考えを話し合えたことも、すごくためになったと思っています。

その他にも普段結構ワイワイ言っていても人前にでるとまったく何もできていなかった私にとってはキャンプファイアでD班の代表としてみんなの前で一言でも話すことができたのは自分にとってすごくプラスだったと思います。来たときは知り合いもいなくて、3泊4日も長いなあ…と思っていましたが、今になると早い早い3泊4日だったのです。

これからライラセミナーで自分なりに学んだことを活かして、また3泊4日みんなで過ごした日々を思い出しながら、頑張ればいいと思っています。

### 山中 隆夫

「3泊4日で、見ず知らずの者が集まって話したとて、どれほどのことができようか？形式的なものに終始するに相違あるまい。」半ばこんな気持ちで始まったライラセミナーだったと思う。初日にこの予想は見事的中した。キャビンタイムはゲームで始まった。打ち解けあう、互いに親しくなるにはよいだろうが、私はこんなことをするために来たのか？と思いながら参加したのが、正直な気持ちだった。

1日たち、2日たち、バズセッションをし、フォーラムで発表という課題が与えられた。この時ほど、こんな短時間ではほとんど皆が一つのことに向かって働いたことはなかったろうと思う。我が班での発表意見のとりまとめ、プレゼンテーションの効果を考えての演出、皆が知恵を出し合って作業していくさまは「こんな短期間で、他人同士が団結して行動できるのか」と驚嘆せざるにはいられなかった。

今回のライラセミナーで、講師の先生方の話は確かに有益で、含蓄のあるものではあるけれども、私にとっての驚きは「団結」であった。

### 大谷 芳彦

ほとんど皆、同じ心境だったようですが、当初「RYLA」が何なのか、「ロータリー」がどういった団体なのか、よく知らないまま、不信感いっぱいでのセミナーに参加しました。いざ班員と顔をあわせて、皆がぎくしゃくした雰囲気で、このまま4日間は大変だと思いました。

セミナーの内容についても私自身は福祉ということに対しては、大事なことではあるなと思いながらも、縁遠い存在だったので、とっつきにくい内容だと思い、困惑気味でありましたが、3日目のバズセッション、フォーラムを通して、いつの間にか福祉ということに対して自然に接している自分に気づきました。辻野さん、片岡さんの講演を聴き、またそれ以上にキャビンでの話し合いの中で、同じ世代の、同じような感覚に触れ、自然と抵抗感がほぐされていました。まずは、普通に席を譲れる人間から始めようと思います。赤穂さん、小笠原さん、そして班員のみなさん、4日間ありがとうございました。

### 川田 奈津

正直言って2カ月ほど前までは、ロータリークラブの存在すら知らなかった私が、たまたま縁あって徳島R A Cの幹事をやらせていただくことになり、参加させていただきました。徳島R A C自体が、まだ例会も始まっておらず、形のない新しい団体です。参加するまでは、一体何をやればいいのだろう。自分自身ロータリーのこともよくわかっていないのに、何ができるのだろうかと不安な気持ちでいっぱいでした。

ですが、4日間、日常の生活から離れ、新しい友人と共に目一杯頭を使って話し合い、素晴らしい内容の講義をお聞きして、何か漠然とですが、方向性が見えてきたような気がします。

また、私は医学部の学生なのですが、出来の悪い私にとって、日々の勉強は大変な負担で、なかなか専門以外のことを考える余裕がありません。さらに同年代で仕事をしている人、別の分野のことを学んでいる人とも知り合える機会がありませんでした。ライラセミナーに参加することにより、さまざまな分野で活躍する思いやりにあふれた人々と知り合い、話し合うことができ、視野が一気に広がったように思います。

もし、いつかまた機会をくださったら、ぜひもう一度参加させていただきたいです。大変よい経験をさせていただきました。

### 斎藤 邦夫

去年の4月1日に社会人となり、ちょうど1年がたとうとするこの時期、4日間にわたる余島での生活は、仕事に追われる毎日から離れ、自分がどんな人間であるかを真剣に考えさせられる大変重要な日々となった。

学生の頃、将来のこと、またそのために自分は今何をすべきかについて徹夜で話すことがあり、普段の無気力な生活に活を入れていた。1年に2、3回のことだったが、大変充実したものであり、自分は討論が好きだったように思う。

では、今回のセミナーの討論は満足のいくものであったかと自分に問いかけると、確実に答えはNOと言える。このセミナーには討論するためにきた。しかし、ほとんど自分の意見を伝えることなく過ごしてしまった。自分はこんなにも臆病者だったのか、認めたく

ない事実を認識させられた。

しかし、最後になって後悔する結果となってしまったものの、自分をより深く知ることができたことはありがたい。今後、自分のこの弱点をいかに克服していくか。決して目をそらしてはいけないこの課題を大切にし、いつかまたこのような討論の場がもてたとき、学生時代のあの充実感を感じたい。

反省文のようになってしまったが、さまざまな人との出会い、交流、素晴らしい講義の数々等、忘れられない思い出をつくることができたのは言うまでもないことである。赤穂さん、小笠原さんにも大変お世話になりました。ありがとうございました。

### 谷崎 治

今回ライラセミナーに参加させてもらって、本当によかったですと心から思っています。この3泊4日は、本当にいろいろ考えたなどわれながら感心しています。初日のキャビンタイムは、まったく初めての人たちと一緒にということで、すごい緊張感がありましたが、2日目、3日目には仲良くなったり、語り合ったり、ゲームをしたりとてもたのしかったです。また、思索の時間なども、今まであまりない経験であり、自分で場所を選び、考えにふけるという大きさを知りました。

僕は2日目、3日目にはキャビンタイムで司会進行役を務めさせていただきました。大変ハイレベルな内容の話をされる方が多くて、それをうまくまとめて、話を進めていくには一体どうしたらいいんだろうと考えながらやっていましたが、それ自体大変楽しかったし、本当に貴重な経験だと思います。また、フォーラムではD班の発表の司会の役もさせていただき、これもよい経験になりました。バズセッションの中で一つのまとまった意見として作り上げねばならず、またまったく時間がない中でD班が本当に一つになり、発表に向かっていけたというのは、たいへん意義深いものだと思います。

また、今回のテーマは「福祉文化の形成を目指して」ということで、バズセッションの中で、障害者福祉の話が多くてきましたが、このことも今の僕には大変ためになるものでした。というのも、僕は現在姫路Y M C Aの学生リーダーをやっていて、来年3年生ということで引っ張っていく立場にあるわけですが、僕は障害を持つ（自閉症、ダウン症など）子どもたちと野外活動を行うところにいて、来年度はどういう風にやっていったらいのかも、ちょうど悩んでいるときです。そこで今回のこのテーマで、他のさまざまな意見を聞き、また自分の意見をぶつけ、他の反応を見られたということは、本当に自分にとってありがたいことであり、来年の見通しも自分の中で立ってきたような気がします。

今回のライラセミナーで得たことは、僕のこれから的人生に活かすことはもちろん、特に障害児との野外活動の中で活かしていきたいと考えています。

カウンセラーの赤穂さん、小笠原さんをはじめいろいろな方にお世話になり、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

## 黒島 早苗

今回このセミナーに参加させていただくと決まった時、私のようにまったく何も知らないようなものがいってもよいのかと不安でした。しかし、余島に来て過ごしたこの4日間はとても充実したものとなりました。これから学生である自分自身、まだまだどう生きてゆくべきかを考えていかなければならぬと思います。今回のようにさまざまなものに関心を持ち、それについて考えることの大切さを知る機会を与えてくれ本當によかったです。

また、キャビンタイムやフォーラムなどを通して、他の人たちの意見を聞いたり、楽しくゲームを行うことで班内の結束も深まり、私たちD班としての色をみることができたと思います。そして自分自身も新しく発見するところがあったように思います。

最後になりましたが、このようなセミナーを開き、私たちに考える場を与えていただいたことに深く感謝します。

## 秋原 美由紀

私は初めてこのセミナーに誘っていただいたとき、「今は行けないな」と思いました。体を痛めて仕事を休んでいるという自分の立場や状況から考えて、いくべきではないし、今は精神的にも集団生活をするのは少ししつらいのではないかと考えました。しかし、そういう今の自分だからこそ、このセミナーに参加できれば自分にとってよい方向というのを見えてくるかも知れない、という気持ちがわいてきて、参加させていただくことにしました。

以前に私だったら「ワーイ！」と元気よく参加して、発言ももっとできたかも知れません。

「笑顔でみんなと話せる。意見が言える」というのが、非常に難しい今の私です。でも、そういう基本的なことをしっかりしたい気持ちが消えてしまったわけではないということを、この3泊4日で確認することができました。「笑顔を大切にしていきたい」と言って、実際に笑顔で人と接しているメンバーを見て、素直に「私もそうしよう」と思えることに気づき「私もまだ大丈夫かも知れない」と嬉しくなりました。人の意見を聞きたい気持ちや、意見を聞いて「私はどうだろう」と考えてみたりする気持ちが、自分の中から引き出されていくのが本当に嬉しかった。

この機会を与えてくださった方、メンバーのみなさん、そしてこのセミナーを開いてくださったロータリアンの方々に感謝しています。

## 浜田 真由美

今まで討論、ディスカッションというのを、私はあまり縁がないものと思っていたが、ここに来て一つのテーマについていろいろな人と話し合うということがどういうこと

か、初めてじっくり考えることができたように思います。

テーマは福祉でしたが、これについて何時間もじっくり自分なりにいろいろ考えてみました。他の人との討論をして、一つの結論に達しましたが、この結論よりもここに至るまでの、皆で一つのことを議論するという過程がすごく大切なことなんだというのが、後のはうになって実感としてわいてきました。結論はどうであれ、それについて真剣に考える、話し合うということが、やはり私には欠けていたように思います。

これからどういう風に自分を変えていけばいいか、まだ私にははっきりとわかっていますが、この「考える」という行為を大切にしてこれからを生きていきたいと思います。

### 中西 啓文

僕は、最後の夜の日に、カウンセラーの方からRYLAセミナーは講義とキャビンタイムの二本柱からなると聞きました。講義とフォーラムからは、残念ながら、勉強不足からか「まあそうですな」というぐらいの感じしか受けませんでした。理想論はとても当然のことであり、目指すのは必要ですが、討論の場で再認識しても仕方がないなと感じました。

それはおそらく、ある程度の意識レベルをもつ人ならば、いや、そうでない人も含まれると僕は思うのですが、理想はもっているはずであると僕は考えています。そして、それは各個人でそんなに違いはないものと思います。僕は「討論している」というよりも「再確認により安心を得ている」というような感じを受けました。

フォーラムの進行は残念ながら僕の関心からはずれていったのですが、僕はフォーラムよりもその前のバズセッションがとても楽しく感じました。バズセッションでは各個人による、また自分も含めて、極端な意見がでました。その意見に対する反発と弁論は意義ある楽しいものと感じました。そう思うのはおそらく自分だけではないと思うのですが、フォーラムの発表自体は、各班のまとめですから、それでよいと思うのですが、その後の討論ではもっと身近なことについて討論したかったように思います。

もう一つの柱のキャビンタイムについてですが、これは楽しませていただきました。「じゃあ、君はRYLAでない普通のキャンプにいけばいいじゃないか」といわれるとそれまでですが、僕は人との会話が好きです。僕は「自分に正しく生きたいと思う」と紙に書いて、火の中に投げました。自分の考えはすべて正しく、同時に自分の考えは必ず間違っている可能性をもつと考えています。間違いを理解すれば、考えを訂正しますが、それを指摘するのは他人の言葉であります。いろいろな人との会話がなければ、僕の考えは独りよがりのものになってしまうと考えています。

本はあまり好きではありません。なぜならば、考えの素晴らしい人が文章がうまいとは限らないからです。僕は相手を前にして、その人の言葉を聞きたいのです。そして今回のRYLAセミナーのキャビンタイムでは、たくさんの知らない人と話ができました。これはとてもうれしいことでした。

また、とても考えることができました。僕は現在、医学を専門に勉強していますが、それ以外のことについて広く浅く長くしていこうと思っています。その点では今回のRYLAセミナーは、とても意義があったと思いました。

### 阿部 貴久

今回のセミナーで一番嬉しかったのは、短時間で他のメンバーと密度の高い交流を図り、バズセッションの発表会で納得のいく発表ができたということです。確かに難しい語句や言い回しはありませんでしたが、（あえて避けました）実直で分かり易い発表内容ではなかったかと自負しております。

私たちは結論の中で、身の周りでできることからあきらめずコツコツと助け合いをしていこうと主張しました。これは表現こそ平易ですが、寸劇の例に挙げたように日常生活の中ではわれわれを取り巻く社会環境、そして我々自身の心の中に、意識レベルの壁があり、これが阻害要因になっている現実の前では決して平易に実現可能な内容とは思いません。その意味で、私たちの結論は極めて高いレベルの到達目標を掲げており、また背景には高い理想が隠されていることをぜひご理解いただけたらと思います。

さて、4日間を過ごした余島での生活は素晴らしい自然と友情に囲まれて、夢のような日々がありました。いつまでもこのままでいたい。もっともっと余島での生活を続けたい。そんな思いでいっぱいですが、皆それぞれ帰るべき日常があります。これからは「余島族」の一員として、心の中に余島での思い出を大事に抱えながら、日常生活の情景とその現実に、余島で学んだ福祉社会の理念を重ね合わせていきたいと思います。

最後にカウンセラーの赤穂さん、小笠原さんには本当に親身になって私たちを見守っていただきました。また、関係者のみなさん、本当にありがとうございました。そして何よりも受講生の仲間たち、とりわけD班のみんな、素晴らしい思い出と感動を本当に本当にありがとうございます。

### 岩浅 宏

このセミナーを受講して、地域社会やボランティアのことを今まで初めてはじめて考える時間を与えられました。私は上板町教育委員会に所属していますが、いろいろいい勉強をさせていただきました。この講習を受け、少しは私にも知識ができたと思います。地方に帰りましたら、自分から積極的に考え方行動し、友といっしょにがんばっていきたいと思います。4日間、ほんとうにありがとうございました。

### 増田 薫子

私のこれまでの生活の中で、今回ほど皆との言葉のふれあいの場を持ったことはありませんでした。この数日間で、何が変わったかと聞かれても、私自身何も言えないというの

が今の本音です。ただこれから的生活を考える上で、今までとは違った希望が見えてきました。美しい自然の多いこの余島という島で、多くのことを考え、学び、体験できたことを人生における一つの通過点として、これからは私自身に、また私がふれあう人々にも大いにプラスになっていくことを確信しています。

參  
加  
者  
名  
簿



# 第19回 R Y L A 運営委員会

## 〈運営委員会〉

ガバナー	三宅洋三 (第2670地区ガバナー 高松R.C.) 田中毅 (第2680地区ガバナー 芦屋川R.C.)
顧問	今井鎮雄 (R.I.理事 第2680地区P.G. 神戸西R.C.)
青少年活動委員会	須之内淳二 (第2670地区P.G. 松山西R.C.)
アドバイザー	石井澄 (第2680地区P.G. 明石R.C.) 平地保治 (第2670地区 小豆島R.C.) 吉本功 (第2670地区 高知東R.C.) 深川純一 (第2680地区P.G. 伊丹R.C.) 安平和彦 (第2680地区 姫路R.C.) 三木明 (第2680地区 姫路R.C.)
セミナーアドバイザー	山口徹 (第2680地区 神戸R.C.) 篠原成行 (第2670地区 北条R.C.)
ディーン	
副ディーン	
■R.I. 第2670地区	
青少年奉仕委員長	篠原成行 (北条R.C.)
ライラ委員長	谷口修平 (松山西R.C.)
ライラ委員	坂井幸博 (高松東R.C.) 平地保治 (小豆島R.C.) 中川洋助 (安芸R.C.) 中島萬里 (徳島西R.C.) 有光和雄 (松山南R.C.)
■R.I. 第2680地区	
青少年奉仕委員長	井奥寛泰 (姫路南R.C.)
ライラ委員長	山口徹 (神戸R.C.)
ライラ委員	三木且視 (龍野R.C.) 大村泰司 (高砂R.C.) 小池弘三 (神戸ハーバーR.C.) 赤穂哲 (姫路南R.C.) 青木修一 (神戸中R.C.)

カウンセラー	
第2670地区	第2680地区
坂井幸博 (高松東R.C.)	赤穂哲 (姫路南R.C.)
永田光春 (新居浜R.C.)	永松潔和 (神戸R.C.)
小笠原貴美子 (高知南R.C.会員夫人)	河合純子 (神戸垂水R.C.会員夫人)
永田志津子 (新居浜R.C.会員夫人)	柳谷舟子 (姫路R.C.会員夫人)
	山路喜代子 (芦屋川R.C.会員夫人)

**主催**

R.I. 第2670地区

R.I. 第2680地区

RYLA運営委員会

---

**RYLA運営事務局**

第2670地区 ガバナー事務所

〒760 高松市朝日新町24-20

(株)北四国コクヨ 2階

TEL 0878-51-3650

FAX 0878-51-3651

第2680地区 ガバナー事務所

〒659 芦屋市大原町10-1

ホテル竹園芦屋

TEL 0797-22-8899

FAX 0797-22-3553